

宝満山総合報告書

—福岡県太宰府市・筑紫野市所在の宝満山に関する文化財の総合報告—

平成25(2013)年

太宰府市教育委員会

宝満山総合報告書

—福岡県太宰府市・筑紫野市所在の宝満山に関する文化財の総合報告—

平成25(2013)年

太宰府市教育委員会



宝満山遠景（南より）



宝満山（北西より）



宝満山遠景（南西より 太宰府市側）



宝満山（東より 筑紫野市側）



宝満山遠景（南西より 太宰府市側）



宝満山（東より 筑紫野市側）

序

本書は、福岡県の北部に位置する宝満山に係わる文化財の総合報告書です。

宝満山は古来より九州の霊峰として全国に存在が知られ、その命脈は龍門神社や宝満山修験会などによる行事に今なお受け継がれています。

本書は平成23年度から実施した太宰府市宝満山総合報告策定審議会によって協議、作成したもので、考古学はもとより、歴史、美術史、自然史などの観点から宝満山の歴史的な価値を検証するものです。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心より願っております。

最後になりましたが、本事業に対しご理解ご協力いただきました、地元区をはじめとする関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

平成25年3月

太宰府市教育委員会
教育長 木村 基治

目次

第1章 序説 宝満山の概観	1
第1節 地理的環境位置	1
第2節 自然環境 市川委員	5
第3節 歴史的環境(宝満山通史)	7
1 古代の宝満山	7
2 中世前期の宝満山	9
3 中世後期の宝満山	9
4 近世の宝満山	9
5 近代以降の宝満山	10
第4節 山の現状	11
第2章 各説 宝満山の調査の成果	13
第1節 調査の歩み	13
第2節 宝満山遺跡群の現状	17
第1項 地形測量	17
第2項 地名・伝承	18
第3項 遺構・遺物	20
1 旧石器時代から古墳時代	20
2 飛鳥時代から平安時代	21
3 平安後期から中世	25
4 遺跡としての宝満山	26
第3節 宝満山の文化財 森委員・井形委員・事務局	28
第1項 古文書・記録類	28
1 縁起類	28
2 古文書	30
第2項 絵図・絵画資料	32
第3項 建造物	36
第4項 石造物・工芸品・彫刻	38
第5項 考古資料	51
第6項 民俗資料	59
第7項 祭事・年中行事	65
第3章 考察編	69
第1節 遺跡と遺物から見た宝満山(遺跡分布と時代別の変遷) 事務局	69
第2節 自然環境と宝満山 市川委員	72
第3節 宝満山の空間構成 (地誌・絵画資料等から見た寺社境内、神社地と登拝道) 事務局	75
1 歴史的空間構成	75
2 既往の保全空間	85
第4節 古代信仰遺跡としての宝満山(信仰の開始から展開へ) 小田委員	87

第5節 建築から見た宝満山 山岸委員	106
第6節 龍門神について(龍門神社史) 森委員	119
第7節 宝満山と仏像の様相(古代中世を中心として) 井形委員	132
第8節 宝満修験について 森委員	148
第9節 遺跡の現状と崩壊の進行 筑紫野市	167
第10節 山岳信仰遺跡としての宝満山(国内山岳信仰遺跡における位置付け) 菅谷委員	174
第4章 総括編(宝満山の歴史的価値を支える視点)	188

資料編

第5章	189
第1節	197
【文献史料】	189
第2節	198
【年表】	198
【参考文献】	202

— 例言 —

・本書は平成23年度から実施した太宰府市宝満山総合報告策定審議会によって協議、作成したもので、委員の構成と審議会に関わる関係機関は以下の通りである。

審議委員

小田富士雄	考古	福岡大学名誉教授(委員長)
菅谷文則	考古	榎原考古学研究所所長
冷川昌彦	自然	筑紫女学館大学特任教授
森弘子	歴史	福岡県文化財保護審議会委員(副委員長)
山岸常人	建築	京都大学教授
井形進	美術	九州歴史資料館学芸員

関係機関

福岡県教育庁文化財保護課 伊崎俊秋課長、吉田東明企画係長、岸本圭
 筑紫野市教育委員会文化振興課 椎木明(教育部長)、境康(課長)、鶴崎弘司(課長補佐兼担当係長)、
 鹿牟田美英子(主査)、草場啓一(主査)、森山栄一(主査)、小島野亮(主査)、権丈幸子(主任)、鹿
 島未帆(主任)、富岡久美子(主任)、吉田高徳(主任)、藤藤礼(技師)、川口陽子(技師)
 太宰府市教育委員会文化財課(審議会事務局) 古野洋敏(教育部長)、菊武良一(課長)、城戸康利(副
 課長)、山村信榮(調査係長)、友添浩一(保護係長)、中島恒次郎(係長、文化財課事務取扱)、橋川史
 典(事務主査)、古川あや(主事)、井上信正(主任主査)、高橋学(技術主査)、宮崎亮一(技術主査)、
 遠藤茜(主任技師)、小西信二(嘱託、文化財指導員)
 ・本書の執筆は審議委員および筑紫野市教育委員会の草場、事務局の山村がおこなった。
 ・画像使用の出典・許諾関係については巻末P203にまとめている。
 ・本書を免刊するにあたり多くの機関や個人に便宜をお許し頂いた。記して感謝申し上げます。九州
 国立博物館、九州歴史資料館、福岡県立美術館、福岡市博物館、篠栗町教育委員会、須恵町教育委員会、
 久山町教育委員会、秋田県由利本荘市教育委員会、龍門神社、太宰府天満宮、観世音寺、大佛大圓寺、
 浮城神社、長安寺、佐谷区文化財保存会、北谷区自治会、井本邦彦、董島宏一、長谷繁光、平岡邦孝(敬
 称略、順不同)

第1章 序説 宝満山の概観

第1節 地理的環境位置

太宰府市は福岡県の北部にあり、玄界灘を臨む博多湾より南約10km、筑後平野と福岡平野とを繋ぐ溝状の地帯に位置し、西に脊振山塊より派生した丘陵、東に三郡山系から連なる山に囲まれている。平地には後期旧石器時代以来の生活痕跡を残す遺跡が散見され、古代には正方位の直線道路を基軸とした計画的な土地区画を伴った大宰府条坊が展開している。条坊北辺には官庁の中核としての大宰府政庁があり、その東に学校院、観世音寺が計画的に配置され条坊内には般若寺、条坊外縁に国分寺・国分尼寺、杉塚庵寺、武蔵寺、天満宮安楽寺などが置かれ、条坊を見下ろす山麓に四王院、龍門山寺が置かれ宗教都市的な様相が展開した。中世には遺構の集中や遺物の大量廃棄が認められるなど「都市的な場」といえる集住空間が条坊東北辺に引き続き営まれた。さらに観世音寺後背部の谷地ごとに崇福寺や観世音寺の子院群などが新たに成立し、鎌倉新仏教を包含しながら宗教的空間が中世後半期まで維持されていた。

宝満山遺跡群は、古代大宰府条坊の北東に位置し、宝満山（標高829.6m）を主峰とし、北は仏頂山頂（868m）より南は愛嶽（おたけ）山（443m）樫までを含む大宰府市から筑紫野市域の山中に展開する遺跡群である。

宝満山は三郡山系の南西端部にあり、主峰は龍門神社上宮社殿のある標高829mのピークを主体とする。山頂は露頭する早良型花崗岩（中生代白亜紀後期）の巨岩で構成され、北東側に尾根続きのもう一つのピークである仏頂山に連なる。山容は西の福岡側からは三郡山系を嗣とする象の頭のように見え、南東の筑紫野市側からの姿は左右均等に山裾の広がるいわゆる「神奈備山」形の独立峰に見える。そのこともあってか近世の地誌類には宝満山の古名を「御笠山」とし、山の雲掛かる姿をもとにしてか「龍門山」とも言うとしている。

宝満山からの眺望はすばらしく、北は志賀島、玄界灘の浮かぶ玄界灘から雷山のある糸島方面、西は眼下に四王寺山、眼前に九千部山から脊振山系の佐賀、長崎の山々が連なり、その先に遠く雲仙曾賀岳が有明海越しに見える。南には筑後の耳納連山、大分の九重連山を望むことが出来る。

三郡山から宝満山に延びる山脈の背は南西側の筑紫野市二日市に向かい分水嶺となっている。このた



図1 宝満山の位置



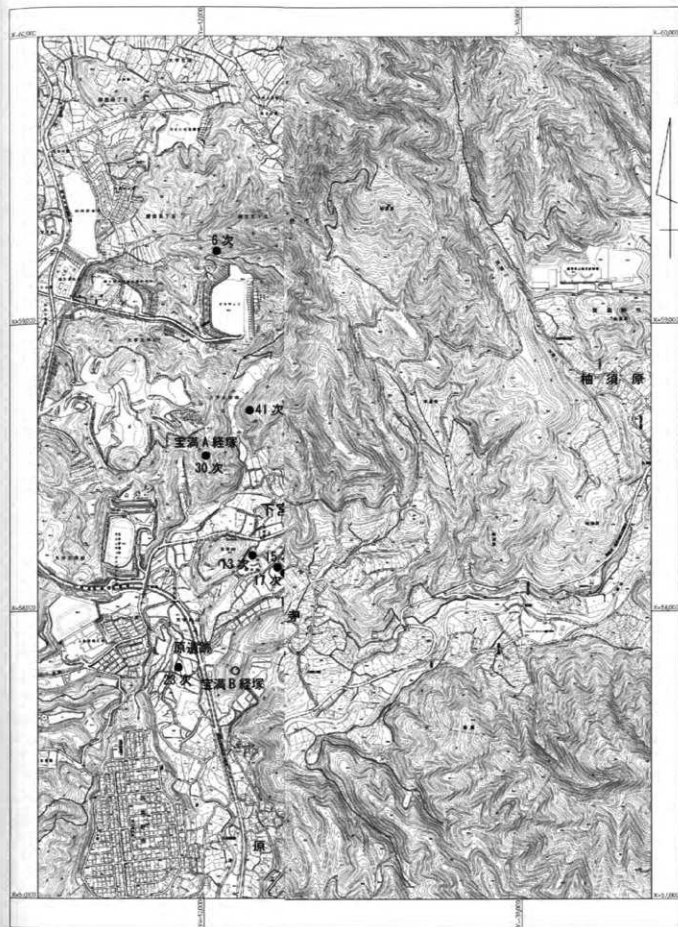
図2 宝満山の位置2



図3 宝満山西側（太宰府市側）の様相



図4 宝満山東側（筑紫野市側）の様相



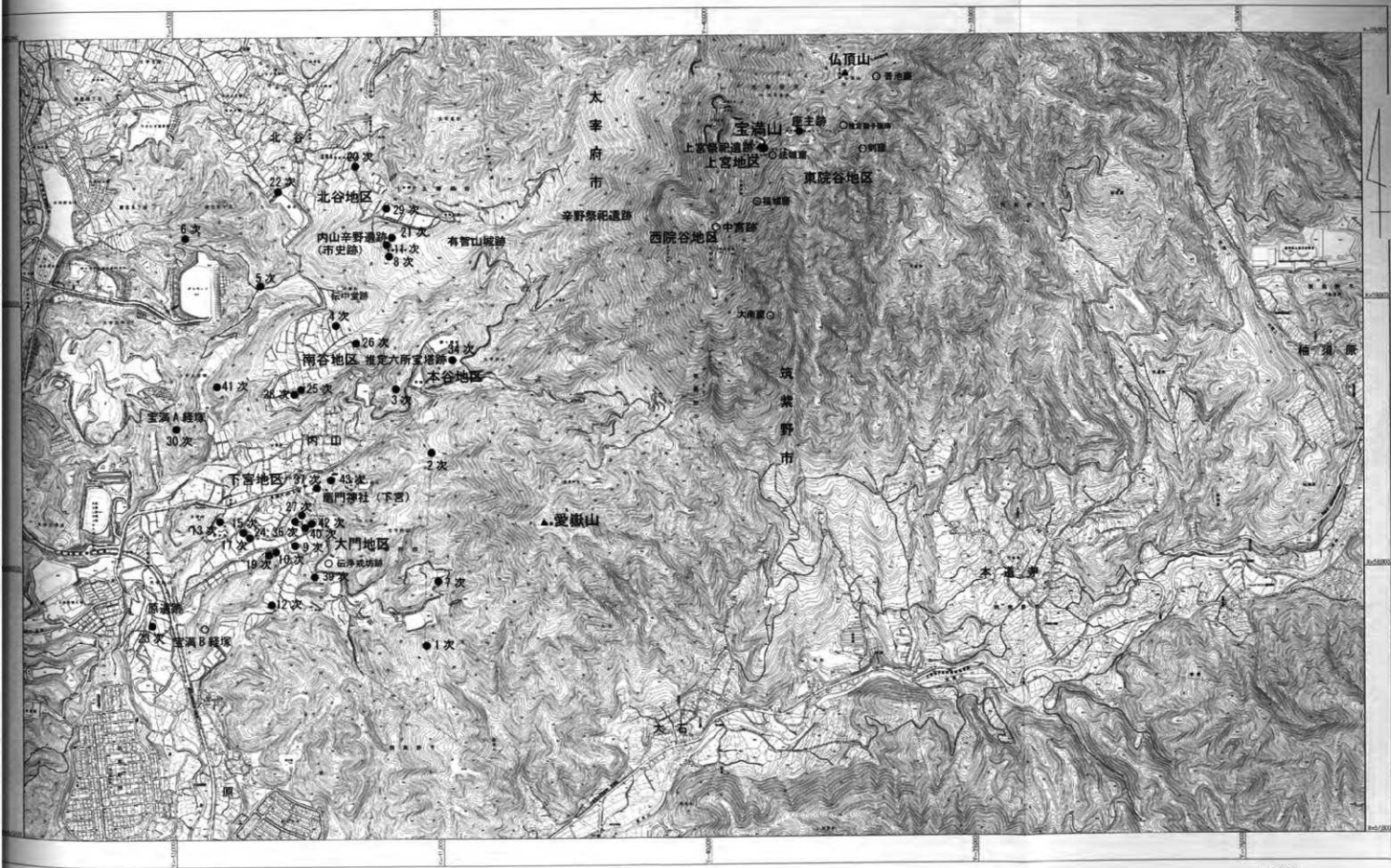


图5 宝满山全图



め宝満山の南斜面から派生する宝満川は筑後平野を南に下り有明海に注ぎ、北斜面の宇美川と御笠川は福岡平野を北に下り玄界灘に注いでいる。宝満山はまさに筑紫地域の南北に水を供給する水分の山となっている。

第2節 自然環境

宝満山一帯は現在、自然林および二次林、植林などで覆われている。標高730mの中宮跡付近から宝満山、仏頂山にかけては自然林が多く、照葉樹林帯上部のアカガシ群落と夏緑樹林帯下部のブナ群落、本来は中間温帯の植生であるモミ群落が混生している。部分的にはそれぞれの群落の典型的な姿も見られるが、大部分はそれぞれの群落の代表的な樹木が混生している。

宝満山での各群落を構成する代表的な種は次の通りである。

ブナ群落：ブナ、コハウチワカエデ、シラキ、ウラジロノキ、アカシデ、イヌシデ、オオカメノキ、シロモジ、コバノミツバツツジ、ウンゼンカンアオイ（草本）など（典型的群落の生育地→宝満山頂直下の仏頂山側尾根筋、頭中山付近の西側斜面）。

モミ群落：モミ、カヤノキ、キッコウハグマ（草本）などモミ群落を特徴する植物の他、アカガシ群落やブナ群落の種群（典型的群落の生育地→仏頂山西側尾根）。

アカガシ群落：アカガシ、シキミ、ハイノキ、ツルシキミなどのアカガシ群落の標徴種のほか、ヤブツバキ、シロダモなど照葉樹林の代表種、ブナ群落を構成する多くの種群（典型的群落の生育地→筑紫野市東院谷の座主坊跡から水場にかけての東側上部斜面）。

この他、老大木を含む古くより植林されたスギ・ヒノキ林も、女道から座主跡にかけての南側斜面を中心にかかなりの面積を占めている。これらの林齢の古い上部植林の中にはブナ、モミ、アカガシ群落の種群も混在している。なお、旧林野庁作成の林班地図によれば、仏頂山北西のモミ林の林齢は約160年である。

宝満山から三郡山にかけての、これらの自然林は太宰府県立自然公園の中心部分であり、標高700m以上は第1種・第2種・第3種特別地域に指定されている。また環境省から、三郡・宝満山の自然林として、特定植物群落に指定されている。

二次林（雑木林）は30～40年前までは定期的に伐採され炭焼などに利用されていた林分である。1960年代までは、晩秋から冬場にかけて仏頂山から三郡山にかけての尾根筋で、良く炭焼の材料として林木を伐採する姿が見られた。この時代の縦走路は一部の急斜面や谷筋を除いては、2～3m前後の



図6 太宰府市側から見た宝満山



図7 山頂から中腹付近の様相(西側)

宝満山頂から三郎山にかけての、主尾根を走る縦走道の筑紫野市側斜面の一部ではモミの植林も行われている。現在ではかなり成長しており立派なキミ林として成長を続けている。また、その下部から三郎山頂にかけての広大な面積の、アカガシを中心とした雑木林も成長を続けている。数十年後には立派な常緑落葉混交林が見られると思われる。

中宮跡上部から羅漢道沿いの西側斜面は主にアカガシ林となっている。式部館跡上宮付近では大木も見られるが、急斜面や巨岩の露出部分も多く樹木の生育条件は良好とは言えない。しかし、絶壁の下部では土壌の堆積も見られ、部分的にブナ林が生育している。ここがノナ群落は、九州で最も標高の低い場所(650m付近)で生育している貴重な群落である。太宰府市北谷側の羅漢道沿いには、標高600m付近から下部はスギ・ヒノキ植林地と、アカガシのほか、シイノキ、タブノキ、ウラジロガシ、ヤブツバキ、クロキ、ハイノキなどの照葉樹林の樹木を交える植生となってくる。かつては落葉も交えた典型的な雑木林であったが、今では樹木が成長した部分は立派な自然林的な様相を示した林分が見られる。

宝満山山麓では、鎮守の森を中心に典型的なスダジイ群落が見られる。その代表は龍門神社本殿裏の社叢である。胸高直径80cmのスダジイを始め、スダジイの大木が群生し、イチイガシ、サカキ、ヒメユズリハなど典型的な社寺林構成種を始め、アラカシ、ヒサカキ、ネズミモチ、カクレミノ、ヤブツバキなど典型的な照葉樹林構成種が生育している。この森は、龍門神社のスダジイ林として、環境省の特定植物群落に指定されている。

宝満山東斜面の山麓には、筑紫野市柚原、本道寺の各大山祇神社、大石の高木神社など各集落の鎮守の森に巨木や老木が生育している。筑紫野市柚原大山祇神社のイチョウ、本道寺大山祇神社のシイノキ、大石高木神社のムクノキは、筑紫野市の5大木の中に入っている。その他、柚原大山祇神社のタブノキ、モッコク、ヒノキ、大石高木神社のシジュノキ、マキノキ、ケヤキなどは見事な老木である。また、本道寺大山祇神社裏の社叢林は、小規模であるが立派なスダジイ林である。

かつては、山麓から中腹にかけての尾根路には広くアカマツ群落が見られた。高木層はアカマツが優占種し、ヒサカキ、ネズミモチ、クロキなどの常緑種や、コナラ、ネジキ、リュウブなどの落葉種が亜高木層や低木層に見られる典型的な里山群落であった。草本層はウラジロやコングが中心で、林床の植生が貧弱なところでは秋にはマツタケなども見られた。しかし、里山の利用が無くなった1970年頃から林床の富栄養化が進行し、アカマツが次第に弱まって共にマツノザイセンチュウが寄生し、やがて松枯れが進行してアカマツ群落は消滅していった。山麓や中腹のシイ・カシやコナラ・リュウブなどの常緑・落葉混交二次林(雑木林)は、かつてのアカマツ群落のその後の姿である。

現在、山腹や山麓の集落上部などに見られるスギ・ヒノキ植林地や竹林は、古代～近代までは、生活利用林としての雑木林や原野・草原＝牧場・茅場など、樅林地や薪林地(これらの言葉は、里地・里山の

低木林が中心であった。その後、高度経済成長期に入ると同時に、電気やガスを使用する日常生活スタイルの変化から二次林の利用が無くなり、現在では10～15mの落葉広葉樹林(シデ群落)に成長しており、春の新緑や秋の紅葉は見事である。主な樹種は次の通りである。

コハウチワカエデ、アカシデ、イヌシデ、シラキ、タカノツメ、ネジキ、リュウブ、タンナサワフタギ、カマツカ、ウラジロノキ、コバノミツバツツジ、オオカメノキ、ヤマボウシなどの落葉樹が中心で、この中にアカガシ、モミ、シキミ、ヤブツバキ、ハイノキなどの常緑樹が点在している。

群落を表現する用語である。)として里山利用されていた部分である。家具の部品、クワなど農具の柄、お椀や箸、竹籠などの籠など、各種用材として使用されていた。このような雑木林や草原・原野の里山利用は40～50年前で終わり、国の指定により順次植林が行われた場所である。現在、これらの林の多くは手入れが行き届かず、その多くは荒れた植林となっている。

第3節 歴史的環境(宝満山通史)

1 古代の宝満山

宝満山は信仰の山として知られ、現在では龍門神社上宮(山頂、標高829.6m)、下宮(本社殿、標高175m)が鎮座する(中宮跡は8合目、標高725m、現在堂社無し)。山の名称は歴史的には「御堂山」「龍門山」の異称もある『筑前国統風土記』具原益軒。近世前半期に成立した山の縁起を記す『龍門山宝満宮伝記』には「天智天皇の御宇都を太宰府に建玉う時、鬼門に当り龍門山の頂に八百万神之神祭りし玉ひ」とあり、大宰府の鬼門にあたる鎮めの場、という認識があったことを示している。宝満山に鎮座する龍門神社は延喜式や六国史に著された「龍門神」、「龍門宮」に連なるもので、『経日本後紀』九仁明天皇承和7年(840)四月条の記事が史料の初見とされる。

一方で、『龍門山宝満宮伝記』には「天武天皇の御宇心連上人常に藤阿伽の水を以て山中を修行す」とされ法相の僧心連もまた伝説的な開闢の人として描かれている。寺院の成立については『扶桑略記』、『歌山大師伝』における延暦22年(803)の伝教大師の薬師仏奉納に係るの記事に「龍門山寺」の名が見られることを嘆息の例とし、承和14年(847)の唐人僧円仁の渡航記録書『入唐求法巡礼行記』に「大山寺」、『石清水文書之二』における沙弥證聖の宝塔建立の記事(933年)では「大宰府龍門山」、『後拾遺往生伝上二』の僧安尊の死亡記事(1086年)では「内山寺」の名称が登場する。『元亨釈書』の兼徒の争論記事(1243年)には「有智山寺」とされ、おおよそ平安前期に「龍門山寺」、平安後期に「大山寺」、平安後期以降は「有智山寺」・「内山寺」と名称が変遷したことが読み取れる。おのおのが連続した一つの組織名否かは解決されていない(森2008)。「大山」の読みが「だいせん」であれば音においては「内山」に通じ連関する可能性もある。下宮地区のホノク(字の下位の地名)に「おおやまじ」には観世音寺僧が伴う形が探られ、独立した寺院体制が整っていない様子が伺われる。沙弥證による宝塔建立の記事(933年)に登場する塔は、最澄が国家鎮護の思想を背景として国内6所(近江国比叡山東塔、山城国比叡山南塔、上野国淨法寺、下野国大慈寺、豊前国宇佐赤鞆寺、筑前国龍門山寺)に配置の計画がなされた塔の一つであり、『六所造宝塔願文』、宝満における仏教寺院展開初期の段階から比叡山が深くかかわりを持っていたことが知られる。発掘調査(宝満遺跡第34次調査)によって詳細が明らかになった本谷礎石建物がそれに比定されている。

平安後期の長治2年(1105)には大山寺をめぐって石清水八幡宮と比叡山延暦寺との間で争論となり、山内での大宰府兵士と叡山僧侶との合戦、平安京における日吉神人、叡山大衆による御所陽明門への強訴事件へと発展し、これをきっかけとし大山寺は比叡山の末寺となった。騒動の背景には1116年『観音玄義疏記』記事の「博多津唐房大山船頭三郎船頭房」や1218年『百鍊抄』記事の「大山寺客人張光安(博多鎮首)」などから同寺院が主体的におこなっていた博多を拠点とする貿易の利権が係ったものと推測される。この段階においては寺に職能で従属する神人や客人といった人々の中に博多の華僑貿易商まで含まれている様相から、寺の規模や機構自体が巨大化していたことを示唆している。



図8 宝満山の遺跡分布状況

2 中世前期の宝満山

『台明寺文書』の1162年の記事によれば(太宰府市2005)には「京都には本寺叡岳、鎮西には本山内山」とあり、平安後期の『梁塵秘抄』巻二には「筑紫の霊驗所は大山・四王寺・清水寺」と詠われており、宝満山は古代末から中世にかけては天台系の「大山」や「内山」「有智山」の名前を有す寺院の在所としてその存在が国内に広く知られていた。

宝満山と峰崎きの若杉山佐谷にある山岳寺院建正寺にある正中2年(1325)銘の板碑には「天台別院有智山末寺於左谷山賢聖院」とあり、周辺の山岳寺院を系列化して宗像方面や糸島方面にまで教縁を拡大していた様子が伺える。

康和4年(1102)、大宰府の府中宇佐町に八幡宇佐宮と相論するなど、12世紀以降には大山寺の四係者が荘園の相論や安堵に係わった事績が散見される。承久2年(1220)では老破、建長元年(1249)には肥後、建治2年(1276)には肥前の荘園経営に係わる文書があり、筑前、筑後、肥前、肥後に分布する應門社や宝満宮の存在は当該期の宝満山の経済活動に結びつく可能性のあるものとして注目されている(森2008)。

3 中世後期の宝満山

鎌倉幕府が滅亡すると地方の守護は足利方の北朝か官方の南朝に就くかの選択を迫られ、筑前を領していた守護武藤少弐氏は北朝方の支持を鮮明にした。このことにより南朝方に就いた肥後菊池氏との軋轢が生じ、建武3(文中元年)年(1336)宝満山中の内山の城(説問文書等では有智山城)に菊池氏が攻め入る事件が発生した。城を守っていた武藤貞経(妙忠)は寺仏堂で自刃し堂社を焼くなど悲壮な落城劇として『太平記』や『梅松論』に描かれている。以降、有智山や宝満山に関する史料は要害としての記載が増える。応安5年(1372)には北朝方の今川了俊、南朝方の棟良親王を有智山城に攻め、太宰府から棟良親王が置いた征西府を逃げるなど、九州での南北朝争乱の主戦場となった。弘治3年(1557)に大友宗麟による山内の検地がおこなわれ内山、南谷、北谷、原にある寺院、坊舎に課役し、堂社を破壊するに及んだとされている。永祿2年(1559)には豊後守護の大友宗麟が筑前を抑え宝満城に城督として高橋兼棟を派遣した。以降、天正14年(1586)に薩摩から島津氏が侵攻するまでの間に鑑録謀反による主家である大友家との争乱、城督を継いだ高橋紹運と在地領主秋月氏、筑紫氏との闘争で何度も山での合戦が繰り返されている。その中、それまで370あったとされる坊は西散し、翌永祿元年(1558)に残った坊中は山上に坊宅を移す事となった。

4 近世の宝満山

戦国時代の混乱により宝満山の坊は多くの者が逃散し著しく荒廃した。天正15年(1587)に豊田秀吉が米100俵を寄進したことから山内の復興が始まる。一方では長らく座主を務めてきたとされる浄戒坊は文祿元年(1592)に断絶し、残った坊中は組織としての改変を余儀なくされていた。秀吉の天下統一後に筑前に入った小早川隆景は文祿2(1593)年に應門神社に対し祈禱料として米100石を寄進し、これが毎年の恒例となる。この年から堂社の再建が始まり、慶長2(1597)年には本社二宇ほか石鳥居、講堂、神楽堂、鐘樓、行者堂、末社、僧坊も再建された。文祿3年(1594)には38年間断絶していた峰入行が復興されている。この頃には宝満二十五坊と呼ばれる一山の形が固まりつつあったと思われるが、慶長2年(1597)に座主を輪番で各坊が務めることとしている。しかし、経営的には一山としてのまとまりを欠いていた。

慶長5年(1600)には筑前に入国した黒田長政が應門山に300石を与えんとするも、それを辞退した

わりに課役の免除を願っている。この時期の山中の経済的な困窮は顕著で、黒田藩は修験の山であった豊前杵築山に習い、茶業で生計を補助させるため茶実10石を与えた。また、元和4年(1618)には藩より25石が与えられている。『龍門山田記』によれば、この頃、東院谷、西院谷の石垣や登拝道も公役として普請されたとみられ、近世的な山内の坊の景観が徐々に徐々に成立した。しかし、山中は坊中の不和などにより山林の管理も行き届かず堂社まわりは樹木の伐採著しく草地となり、そのこともあって寛永10年(1633)には講堂、神楽堂、鐘樓、行者堂など中宮地区の復興された堂社が悉く焼失している。宝満山の南西にある尾根続きの別峰である愛蔵山は、山頂周辺で平安中期の祭祀土器が採取されている山であるが、『筑前国続風土記』によれば、黒田家臣久野外記入道心が山上にあった伊豆奈権現の祠を寛永年中に移して再興し、宝満山の財行坊を社僧に充てており参詣の人が絶えないとしている。信仰の山としては宝満山と一体的な扱いを受けていた。

一山のまとまりがない中、寛永18年(1641)に平石坊幸重が座主に就く。慶安3年(1650)には黒田藩2代藩主忠之により、焼失した堂社が復興される。近世的な社会構造の構築が進化する中、宝満山も寺社再編の波に洗われ、永応元年(1652)に一山が一度比叡山の末寺に位置づけられ、多くの修験者が離山する事態が発生する。このことで山中は再度荒廃し、黒田藩3代藩主光之の命により旧坊中に帰山の命が下りるといふ混乱があり、直後の明暦3年(1657)には彦山の末寺に、寛文5年(1665)にはそれを撤回するごとく聖蹟院の末山になった。この彦山と聖蹟院を巻き込んだ騒動は福岡藩の裁定で騒動の中心となった平石坊、山中坊、財行坊を離山させることで終結し、福岡藩重臣の弟を迎え、座主楞伽院をたて、ようやく近世的な安定した一山の組織が再編された。

寛文11年(1671)に藩主光之から改めて山中の80万坪が寄進された。一山ではこれに基づき山中の土地管理について詮議し、分配方法や山林管理の法度を定め請文を添えた山林式目を翌年に藩に提出した。井本坊に残された『龍門山水帳』にその詳細が残されている。山内は神地、寺内、坊山、預山に区分され上宮周辺のブナなどの原生林域が神地、東院、西院谷(中宮を含む)の坊城が寺山、各坊の管林域が坊山、共同管理や管理委託した領域が預山であった。これにより霊山としての美麗な山容を維持管理する体制が整えられることとなった。これ以降、山中の縁相は安定し峰入りの行も催行されるようになり、山中北側に羅漢道が整備されるなど、霊場としての隆盛期を迎えた。

宝満山の峰入りは江戸期を通じておこなわれ、春峰は宝満山を発して三郡山系、大鳴山を越えて宗像孔大寺山に至り、織幡宮で笠野瀬を遙拝した後、春椎宮、宮崎宮、博多を経て福岡城に入り藩主に対し祈禱した後には高宮、春日宮、武蔵寺、安楽寺天満宮を経て山に戻るといふルートを通った。秋峰は筑後北部と筑豊の峰伝いを辿り英彦山を往復するもので、山中での行と里での布教とが一体となった一大行であった。黒田藩主への祈禱奉仕が度々おこなわれたことから領主との宗教的関係性が保持されていたことが伺え、慶応3年(1867)の財政難中におこなわれた勧進によって寄納集金が3000枚集まったことなどは民衆との結縁の状況が伺える。山の信仰が民衆に広がったことは博多聖福寺住持仙居の絵画や山中の金石文に見られるような文人墨客の登拝、博多町人による山中名所(龍門岩)の復旧などにも確認される。

5 近代以降の宝満山

明治新政府が成立し、明治元年(1868)に出された「神仏分離令」は宝満山の信仰史にとっても最も深刻な事態を与えた。坊中は庵仏派9坊と奉仏派16坊に分かれたが、明治3年(1870)には神楽堂、鐘堂、行者堂、護摩堂、法華塔、九輪塔など山中の諸堂が焼却、破壊された。翌明治4年(1871)にはすべての坊は神職に転じた。この年には坊中が管理してきた山林すべてが政府により土地となり、生活

の糧まで失っている。明治5年(1872)には龍門神社が村社に位置付けられ、祠家1名が奉仕となったため、明治6年(1873)には吉祥坊の吉田家のみを残して坊中は離山していった。坊中は里の石大石などに飯高した者もあったが、後に糸島、博多、糟屋、筑紫地区などに四散して、あるものは僧侶となり、あるものは在家のまま修験の行を個人で継続する者もあった。これにより多くの宝満山を信奉していた一般の信者は下山した山伏に付き、以降、信仰を以て宝満山に登拝する人々が激減したとされる。ただ明治22年(1889)になりようやく宝満山での峰入りが再興され(その後明治26年、昭和3、7、9、13、14、15、18年と催行されている)、修験道による山での祭祀は命脈を保つこととなった。

明治時代初期の混乱期を経て世情が落ち着きを見せる中、明治24年(1891)に旧坊中が「上地官林払い下げ願」を県に提出した。一方で龍門神社は式内社であるにも係らず村社格の扱いであったため、明治24(1891)年には玉依姫御陵調査として福城窟(法城窟)の調査をし、神武天皇の御母玉依姫の御陵であるとして、北谷村落より「氏子復旧願」が県に提出されるなどの条件整備があり、明治28(1895)年に龍門神社は官幣小社に列せられた。翌明治29年(1896)に龍門神社は県に「上地官林払い下げ願」を提出し、明治41年(1908)にようやく旧坊中が江戸期に管理していた山林の一部(63町8畝21歩)が龍門神社に編入され、山内が現在の民有、官有、龍門神社社地という形態となった。

官幣小社への昇格を機に境内の整備事業が企画され、境内を造成拡張した後には大正15年(1926)より下宮本殿建て替の普請に取りかかり、昭和2年(1928)に改築、落成している(現本殿)。また、昭和18年(1943)頃まで境内の参道や石垣も新たに造作され、現在のような景観に至っている。

第4節 山の現状

宝満山は一年を通じて登山者が絶えない山であり、その数は年間7万人を超えるとも言われ、九州では屈指の登山の山となっている。この山は中宮を過ぎた8合目あたりから露岩帯となって登攀の傾斜も急となり、829mの標高であるが山頂まで2時間程度の所用時間で登頂できることもあり、100万都市福岡の近郊にあってその人気は高い。かつてあった「十六詣り」の風習の名残もあって、小中学校での鍛錬遠足で利用されることもあり、多くの市民、県民に周知されている。登山ルートは複数あるが大宰府市の龍門神社から登拝道を辿り、一の島屋、中宮跡、男道経由で山頂へ至るルートが最も利用されており、筑紫野市の大字大石洞から東院谷を経て山頂に至るルートも良く知られている。山頂東側の座主跡には龍門神社と西日本鉄道株式会社山友会が運営するキャンプセンターが昭和43年(1968)に設置され、山中での宿泊を可能にしている。昭和40年代に始まる登山ブームにより、山中でのゴミと糞尿処理の問題が顕在化し、それと並行してジャクナグをはじめとする植物の盗掘、考古遺物の持ち去り、無届の作道など、干渉しなかった人災が山の関係者を悩ますこととなった。

また、近年の集中豪雨は深刻な山の崩壊を引き起こしており、ことに平成15年(2003)7月19日に発生した豪雨は山中の100か所以上で沢を中心とした土砂崩れを発生させた。この



図9 登山客で賑わう山頂



図10 キャンプセンターへの荷揚げ

れによって東院谷地区と西院谷地区では5か所以上で近世の坊跡にある石垣が崩壊、流出し、遺構に対して深刻なダメージを与えた。また、平成21年(2009)7月27日、その後数度にわたる集中豪雨でも東院谷地区で土砂の流出が起り、石垣などの遺構に影響が出ている。また、平成17年(2005)3月20日に発生した福岡県西方沖地震により、有智山城大手門とされる場所の石垣が一部崩落する事案も発生した。このように、山は近年加速度的に増加している人的・自然的な負荷を受けている。



図11 平成21年7月の水害(東院谷地区)

第2章 各説 宝満山の調査の成果

第1節 調査の歩み

宝満山の調査は修験者が難山した後の近代に始まる。明治24年(1891)に福岡県や太宰府神社(現太宰府天満宮)により山中の福城窟(法城窟)が宝満山の祭神玉依姫の陵墓として学術調査が実施された。山内での学術調査の嚆矢と位置づけられる。

本格的な学術調査は現代になって太宰府天満宮が主体となっておこなわれた。昭和35年(1960)に太宰府天満宮宮司西高辻信貞が中心となり宝満山文化総合調査会を立ち上げ、考古、文献、民俗の専門家が集められ資料が収集された。

- ・1960年宝満山総合文化調査(1次)聞き取り、踏査(2次調査)上宮祭祀トレンチ調査、法城窟トレンチ調査、下宮礎石群平板測量調査

- ・1961年宝満山総合文化調査(3次)下宮礎石群トレンチ調査

昭和43年(1968)には折からの登山ブームによる上宮崖主跡のキャンプセンター建設に伴う発掘調査(調査期間は1月18日～1月30日、調査主体は龍門神社、調査者は福岡県教育委員会宮小路賢宏、未報告)が実施された。

この時点においてまでは、古代を中心とした信仰の霊山的な存在がクローズアップされた山であり、神社の占有する下宮、中宮、上宮、修験者の坊跡を中心とした遺跡の様相で捉えられていた。

しかし、昭和58年(1983)におこなわれた太宰府顕彰会による宝満山遺跡全域における地形測量調査および、太宰府天満宮文化研究所小西信二の悉皆的な遺物分布調査により、いままて射程とされていた山中の諸所に古代から近世に至る遺跡の存在が確認されるに至り、それまで文献史学が提示していた中世寺院から修験道の段階の宝満山の様相を遺跡調査によって解明しうる可能性を提示した。

この頃から、山内では送電線の設置などを皮切りに、立て続けて埋蔵文化財の調査が緊急的に実施されるようになった。

1986年太宰府市による送電鉄塔建設に伴う宝満山遺跡調査開始(1～7次)

1991年太宰府市史編纂事業に伴う市の発掘調査(8次)大字内山宇辛野の中世墳墓

1991年民間開発に伴う市の緊急発掘調査(9次)大字内山宇大門の造成跡ほか

1992年民間開発に伴う市の緊急発掘調査(10次)大字内山宇大門の整地・権ほか

1993年民間開発に伴う市の緊急発掘調査(11次)大字内山宇辛野、(12次)大字内山宇ジル谷、(13次)大字内山宇地蔵原の生活関連遺構ほか、(14次)大字北谷宇熊崎の墳墓跡

1994年民間開発に伴う市の緊急発掘調査(15次)大字内山宇地蔵原の生活関連遺構、(16次)大字北谷宇熊崎の墳墓跡、(17次)大字内山宇地蔵原の生活関連遺構

1995年民間開発に伴う市の緊急発掘調査(18次)大字北谷宇熊崎の祭祀?跡

1996年民間開発に伴う市の緊急発掘調査(19次)大字内山宇大門の生活関連遺構

1997年民間開発に伴う市の緊急発掘調査(19次)大字北谷宇イヤノ浦の生活関連遺構

1998年民間開発に伴う市の緊急発掘調査(20次)大字北谷宇小野の生活関連遺構、(21次)大字内山宇辛野の生活関連遺構、(22次)大字北谷宇谷ノ内の炭焼窯跡

1999年公共工事(国博関連)に伴う県の緊急発掘調査(23次)大字内山宇野田、平田製鉄遺構、炭焼窯跡

表 1-1 宝満山における発掘調査表 1

年度	元号	年度1	年度2	所在地	遺跡の内容	遺跡面積	調査面積	調査状況	報告書
1	昭和	61	1986	大宇内山平山7154-20	縄文時代長良時代の遺跡 跡地出土	1742	90	特別高圧送電線建設	
2	昭和	61	1986	大宇内山平山793-44	縄文前期土器・土器・土器 土器・土器・土器	1658	106	特別高圧送電線建設	
3	昭和	61	1986	大宇内山平山728-5、 743-4、762-3、780-24	大宇内山平山728-5、 743-4、762-3、780-24	1381	308.1	特別高圧送電線建設	1
4	昭和	61	1986	大宇内山平山214-2、 215-1、大宇内山平山 宇山222-3、22-4	中世・近世・縄文、小倉弘 遺跡	2126	499.6	特別高圧送電線建設	1
5	昭和	61	1986	大宇内山平山768-273	縄文時代土器跡	1859	173.0	特別高圧送電線建設	1
6	昭和	61	1986	大宇内山平山728-292	縄文時代土器跡	1419	56	特別高圧送電線建設	1
7	昭和	61	1986	大宇内山平山7154-4 外	縄文時代土器跡、土器跡、 土器跡	6778	815.5	特別高圧送電線建設	1
8	平成	2	1991	大宇内山平山753	中世・近世・縄文、土器 跡地出土	456	207	専用住宅建築	
9	平成	3	1991	大宇内山平山7908	縄文時代土器跡	360	270	専用住宅建築	
10	平成	4	1992	大宇内山平山7944-1	縄文時代土器跡	1000	225	専用住宅建築	
11	平成	4	1992	大宇内山平山7946-1	縄文時代土器跡	1000	225	専用住宅建築	
12	平成	5	1993	大宇内山平山1040外	縄文時代土器跡	1920	772	専用住宅建築	
13	平成	5	1993	大宇内山平山750-70	縄文時代土器跡	32000	1040	ダム建設	
14	平成	5	1993	大宇内山平山750-70	縄文時代土器跡	32000	1040	ダム建設	
15	平成	6	1994	大宇内山平山750-70	縄文時代土器跡	32000	1040	ダム建設	
16	平成	6	1994	大宇内山平山750-70	縄文時代土器跡	32000	1040	ダム建設	
17	平成	7	1996	大宇内山平山750-70	縄文時代土器跡	32000	1040	ダム建設	
18	平成	7	1996	大宇内山平山750-70	縄文時代土器跡	32000	1040	ダム建設	
19	平成	8	1996	大宇内山平山7947-1	縄文時代土器跡	490	434	専用住宅建築	
20	平成	8	1996	大宇内山平山7947-1	縄文時代土器跡	490	434	専用住宅建築	
21	平成	10	1998	大宇内山平山7947-1	縄文時代土器跡	1300	340	専用住宅建築	
22	平成	10	1998	大宇内山平山7947-1	縄文時代土器跡	1300	340	専用住宅建築	
23	平成	11	1999	大宇内山平山7947-1	縄文時代土器跡	1300	340	専用住宅建築	
24	平成	13	2001	大宇内山平山7947-1	縄文時代土器跡	2600	960	調査	
25	平成	13	2001	大宇内山平山7947-1	縄文時代土器跡	2600	960	調査	
26	平成	13	2001	大宇内山平山7947-1	縄文時代土器跡	2600	960	調査	
27	平成	14	2002	大宇内山平山7947-1	縄文時代土器跡	2600	960	調査	
28	平成	14	2002	大宇内山平山7947-1	縄文時代土器跡	2600	960	調査	
29	平成	15	2003	大宇内山平山7947-1	縄文時代土器跡	800	382	調査	
30	平成	17	2005	大宇内山平山7947-1	縄文時代土器跡	13900	916.4	土砂移動、駐車場造成	
31	平成	17	2005	大宇内山平山7947-1	縄文時代土器跡	127000	25000	遺跡分布調査	

表 1-2 宝満山における発掘調査表 2

年度	元号	年度1	年度2	所在地	遺跡の内容	遺跡面積	調査面積	調査状況	報告書
32	平成	18	2008	大宇内山平山7947-1	中世・近世・縄文、土器 跡地出土	85000	30000	遺跡分布調査	7
33	平成	19	2007	大宇内山平山7445-1	縄文時代土器跡	567.8	467	工事	7
34	平成	19	2007	大宇内山平山780-1、16	縄文時代の遺跡と三國時代の 遺跡跡地	11038	1156	本谷堤防工事	
35	平成	19	2007	大宇内山平山7947-1	縄文時代の遺跡と三國時代の 遺跡跡地	300000	300000	遺跡調査	7
36	平成	19	2007	大宇内山平山720、621、930	縄文時代の遺跡と三國時代の 遺跡跡地	479.41	243	農地改良工事	
37	平成	20	2008	大宇内山平山7947-1	縄文時代の遺跡と三國時代の 遺跡跡地	893	747.5	遺跡調査	7
38	平成	20	2008	大宇内山平山7947-1	縄文時代の遺跡と三國時代の 遺跡跡地	34400	33400	遺跡分布調査	
39	平成	21	2009	大宇内山平山7947-1	縄文時代の遺跡と三國時代の 遺跡跡地	1755	268	農地改良	7
40	平成	21	2009	大宇内山平山7947-1	縄文時代の遺跡と三國時代の 遺跡跡地	326	168.4	農地改良	7
41	平成	21	2009	大宇内山平山7947-1	縄文時代の遺跡と三國時代の 遺跡跡地	8000	324	グラウンド造成	
42	平成	22	2010	大宇内山平山7947-1	縄文時代の遺跡と三國時代の 遺跡跡地	986	877	造成	
43	平成	23	2011	大宇内山平山7947-1	縄文時代の遺跡と三國時代の 遺跡跡地	700		仕舞所建設	

報告書一覧

- 「宝満山遺跡」1989年大宇内山平山教育委員会(昭和63年)年度1~7次
- 「宝満山遺跡」1997年大宇内山平山教育委員会(平成9年)年度14~16・18次
- 「宝満山遺跡」2001年大宇内山平山教育委員会(平成13年度)宝満山11・21次
- 「宝満山遺跡」2002年宝満山遺跡調査委員会(平成13年度)宝満山23次
- 「宝満山遺跡」2006年大宇内山平山教育委員会(平成18年度)宝満山9・10・12・13・15・17・19・20・22・24~29次
- 「宝満山遺跡」2008年大宇内山平山教育委員会(平成17年度)宝満山30次
- 「宝満山遺跡」2010年大宇内山平山教育委員会(平成21年度)宝満山遺跡31~40次
- 「大宇内山平山」考古学発掘1995年大宇内山平山教育委員会(平成6年)年度1~7次
- 「宝満山遺跡」2012年大宇内山平山教育委員会(平成24年度)宝満山遺跡42、43次(予定)

附属 図任の調査

1 宝満山の縄文時代調査

年度	元号	年度1	年度2	調査地	調査内容
1	昭和	35	1960	下京、安祥通、下京の 山頂、山頂、山頂、山頂	縄文土器調査
2-1	昭和	35	1960	山頂	縄文土器調査
2-2	昭和	35	1960	山頂	縄文土器調査
3	昭和	36	1961	下京	縄文土器調査

2 上記以外の縄文時代の調査

年度	元号	年度1	年度2	調査地	調査内容
昭和	43	1968		山頂	縄文土器調査(未報告)



図 12 山頂祭祀遺跡の調査 (1960年)



図 13 宝 34 次現地説明会 (2009年)

- 2001年民間開発に伴う市の緊急発掘調査(24次) 大字内山字大門の鍛冶工房跡、(25次) 大字内山字南谷の生活関連遺構
- 2002年民間開発に伴う市の緊急発掘調査(26次) 大字内山字南谷の礎石建物、(27次) 大字内山字地藏原の参道跡ほか(28次) 大字内山字南谷の生活関連遺構、(29次) 大字北谷字小野の基礎建物、鍛冶遺構ほか
- 平成17(2005)年民間開発に伴う市の緊急発掘調査(30次) 大字内山字前田の宝満A経塚

このような民間開発による緊急調査に追われる中、平成10年度に実施した大字内山字辛野の21次調査地点を内山字野遺跡として平成16年(2004)1月に市の史跡に指定した。

また、平成15(2003)年7月19日早晩の集中豪雨によって、山中の100を超える箇所ですり流が発生し、近世の坊跡とされてきた箇所では大規模に石垣が崩壊するなどした。

そのような状況の中、市においては山中の遺構について詳細な位置や構造などの台帳的な情報を把握してはなかったことから、平成17年度から同21年度までの5カ年の計画で、国庫補助事業として地元への承諾を得た上で山中の悉皆的な遺構探索をおこない、1/2,500図に個々の遺構をプロットする事業と、宝満山を代表する既知の主要遺跡として揚げられる伝有智山城土塁および周辺の図化(31,32次)、本谷(妙見洞)礎石群の確認調査(34次)、宝満山下宮礎石群の確認調査(37次)、中宮跡周辺の地形測量調査(38次)を実施した。これによって山林で遺跡の把握が遅れていた部分において遺構の所在が明確となり、主要遺跡については毀損の事態に対応するための基礎的な図を作成することが出来た。

- 平成17(2005)年 大字内山字辛野 有智山城測量調査(31次)
- 平成18(2006)年 大字内山字辛野 有智山城周辺測量調査(32次)
- 平成19(2007)年 民間開発に伴う市の緊急発掘調査(33次) 内山字辛野での奈良時代他の生活関連遺構、国庫補助による確認調査(34次) 内山字本谷の本谷礎石群(推定六所宝塔跡)、大字内山、大字北谷他国庫補助による悉皆的測量調査(35次)、内山字地藏原の農地改良に伴う生活関連遺構の調査。
- 平成20(2008)年 大字内山字御供屋における下宮礎石群の確認調査、国庫補助による悉皆的測量調査(38次)
- 平成21(2009)年 内山字ジル谷での農地改良に伴う生活関連遺構の調査(39次)、大字内山字大門での農地改良に伴う生活関連遺構の調査(40次)、大字内山字ジル谷での農地改良に伴う生活関連遺構の調査(41次)

近年、高齢化が背後にある農地改良に伴う申請が増え、削平や作道にかかる部分について発掘を進めて来ているが、43次調査では平安中期の底を持つ礎石建物が発見され、10世紀を中心とする時期の内山地区での中心的な堂舎であることが判明した。

- 平成22(2010)年 内山字ジル谷での農地改良に伴う礎石建物の調査(42次)
- 平成23(2011)年 大字内山字御供屋での事務所建て替えに伴う龍門神社境内測量調査(43次)。

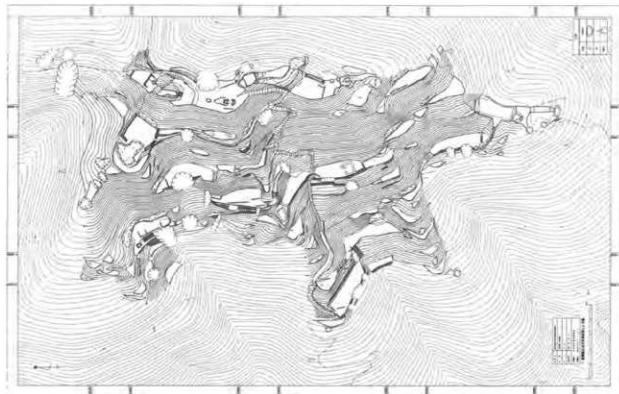


図14 宝38次西院谷の測量図(太宰府市2008年)

第2節 宝満山遺跡群の現状

第1項 地形測量

遺跡としての宝満山に関する測量調査は、昭和58年(1983)に太宰府天満宮文化研究所が太宰府顕彰会から刊行した『宝満山及び龍門神社周辺の遺跡分布調査報告書』に用いられた1/2,000の全体図がある。作図は航空測量と平板による補足データからなるもので、山内の状況がほぼ網羅されている。この際に山頂地区と下宮礎石群については1/500の精度で詳細図が作成されている。遺跡の分調査の成果は全体図を1/10,000に縮小編集した図が使用されている。

太宰府市側ではその成果を1/2,000の精度で山内での人為的平坦面(荒地、水田、畑)、人為的マウンド、道(現況道路・小径と廢道・古道)、切り通し・造成崖、堀・濠、土塁・土橋、以上の遺構に係る斜面・法面上端、下端、

礎石、石垣、墳墓、経塚、石碑・石塔・磨崖、集石遺構、石列、上記遺構の崩壊箇所、遺物散布地などの観察項目を設けた調査をおこない(第32,35次調査)、中宮跡のある西院谷地区では1/500の精度で測量調査を実施し(第38次調査)平成22(2010)年に成果を公表している(太宰府市2010)。

これとは別に九州歴史資料館の岡寺良が中世山城調査の作図手法により西院谷地区と東院谷地区の近世坊跡等の作図をおこない、平成20(2008)年に成果を公表している(岡寺2008)。

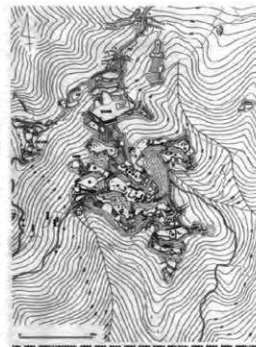


図15 東院谷の坊図(岡寺2008年)

第2項 地名・伝承

宝満山の地名については太宰府顕彰会刊行の『宝満山及び龜門神社周辺の遺跡分布調査報告書』において小字までの情報が一覧で公開されている。また、小字より小さな小地域を示すホノケについても昭和50年代に採取された聞き取りの成果と明治期に作成された字図の注記から知られる地名が全体図に注記され、その成果は『宝満山遺跡6』（太宰府市2010）の全体図にも反映されている。筑紫野市側については平成23年度に大字原、大石、本道寺、柚原地区において聞き取り調査を実施した。

信仰や遺跡に係る地名には、太宰府市側では北谷、南谷、内山の名が、中世山岳寺院があった段階での山内支配の単位を示す名称であり、北谷に智光寺原、キョウヅカヤマ、別所、大黒寺、坂本など寺院関連の名称が見られる。南谷地区には中堂、中堂谷の名があり、根本中堂のあったとされる場所がある。内山地区においては御供ヤ谷、宮ノ前、釈迦院、本谷、地藏原、オオヤマジ、キョウヤマ、大門、御所の内、ビシヤモン、汐井川、浄成島（浄成は中世座主の名称）などが寺社に関する地名として残され、山内での惣寺の機能のある施設が置かれていたことが推察される。

宝満山に係わる小字について行政台帳等で確認できるものは以下の通りである。

1 太宰府市

大字北谷

宝満、小野、大黒寺、谷、岸ノ谷、一丁坂、出口、小畑、ロノ坪、嶺ヶ浦、川久保、宮ノ下、イヤノ浦、奥小屋（おつこや）、別所、ソイラ、八反田、長浦、只越（ただごえ）、熊崎（くまざき）、地藏谷、小原、戸石、横枕、山浦、山ノ下、夕内（ゆうない）

大字内山

龜門山、辛野（からしの）、中堂、南谷、谷上（たにかみ）、前田、野田、平田、地藏原（じぞうばる）、本谷（ほんたに）、御嶽（おたけ）、山ノ内、御供ヤ谷（ごくやたに）、宮ノ前、下御供屋谷（しもごくやだに）、大門（だいもん）、ジル谷

大字太宰府

松川（まつごう）、冷林（ひえべす）、大原（おおばる）、三浦、菅谷（すがや）

2 筑紫野市

大字原

古賀、谷川、ミイ田、ミスタ、下原（しもばる）、中村、山崎、焼石（やけいし）、楠原、石坂、塚浦、山小川、野添（のぞえ）

大字吉木

生妻谷（しょうがだに）、尺ヶ浦（しやつかうら）、片山、六度（ろくど）、今屋敷、吉木畑（よしきばたけ）、大谷、鳥越（とりごえ）、広畑（ひろはた）、山の口、笹栗、柿の元、風来（ふうれい）、堀切、長谷（ながたに）、引地（ひきじ）、清水（しやうず）、吉木田（よしきだ）、宮の脇、倉谷、先の原（さきのはる）、入道原（にゆうどうげん）平原（ひらばる）靴子形、浦畑、鷹取、田代、一木、久保田、キシ田、走り折（はしおり）、平口原（ひらぐちばる）、東坂部、地藏田、松本、吉原、戸瀬戸口、桜木、唐木（からき）、一本木、中村崎、土穴、手島、大坂、釘、下の谷、岩本、栗田、水洗（みずあらい）上の川原（うえのこうら）、池田、塚口、西坂部、福ヶ坂（ふくかきか）、四郎五郎

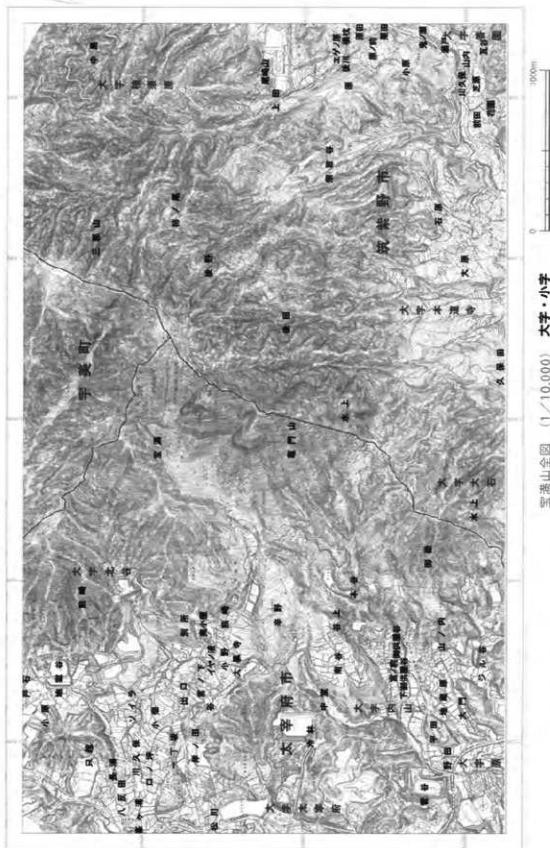


図 16 宝満山周辺の字分布図

大字大石

一の瀬、久保田、向の原、鏡田（よろいだ）、原田、上内田、浦口、上屋敷（かみやしき）水上（みずかみ）
大字本道寺

井手口、畑ケ田、前田、原ノロ

後口野（うしろの）、石原、火原（ひのほら）、後口田（うしろだ）、後田（うしろだ）、中の原

大字香園

三ッ釜、扇山、坊主田（ぼうずだ）、根知川（ねちがわ） 垂牛田、瓦谷、芝原、浦野、花園、湯の谷、前田、堀、下屋敷（したのやしき）、平原、谷山、山神田（やまがみだ） 節匂田（せつくて）、山留

大字須原

目の谷、峠、イヤノ小樺（いやのこじい）、ナギノ、小樺（こじい）、持松田（もちばた）、杉谷、山添、菅原（くらはる）、山シブ、横枕、原田（はらだ）、宗旨口（ちゆうしぐち）、山田尻、栗林（くるべし）
ノゾノ原、尾崎山、上田（かみだ）、原、後川（うしろごう） 原の前（はるのまえ） 小原（こばる）、鬼の瀬、瀬戸、山の内、川久保、日守（ひまもり）、大谷、柿の尾、宗旨谷（しょうしだに）、中島、三郎山

筑紫野市側での地名の聞き取り調査で字以下のホノケに、大字本道寺にてオザスマヤキ、宗旨谷、アカダン（照加谷？）、インノクラ（院の倉？）、大字大石に大行事原、ヤマブシダン（山伏谷）などを採取することができた。

概して太宰府市側に古代・中世社に関連する可能性のある地名が多く分布し、筑紫野市側は近世以降の宝満二十五坊に係る地名が見られ、その違いが看取される。

第3項 遺構・遺物

1 旧石器時代から古墳時代

宝満山遺跡群において旧石器時代に属するものは、山の西斜面の標高250mのレベルにある辛野地区（宝満山遺跡2次調査）において、横刺ぎの剥片を素材とする肉厚のナイフ形石器が黄砂地植植物（レス層）の二次堆積層中から単体で出土している。縄文時代は宝満山西裾から太宰府市の高雄丘陵にかけて早期の遺跡が散見される。九州国立博物館用地内の浦ノ田遺跡では早水台式期から田村式期の押型文土器を伴い集石が4基、落とし穴2基などが検出されている。このほか落とし穴が下高雄遺跡1次調査で、押型文土器は内山地区の宝満山遺跡10次調査（山形文、早水台式）、石穴遺跡1次調査D区（楕円文）、宝満23次調査、宝満山遺跡群に隣接する筑紫野市原遺跡では押型文土器（稲荷山式から田村式期）と、それに先行する貝殻条痕と刺突文を伴う円孔文式の柏原式土器も出土している。早期の集落は同時期の南九州などで見られるものとは比較にならないほど小規模なもので、宝満23次、原遺跡（筑紫野市）で見られたように土器相も前半の早水台式から後半期の田村式のものまでを含み、一時期に大規模にその場が利用されたというのではなく、非常に長い期間にくりかえして同じ場が利用されていた状況が想定される。晩期の遺跡には山裾部にある太宰府天満宮周辺地区の進歌屋1次、新町3次（黒川式期）か、浦ノ田3次（広田式期）、馬場10次（夜白式）などが散見され、緑色片岩系の素材による石剣を伴うことから斜面地を小規模に耕作していたことが想定される。弥生・古墳時代には高雄丘陵を除く山裾周辺では顕著な集落跡は調査されておらず、現状では大字北谷の松川、ツイラ、イヤノ浦、熊崎遺跡（福岡県1980）などで土器が散見される程度である。

2 飛鳥時代から平安時代

7世紀末から8世紀初頭の段階で内山地区の宝満27、40次調査、中腹の辛野地区および山頂下下の東院谷地区において土器が出土し、8世紀中葉から後半の段階で山の南西裾の原遺跡や中腹の辛野地区の第21次調査において土師器甕に供膳具を伴う土器相を持つ生活感のある遺跡が形成されている。原遺跡では山頂祭祀で用いられた須恵器の小型華瓶や寺院で出土する鉢形土器と供に墨書土器も出土し、「董」「寺」の文字があることから、宝満山での初期寺院の活動を担う大衆院や花園院などの機関が置かれていたことも考えられる。

内山辛野地区や筑紫野市本道寺の東院谷地区では悉皆調査や平成15年（2003）7月の水害調査で遺物が採取されているが、その中に8世紀初頭に位置づけられる須恵器の坏が見られる。8世紀も中頃以降になると、山裾の原遺跡に近い33次調査では二彩陶器が出土している。下宮地区では瓦を伴った包含層が、さらにその上の内山辛野での第21次調査では煮炊具としての甕を含む土器群と整地層が見つかり、その眼上には祭祀遺跡である辛野、山頂遺跡が展開している。その他、下宮から中宮に至る間の独立峰である3、30、34次地点の頂部付近で須恵器の坏や蓋の破片が採取されている。このような状況を総合的に判断すると、宝満山での遺跡の形成は8世紀初頭にはじまり、8世紀中頃には原遺跡などの山裾で一定期間の滞在を可能にする生活空間が形成され、第21次地点のような山中でのキャンプサイトがそれに連動して展開し、現在の登拝ルート沿いの独立峰の頂部で小規模な土器を用いた祭祀が連続的におこなわれて、北西面では辛野遺跡、南西面では山頂遺跡が最大の祭祀場となっていたことが理解される。

8世紀中葉には、山頂南東斜面における祭祀、南東斜面の大南窟（宝構造を持つ巨岩露頭）の使用が始まっている。山頂での祭祀は9世紀前半にピークを迎え、土器の投棄は11世紀までおこなわれている。多量の土器と伴い銅製鏡、奈良三彩、施釉陶器、皇朝銭などが山頂東直下の崖下で採取されている。ここで出土する多くの土器の縁には油煙の跡が残され、闇の中で土器に油を注いで火を灯して巨岩の上

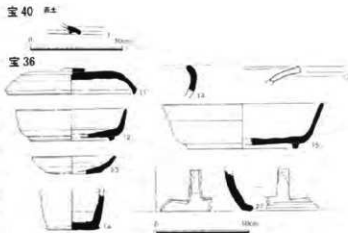


図17 宝満38,40次出土の8世紀の遺物

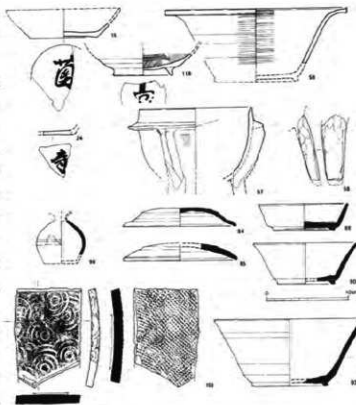
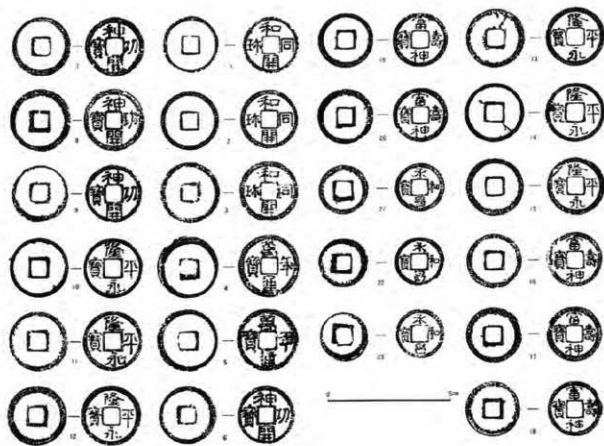


図18 原遺跡出土遺物



2cm

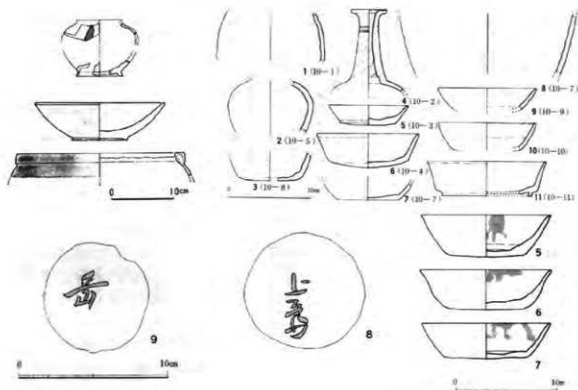


図19 宝満山頂出土遺物

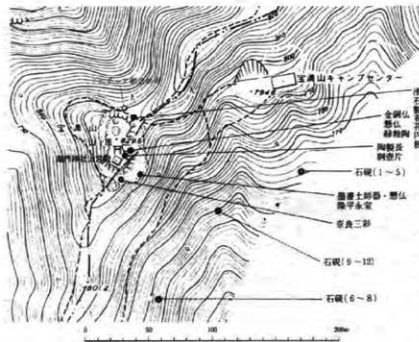


図20 宝満山頂遺物出土状況

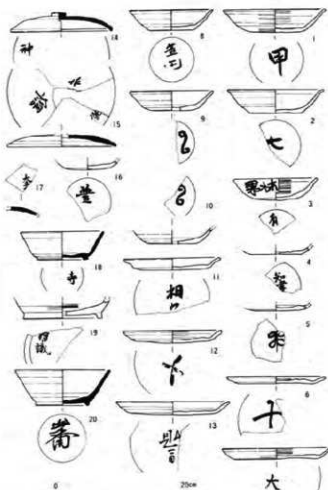


図21 辛野地区出土墨書土器

で祈りがささげられていた光景が想像される。また、出土した墨書土器に「寺」銘のものがあり、祭祀のために山中に入っていた者の中に仏教を背景とした人間が含まれていたことは考えられる。

このように宝満山での遺跡の黎明は宗教を背景とした祭祀を前提に成立し、山頂での祭祀は福岡県神ノ島一号祭祀遺跡と岡山県大飛鳥祭祀遺跡の出土遺物の構成と類似し、遣唐使派遣にかかわる国家祭祀を背景とする遺物群との評価がなされている(小田1983)。さらに西側の裾にある

辛野地区における8世紀初頭から後半にかけての祭祀遺跡では、出土した墨書土器の文字中に「神」「論」「寺」「知孝」「守護」など宗教性を帯びた文字が見られ、特に現代でいうところの外国を示す「蕃」銘の文字を持つものが存在することから、古代官衙大宰府を背景とした国境祭祀をおこなうべき場として成立していたと考えられている。

平安時代にはさらに明確な遺跡の展開が観られる。本谷礎石建物は標高275mにある第34次調査で詳細が確認された。検出された34SB001の礎石建物は、完全によって設計された一辺814cm(26.8尺)、三間四方の互を所要した建物であったことが判明した。柱の芯心の幅は両外が2.5m、中央が3.1mの一辺が8.1mを測り、山を削り出して作った方形の基壇を伴っている。石で築かれた階段の位置から南を正面とした建物で、東には山頂を仰ぐ好位置に立地している。礎石の脇から平安時代の様式とされる小銅仏が出土している。第32、35、38次で実施した宝満山中における悉皆的な一連の分布調査によって、山中において古代の瓦と礎石を伴う遺構の存在

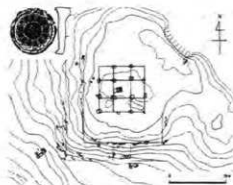


図22 本谷礎石建物と小金銅仏

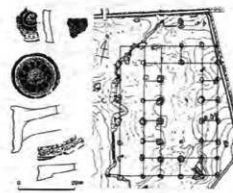


図23 下宮礎石建物

し、以前の調査では鴻臚館式の軒瓦が出土し、至近で奈良時代の都府様式鬼瓦が出土しており、昭和35年(1960)の調査では一部に奈良時代の遺物包含層が見つかっていることや、礎石自体に柱座の作りだしがあることから、奈良時代に成立した建物が再建された可能性を秘めている。また、平安時代の瓦は10世紀を中心とする時期のものが主体を占めており、奈良時代と12世紀後半の間に屋根の葺き替えや建て替えがおこなわれたことも想定される。建物の規模は大宰府観音寺、宇佐赤松寺の講堂に近く、九州最大規模クラスの瓦を所要する堂柱であった。講堂などの性格を持つ山内の中核建物と目される。第27次調査ではこれに接続する谷部の参道遺構と考えられる道路遺構が見つかった。この間には過去に平安期の瓦が多量に採取されており、37SB010以外に瓦所要の建物が複数存在して、この一帯で堂舎が群を成していたことが想定される。谷部から上がる通路は本報告の第39次調査でも見つかっており、その上の平坦面が浄成坊(座主坊)の伝承があり、平安後期以降には堂舎群の南には優位な坊が形成されていた可能性が高まっている。

下宮礎石建物のさらに西側で、近年新たな礎石建物が見えられている(第42次調査)。建物は基壇を伴い、その規模は東西24m、南北21m以上で、基壇の石積みには、長さ50cm前後の花崗岩の礫を使い、現状では1~2段分(高さ40cm前後)が残っているが、当初は約3~4段(高さ70cm前後)の石積み

は下宮地区とこの場所に限定されることが鮮明となり、しかもこの遺構が出土遺物の検討から10世紀代に創建されたものであることが想定されることから、以前から推定されていた承平7年(937)『石清水八幡宮文書之二』所収「大宰府様」記事中の「六箇所宝塔」中の沙弥澄覚が承平三年以前に建立した筑前鹿門山の宝塔の最有力の遺構となった(小田1982、森2008、第5章第2節史料No.8)。この34SB001が宝塔であるかどうかについては、平安前期の宝塔や多宝塔の建築学的な構造研究が今以上に深化する必要があるが、先の「大宰府様」記載した「下修三昧法」をおこなう施設としてはまさに的を得た一間四面の三昧堂的な構造をもつものと評価されよう。この塔はもともと天台宗を開いた景澄が企画した、弘仁9年(818)のものと考えられる。「六所造宝塔願文護国縁起」記載の「筑前宝塔院」にあたるもので、国分寺の制度に代わって天台宗が企画した国家安寧を目的とする仏教施設であり、古代前半に国境祭祀がおこなわれた宝満山遺跡との関係では、その性格においてまさにそれを引き継ぐ宗教施設といえる。

鹿門神社下宮地区にある下宮礎石建物37SB010は標高157mあたりの平場に展開する5間×7間の礎石建物で、北に対し13度西へ振れる南北棟である。規模は23.3×17.8mを測る。乗行きの西側1間分は礼堂と考えられ身舎は土間構造であった。建物建設に伴う基礎地盤が確認されその規模は南北長34m、東西長22mであり、礫が混じる地山を一度切り下げた平坦に成し周囲から1.1mほど盤地により盛土成形している。この建物は既往の調査では平安後期とされていたが、整地の出土遺物から造営年代は12世紀後半以降のもとも判明した。しかし、以前の調査では鴻臚館式の軒瓦が出土し、至近で奈良時代の都府様式鬼瓦が出土しており、昭和35年(1960)の調査では一部に奈良時代の遺物包含層が見つかっていることや、礎石自体に柱座の作りだしがあることから、奈良時代に成立した建物が再建された可能性を秘めている。また、平安時代の瓦は10世紀を中心とする時期のものが主体を占めており、奈良時代と12世紀後半の間に屋根の葺き替えや建て替えがおこなわれたことも想定される。建物の規模は大宰府観音寺、宇佐赤松寺の講堂に近く、九州最大規模クラスの瓦を所要する堂柱であった。講堂などの性格を持つ山内の中核建物と目される。第27次調査ではこれに接続する谷部の参道遺構と考えられる道路遺構が見つかった。この間には過去に平安期の瓦が多量に採取されており、37SB010以外に瓦所要の建物が複数存在して、この一帯で堂舎が群を成していたことが想定される。谷部から上がる通路は本報告の第39次調査でも見つかっており、その上の平坦面が浄成坊(座主坊)の伝承があり、平安後期以降には堂舎群の南には優位な坊が形成されていた可能性が高まっている。



図24 宝満42次礎石建物

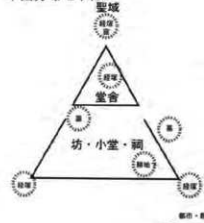
であったと推測される。幅は4.3mの石段の2段分が基壇の南側中央にあり、基壇の東側には幅3.4m、長さ4.8m以上の規模で、花崗岩礫を敷き詰めた遺構が付帯する。建物部分は以後の削平があり、礎石が当初の位置をほぼ保っているのは3個のみで、その他では礎石の抜き取り痕跡を確認した。身舎は、桁行3間(12.3m)×梁行2間(6.4m)と考えられ、桁行の柱間は約4.1m、梁行の柱間は約3.2mを測る。柱間が広いため身舎内については土間であった可能性が高い。削平されているため遺構として確認できるのは東側と北側のみであるが、身舎の周囲には並が通っていたと考えられる。基壇と建物の位置関係などから四面に庇があったと考えるのが妥当とされている。四面庇であれば建物の規模は桁行5間×梁行4間(正面18.7m×側面12m)と

3 平安後期から中世
平安後期以降は山中に広く遺物の散布地が知られており、大宰府市側の内山、北谷をはじめ筑紫野市側の原、大石、本尊寺などの集落、山中の東院谷、西院谷周辺などでは当該時期の遺物が雛壇状の造成面で広く採取されている。
南谷地区の第4次調査では奈良時代以降のものや位置づけられる小金銅仏が出土している。記録ではこの周辺から雑草が出土したとされ、山内の雛壇状の造成面上に形成された生活空間が前述の寺院にかかわる坊跡と推定される。近世地誌には「有智山、南谷、北谷、三所の僧舎すへて三百七十坊しかや」『筑前国続風土記』と記載され、11世紀以降14世紀前半頃には、遺構の広がりから広大な規模の生活空間が形成されていたと考えられる。



図25 宝満山遺跡概念図

平面分布モデル



垂直分布モデル

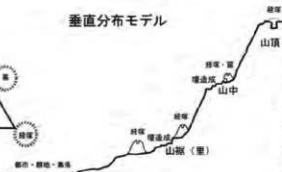


図 26 宝満山の遺跡分布モデル

出土した丘陵裾の田面に「ビシャモン」のホノケ（小地名）が残されている。このことは推定坊跡地区の面的開発の端緒が発掘調査の所見では12世紀におかれる点と整合的であり、開発に伴って山内に「堂」と「坊」がセットで出現したことを示唆している。

坊の単位と考えられる段には谷や尾根に沿う道に面して計画的に配置されたものや、谷部を魚鱗状に利用するものなど幾種類かの傾向が見られる。幸野地区の最高所にある宝満21次調査で検出した13世紀後半頃の遺構は、正面の造成崖に二段の石垣と食い違いの石段、段の上がり口に四脚門、奥には土塁状の造成崖下に枯山水風の庭園、花壇状遺構、それに開まれた桁行3間、梁行2間の教舎風建築物があり、室町期に先行する居館的な要素を備えた施設であることが判明した（市指定史跡）。その遺跡の下の谷にあたる第29次調査では石段や溝で区画して斜面地を有効に利用した企画性の高い推定坊跡がみついている。これら聖堂や推定坊跡は調査の所見から平安後期に整備され始めたものと考えられ、山中での土器祭祀盛行後に寺社が形成された流れで捉えられる。この遺跡の坊化の開始時期は中国華南産白磁が多量出土した11世紀後半以降の時期に該当し、同じ山岳遺跡である太宰府原山、四王寺坂本地区、福岡市東山天福寺、脊振山東門寺山頂地区、糟屋郡首羅山などで分布する遺物の上限時期でもあり、北部九州においては一斉に山岳寺院が形成され始めた感がある。筑紫野市側でも彌谷を中心とした本道寺地区にはほぼ同時期のものと思われる石垣を多用した段造成群があり、大石地区の水田でも同時期の遺物が分布することから山の東面側においてもこの時期に坊が展開していたと考えられる。

山岳寺院化のきっかけとして知法による経塚の形成が注目される。山内では経塚が内山地区の宇南谷（宝満A経塚）と筑紫野市大字原（宝満B経塚）の二箇所で見られている。宝満A経塚は古くに個人によって発掘されたもので、宝珠鍬と反りのある六角形の蓋を持ち、経巻とともに飛鳥様式をどめる金剛製菩薩立像が納められていた。重要文化財に指定されている。また、南谷地区の4次調査では奈良時代以降に位置づけられる小金銅仏が出土している。周辺は中世の坊が広がるエリアであり、宝満A経塚例のように経塚に封入されたものが坊中で祭られたものであろうか。

4 遺跡としての宝満山

宝満山遺跡群は7世紀後半から8世紀の山頂、山中祭祀にはじまり、記録から奈良朝末から平安初期に「龍門神」が成立、ほぼそのころに仏教寺院「龍門山寺」も成立。12世紀に至って西斜面裾部（内山、南谷、北谷地区）と山頂東麓辺において堂と坊がセットになった寺坊城が成立し、そのシステムは14世紀前半までは安定して営まれていた、と考えられる。寺坊城の衰退は急激に起こったと見られ、発掘

調査をおこなった内山、南谷、北谷地区では14世紀前半を以って遺構形成が一旦終了する。現状では南谷の一部においてその後の時期（15、6世紀）の遺物が散見されるが、遺構形成は顕著でない。ただ、下宮後背の本谷といわれる地区の尾根部でおこなった3次調査では尾根を断ち切る空壕状の溝が14世紀前半から中頃に穿たれ、それは16世紀頃まで機能しており（太宰府市1989）、『梅松論』『太平記』『龍造寺家文書』などにみられる少武氏壑城の「内山の城」（有智山城）への菊池勢の城攻め、懐良親王による大宰府での征西府樹立による宝満山の要害化など、14世紀前半代から起こる南北朝期の動乱により居住空間が荒廃し山内が要害化されたプロセスが遺構に反映されたものと見られる。

宝満山に残る北谷、南谷、本谷などの名称は比叡山本山の他、末山の各地方寺院に広く見られ、鎌倉初期成立とされる『彦山流記』（広渡正利1979）によれば豊前国彦山においては南谷、北谷、中谷、惣持院に夫々「講堂」と「先達」が一定の比で配置され「一山四谷」と呼称されることから、「谷」名称は天台系寺院の寺務機構に係る「坊」を束ねる上位の機構の名称であったことが考えられる。宝満山では宗教に関連した施設が中世末期の武士の占拠や戦乱により早々に荒廃してしまい、霊山としての面持ちや龍門神社の祭祀と復興された修験者による年一度の峰入りや探灯護摩供により保たれている。しかし、残された地名とそこに眠る遺跡からは国境において展開した壮大な宗教世界が広がっていた山であることを知ることができるのである。

宝満山遺跡のモデル

平安時代末から鎌倉時代

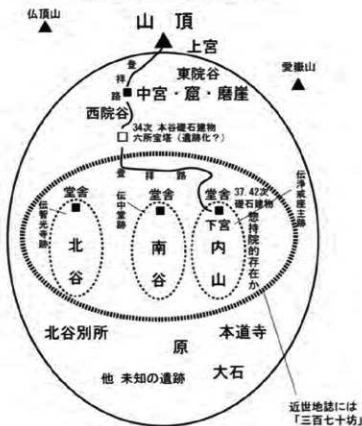


図 27 宝満山遺跡の構造モデル

第3節 宝満山の文化財

第1項 古文書・記録類

1 縁起類

(1) 『龍門山宝満大菩薩記』(横浜市金沢区称名寺・神奈川県立金沢文庫に寄託) 鎌倉時代

枳型折本 縦16・2cm、横13.5cm 楮紙 墨書

称名寺2代住職願阿(1261～1338)の手沢本

神奈川県立金沢文庫で平成8年開催された、テーマ展「金沢文庫の中世神道資料」に展示された。同展の『図録』に解説と一部の写真、全文の翻刻が掲載されている。また〔森2008〕にも独自に行った全文の翻刻を掲載。『図録』では「神祇源流」に際しての伝授書の一とし、制作年代は願阿の時代、鎌倉末としている。

本縁起は、八幡宮関係の者の手になったと考えられ、まず龍門宮が願西九州二嶋の鎮守であること謳い、神の系譜として『宇佐託宣集』等と同様、安曇羅龍王の五所の姫君のうち神功皇后の姉と位置づけ、次に、神功皇后「三韓征伐」の時に共に戦ったこと、応神天皇誕生に際し龍門を立てたこと、神亀元年(724)、龍門山の上宮・下宮・十所王子と香椎社等が草創されたなど、神功皇后との関係を強調している。鎌倉末期の称名寺住職願阿の手沢本であり、その時代に存在していた宝満山最古の縁起である事に疑問はないが、その内容や宝満山と八幡宮の関係を勘案すれば、成立年代はさらに遡らせて良いと思われる。文中に天永2年(1111)、久安2年(1146)の年号が見えることから、それ以降であることは確かであるが、鎌倉初期ごろまでには成立したものと推測される。

(2) [筑前龍門山由来之写] (高千穂(上)文書) 江戸時代初期

表題もない一紙物であるが、『龍門山宝満宮伝記』など本格的縁起制作以前の宝満山の縁起として注目される。聖護院文書『天明西九改元寛政正行 修験方日記』に記載された、寛永17年(1640)9月晦日、財行坊寺時を代表とする宝満衆徒中が「讀言上」した宝満山の「由来」と骨子の部分はほぼ同文である。しかし、本書の方が地元で即して文章がより整備されている。本末論争の一連資料の中にある。内容は①推古天皇御代の心連上人による寺院創建、②白鳳2年宝満大菩薩が天竺より飛来し、当初日域の主にならうとしたが、天照大神のものであったため、鈴鹿山に籠もり、後二国二島の鎮守として龍門山に入った③役行者が来山し、宝満を金剛界当山と号し彦山を胎藏界本山と名付けた④伝教大師の来山についての項目などを載せている。簡単なものではあるが見られにくい興味深い内容を含んでいる。〔森2008〕別冊『宝満山関係史料集』に翻刻・解題掲載。

(3) 『龍門山宝満宮伝記』 江戸時代・貞享4年(1687)

江戸期の宝満山の縁起の成立については、福岡県筑紫野市山家鎮座の宝満宮に所蔵する『龍門山宝満宮縁起』の奥書によってその経緯を知ることができる。

宝満宮伝記者、天正年中之兵乱に焼失せしゆへ、古来の開書を集、貞享の比迄平坊弘有探之、

以上京し松下見林江文句の綴を改竄有り。毫者五条大納言ト云殿へ頼入れ、乾坤之巻成就して

外題并和歌者鷹司右大臣兼熙公の墨跡也。

つまり宝満宮の伝記は、元々何らかの形で存在したが天正の兵火で焼失したため、平坊弘有が古来の聞き書きを集め、貞享の頃(1684～88)までに一応の形を整え、国学者松下見林の校閲をうけ成立した。揮毫は五条大納言に頼み入れ、乾坤之巻をつくり、外題并和歌は鷹司右大臣兼熙公の墨跡を載けるという格式高い2巻として成立させた。龍門神社に「宝満宮御伝記函」と記泥文字も鮮やかな黒漆箱が蔵

されている。残念ながら箱のみでその原本は伝わらないが、『龍門山宝満宮伝記』の近代の写本が伝わり、その奥書に

龍門山また昔ながら降つる岑のしら雪あけてこそ見ゆ

右宝満宮伝記乾坤外題并巻末和歌者右丞相兼熙公真蹟也

貞享四年九月廿八日

侍從菅原(花押)

とあり、山家本『龍門山宝満宮縁起』の奥書と一致している。五条大納言は本性菅原氏、字平頭などを歴し、延宝5年(1677)権大納言になった五条(菅原)為庸と考えられる。

本縁起は漢文の白文で、最初に祭神について述べ、天智天皇の御代都府樓の鬼門よけのために山上で祭祀を行った記事の前に、神功皇后9年3月、皇后が熊鷹を討とうとして櫻日宮から嵯峨宮に遷ったときの話を載せ、それから天皇の御代ごとの編年で、皇代後宇多院の御代の蒙古襲来までを「巻上」とし、86代四条院から慶長2年の小早川隆景による社殿の復興、末尾に摂社・末社について述べ、これを「巻下」としている。

憲政評や利生評というこりより、奉幣や叙位、寺領の寄進等、歴史的事実を羅列し、政治的側面を強調することによって、宝満山の権威づけに努めている。本縁起の作目的が、彦山との本末論争にあたって、彦山よりも「格の高い山」であることを実証することにあったと考えられ、それが叙述にも体裁にも大きく反映している。

管見の限り本縁起は、静嘉堂文庫、福岡県立図書館、福岡市博物館に所蔵されている。いずれも書冊本で、静嘉堂文庫本には「明和七年八月吉日 守田八十治」の奥書がある。福岡県立図書館本は筑前叢書48・許斐堂文書であり「江藤文庫」の蔵書印があり、末尾に「龍門山」と記されている。福岡市博物館本は青柳種信関係資料709で「文化十癸酉中秋 以龍門山富倉房之本書写之 青柳氏」の奥書があり、文末に「一本云、是松下見林筆蹟也、本紙向軸之奥鷹司右大臣兼熙公筆跡在、尚未五条菅原朝臣書印在」と書き入れがある。静嘉堂本・筑前叢書本には返り点、送りかた、ふりがなが付してあるが、青柳種信本は白文である。〔森2008〕別冊『宝満山関係史料集』に青柳種信本による翻刻と解題を掲載。大倉記念文庫に『龍門山宝満大菩薩縁起』が架蔵されている。本書は松下見林の自筆と考えられ、墨付9丁、全漢文、延喜式より説き起こし山名に及び、以下慶長2年迄の編年体の記述がある。事項の範囲は上記と一致するも、内容については異なり、訂正の跡が随所に見られ、末尾に「内辰九月三日草」などとある。貞享年間(1684～88)に近い丙辰年(延宝4年(1676))。このことと『山家本』の奥書から考えられることとして、福井敬彦は、弘有が伝記の開書きや逸文等を探し集め始めた時期は貞享年間よりかなり以前であって、この丙辰年には既に一応の体裁が整えられていた。そこに見林が手を加えた。あるいは弘有と見林は延宝年間にはすでに交流があり、見林は校閲ということに留まることなく、弘有の編纂事業に関しても、何らかの指導・助言等を行っていたのではないかという可能性を指摘している〔福井1987〕。

(4) 『龍門山宝満宮縁起』 江戸時代・延享4年(1747) 山家宝満宮蔵

福岡県筑紫野市山家の宝満宮所蔵。現在は筑紫野市歴史博物館に寄託。前項に掲げた奥書があり、近世に於ける修験方が編纂した縁起成立の経緯を知る上で貴重である。本縁起は弘有編纂の『宝満宮伝記』が白文で難解なため、衆人が読めるようにとの思いから延享4年(1747)5月、山家宝満宮司嶋崎氏仍舊郷が同宮社頭に於いて読み下し書写し、また古書等を追加記述、あるいは削除したものである。

なお本縁起とほぼ同文の『龍門山宝満宮御伝記』なる縁起が、筑紫野市大石の個人宅に所蔵されている。本書には末尾に『本朝高僧伝巻73』「願維治之五 神仙四之上」『筑前龍門神』項より心連上人による玉依姫示現の話を載せ、次に龍門山をうたったと思われる漢詩様の詩句を山型に書し、最後に宝満

宮宝物を記している。〔森 2008〕別冊『宝満山関係史料集』に翻刻・解題掲載。

(5) 『龍門山日記』 江戸時代中期・龍門神社蔵（福岡県指定有形民俗文化財）

本書は小田富土庫によって、昭和 44 年に『神道学研究』第 17 巻第 5-6 号に翻刻紹介され、宝満山の縁起の中で最も早く知られている縁起である。山岳宗教学研究叢書第 18 巻『修験道史料集Ⅱ西日本編』に森弘子が行った翻刻、解題を掲載。本書は乾・坤 2 巻からなり、宝満山の由緒を天皇の御代ごとに編年体で綴っている。乾巻は山名、祭神の由来につきき、天智天皇御宇、大宰府の鬼門よけに山頂に八百万神之祭をしたという記事から、慶長 2 年（1597）本社再建までの事歴を年を追って述べ、末尾に慶安 3 年（1650）黒田忠之建立の末社を列記している。さらに異筆の追記が 2 枚にわたってなされている。

坤巻は、慶長 4 年（1599）から延宝 8 年（1680）までのできごとを述べている。両巻ともに片仮名を交えた書き下し体で書かれ、後に加えた、本文とは異筆の返り点や送り仮名、若干の訂正が見られる。乾巻・坤巻それぞれの末尾に「楞伽院蔵」と記されているが、本書成立の由来等は記していない。乾巻は山家の『龍門山宝満宮縁起』とは別個に『龍門山宝満宮伝記』をカタカナで読み下し、筆者の意によって削除、追記がなされたものと考えられる。坤巻は江戸初期の記述でやはり編年体で述べられている。記述に恣意的な所もあるが、この時期の事を述べたものは外に貴重である。平石坊弘有の著とも考えられる。

2 古文書

(1) 龍門神社文書（江戸期のものは福岡県指定有形民俗文化財）

江戸期のものは、楞伽院旧蔵の『龍門山日記』。版本の『龍門山七窟巡礼由来』、伊丹家旧蔵の『宝満山寛文以来之記』の 3 点のみ。あとは近代以後のものである。官幣社昇格の条件整備に関わる文書、社殿改築・境内整備のための図面、宝満講社関係の文書、明治 28 年 10 月（官幣小社昇格）以降の日記・会計簿などがある。『宝満山寛文以来之記』は〔森 2008〕別冊に翻刻、解題。

(2) 井本文書

井本文の子孫井本家に伝わる文書。旧坊中は明治 24 年、同 33 年に「上地山林松下げ願」を提出している。当時の当主井本邦雄が、33 年の申請の際の中心人物であったらしく、宝満山の土地に関する文書が一括して伝来する。ことに『龍門山水帳』は江戸期の山の区分、所有関係、坊の変遷などを知る上で貴重である。墨付き 33丁の書冊本。表紙に「龍門山水帳 写し」〔楞伽院蔵〕とあり、奥書に「寛文十二壬子年六月六日／当時座主平石坊弘有判／年行可伊多坊幸栄判／同岩本坊了運判／一山絶地中速判」〔文化五戊辰三月中旬写す 泰雅〕とあり、寛文 12 年（1672）6 月、当時の座主平石坊弘有を中心にまとめたものを、文化 5 年（1808）時の座主楞伽院泰雅が書写したものとわかる。泰雅は書写の原、その後の変更を書き加えている。他に黒田長政社領寄附判物（盗難に遭う）・黒田綱政社領加増判物・黒田光之寄進状（写し）等の藩主からの寄進状、座主楞伽院ほか 8 坊の世代書、『旧宝満坊中墓所銘石碑録』、『輪化地財録』（慶応 3 年）などの寄附帳了冊、『役行者霊驗記』『龍門山入峰大略伝記』『呪符帳』などの修験に係わるもの、聖護院からの達シ・授戒状、そして上地山林払い戻し申請に関わる書類、地図類がある。30 点が『福岡県古文書等緊急調査報告書（旧筑紫郡）』1982・福岡県文化会館、〔中野 1980〕に目録掲載。

(3) 永福院文書（龍門山南坊文書）

永福院は南坊が下山して入った、糟屋郡新宮町の寺院。本山修験宗（聖護院派）。明治維新の際、南坊高橋賢俊は神職に転ずることに最後まで抵抗し、他の山伏にさがしけ明治 4 年に離山。信者の勧進で当時無住だった永福院に入った。その際携えた仏像・経典等に加え、入峰復興を目指し、坊中より収集

したと思われる儀軌類が含まれる。また輪装としてまとめられた『無明法性山伏の口伝』（天正 19）など 4 点の中世文書、『鎮西龍門山入峰伝記』、高橋氏の由来を記した巻子本、「高橋賢俊一代記」など、宝満山修験の実態を知る上で貴重である。61 点が『福岡県文化会館所蔵福岡県近世文書目録第 2 集』1972、〔中野 1980〕に目録掲載。福岡県立図書館にゼロックス複写所蔵。

(4) 宝照院文書

大黒寺ともいわれた奥坊は、明治 6 年下山。北崎村小田（現福岡市西区小田）の宝照院に入った。明治 40 年博多竹苅番・筒屋町の人人々の要請で「博多の北辰さま」を祀る旧組下山伏「菩提院」と合併。智楽院に転移した。その合併の経緯を示す文書、宝満山から移座した大黒天の由来書などの近代文書、『鎮西龍門山入峰秘記』（1861 年）『役氏相伝探灯護摩記』（1840 年）などの江戸期の修験関係文書がある。福岡県教育委員会目録作成。

(5) 佐々木文書

旧修験坊の文書。『葛城峰中日割道節之事』『宝満山秋峰修行』などの入峰に関するもの、明治期の「神楽大菩薩尊藏御置願書」「国有山林下戻申請書」などがある。ことに明治 4 年、佐々木益雄が親孝行のため藩行から表彰された一件の文書類は、廃仏派と泰仏派に分かれて争っていた山頂の様子を垣間見せる。佐々木氏旧蔵の『宝満修験道葛城峰入之図』は現在龍門神社所蔵。『福岡県文化会館所蔵福岡県近世文書目録第 2 集』1972、〔中野 1980〕に目録掲載。福岡県立図書館にゼロックス複写所蔵。

(6) 叶院文書

福岡市博多区の在宅（組下）山伏叶院の文書。叶院は本山修験宗（聖護院派）。伏桑最初祖霊といわれる聖福寺と隣接し、同寺 123・125 世住職仙伝の作品を蔵する。また文化 13 年（1816）の龍門岩の復興に当たっては、福岡城下町可の魚屋武四郎が願主、仲谷坊が取次宿坊となり、仙住が鼎状に崎つ岩の一石に「仙童」と揮毫した。その経緯を記した『龍門岩由来』は福博の町衆と宝満山の関係を知る上で貴重である。また入峰に関する『鎮西龍門山入峰伝記』『峠中略路密記』、儀軌類があるが、その多くが座主楞伽院、最後の座主龜石坊の旧蔵であることが注目される。〔中野 1980〕に目録掲載。平成 24 年の調査で、昭和 3 年御大典記念に行われた入峰の記録があることが判明。

(7) 石井坊文書

若杉山石井坊の石井家に伝わる文書。現在篠栗町歴史民俗資料館に寄託。目録化、写真撮影が行われ、順次解読がすすまれている。石井坊は表樟屋部の惣社若杉山太祖宮の社務別当を努めるとともに、宝満山派修験の組下山伏で、東の触頭として両樟屋部・宗像郡の山伏 10 院坊を取りまとめた。この 10 坊は、両樟屋・宗像石井坊組合とも称して、連名のもとに噴願書などの形で度々資料に見える。文書の内容は、太祖宮由緒、社殿の造営・修理、祭礼・遷宮、聖護院・楞伽院との関係を示すもの、聖護院からの補任状・許状、祈禱、廻籠・配札、藩主の書状山真、借用書、土地関係等に分類される。300 年に亘る近世文書 548 点。九州歴史資料館（九州の寺社シリーズ 8）『筑前箱屋若杉山の仏教遺跡』に、森山みどり「石井坊文書について」として概要が載せられている。

(8) 林（美）文書

福岡藩の大工頭のもとで大工棟梁を努めた林家の子孫である林美家世氏旧蔵の史料。現在九州歴史資料館所蔵。林助四郎は安永 3 年（1774）、その子武四郎は文化 11 年（1814）に御普請御役所棟梁役を命じられている。485 点の文書の多くはこの 2 人に関するもの。なかに藩と深い関係にある寺社に関するものがあり、宝満山関係も上宮・鐘樓・獅子宿・業師堂の修復に関する文書・見取り図、行者堂・講堂付近の見込図などが含まれる。

(9) 高千穂（上）文書（英彦山文書）

高千穂家は英彦山の座主家。文書群の中に宝満山関係のものが含まれる。ことに元禄期の本末争論関係の文書については一纏まりのものがあり、その経緯を知ることができる。「元禄六癸酉年 宝満山往來記」を〔森 2008〕別冊に翻刻。

(10) 聖護院文書

聖護院文書全体については、京都聖護院に於いて目録化がなされている。そのうち「修驗方日録」などに宝満山関係の記録が遺されている。

第2項 絵図・絵画資料

(1) 山中絵図 (図28、図29)

①『宝満山絵図』福岡県立美術館蔵 紙本着色(淡彩) 江戸初期・17世紀(福岡県指定有形文化財)

福岡藩の御用絵師尾形家にある絵図。太宰府市側から見た西図(85×130)と筑紫野市側から見た東図(81×139)がある。宝満山中の堂社や坊・旧跡、麓の集落、さらに画面下部に博多湾や志賀島・唐津・阿蘇山・雲仙・久留米・柳川までもが描かれる。山中の記載が詳細で、坊の配置等も知られる貴重な絵図である。記載内容から考証すると慶長2年(1597)もしくは元和6年(1620)から慶安3(1650)の間の宝満山の様子を描いたものと考えられる。あるいは黒田藩の宝満山復興のための絵図であるかも知れない。

※〔森 2008〕にトレース・解説図を掲載。

②『宝満山山中絵図』江戸時代・寛政9年(1797) 紙本墨書 個人蔵

山内の大規模修復のための見取り図と考えられる。〔中野 1980〕の巻末付図として1/4縮尺の図が添付されている。図右下に「本社拝殿・講堂・行者堂・神楽堂・講摩堂・鐘樓・薬師堂・末社不動堂共ニ七ヶ所・鳥居二基、右修復ニ作付候、座主坊は修復之不及御沙汰候事、但不動堂不詳 寛政九丁巳六月改之 □末社拾ニヶ所 ○焼物末社廿五ヶ所・石ノ末社二ヶ所」という書き入れがある。図中の堂社には簡単な注記があり、位置、材質、大きさなどが知られる。

③『筑前国純風土記附録』巻10挿図 紙本着色 江戸時代 27×20cm 個人蔵 (図30)

本書は福岡藩土加藤一純が退職後に計画し、天明4年(1784)藩命を受け鷹取周成ら数人の助録を得てまず40巻藩に献上し、その没後鷹取周成が青柳種信の助録を得て8巻を補い、全48巻として完成させたもの。社寺を主として180枚余の写実の挿絵があり、絵画資料としても貴重なものである。宝満山については、巻10「御笠郡上」の冒頭「内山村」の項に「龍門神社」として上宮からはじめて、全山を仲谷坊の案内で歩き、実際に即して述べている。挿絵では内山村・北谷村から頂上までの正面表参道を中心に鮮やかに丁寧に描いている。御用絵師尾形家や衣笠家の関与も推測されるが明らかでない。〔森 2008〕にトレース・解説図掲載。

④『筑前名所図会』巻4挿図奥村玉蘭 江戸時代・文政4年(1821) 紙本墨書福岡市博物館蔵

奥村玉蘭の『筑前名所図会』は図が詳細すぎて藩の機密に触れるという理由で出版許可が出なかったと伝えるが、奥村家に保管されていた稿本をもとに、昭和48年西日本新聞社から復刻出版された。文章は『統風土記』の踏襲が多いが、龍門山神社については羅漢道開通の経緯を述べる部分、山中の人が長寿で百歳まで生きる人も多いことなど、他に見られない記述もあり、また挿絵については「龍門山図」のほか「五百羅漢・千林地蔵」「龍門石」「益影の井」「座主佛伽陀上宮裏鉢の図」が載せられている。

⑤『龍門山図』奥村玉蘭 紙本木版画 江戸時代・文政5年(1822) (図31)

『筑前名所図会』の挿図と似ているが、仏頂山・頭巾山までも描き、より雄大に岩山の宝満山の様子を描き出している。太宰府天満宮・旧井本坊などに所蔵されている。本図は、右上部に龍門山の由来を



図28 『宝満山絵図』(東図)(福岡県立美術館蔵)



図29 『宝満山絵図』(西図)(福岡県立美術館蔵)

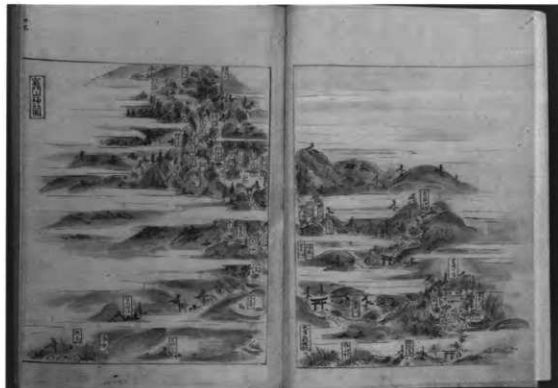


図30 『筑前国統風土記附録』巻10 挿図(平岡邦幸氏所蔵)



図31 『龍門山図』奥村玉蘭(太宰府天満宮所蔵)

書き、千鉢地藏・五百羅漢・七窟などの書き入れがある。寛政12年(1800)の役行者1100年遠忌を期して羅漢道や七窟巡礼のコースが設定されたことに関係がある観光パンフレットの的な性格をもつものと考えられる。[森2008]にトレース・解説図掲載。

⑥『宝満山名所古蹟図』明治37(1904)大庭卯作著・発行 銅板版画 太宰府天満宮蔵

図中央上部に、宝満山と官幣小社龍門神社(下宮)境内の様子を描き、宝満山の由来・古歌を記す。その周りに応神天皇御産湯益影ノ霊水・獅子瀧・上宮・稚児落及無明ノ橋・金ノ鎖・上宮日出ノ眺・仙庄ノ書及ビ針ノ耳・龍岩・弘法大師求聞持ノ法ヲ行ヒ雨ヲ祈リ給ヒシ処「福城ノ窟」・劍ノ窟・仏頂山心運聖人ノ墓・一ノ鳥居及ビ有智山城跡・下宮・トッコウ水・狗ノ窟・赤ノ井・愛嶽神社・富士ノ窟・講堂ノ趾・役行者安置ノ窟・吉田ノ夕景・五百羅漢・新宮宝満知光寺及真誓親王ノ陵・岩見重太郎御道ノ興儀ヲ授リシ処「豪良谷男女ノ瀧」の24ヶ所が、名所古蹟として紹介されている。

(2) 入峰絵巻

①『明和四丁亥歳宝満派入峯絵巻』1巻 25.9×625cm 紙本着色(図32)

江戸時代・明和4年(1767) 福岡市大佛大圓寺蔵

巻頭に明和4年の春峰入峰の日程が記され、その後に入峰の行列次第を描いている。入峰に参加した山伏の構成、役職、服装等を知る上で好資料である。本絵巻と同系統の絵巻が久留米市の個人に所蔵されている。本絵巻には文字の部分はない。人物の表情など生き生きとして絵師の技量としては大圓寺本より上と考えられるが、模写していく内に生じる衣装の色の乱れや人数の欠落が見られる。[森2008]



図32 『明和四丁亥歳宝満派入峯絵巻』(大佛大圓寺所蔵)

②『宝満修験道葛城入峯之図』1巻 本紙

28.7×410.6cm 紙

本着色 江戸時代・文

化9年(1812)以降(図

33) 龍門神社蔵(福

岡県指定有形民俗文化

財)

旧修験坊佐々木氏よ

り奉納された。本絵巻

と同系統で個人蔵のも

のが二本ある。個人蔵

の一本に「文化九年中

六月吉祥日、何人が描

いたものかは審かでは



図33 『宝満修験道葛城入峯之図』(龍門神社所蔵)

ないが、明治二年春、御一新につき、臨時の葛城峰があり、蓮乗院静寿がこの一卷を貸し、文化年中の因と聊か替わった所を口授した。その教示によって替わった所を收拾して写した」と端書きがある。本絵巻が蓮乗院が示したという、文化9年(1812)に描かれた因そのものかどうかは不明であるが、個人蔵の絵巻と画風が極めてよく似ている。端書きにあるように龍門神社本と個人蔵本とは描かれた先遣や度衆、新客の人数に違いがある。〔森 2008〕

第3項 建造物

1 記録類

①『福岡県筑前国御笠郡龍門神社明細図』(以下『明細図』) 明治中期 書冊(福岡県指定有形民俗文化財)

明治中期の龍門神社の建造物について来歴、寸法等を記す。正面図、側面図、平面図など詳細な淡彩魚目を取り込んでいる。記載のあるものは、上宮本殿・渡り殿・拝殿、手水舎・石段、神紙殿(中宮・旧講堂)、上之鳥居・石灯籠、一之鳥居・石灯籠、外宮(下宮)本殿・奉幣殿・奉幣殿左右瑞垣・渡り殿・拝殿、汐井台・手水舎、石瑞垣・敷石・石垣・石段、石鳥居・石灯籠、社務所、磐余彦神社、彦五瀬神社、稲佐神社、三宅入野神社、鶴邊草葺不合神社・照日降日神社・式部稻荷神社・須佐神社・五穀神社、愛嶽神社上宮石殿、愛嶽神社外宮、愛嶽神社參籠所、愛嶽神社石鳥居・石灯籠である。

2 神社本殿と上宮社殿について

(1) 上宮

「下部兼文勘申伊勢大神宮神寶紛失事」(因書寮蔵)長治二年(1105)三月三日条に龍門宮上宮神殿焼失の記載があり、平安後期には上宮、下宮の形ができていたものと考えられる。出土遺物の状況から、山頂では8世紀から9世紀に初期の祭祀がおこなわれており、平安時代のいずれかの段階で社殿が成立したものと考えられる。中世以降の社殿は、文祿二年(1593)に小早川隆景が再興。慶安元年(1648)以後は藩主黒田家が修繕し、安政元年(1854)に黒田長博が再興していた。その社殿も明治後半に焼失、大正元年に再興されるも、昭和27年に再び焼失。現在の社殿はコンクリート造りで昭和32年(1957)に竣工したものである。

安政元年建築の上宮殿は『福岡県筑前国御笠郡龍門神社明細図書』(龍門神社蔵)に図面付きで子細が記載されており、本殿、渡殿、拝殿(全長17m、幅4.2m)、石垣からなる本格的な社殿であり、本殿は屋根が入母屋造妻入(背面の屋根型式は不明)の三間社で正面に向拝が付いていたことが知られる。

(2) 中宮

山中の8合目に中宮があり、寛政9年(1797)の『山中絵図』には中宮には大講堂、神楽堂、鐘樓などがあったことが知られる。建物群の草創は磨崖仏の存在より中世に遡るものと思われる。社殿は江戸期に造立された講堂が「神紙殿」の名称で少なくとも明治28年(1885)までは存在し、それは『福岡県筑前国御笠郡龍門神社明細図書』(龍門神社蔵)により屋根が入母屋造平入椀葺、内陣、外陣、向拝を備えた三間社(幅7.2m、奥行5.8m、高さ4.2m)であったことが知られる。

(3) 下宮

近代に至るまで宝満宮や龍門宮と表記された神社は上宮が本殿であり、山裾の下宮は山頂を遙拝する拝殿的な機能であったと思われる。江戸中期以降に編まれた『龍門山旧記』には「上宮に対して下宮と号す。大塔、金堂、鐘樓、大講堂、僧房、食堂、文庫、経藏、神社伽藍所々其跡猶存せり。大塔輪堂の跡は心柱の礎に可知。傍に札拝石と云有り。山上の宮拝する所也」と記載され、伝聞では一大伽藍が展



図34 龍門神社上宮古写真(昭和27年以前)



図35 上宮本殿正面の図(『明細図』)



図37 中宮社殿(現在)

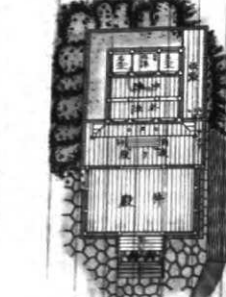


図36 上宮平面の図(『明細図』)



図38 中宮神紙殿正面の図(『明細図』)



図39 下宮『風土記附録』のトレース図



図41 龍門神社拝殿と本殿(現在)



図40 龍門神社下宮(大正15年以前)

開いていた土地だと説明されている。境内にある下宮礎石がその代表的な遺跡となっているといえようか。江戸後期に編纂された『筑前国続風土記附録』には宝満山の絵図が採用されており、江戸後期の下宮地区の概要を知ることが出来る。それによれば、参道は現在の境内の式部稲荷社近くにある金剛兵衛の石塔(図中では「紹翁石塔」とあり)辺りが境内の入り口であり、鳥居を潜ると数段の階段が設けられており、坂道の左手に大師堂と祇園社が順に並び、反対の右手には留守守としての圓光院が描かれている。さらにその奥の最高所に入母屋造妻入の下宮社殿が描かれている(ただしこれは絵巻書の写真から推して拝殿が描かれたものであろう)。社殿は大正 15 年(1926)まで保持され、絵巻書などにより写真でその姿を見ることが出来る。

境内地の近代以降の変遷について、平成 24 年(2012)の社務所移転に伴う文書調査によって大正 14 年(1925)以前、昭和 2 年(1927)4 月、昭和 16 年(1941)、昭和 18 年(1943)の境内図が見えられた。これによれば、大正 14 年までは江戸時代以来の境内の地形を保ち、参道は現在より狭く直線的で、現在の式部稲荷社の位置を抜けて境内西側の消防小屋方向に延びていた。下宮礎石建物とは参道を挟んで反対の位置にあたる金剛兵衛の石塔のある辺りには民家が数軒建ち並んでいた。下宮本殿と社務所が建て替えられた昭和 2 年までには民家周辺は解消され、斎館も位置が変更されている。現在の式部稲荷社の位置に石垣が整備され、ここが下宮正面の観を足すようになった。昭和 17 年には下宮礎石建物のある位置を含む現在の境内西側の土地が編入された。そして昭和 18 年に斎館が現在の位置に建て替えられ、なによりも幅の広い現在の参道が新規に掘削整備され、駐車場東にある階段と石鳥居を正面とする、現在の境内地の形状に至っているうである。そして平成 25 年(2013)秋に挙行される予定の開山 1350 年大祭に併せて、昭和初年建築の社務所が建て替えられた。

第 4 項 石造物・工芸品・彫刻

1 石造物

(1) 鳥居・石灯籠

①一之鳥居・石灯籠(図 43)

山中 2 合目にある。花崗岩製の明神鳥居で、円柱を楕圓立て、貫をつけ、鳥木は 2 個、笠木は 3 個の部材で構成されている。鳥木は額東の真上で突き合わす。地上より笠木頂部まで 7.1m、地上より貫下端まで 4.99m、柱内法間 4.5m、柱の直径 0.8m である。向かって右側の柱正面に「大旦主筑前大守松平光之公、側面に「延宝七己未年(1679)、向かって左側の柱正面に「鑑建文 座主平石坊法印弘有、左側面に「仲秋吉祥日平石坊大西村弥平次」と陰刻銘がある。額東は銘文無し。現在、扁額は大失われているが、『明細図』によると高さ 4 尺 5 寸×巾 3 尺 2 寸の銅額があった。

鳥居両側に建つ石灯籠一対は文化 11 年(1814)5 月、10 代藩主黒田斉清が造立したものの。

②上之鳥居(図 44)

中宮跡には 2 代藩主黒田忠之が寄進した鳥居が倒壊したため、3 代藩主黒田光之が天和 3 年(1683)に再興した「上之石鳥居」と、その向かって右側に石灯籠があったが、現在は倒壊し、横たわった柱石に「国家安全万民興業所祈 座主大越家平石坊弘有一山衆一同」の陰刻銘が見える。なお中宮跡手前の浄土院跡に笠木を利用した芭蕉句碑が建てられている。この句碑には寛政 10 年(1798)の年号がある。[森 2000]

③下宮の鳥居(図 45)

下宮駐車場から最初の鳥居はごく新しい。次の石の鳥居は昭和 3 年、炭鉱玉麻生太吉が奉獻した。い

ずれも花崗岩製、明神鳥居。同年麻生太吉は、龍門神社参拝のため天満宮北神苑から内山に向かう道に向けてトンネルを、その出口に龍門神社に寄進して石灯籠 1 対を造立寄進した。三つめの鳥居は向かって右柱正面に「安永 9 年(1780)庚子十一月吉旦加藤一教奉進、左柱に「□□園□昌平 内山□□…」の陰刻銘がある。竹田文庫所収の「愚山書簡 874」は、加藤一純が「龍門下宮鳥居一基」を建立し竹田茂兵衛に銘文を依頼した書簡である。その鳥居がこれにあたるであろう。額東兼用の扁額に「宝満宮」とある。地上より笠木頂部まで 4.29m、貫下端まで 3.01m、柱内法間 2.74m、柱の直径 0.5m。柱は地上部分を円形に造り出し、地下は角石で楕圓立てである。

『明細図』によると安政 7 年(1860)11 月氏子中が建立した鳥居があったが現在は存在しない。またこの鳥居の前に文化 11 年(1814)11 月に氏子中が建立した石灯籠一対があったと記されているが、安永の鳥居の上の石段上の一対で設置されている石灯籠のうち、左側の「奉獻 永代常夜燈」と書かれた石灯籠に「文化」の文字をかすかに見ることができ、頂部に宝珠を戴く形状からもこれであろうと考えられる。

壱山口の鳥居は、昭和 2 年 3 月に炭鉱会社「貝島合名会社」が建立したものである。

④愛嶽山の石の鳥居 江戸時代・寛政 3 年(1791)

愛嶽山上宮の一番手前の鳥居。扁額には「飯淵大権現」とある。向かって右の柱表に「奉造石鳥居一基 本願宮新坊、左側石柱の表に「発起□□大庄屋水城武/同郡山口村大庄屋/再建/寛政三年辛亥仲夏吉辰 次に「御堂乙金村大庄屋/高原善太郎徳美/同郡阿志岐村大庄屋平山仙十郎政成/夜須朝日村大庄屋/平山弥十郎保成/御堂郡塔原村大庄屋/石橋徳平次正弥/大石村庄屋/石川□内」と刻し、御堂宗、夜須郡などの信仰圏が知られる。『明細図』によると、前巾(柱外面より柱外面迄)1丈1尺6寸、高さ(笠木上端より地盤高起迄)1丈4尺4寸とある。なお鳥居の両側に石灯籠 1 対があるが現在はこの場所には存在しない。

⑤愛嶽山の石灯籠 3 基 江戸時代・延宝 7 年(1679) 寛政元年(1789)

石の鳥居の奥には赤い木の鳥居が三基ありその奥に石垣がある。石垣の左手下に明治 12 年 11 月の上宮及び通夜堂再建の石碑が建っている。山麓の大石村の 5 人が世話人となり、宰府村・原村・吉松村などから寄附が寄せられた旨記されている。石垣の上、右手に 2 基、左手に 1 基石灯籠が建っているが火袋が失われ、他の石で補っている。竿石に「本道寺村 日永田源作、2「寛政元年己酉三月吉祥日/鬼木氏」「奉寄進 志連中/発起 原村源之十、3「延宝七己未年五月吉祥日/御堂郡太宰府住/鬼木源太郎/愛嶽山 御宝前」とある。これらの内いづれかが、前記鳥居横にあったものかどうかは不明。寛政の年号のある石灯籠の屋根石の宝珠は『明細図』に記された図に酷似するが、竿石の形状が異なっている。おそらく崩壊した石灯籠を再建した際、組み合わせが違ったものと考えられる。

(2) 石塔

①日あけ地蔵台座 鎌倉時代後期(図 46)

龍門神社参道脇の小高い所にある「日あけ地蔵」には、四十九日の忌明けの日に 1 升で 49 個の餅をつくり供えるという風習がある。その台座に、各面に直径 40.5cm の月輪の中に金剛界四種の梵字が裏研彫りされている。塔身は高さ・巾ともに 52cm。元来、塔身が宝篋印塔の一部であったものが地蔵の台座に転用されたものと考えられる。

②碑型式板碑(伝 金剛兵衛の墓) 鎌倉時代後期～南北朝(図 47)

日あけの地蔵堂の左背後にある。蓮華座の上に不動明王の種子を彫るが、梵字部分で折損している。台石からの高さ 163cm、最下部巾 38cm、最大厚 30cm、やや裾開きの形態を呈する。頂部を山形にし、3 段の水切りを入れる。南北朝朝頃、宝満山に住んだ刀匠金剛兵衛盛高の墓と伝える。

板碑の左横にある石碑は、明治29年(1896)、北海道松前に住む金剛兵衛の末裔が夢に神告を得てはるる尋ねてこの墓を探し当てた感激のあまり自らその由緒を刻したものとす。

【碑文】

〔正面〕金剛兵衛末裔先代太次兵衛之碑／祖先金剛兵衛盛高ノ肖像ハ当家楠林家ニ現存ス
〔裏面〕去今元年間先代太次兵衛青森ヲ経テ蝦夷松前ニ航ス／世々鍛冶業ヲ営ミ系統連続猶存ス／今
回先代ノ旧地ヲ探検ニ来リ／町長斎藤氏ニ謀リ、金剛兵衛盛高ノ末裔ナルコト明瞭ス／此ニ碑表ヲ設ケ
テ略路示シ／由緒ヲ知ル云々／明治廿九年一月十一日建之ノ北海道松前福山ノ本家楠林氏九代内山治右
衛門同亀三郎(森1975)

③大日如来梵字板碑 時期不詳(図48)

ひあけ地蔵の右側にある。高さ180cm、巾75cm。自然石を利用して梵字板碑。梵字は金剛界大日如來の種子で、字の長さ90cm。なお東山麓、築紫野市大石の高木神社(大人事社)にも高さ153.6cm、字の長さ55.7cmのやや小ぶりの同様の板碑がある。『筑前国統風上記附録』(以下『附録』)に「社内に大日石仏あり」と記すものであろう。

④法華経一字一石埋納石碑 江戸時代・延宝7年(1679)

高さ159cm、巾26.7cm、奥行17.9cm

一の鳥居の前向かって左手にある。石碑正面中央上部に径13.8cmの月輪に梵字(カーン)を陰刻しその下に「書写大乗妙典一字一石遍照上人遺跡」、右側に「覺雲宗寿為菩提再興之」、左側に「延宝七己未年八月時正」とある。

⑤青面金剛石塔 江戸時代・元文5年(1740)(図49)

東院谷道(通称女道)、福城館の下、東院谷坊城の入口付近にある。切石の方形石台の上に墓石状の石碑が立っている。正面に「青面金剛尊」、左側に「元文五庚申年仲夏吉祥日」、右側に「慎當山講中建之」とある。また横の岩には蓮華座の上に「南無阿弥陀仏」と彫る。

⑥十三仏梵字板碑(図50)

西院谷の栄門坊墓所にある。高さ60cmほどの石面上部に1つ、下に横3列、縦4列の月輪を彫り、十三仏の梵字を線刻する。上部の梵字は虚空蔵菩薩の種子。下部は2割ほど土に埋もれている。

なお、近世墓地にある墓石、供養塔については興寺良の調査報告「宝満山近世墓群銘にみる墓池と坊跡の平面構成」が『年報太宰府学』第5号に掲載されているので、本稿では割愛する。

⑦發生禁断碑 高さ160cm、幅90cm、頂部山型角錐高さ10cm(図51)

正面登拝道5合目の左手岩上に建つ。花崗岩の石柱正面に「發生禁断」と刻す。正保2年(1645)平石坊幸重が乗頂になった際、山・里の境界をはっきりさせ、山上を狩猟・伐木禁止の立山にしたという(『龍門山田記』坤)。本石碑は境界を示す物と思われるが、史料に見えず建立の由来は不明。

⑧登山道道標 高さ167cm(含台座)・144.8cm(本体)、巾35.2cm、奥行17.0cm(図52)

登山口に立つ道標。花崗岩の石柱頂部を山型に切る。背面は整形されておらずやぶやみがある。正面に「是ヨリ登山道 一合目 寄附者博多・金澤永藏」とある。金澤永藏の名のある石柱は、一合目より小型であるが八合目にもある。建立年代は不詳だが、江戸後期と考えられる。

(3) 磨崖梵字仏

標高800m付近の中宮跡から少し登った登山道沿いに4基の磨崖梵字仏群がある。『太宰府市史建築・美術工芸資料編』では、中宮跡に近い方から便宜的に1~4号仏として説明している。

①1号磨崖梵字仏 鎌倉時代・文保2年(1318)(図42)

講堂跡後の丘の背面にある高さ5mの巨岩上部に径80cmの月輪を左右に彫り、その中に五転具足の金胎兩界の大日如来を表す梵字を薬研彫りしている。梵字の下、中央に「文保二戊午九月月上旬」、右に「工彫藤原廣口」、左に「法眼幸榮十六度」と彫られている。この磨崖岩の前には2間5尺×2間半、椽葺の役行者堂があり堂前に護摩壇(円形に整形した岩が遺る)、笈立岩、七童子の祠があった(『附録』)。また右下の谷に石灯籠の竿石が倒れた状態であり、真ん中に「役行者石燈籠」、右に「施主大先達法印亀口」、左に「寛文九年夷則吉日」とある。寛文9年は1669年、夷則は7月。

②2号、3号磨崖梵字仏 鎌倉時代・元応元年(1319)元亨3年(1323)

1号磨崖の向かいの岩壁にある。2号磨崖は径72cmの月輪が彫られている。中に書かれた文字は削り取られているが、わずかに痕跡を残して、左が阿弥陀如来、右が釈迦如来を表す梵字と推定される。その下に元応元年七月十四日という年号が見える。七月十四日は夏峰・大巡行の出峰の日にあたり碑伝を建てた日である。

2号磨崖の右横の岩壁ある3号磨崖も径72cmの月輪が彫られている。梵字は明治初期の廣仏殿釈の折り削り取られたものであろうか、完全に破壊されている。月輪の下には元亨三年七月の年号が見える。『附録』によると「是より下る坂を善哉坂といふ。坂の下に高さ三丈許の大岩あり。十一面観音・釈迦・阿弥・大日四佛の種字を彫刻す。伝教大師の筆といふ」とあり、四つの種字を一体のものとして掘っている。この記述を正しとし、確認できる梵字が阿弥陀如来と釈迦如来だとすれば、3号磨崖の種字は十一面観音と大日如来ということになる。両岩にある年号は4年しか隔たっておらず月輪の大きさが同一であるから、最初から一体のものとしてプランされたと考えられる。

③4号磨崖梵字仏 南北朝時代・建武4年(1337)



図42 1号磨崖梵字仏



図43 一之鳥居と燈籠



図44 上之鳥居



図45 下宮の鳥居 (安政9年)



図46 日あげ地蔵



図47 碑伝型式石板



図48 大日如来石板



図49 青面金剛石塔



図50 西院谷十三仏



図51 殺生禁断碑



図52 登山道標



図53 福城窟磨崖



図54 法城窟磨崖仏

龍門岳裾の旧登山道に、径58cmの月輪が中央上位に一つ、その下左右に二つ、計3つ確認できる。これも削り取られているが、『附録』には「本社三神の本地仏を表し、弘法大師墨書せられしなり。建武丁丑四年八月吉日彫刻施主勳進阿闍梨順成と記せり」とある。『市史』では「太宰府馬場 宝満講堂等 十口 建武四年八月十日 勳進阿闍梨 顕威」と読んでいる。「講求」や「勳進阿闍梨」がみえ、当時の宝満山信仰の伝播のあり方が窺えて興味深い。石面中央下方に高さ55cmの光背状の彫り込みがあり、像高35cmほどの座像が彫られていたと観察される。

(4) 窟の磨崖

①福城窟の磨崖梵字 (図53)

東院谷道の頂上に向かって左手、龍門岳東斜面の福城窟入口上部の岩盤に月輪の中に金剛界大日如来の種子を葉研彫りする。梵字の下に銘文があるが判読できない。

②法城窟の磨崖仏 (図54)

東院谷の坊跡(富倉坊・修蔵坊)の奥、頂上から約150m直下にある東南向きの石窟「法城窟」は「福城窟」ともいわれ、山内七窟の第1、また玉依姫の御陵とも言われた。その窟入口に立つ石に地藏菩薩、窟内のほぼ中央上面に堆積した岩面に十一面と思われる観世音菩薩座像の線刻がある。いずれも中世のものと思われるが、詳細な調査は未調査。

③塗蓋窟 江戸時代・享和2年(1810)

仏頂山の手前の尾根から左手に、ブナの原生林の中を下った標高800~805m地点にある。窟の北側岩面に「太宰府 □□中村入道了保」「丁時 享和二年壬戌 四月仏生日」、右側に七つ梵字が彫られていたらしい跡と「宝満宮」と読める刻字がある。

(5) 記念碑・詩碑・歌碑

①十三仏磨崖 江戸時代・貞享3年(1686)

座主跡キャンプセンターの水場から、尾根に向かって少し登った右側の岩に、天蓋の下に基台ののつた十三仏の梵字が彫られ、その下に、貞享三年(1686)四月の年号のある銘文が記されている。下に刻された銘文の右側には平石坊の来歴を記し、左側中央には「伝燈大先達法印喜多院弘有再興」、その左右に山門(聖護院)において門跡道見親王に拝謁し、権大僧侶に再任されたことを記している。平石坊弘有は、戦乱に荒れ果てた宝満山の再興に奔走したこの山の座主であり、近世に於ける宝満山中興の祖とも言うべき人物である。この十三仏梵字磨崖とその銘文は、一山再興なり、弘有が榮達を極めたときの記念碑といえる。

②玉依姫偈頌 江戸時代・文政2年(1819)

玉姫降神 則山谷鳴震動/心蓮遊座 則天華飛繽紛

山頂を目前にした右手の岩、馬蹄岩に彫られた祭神玉依姫を頌える偈頌。偈・書ともに博多聖壽寺123・125世住職仙厓義梵の作。仙厓は白隠、良寛と共に「江戸時代海林三僧」と称された僧である。馬蹄岩は、玉依姫が示現した時騎っていた龍馬の足跡が遺った岩という。

③仙窟岩及び亀岩銘 江戸時代・文化13年(1816) (図55)

9合目にある龍門岩は、龍門山の名の由来とも言われる三石が鼎立した岩である。信仰上重要な岩であったが、その一石が倒れ永らく苔に埋もれた状態であったものを、文化13年4月に再興したものを、岩面に「仙窟 仙厓書」と刻する。その左手の「亀岩」と呼ばれる岩の腹に下記のような陰刻があり再興の経緯を知ることが出来る。

是龍石之一面 昔時鼎立者也/近世覆苔蔽埋之/人不知其為壘石/今茲文化十三年四月/座主信雅禪起之 復鼎立之爾云/施主福岡岡町住魚屋武四郎/撰次坊坊 仲谷坊良恭 [森1975]



図 55 仙巖



図 56 山頂礼拝石「肇社」



図 57 龍門山碑



図 58 歌碑



図 59 宝満山修験道復興之碑

④山頂礼拝石刻字「肇社」 近代・大正2年(1913)5月9日 吉嗣祥山書(図56)

宝満山山頂にある通称礼拝石といわれる花崗岩に「肇社」と大書し、その右側に「大正二年五月 祥山」と刻す。吉嗣祥山は太宰府住の文人画家。龍門神社の官幣社昇格に先駆的な役割を果たした。

⑤龍門山碑 近代・大正12年(1923)5月(図57)

中宮跡に建つ。台座に、当時の龍門神社司宮大久保千壽が撰し、太宰府神社主典宮垣暢夫が書した宝満山の自然と龍門神社の由緒を讀める銘文と、浄財を寄せた120名の名が刻されている。

【碑文】龍門山は海拔三千尺雲霧深く覆ひ／烟氣常に絶えず故に此称あり別に／宝満山とも謂ふ厄難怪石□□威す／形勢雄大古今春の花秋の紅葉を以／て特に其名高く山上の□望空閣に／して千里の雲山河海に一時の間に／聚むるの妙景真に海西の鎮と唱え／ける龍門神社は斯の崇高秀美なる／壹城に鎮座せられ皇祖神武天皇／の御母玉依姫命を奉祀し創建は／遠く天武天皇白鳳二年に属す歴／代朝廷の御崇信篤く延喜式には名／神大社に列し嘉承元年正一位を授／けられ九国の總鎮守と尊称せらる／明治廿八年官幣小社に御昇格仰出／されたり斯の山の雄勝と共に威靈／千古に轟き絶沢萬方に遍し瞻成哉【森2000】

⑥歌碑 高さ281cm、最大幅193cm 近代・昭和15年(1940)(図58)

紀元2600年記念事業として建立された『拾遺和歌集』所収の宝満山を代表する歌の歌碑。揮毫は文学博士尾上八郎(榮布)。

【碑面】筑紫へまかりける時／かまと山のもとに宿りて侍りける／道つらにはへりける木にふるく／書きつけてはへりける／春はもえ秋はこかるかまとやま／清原元輔／かすみも霧もけふりとそ見る／文学博士 尾上八郎書

⑦宝満山修験道復興之碑 現代・平成元年7月 自然石・一部整形 縦188、横310cm(図59)

下宮参道右手に立つ。昭和57年、開山心運上人の1300年遠忌に入峰・探灯護摩供が復興した事を記念して平成元年7月に建立。正面上部に宝満山修験会西高辻信良会長(太宰府天満宮司・龍門神社司)の揮毫で「宝満山修験道復興之碑」とあり、その下に縦71.5×横178cmの整形をした面に復興を記念してつくられた琵琶歌「龍門山」の歌詞が作者で俳人の小原善子氏の自筆で彫られている。琵琶歌の作曲は筑前琵琶協会会長中村旭園。裏面には復興に関わった宝満宮龍門神社前宮司西高辻信貞・福聚金剛院阿闍梨正大先達大僧正玄澄等50人の名が刻されている。

(森弘子)

2 彫刻類

(1) 龍門三神坐像(福岡県指定有形民俗文化財)(図60)

龍門神社の神殿に祀られている神像。二軀は高貴な女性の姿で、一軀は衣冠束帯姿の貴紳。それぞれ顔と体を真っ直ぐ前に向け、静かに威厳を示している。二軀の女神像のうち、三軀の中心に祀られる像は、玉依姫命である。像高は30.5cm。右足を前にはずしながら安座し、両肘を屈して手先を挙げていた様子。その左側に坐すのは神功皇后。像高は29.9cm。ふっくらとした面部は、玉依姫命よりもやや年嵩と見える。玉依姫命の右手に坐す男神は、応神天皇である。像高は35.3cm。立纏の冠をかぶり袍を着ける姿で、面部はやはりやや年嵩と見え、引き締まった一段と威厳のある表情をしている。構造は三軀共に、針葉樹材を用いた一本造。膝前は別材とし、玉依姫命像は両前膊を含む手先を、神功皇后像は手先を含む両袖口を、別材としていたものだと看取される。神功皇后像、応神天皇像は膝前を欠失し、玉依姫命像、神功皇后像は、それぞれ別材製の手部を欠失している。やや大振りな頭部と、首が短く、安定感はあるが肉づきの抑揚の少ない体など、頭体の比例や体型等を見ると、室町時代の風が感じられるものの、面貌には江戸時代の明瞭さに通ずるものも感じられるようである。慶長2年(1597)の小早川隆景によ

る社殿復興時に制作された可能性が指摘されている。また、玉依姫命像には背面から羽りが施されており、納入品が存在した可能性が指摘されている。神像の聖性を増すための、聖なる品が納められていたのもであろうか。

(2) 木造狛犬（龍門神社）（福岡県指定有形文化財 彫刻）（図 61, 62）

向かって右が開口する阿形、左が閉口する吡形となる、一対の木造狛犬である。ただし獅子頭部には、角形の柄杓があって、こちらは頭頂部に角を有する狛犬として造像され、阿形の方は吡形であって、そもそも獅子犬の一対として造像されたことが知られる。顔を振っているために、体の側面が正面から見える姿で構えている。阿形像高 87.5cm、吡形像高 87.3cm。樟材を用い、頭部の幹部は一材から彫出し、これに一材よりなる前足を、それぞれ柄杓を寄せている。なお体幹部については、一材より彫出しているもの、彫を用いて左右に二分して平彫にて内側を行った後、柄杓を寄せるという構造をしていることが指摘されている。大きく寸胴に伸びた胴体に、やや扁平な頭部をいたく姿は、守護獣の迫力の中におおまかな趣もあり、室町時代の作だと看取される。吡形胎内胸部に、「永禪作者」の墨書があって作者が知られるが、この人物は、同じく龍門神社にのこる、文明 3 年（1471）の年紀をもった獅子頭の眉にも、「江州永禪」としてその名が見えている。これにより、「本狛犬もその頃の作であろうことが推定でき、九州で造像に多用される樟を材とすること併せて、製品が送られてきたのではなく、近江からきた工人が、当地にて造像したことを知ることができ。」

(3) 獅子頭眉（龍門神社）（福岡県指定有形民俗文化財）（図 63, 64）

樟材を用いて造られており、右眉は縦 5.2cm 横 20.0cm 厚 3.9cm、左眉は縦 5.5cm 横 20.0cm 厚 3.9cm を測る。これは、『福岡県地理全誌』に、「神宝ニホニエ刻メル獅子頭アリ。高麗製。其兩眉ノ稜骨ノ所ヲ開置ス。裏一銘アリ。宝満下宮太宰少貳殿御代江州永禪作文明三年辛卯六月七日歳五十二叟太誌セリ。」として紹介されている獅子頭の、眉にあたると思われるものである。というのも眉裏面にある墨書が、右眉裏で「文明三年六月七日永禪作 / 歳五十二叟」、左眉裏が「宝満下宮太宰少貳殿御代 / 江州永禪」と、記載によく合うこと、そして法量も適当であることによる。この、文明 3 年（1471）に少武政の関わりのもとに近江の永禪が造った獅子頭の、本体は失われているが、造像の時期や場所、関係者や工人の名前まで備えた、簡潔ながらも重要な情報を押さえたこの銘文、およびそれが記された眉が遺されていることの意味は大きい。

(4) 石造獅子（福岡県指定有形民俗文化財）（図 65）

石造と称し菊石製だとしているが、この菊石とは、造礁珊瑚の一種で暖海に産する、キクメイシ科のサンゴの産物のことである。やわらかく菊石石から彫り出したこの獅子は、現状で総高 23cm 長さ 31.7cm を測る小像で、台座の前方下半と両前足を欠失しているものの、破損前の写真を見ると、左前脚を台座に突っぼって上体を支え、右前脚は、台座に置かれた長いリボンがついた籠を押さえる、という姿をしていたことが分かる。いわゆる玉取獅子で、どこか犬を思わせる日本の獅子狛犬とは異なる獅子らしい面貌表現をはじめとする、頭部部の表現にも鑑みて、中国からもたらされたものかと判断される。『龍門山日記』の寛永 18 年（1641）の火災後の記事に、「石之獅子珍奇之宝物也」とあるものと推察され、そうであるならば、造像は明時代に遡り、中世には山にもたらされていた可能性を想定することができる。

(5) 地蔵菩薩立像（北谷地蔵堂）（福岡県指定有形文化財 彫刻）（図 66）

円頂で、右手に錫杖、左手に宝珠をもち、蓮華座上に立つ。着衣は、下半身には裳を、上半身には、右肩を覆う衣、左肩を覆う衣を着けた上に、円形の裳をもった袈裟を着けているものと見えるが、背面から見ると、上半身には通肩に大衣をまとっているものと見える。像高 126.2cm。頭部を通して、幹部

は針葉樹の一材より彫出する。内側は施さない。彫彫。両手先別材。右肘から先、左袖の内側には、別材を別。地着から 11cm の高さまでは別材。裾の左右と背面にも、別材を削いでいる。肉身部には漆箔を施し、着色部は部分的に紙貼りした後、白色顔料下地を施し彩色する。台座は、前後二枚の木塊から彫出し、着衣を施す。頭部の幹部以外、つまり別材製の部分については、概ね全てが後補と見られる。また後の前面は肉つきが平板で、彫口が硬く単調であるが、これは前面がいずれかの修理の際に、彫り直しがなされているからだと看取される。前面と背面の規制の不整合も、この彫り直しによるものだと理解される。前面や地着などは、かなり朽損が進んでいたものであろうか。背面や側面によくのこる、当初部の力強い抑揚をもった肉つきや、比較的深く鋭く厳しい衣文の彫口などの表現と、一木造で内側を施さない構造技法に鑑みて、造像は平安時代、10 世紀に遡ると考えられる。

(6) 神杵形立像（北谷区）（図 67）

史をかぶり、瞋目で閉口、着甲して立つ神杵形像。現状像高 65.5cm。針葉樹材を用いた木造の像で、頭部の幹部は、前面一材、背面一材の二材よりなり、これに両眉先や、右大腿部外側等を、柄杓を寄せているものと看取される。像内には、痕跡が最大で幅 3cm 弱を測る丸盤で、内側を施している。ただし、部材の中で現状のこっているのは、体幹部の前面のみである。頭部が体部に比して小さく、忿怒の表情を浮かべる丸い顔には静穏な趣が漂い、体部は抑揚すなくずらりと伸びて、下半身をゆったりと動かしながら穏やかな体勢を見せている。このような様子も、寄木造という構造共々、平安時代後期、12 世紀の仏像の特徴をよく見せている。

(7) 天部形立像（北谷区）（図 68）

朽損が進んでいるものの、高く髻を結い上げ、着甲していたものかと看取される。尊名は不詳ながらも、天部に属するいずれかの尊像だと思われる。現状像高 57.3cm。構造としては、頭部の幹部を、内側にも施さずに針葉樹の一材から彫出し、両眉先を柄杓を寄せているものと看取される。その別材製の両眉先を亡失し、両膝下は朽て失われ、表面も朽損が進んでいるものの、肉厚な体つき、大腿部の充実した張りなどは、構造共々平安時代前期の作例に通ずる古様さをもつ。しかし、穏やかな体勢や、朽損のためだけではなく、当初から比較的総て浅いものであったと看取される彫口は、平安時代後期のものと見え、古式古様をのこす当該期の作例であると判断される。造像は 11 世紀であろう。

(8) 陶製獅子（北谷区）（図 69, 70）

色彩やかな陶製の獅子一対で、平面が長方形をなす厚い台座の上に坐り、片方は長い飾り帯がついた篋をとり、もう一方はかつては獅子を抱いていたものと推定される。共に顔に「王」の字を書き、開口し、鈴や房飾りがついた首輪を着けている。台座には、長辺側には太湖石を中心に配した花鳥図が、短辺側には文房具の類が描かれている。技法としては、厚さ 1cm 程度の中空の部材を張り合わせて獅子の姿を形成したのち焼成し、絵付けをしてさらに施成しているものだと見受けられる。子持玉取という、中国で一般的な姿をしていること、黄、緑、紫、白を主体とする彩り、その色描き出された図様に鑑みて、制作は中国であると判断される。類別を探索しそれと比較しながら位置づけを定めることは、今後の課題であるが、明時代から清時代にかけてのいずれかの時期であろうと考えられる。

(9) 聖観音坐像（柚須原観音堂）（図 71）

『筑前国統風土記附録』をはじめとする地誌の類には、柚須原村の観音堂で、「康永三年二月二十二日施主各信男信女為息災延命為五穀成就現当二世諸願成就親視世音菩薩生光奉再興也」という胎内銘をもつ観音像が存在していることが記載されている。現在観音堂に安置されている聖観音坐像は、江戸時代に補われた光背裏に「筑前国御堂郡須原村観音之莊藏生光附新奉再興施主村中 / 里長谷氏和田氏原氏辰原氏伊藤氏島海氏松名園氏廣嶋氏比原氏大田氏 / 諸嶋氏森書各姓名而奉納像中也并心経一卷 / 背

元禄己卯十二年二月三日為成信録記之 / 戒壇院燈燈誦依 / 木尊像内記録云 大佛工京都住照曉 / 一康永三年二月廿二日為息災延命諸願成就觀音之 / 奉坐光仕以上雖有施主姓名文字不明也 / 一慶長十八年八月十二日津國上田藤三郎同室奉彩色 / 也己上」とあることから、地誌に見える件の像だと考えることができるものである。像は、像高51.3cm。針葉樹材を用いた一木造の作例である。頭部には内刻を施さず、体部は底面をのこしながら背面から内刻を施して背板を当てている。構造としてはかなり古式であるが、やや下ぶくれで頬の長く感じられる顔立ちや、猫背の体型などは、中世のものだと看取され、康永3年の銘文に見える再興は、再興造像を意味するものと判断される。1344年に造像されたと推定される。中世の貴重な基準作である。なお台座には、三つの修理銘がある。一つは江戸時代の墨書で、「山城国愛宕郡京大仏義尚」とあるもの。あとの二つは近代以降の墨書で、一つは、「普照山本院院住職権大僧都藤野賢四十一才」が中心となり、地住任民が修理した時のもの、そしてもう一つは、昭和6年(1931)に、「油須原区氏子」が合力して修理した時のものである。

⑩ 銅造菩薩形立像(文化庁) 国重要文化財(図72)

内山の宝満山A経塚から、銅製経筒と共に出土した。鏡山猛氏が、発見時に居合わせた人物から得た聞き書きによると、太宰府天満宮から龍門神社に至る道の左手、標高190mの小山の頂が出土地であり、やわらかい岩盤を井戸状に掘り下げた大型整穴の底に経筒があって、その間の平瓦三枚で囲った中から見出されたという。総高20.6cm像高17.6cm。すしりと重くムクの塑造かと思われ、随所に鎌金を覗いている。像は、日月に見える形を頂いた山型の冠をかぶり、腹前で宝珠を捧ぐように手を重ね、反花座に直立している。前面から見ると上半身には、板状の胸飾を着け、左肩を覆う衣を着け、下半身には裳を着けていると見えるが、背面から見ると、下半身には裳を着けるものの、上半身は裸身のように見える。天衣が背面上部を覆い、胸脇を通って膝前をVの字型を呈して渡り、左右それぞれの前膊にかかって体側を鱗状に垂下して、台座側面にまで至る。像の正面観の左右相称性や手の構え、膝前や体側の天衣の概形、背を反らし腹部をつき出し気味に立つ、奥行きが薄いしなやかな「く」の字形の側面観などは、飛鳥時代の仏像に通ずる。ただし、下ぶくれの丸顔に刻まれた沈んだ表情や短い首、簡略化された表現や、服制の不整合などが、地方作のゆえか時代が降るゆえかで議論があり、造像時期については定まっていない、といへ概ね諸説平安時代初期までには収まっていて、当地における金銅仏造像の早い頃の様相を考えるにあたり、きわめて重要な存在であることは間違いない。

(11) 銅造菩薩形立像(太宰府市蔵)(図73)

内山字南谷から出土した。総高10.5cm像高8.9cmを測る銅像で、錆に覆われながらも鎌金がのこっているのも垣間見える。自然科学的な分析の結果によると、材質はほぼ純銅に近いものであるという。大きく丸い髻を結って、三面冠を戴き、天衣をまとい糸帛を着け、下半身には裳を着ける。童子を思わせる丸顔に、微笑を浮かべるようにしながら、力みのない細身の体で、台座の上に真っ直ぐに立っている。造像は飛鳥時代後期ないしは奈良時代、7世紀末から8世紀にかけてだと考えられている。ただし、出土したのは近世以降の堆積土の中からということで、造像されて以来、長らく伝世していたことが窺える。

(12) 銅造如来形立像(太宰府市蔵)(図74)

内山の、宝満山頂を良好に仰ぐことができる場所にある、堂柱の跡から出土した。ここは最澄が建立を奨励した、六所宝塔の故地ではないかと考えられている所である。総高12cmを測る像は、厚く緑青に覆われているものの、頭部に肉髻をもち、右手は挙げて左手は下ろし、台座の上に真っ直ぐに立っている。造像は飛鳥時代後期ないしは奈良時代、7世紀末から8世紀にかけてだと考えられている。ただし、出土したのは近世以降の堆積土の中からということで、造像されて以来、長らく伝世していたことが窺える。

制作の時期は、ずんぐりとしていてやや頭部をつき出し気味にする体形や体勢と併せ、平安時代前期あたりが穏当かと思われる。ただ確定には至らず、さらなる古風ないしは朝鮮半島製の意見もある。

(13) 銅造仏手(個人蔵)(図75)

宝満山山頂付近の岩場から見出された。仏像の右肩から先にあたり、天衣の表現が確認できる事、未開蓮華を作っていることから、菩薩像の一部であることが推定できる。仏手は銅製鑄造で、縁青に覆われた中に鎌金痕が確認される。体部への接合は肩の内側に突出した縁柄による。肩から肘までの寸法が8cmということで、小型の作例ではある。しかし、第一指と第三指は捻じながら、しなやかな動きを見せる優美な指の表現、肩から上膊にかけての、なめらかで穏やかな丸みなどは、洗練された気品を感じさせる。上宮付近くに美しい小金銅仏が安置されていたことが知られる。一小部材から制作の時期を判断することは困難であるものの、従来平安時代末から鎌倉時代半ばまでの範囲に収まると考えられている。ここでもそれを支持するが、その穏やかさ静けさ優美さは、その範囲の前半よりも絞り込んでも、鎮かれるのではないかと感じさせるものを見ている。

(14) 薩摩塔(図76)

薩摩塔とは、昭和33年(1958)に、薩摩で初めてその存在が認識されたことからその名がある石塔である。その姿は基本的に、木造須弥壇を模した下半に、壺型をした塔身を据え、反りが強い屋根がのりというもの。現在は薩摩にとどまらず、平戸周辺や福岡平野周辺などからも見出されており、むしろ西北九州を主たる分布域としながら、九州の西側にその存在が確認されている。その制作は総じて、12世紀から14世紀にかけての中国だと考えられている。本塔は、神仏分離に至るまでは、宝満山中に所在していたと伝えられている。『筑前国統風土記附録』に、壺門岩の側にあるとして、「火燒皇子の刹、三重の石塔あり。塔の四面に仏像を彫刻せり。」^{傳説と}として見えている石塔が、それにあたるかと考えられているものである。総高は48.5cm。石材はやや赤みを感じる緻密で重い石材である。薩摩塔の中であって、塔身の平面形状が円形ではないこと、屋根が板状であることなどは異質であるが、尊像表現は首龍山遺跡に2基あるうちの西側の塔に通じており、それと同じく13世紀半ば頃の中国、南宋時代の制作であろうと推定される。

(井形進)



図 60 龍門三神坐像



図 63 獅子頭屠 (右・表)



図 61 木造狛犬 (阿形)



図 64 獅子頭屠 (左・表)



図 62 木造狛犬 (阿形)



図 65 石造獅子



図 66 地藏菩薩立像



図 67 神形立像



図 68 天部形立像



図 71 聖観音坐像



図 72 銅造菩薩形立像



図 73 銅造菩薩形立像



図 74 銅造如来形立像



図 75 銅造仏手
『宝満山の地室』1982より転載



図 69 陶製獅子 (左)



図 70 陶製獅子 (右)



図 76 薩摩塔

第5項 考古資料

1 上宮地区出土遺物 (図77)

宝満山の山頂は標高829.6mであり、花崗岩の露岩で構成される。長年の人の営みにより約100㎡の南北に長い平場となっている。遺物は上宮社殿のある東崖に集中し、博多湾側を望む西崖でも若干出土している。

・施釉陶器 (奈良三彩、緑釉陶器)

奈良三彩と思われる小壺の口縁部と底部片、緑釉陶器は坏と近江産と見られる坏ない皿の底部片と口縁上面が平坦な壺、透孔部分の可能性のある香炉の蓋片が出土している。この他に灰緑釉陶器片の出土も報告されている。三彩の小壺はやや黄味を帯びた白色の胎土であり、口縁や胴部の形状や胎土などから8世紀後半から9世紀前半の所産のものか、宗像沖ノ島との祭祀具の共通性を考える上で重要な遺物である。

・土師器、須恵器

採取された遺物の9割近い遺物が土師器の坏であり、かつて存在した東崖の石標上にあつた遺物包含層の大半を占めていた。しかもほとんどのものに灯心や油煙の燻が見られ、灯火として使用され、廃棄されたものと考えられる。遺物は8世紀中頃以降の土師器の坏、皿、蓋と須恵器の坏a、坏c、長頸壺、蓋などが知られている。土師器には坏の底に「岳」「大」「東」「福」「井」「廿」「上」「川」や記号の墨書をしたものが含まれている。古代の土器類は8世紀に始まり、9世紀前半のものが主体となるがその後の遺物は激減し、一部10世紀の黒色土器を含み、古代後期の土師器丸坏、糸切りのある土師器の坏皿類が少量見られる。土器類ではこの他中世の瓦質火鉢や中国陶器の壺または水注や経筒片、近世陶磁器などが見つかっている。経筒片は上宮背面の岩の割れ目からも採取されている。

・皇朝銭

「和同開寶」「万年通寶」「神功開寶」「隆平永寶」「富寿神寶」「承和昌寶」の皇朝十二銭と江戸期の「寛永通宝」が採取されている。初铸年が「和同開寶」は和銅元年(708)であり「承和昌寶」が承和2年(835)であることは土器の出土傾向に合致し、このことから上宮での祭祀が遣唐使の入唐との関わりがある国家的な祭祀であるとされている。

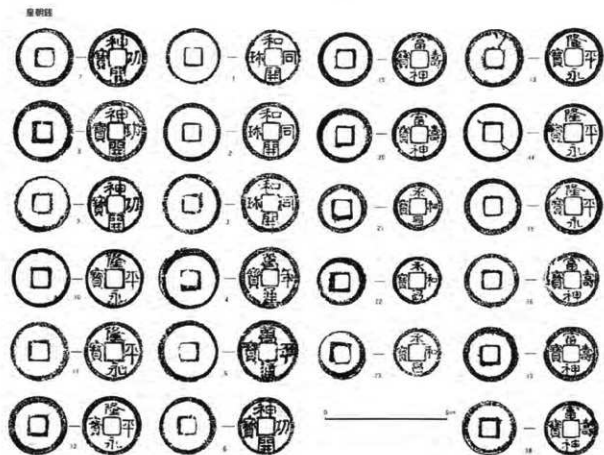
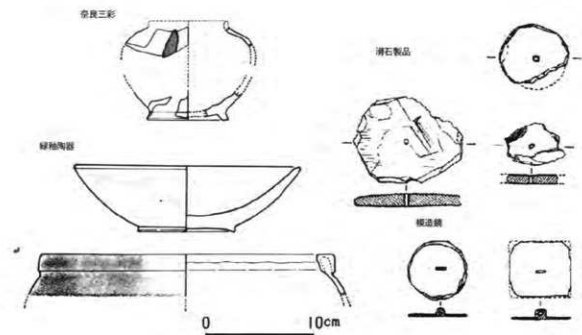
・金属製品

山頂域からはかつて銅製儀鏡(円形、方形の二種)、金銅製仏像の手(木閉蓮華の持物あり、平安後期か)、掛仏の尊像、光背、草履、花の各部位、銅板切抜抜(室町時代)、風鐸、独鈷片、鈴、飾金具、鉾釘、小銅鏝、銅製香炉蓋(近世)、銅滓(火災などの被熱による製品の溶融物)、模造鉄斧などが出土している。ほとんどが東崖での出土だが模造鉄斧は西側の権児岩としての採取である。

2 龍門獄祭祀遺跡出土遺物

・土器類

龍門獄は山頂の南の標高798mの3つの花崗岩の巨石からなる露岩の嶺であり、「龍門岩」や「仙龍岩」など呼ばれ山中の聖所として近世まで保持されてきた。ここからは須恵器坏、土師器坏a、坏c、皿a、壺、黒色土器B類、緑釉陶器片と玄界灘式製土器の甕が複数出土している。この甕も沖ノ島1号や5号遺跡で出土しており、その関係が注目されている。遺物の時期は8世紀後半から9世紀前半が主体で一部に10世紀のものが見られ、山頂での傾向に似ている。



上宮地区出土遺物

図 77 上宮出土遺物

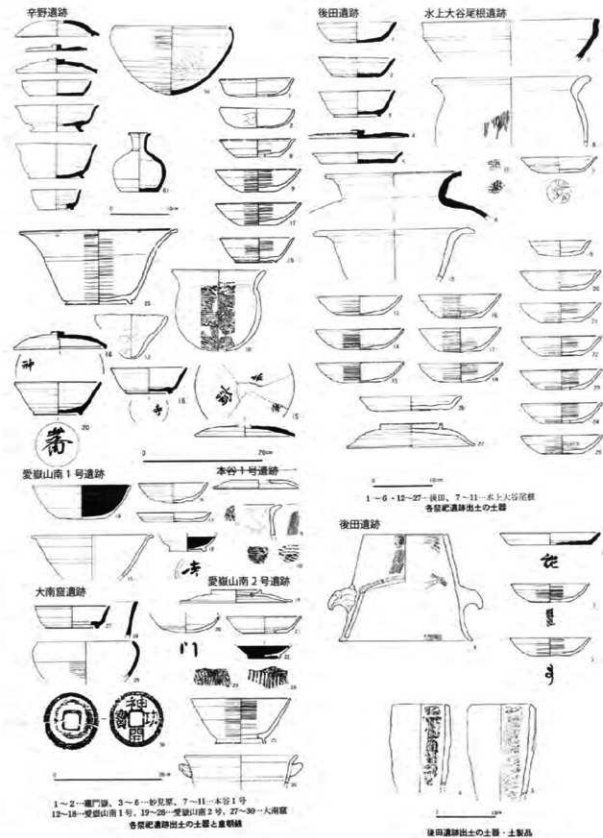


図 78 山中祭祀遺跡出土遺物

3 辛野祭祀遺跡出土遺物 (図78)

山頂西側の標高400m付近にあるわずかな尾根が祭祀の場として利用されている。

・土器類

土師器には環a、環c、環d、碗c、皿b、蓋c、蓋b、小高环、鉢、鉢(香炉)、甕a、玄界灘式製塩土器甕、焼塩壺などと多彩である。須恵器は蓋a、蓋c、小環a、環a、環c、皿a、鉢a(鉄鉢型)、壺a、壺b、壺d、華瓶形小壺などとこれも山頂部出土品より多彩である。時期は7世紀後半から8世紀のものが主体で、一部のものが9世紀初頭頃を下限とする。大宰府政庁1期に遡る遺物の存在は貴重である。墨書土器には「神」「寺」「蕃」「論」「大」「奉」「甲」「有」「知孝」「豊」「財」「相」「十」などがある。遺物の中に香炉や鉄鉢型土器が存在し、「寺」銘の墨書があることから仏教の影響がみられる。「蕃」の文字は蕃客や蕃夷の意が連想され、ここでの祭祀が大宰府政庁の成立と連関し、国境を意識したものであったことを示唆している。

・金属製品

「神功開寶」と「富寿神寶」の皇朝銭が出土している。このほか被熱した帯金具片、鉄小刀、鉄鋸などがある。

4 下宮地区周辺 (図79,80)

現在の龍門神社のある標高150mを前後する大字内山では以前からの採集品に加え、近年の発掘調査により7世紀後半以降の須恵器の蓋、8世紀前半から後半にかけての須恵器環c、蓋c、鉢a(鉄鉢形)、華瓶形の小壺、円面硯、などの在地産の土器類に加え、新羅系須恵土器の壺、緑釉陶器壺などが見つかった。瓦類は平安期の格子目の叩きのある瓦類が大平を占めるが、奈良時代の鴻臚系系の軒丸、平瓦と都府様系鬼瓦片が採取されており、同時期の堂社があった可能性を示唆している。鬼瓦は大小2種があり、小型のものは9世紀に下る可能性がある。平安時代の瓦は叩き目の分析から時代は9世紀後半から11世紀に及び、供給元は安楽寺や観世音寺、平井などの各工房を含んでおり、大宰府地区の広範囲から集積されたものがもたらされた可能性がある。

5 山中祭祀遺跡出土遺物(本谷1号、愛嶽山南1号、2号、大南窟、後田、水上大谷尾根、仏頂山東、東院谷地区)(図78)

この他、山中では数カ所を古代を中心とする祭祀に係わると考えられる遺跡が見つかった。妙見原遺跡(標高275m)は大字内山の推定宝塔跡の足下にあたる平地で、ここからは8世紀後半頃の土師器、須恵器、製塩土器と10世紀頃の瓦類が出土している。一の鳥居東遺跡は大字内山の登山道脇の平坦部にあり、8世紀後半頃の土師器の甕、皿、須恵器の長頸壺、環、皿、円面硯、製塩土器の甕と坏が出土している。本谷1号遺跡(標高350m)は大字内山の鳥越峠から300m下った大宰府側の斜面にあり、8世紀の土師器、須恵器、製塩土器の甕と坏、10世紀頃の黒色土器B類が出土している。愛嶽山頂は宝満山の別峰ともいべき標高432mの峰で、愛嶽山南1号遺跡は山の南斜面中腹(標高345m)の大字大石字水上にあり、8世紀から9世紀代の土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、灰釉陶器、瓦類が出土している。土師器環には「寺」銘の墨書土器がある。黒色土器A類の碗は4個体以上重ねられた状態で出土している。愛嶽山2号遺跡は大字大石字水上の標高285mの花崗岩の巨石がある辺りにあり、8世紀後半から9世紀代の土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、平安後期の白磁、鉄器が出土している。土師器には「門」の文字のある墨書土器がある。大南窟遺跡は宝満山の南側の急斜面中にある屹立する巨石に形成された窟の遺跡であり(標高515m)大字大石字水上に位置する。窟の下方から土師器甕、短頸壺、環、皿、鉢、須恵器環c、蓋c、皿a、鉢a(鉄鉢形)、壺a×b、華瓶形小壺と皇朝銭「神功

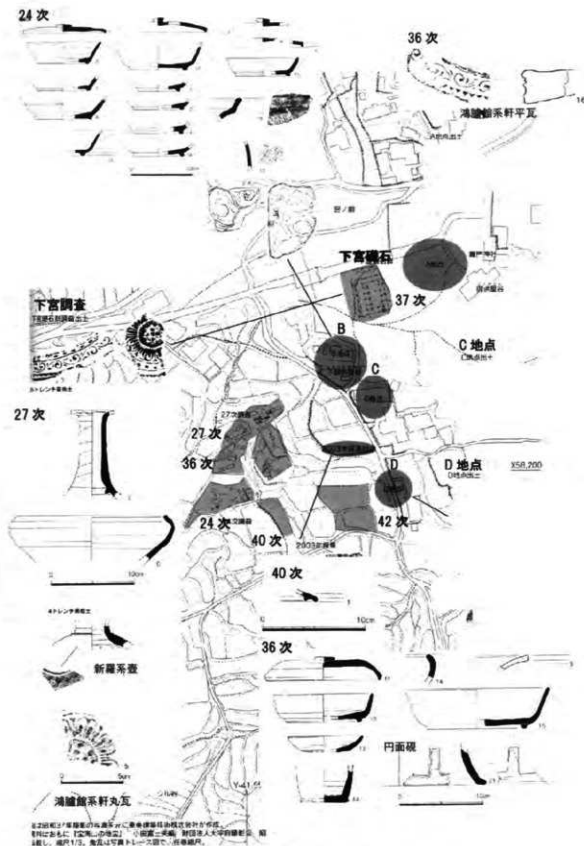


図79 奈良時代の下宮地区出土遺物

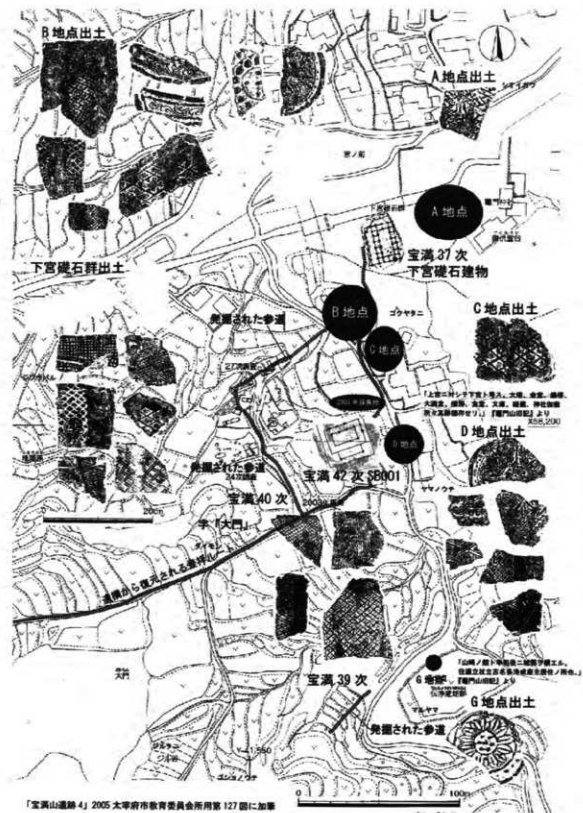
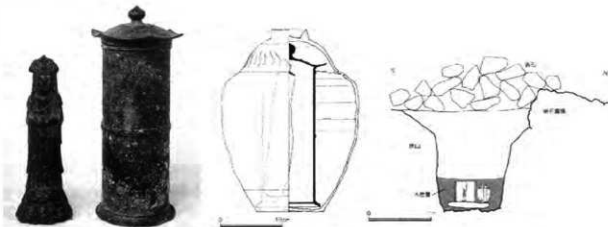


図80 平安時代の下宮地区出土遺物

開寶」、滑石片、中国陶器意他が出土している。遺物は8世紀を中心に12世紀までのものがあり、中国陶器は先の尖った鈕のある経筒の蓋を含んでいる。水上大谷尾根遺跡は山頂から南東に下る尾根筋の標高615mの地点の巨石が地盤に覗くわずかな平坦地にあり、土師器の坏d、移動式甕、製塩土器坏、須恵器の皿aが出土している。後田遺跡は標高868.7mの仏頂山の南100mの巨石がある平坦面、大字本導寺宇後田に位置する。8世紀代の土師器の坏、皿、蓋、甕、甕、須恵器の坏、蓋、皿、壺、甕、黒色土器の坏、製塩土器が出土している。土師器には「藤ノ」や螺線記号の墨書がある。仏頂山東遺跡は頂きの東の標高860mにあり、8世紀の土師器皿、甕、須恵器、製塩土器甕が出土している。また、東院谷地区は筑紫野市大字大石字水上の標高750m付近にある近世の坊跡として知られ、古代から近世に至る

宝満A経塚



A経塚埋納時の復元想定（太宰府市2006年より）

宝満B経塚

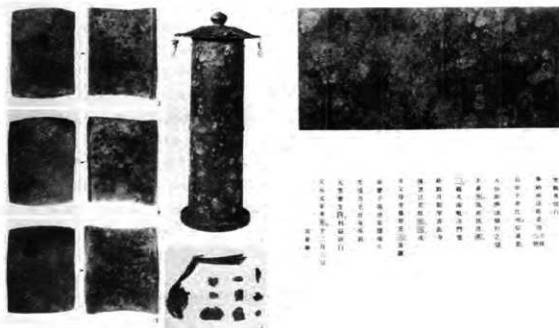


図81 平安時代の下宮地区出土遺物（亀井1982年より）

までの遺物が採取されているが、近年の集中豪雨により新たに7世紀後半以降の須恵器の蓋、8世紀前半の須恵器杯e、8世紀後半の土師器の杯a、鉢、香が形土器、須恵器の小壺、12世紀以降の中国陶器壺、14世紀頃の龍泉窯系青磁壺、16世紀頃の瓦質火鉢などが発見されている。7世紀後半に遡る土器は東院谷地区のほか下宮地区、辛野遺跡でも確認されており、山での祭祀が開始された時期を考える上では重要である。

5 経塚出土遺物 (図 81)

・A 経塚 (外容器、経筒、小金銅仏、陶磁器ほか) 国重要文化財

大字内山と大字太宰府宇冷林(ひえべし)の境にある標高193mの独立峰の頂部で昭和初期に発掘された経塚で、平成17年度に太宰府市が再調査をおこなった。山頂部の露岩脇に直径1.2m、深さ1.7mの穴を穿ち、底に平石を据えてその上に瓦3枚で囲った中に小金銅仏、それに並んで中国陶器の壺の口縁部を欠いたものを外容器とし四王寺型の銅製筒型経筒を入れて白磁V類輪で蓋をして平置きし、白磁の皿、小壺、銅製の鈴などを入れ、周りを木炭で覆って埋め、表面を河原石で覆って収納していたものである。仏像は飛鳥様式を持つ後代の作とされている。その他、この岡の頂部では奈良時代の須恵器の杯e、蓋が複数出土している。

・B 経塚 (瓦、経筒)

筑紫野市大字原字山崎の丘陵上で発見された経塚で、発見の詳細は伝わっていない。遺物は瓦3枚、紙本経残片、軸木、環塔のある蓋を持つ四王寺型の銅製経筒で、筒の外面に釘書きによる天永元年(1110)の年号を含む銘文がある。銘文には肥前松浦の藤原家出身の僧履尊が大南無沙門堂に数ヶ月籠もって法華経を書写し、父母や妻子の現世での安寧と後生の菩提を弔い利益を請う内容が記されている。経筒の形状からA経塚とはそう時期差のない間で形成されたものと思われ、当該時期の宝満山山嶽で展開していた宗教活動の具体相が知られる貴重な資料である。

第6項 民俗資料

1 福岡県指定有形民俗文化財

龍門神社所蔵文化財の内、黒田忠之寄進の鏡二面が「梵字文神鏡」として昭和37年2月20日、福岡県の有形民俗文化財に指定された。その後、平成23年3月18日、「宝満山山岳信仰関係資料」と名称を変更、龍門神社所蔵の305点を追加し、総員数307点が有形民俗文化財として指定されている。

内訳は、①信仰資料にA神体・偶像類27点(既指定2点を含む)、B神事・仏事用具55点、C神札・護符類15点、D奉納・祈願品類94点、Eその他の信仰関係資料27点、②その他、A記録類89点である。次にその主なものについて記す。

①A神体・偶像類

(1) 銅鏡4面

龍門神社の祭神三神をあらわす銅鏡は、寛永18年(1641)2月の火災から時をおかず、2代藩主黒田忠之が同年3月に寄進した鏡3面と、3代藩主黒田光之が寛文12年(1672)11月に寄進した鏡3面があった(「宝満宮」鏡銘文)。しかし光之寄進の3面のうち「宝満宮」鏡と「聖母宮」鏡の2面は今日に伝わらず、忠之寄進の「宝満宮」鏡は嘉永6年(1853)火災に遭い、11代藩主黒田齊博(長博)が再寄進した。・「宝満宮」鏡 江戸時代・嘉永6年(1853)

銅鑄造 径54.7cm 縁厚2.0cm 柄長さ4.1cm・厚0.85cm

鏡背に陽鑄銘文がある。中央に「十一面観音の種子(キャ) 宝満宮 座主平石坊幸重」、右に「寛永十八年辛巳三月吉日 大権主筑前太守源忠之」とある。これは忠之寄進の鏡にあった銘文を再鑄しているものである。左には、忠之・光之がそれぞれ三面の鏡を寄進したこと、嘉永6年の火災で「宝満宮」鏡が焼失したので、昔のままに黒田齊博が改鑄寄進する旨が記されている。柄部に「鑄工 博多野子町住 深見藤右エ門満直」の陰刻がある。

・「聖母宮」鏡 江戸時代・寛永18年(1641)

銅鑄造 径45.7cm 縁厚0.8cm 鏡面厚0.4cm 柄長さ4.3cm・厚0.7cm

鏡背陽鑄銘文 中央「釈迦如來の種子(バク) 聖母宮 座主平石坊幸重」

右「寛永十八年辛巳三月吉日」左「大権主筑前太守源忠之」

・「八幡宮」鏡 江戸時代・寛永18年(1641)

銅鑄造 径44.9cm 縁厚0.85cm 鏡面厚0.45cm 柄長さ43.85cm・厚0.6cm

鏡背陽鑄銘文 中央「阿弥陀如來の種子(キリク) 八幡宮 座主平石坊幸重」

右「寛永十八年辛巳三月吉日」左「大権主筑前太守源忠之」

・「キリク」鏡 江戸時代・寛文12年(1672)

銅鑄造 径36.2cm 縁厚0.9cm 鏡面厚0.3cm

鏡背陽鑄銘文 中央「阿弥陀如來の種子(キリク) 座主平石坊弘有法印」

右「寛文十二年壬子十一月吉日」左「大権主筑前太守源光之」

忠之寄進の鏡より小型、径は三分の二の大きさ。梵字(キリク)の左右に鈕が鑄出されている。忠之寄進の鏡が鏡台に差し込み立てる形式であるのに対し、紐でつり下げる形式である。翌寛文13年(1673)には、宝満宮草創1000年祭が斎行されており、そのための寄進であろうか。

(2) 水鏡および水鏡箱蓋断片

・銅鏡「水鏡」中国元時代末期・14世紀 径36.5cm 外縁1.5～1.7cm 鏡面厚0.3cm

『新統古今和歌集』第二十神祇歌 2075に

筑前守にて国に侍りけるに、日のいたく照りければ、雨の祈りにかまどの明神にかがみをたてまつるとそへたりける。

藤原経衡

雨ふれと祈るしるしのみえたらば水かがみと思ふべきかな
とある。この事を『伝記』では後三条天皇御宇(1068～1072)、『旧記』では後宇多天皇御宇(1274～1287)の出来事としている。しかし鏡の年代感と合わない。新編古今和歌集は、永享5年(1433)頃足利義満の発意により同年8月後花園天皇の繪旨が撰者形鳥井雅世にくだり編纂された。水鏡本には15世紀とすれば、鏡の年代感とも一致する。『伝記』には藤原経衡が「大早の時、鏡を鏡に懸け、和歌を詠じた」とあり、『縁起』には「雨乞ひにこの鏡を懸け雨乞いすれば必ず雨が降る」とある。修法については「竹林庵1909」によると、「早魃の際、寺社奉行から令達が行くと、講堂前に八大龍王の名を書いた水色の旗8本を立て、竹籠を設け、益影井など山中の五所秘水を供え、講堂の中では十八道立の護摩壇を張ってここにも五所秘水に名香を入れた香水器を飾り立てた。早朝より十八道立の水天供の作法で暮方まで祈祷をする。祭壇に水鏡を設置し香水器の秘水を櫛の葉で注ぐ。二七日の修法であるが、水鏡の箱の蓋を日に日に少しずつ開けいき、洒水量も多くなっている。満願の14日を通さずとも雨が降らない場合は、座主が水鏡を抱いて獅子滝の滝壺に沈み、脇師一同滝壺の前で護摩を焚き経を誦むという祈祷が行われた。

・水鏡箱蓋断片 江戸時代・元禄15年(1702) 桐材

水鏡が入れられていた箱は元禄15年に新調されたが、現在は蓋板を遺すのみとなっている。

その両面に表は金泥文字で、裏には銀泥文字で水鏡の由来が書かれている。

(表)(右上部)水鏡(左上部)新編古今集/筑前守にて国に侍りけるに日いたくり/ければ雨の祈に
龍門の/明神に鏡を奉る/とてそえたり(左下部)藤原経衡/雨ふれといのる/志しるしの/見へたらは
/水鏡/とも/おふ/へきかな

(裏)龍門山神祠水鏡蓋銘并序/龍門山又曰御笠山乃筑紫諸州之鎮是以有炎旱則/國人必祈請于山神而
降雨蓋因名山能出雨也古/昔本州刺史藤原経衡在太宰府之日憂久旱之苦禾稼/故博朝慈 神面語讀因獻
之以大鏡一面蓋之以後/歌一首載在于新編古今集今其鏡猶存焉因歌辭序/曰水鏡徑一尺二分二分此自中
華所來也夫鏡者至/器也以其虛明惟神之所寓況経衡之所獻其志欲/博雨必有感應如此然則可謂希世之
重器也今其/蓋歷世之久而垢穢旧矣祠官博朝復山請予之改作繇予為本郡之大吏也予於此命工新製以
換旧蓋/奉○○○広前○○○歳月金銘日

□□清南 神鏡永榮 降雨降祥 以赫威靈 / 又 / 我おもふ御笠の山の陰にすめは雨もふ

りつつ民安しとそ/元禄壬午季二十四日/橘右衛門財丹治増能再拜書

(3) 神筆鉾(銅文) 全長38cm 最大巾7.5cm 厚さ0.35cm 間部巾12.8cm 重さ552g

背に綾杉文を陽鏤、表面に横一線と線鏤の図形を陽鏤。昭和16年の『宝物貴重品台帳』に因るとともに「神筆鉾御鏡(長老尺老寸五分・巾式寸五分) 老本 原因不詳」とある。考古学的知見は『宝満山の地誌』に掲載。

※木造龍門三神像・菊日石獅子・木造獅子頭等は第2章第3節第4項を参照

① B 神事・仏事用具

(1) 仁王般若経及び箱 18セット 経巻: 版本墨刷/折本装 縦27.3cm×横8.0cm

仏教関係遺品として唯一龍門神社に遺されたもの。坊名を墨書した木箱に、多くは経本が上下二巻帙入りの形で納められているが、一巻のみもの、帙のないものもある。木箱と経本にある坊名が一致しないものもあるが、箱蓋表に福藏坊・浄海坊・鳥居坊・福寿坊・道場坊・新坊・福泉坊・富倉坊・歎明坊・

尾崎坊・佛堂院・岩本坊・寂光坊・吉祥坊・大谷坊・東院坊・修藏坊の墨書のあるものがあり、「新坊主」と鉛筆書きされた箱が別にある。箱蓋内側もしくは箱本体内側、経巻頭表紙裏、経巻最後尾に墨書があり、嘉永7年(1854)夜須郡四嶋村の岡部森右衛門の妻が寄進したものであることがわかる。また東院坊分には下巻巻末に「廿七部内」「龍門山/大講堂納/東院坊受持」と墨書があり、寄進当初は27セットあった可能性がある。ただし、富倉坊分の下巻には「此経者長崎西田氏西原氏福西氏等諸庵/主有志願之事託余奉納于太宰府/聖口禱者也維時/寛政二年庚戌春二月 勾当坊剛重録」という奥書があり、本来寛政2年(1790)に太宰府天満宮の勾当坊長崎の門々より寄進されたものであることが知られる。なおこの経本は天和2年(1682)洛陽書林伊藤次郎兵衛刊行本である。

① C 神札・護符類

(1) 祈札 15点

糟屋郡新宮町の旧家(酒造業)から太宰府天満宮に奉納された神札類(木札)の中から宝満山園係のものに龍門神社に移管したもの。明和8年(1771)から明治2年(1869)の間の祈札。発行者は龍門山2本、南坊9枚、福寿坊1枚、組下山伏の臨臨間1枚、白岳山1枚。華供峰中(春峰)あるいは大峰(秋峰)の探灯護摩供、護摩供に祈願を込めた札が8枚、龍門山での神事、法会の際の祈願に係るものが7枚ある。願意は、息災延命、病魔悉除、家内安穏、諸難退散、除災招福、除災生家、家内安寧、家内平均、百事吉祥、家運繁栄、酒造繁栄などである。

① D 奉納・祈願品類

(1) 扁額

・宝満宮扁額 江戸時代・嘉永7年(1854)

縦130cm、横106cm 木造 漆塗一部金箔

宝満宮の扁額は貞享2年(1685)、福岡3代藩主黒田光之が左大臣近衛基熙に禱を要請し、京都堀川住の勤願師佐竹重成が制作し山頂の上宮にかけられていたが、嘉永6年(1853)の火災で焼失したため、翌年、公命によって博多の勤願師佐田謙澄が模本を参考に再興したもの。額裏にその経緯を記す。額縁に紫・銅の紋を配するが、小早川隆景が再建した上宮の金柱の飾りも菊桐の紋であったという(『龍門山宝満宮伝記』等)。

・下宮社額 江戸時代・宝暦6年(1756)

木造 透き漆塗 金泥文字 裏に墨書あり

表に「龍門山下宮」と金泥文字で書す。額縁は失われている。裏に福岡藩の学者で有賀山村を知行した加藤一純が記した銘文がある。

【社額銘文】

御笠郡有賀山邑龍門山下宮の社額字一篇/寶曆丙子年九月十日新に是を製し掲奉る/額の文字筆を染へき人数筆を撰ひ司官をして/御神に告め神慮に任せ奉る吉田雲霊翁/則其人也抑富宮のまします有賀山邑へ予か/采食の地なれば予へ御宮を崇敬する事他に/異なり仍て思ふに扁額を視たるなくも語/来る人わきまへさるもあらんかされは此額字を/製造して掲げ奉る者也/加藤一純敬識

(2) 小鏡 7枚 銅製鋳造 無文 径9.7cm 厚0.2cm程度 紐付き

小鏡にとりつけた紐のこつており神輿に取り付けられていた飾り鏡と考えられる。龍門神社の神事は古くは、玉依姫が示現したという2月10日、上宮から神輿を出し下宮に護御し、3月9日まで留まって、10日朝に玉依姫に神輿を進め、その日のうちに上宮に還御するものであったが、中世に絶えてしまったという。近世は神輿を使用するよう祭事は行われておらず、神輿はなかったものと考えられるが、安政6年(1859)のコレラ流行の際、宝満宮の神輿を福岡城下に持ち出し、万町まで二夜三日祈禱し、

市中をかきまわして福岡城中にも入って祈祷したことが『見聞略記第三卷』等の史料に見える。おそらくこの時、神輿を新調したと思われ、23枚の鏡の裏に寄進者と考えられる太宰府天満宮の社家や御笠郡・志摩郡・博多の人々の名の墨書がある。

【墨書】 演盛院・檢校坊・花台坊・明屋坊・十境坊・六度寺・蓮歌屋・大嶋兵庫・大嶋得右衛門
奉寄進太宰府社家市川精太夫幸温・上村香左衛門・茶屋與八・元結屋次助・御笠郡隈村田中弥平
御笠郡隈村田中伝八・御笠郡西小田村山茂次郎・御笠郡江村八尋佐平・御笠郡原村庄屋弥八
郎西年男・志摩郡池田村住人三嶋成七・志摩郡池田村住人三嶋茂二郎・志摩郡御床村住人鎌田甚
内・志摩郡御床村住人鎌田甚古・奉寄進 宝満大菩薩・博多新川端町米屋山平

(3) 蜀江鏡及び箱 縦18.4cm、横12.8cm 明代カ

女性の姿を織りだした鏡をガラスではさんだ後、二重の木箱に収める。木箱は透き漆塗りで蓋中央に「蜀江鏡」右上に「奉寄進」左下に「伊地知文右衛門字」と金記文字で書く。外箱蓋裏と内蓋裏に墨書がある。

【外箱蓋裏】 鏡之箱調ル事 享保十乙巳歳八月二日 寄進者ノ備後國福山ノ住人伊地知文右衛門娘ノ當國ニ来リ及成長爲當家之妻女是則現世安穩息災延命祈處也

【内箱蓋裏】 蜀江鏡一雙予之曾祖職職奉獻ノ干ノ清潮也星霜久遠宸前損壞誠識痛ノ誠今茲壬午儀大祭祀恭承先志ノ再加修飾以祈ノ明神嘉惠云爾ノ伊地知文四郎ノ幹貞貞(花押)ノ于時ノ文政壬午年仲春

①Eその他

(1) 伝神功皇后御腹帯及び箱

二重の箱の中に、納入の鏡の袋状の紐を麻布でぐるんだものと絹袋を納めている。安産祈祷に使われたものであろうか。

・外箱 縦57.5cm、横22.0cm、高さ16.0cm

針葉樹材、透き漆塗、底面栗木、鉄の蝶番がつけられている。上部真ん中に「御寶物」と墨書

・内箱 縦52cm、横16.5cm、高さ13.5cm

桐材 黒漆塗り、蓋中央に金記文字「神功皇后御腹帯」、裏側に和紙でうちばり

・絹袋 縦24cm、横16.5cm 裏側に和紙でうちばり

「座主楞伽院」「調不申候二付拙者」「額斗未布」の墨書がある

・腹帯 長さ135.6cm 巾3cm 錦・麻布

〔表〕 十一面観音・釈迦・阿弥陀の種子 玉依姫神功皇后応神天皇安産奉子孫繁榮息災延命
之安紙書也

〔裏〕 13仏の種子ノ八百万神守護令慈悲恩徳給如意吉祥長寿

②A記録類

ほとんどが近代以降の記録類であるが、近世の資料について以下に述べる。

・『山姥帷子記』及び箱 紙本墨書、巻子装、箱入り 縦20.2cm、横125.0cm

正徳4年(1714) 権大僧都法印寂賢

明治36年4月の西高辻信雅前宮司から新任の本田豊宮司への宝物引き継ぎ書に「山姥帷子 老箱ノ由来書老輪派」とある。昭和16年11月の『宝物貴重品台帳』には『山姥帷子記』の記載はあるが帷子そのものについては記述がない。この間に帷子は失われたと考えられる。「由来書」とあるものが本資料であろう。

「山姥帷子」入手の奇譚。龍門神社に奉納された経緯が以下の通り綴られている。

【山姥帷子記】

筑前国夜須郡甘木町は一月六度、群市を成して近郷、財の用を通ずるの地なり。御笠郡下見村の東方にあり、兩村相隔ること二里あまり、十二月終り月の市を国俗に呼びて乙子市という。嗜昔(ちゆうせき=昔)、天正の頃、下見村に居民あり、時の人大納言と号す。その称号更に所以を知らず。家世豊富にして、声遐邇に馳せ、一時の徳者と称え見る。奴婢僕従いたつて多し。厥(そ)の中に一人の老僕有り、性愚昧なりと雖も、平素、能く主氣に相応ず。ある時、團作の籠を売らしめ、之を袋にして印符を加え送書を調べて老僕に与えて曰く「汝、この籠を以て甘木の市に売(いたり)て、之を売るべし」即ち領事して門閭を出て往去すなり。

彼之の老僕、中途にして或る池塘の畔に昼寝す。薄暮に逢(いたり)て既に覚む。漸く甘木の市に至るに、人過りて市郡(みせ)寂寥たり。力を無くして家に帰る。時に主人袋を解きて斯の帷子有るに驚く。符印少し損壊せずして斯の如きこと奈何(いかん) 里人咸(みな)集まり会して曰く「甘木の乙子市、山姥出現すること古より世に伝へ云ふ所なり、実哉、奇異なること哉」是凡人の所業にあらず、必ず鬼女の与えし所ならんか。

今彼の奇帷を見るに、地布龜線にして染むるに青黄黑白の分段を以てす。乱紋の怪異、裁断調縫の趣、全く当世の様態にあらず。畫機織り出し妙手染め成すこと識らざる幾見霜をや、然るに大納言縁族の子細あるを以て太宰府の社上座坊の後室水文尼に譲り与ふ。余が母幼穉の時、水文尼の養子たり。故ありて本親龍門山平石坊幸重に返送す。その後余が父の家に来る。水文尼孫無き故に余が母に伝え与ふ。母之を以て寶篋に授く。語るにこの由来を以てし記す。母没して後、額納すること十有余年、思ふに我が家に置用すべき類にあらず。讀みて高辻の宝庫に寄付し奉る。後覽の者をして疑を解かしめんがため、その事実をしたため、珍産の記となることしかり。

権大僧都法印寂賢書

(原文漢文)

正徳四年午歳三月吉日

・『丙子龜嶽時稿』及び箱 紙本墨書、冊子装、表紙は布 縦36.3cm、横24.7cm、厚0.5cm

箱：透き漆塗木箱、箱側中央両側に組紐付

紺色の唐草模様布の布張りの表紙、見返しには金粉を撒き散らし、鳥の子紙の料紙20丁に黒田一貫以下63名の七言絶句を載せている。貝原篤信(益軒)が書いた序文によると、元禄9年(1696)10月、福岡藩大老黒田三左衛門一貫は、幕府長崎奉行が山家駅を通るのを出迎えた帰途、大石村にまわり、そこから宝満山に登って神廟を拝した。参拝が終わって目を周囲に転じ、その風光の美しさに感嘆した一貫は、「紅葉の名所として名を馳せた竜田や高雄も到底かなわない。しかし此処まで来てこの絶景を見ることのできない人が多いだろう」と、佳興を發し新詩一絶を賦した。これを感誦する者はみな欣賞した。さらに城下の詩をよくする者を選びこれに和韻させた。和韻したのは、久野晴湯・月成聖軒・黒田一奉・立花増武・加藤一州・貝原拙軒(益軒)等福岡藩士30名と、妙楽寺性宗・崇福寺天庵・聖福寺丹藏等僧侶32名である。この一冊は、緑色の組紐のついた桐箱に納められ、座主楞伽院に贈られた。本田豊宮司著『龍門山記』1906に翻刻。

・『龍門山七窟巡礼由来記』 江戸時代・寛政12年(1800)

縦23.6cm、横16.7cm 木版刷り 墨付き3丁

表紙に「龍門山七窟巡礼由来」、内題「龍門山七窟略記并七窟巡礼の由来」とあり、奥書に「寛政庚申佛生月吉辰ノ聖願主ノ知足院」とある。知足院は仲谷坊隠居。寛政12年(1800)、役行者1100年遠忌を機に羅漢道を開き、七窟の巡拝路を設定し七窟七所の巡礼行を「再興」したことを記念して出版。役行者が修行したという天神の七窟と、地神五窟についてその由来を述べる。

・『龍門山陵考』 明治24年(1891)船尾鉄門著 写本

宝満山七箇の第一法城窟を福城窟として、ここが神武天皇の御母玉依姫尊の御塚であると考証したものの。官幣社資格の条件整備の一環として、「玉依姫尊山陵取調」として明治24年4月28日に行われた福城窟(法城窟)の調査に参加した筑後久留米藩の国学者船尾鉄門が、この調査のあった翌日4月29日に、太宰府の客舎において著した。龍門神社には、皇紀2600年紀元節に鉄門の門人黒岩萬次郎が奉納した『龍門山陵考』が2冊ある。なお昭和56年、『柳川藩史料集』(青潮社)の附録として複製版で発行されている。本書原本は大正4年に中嶋筑水が樋口銅牛氏所蔵本を謄写したもので、表紙に「扶山文庫」の印がある。

・『宝満山寛文以来之記』 江戸時代・寛延3年(1750)

『寛延三年夏彦山より御内山拝借地願之記』『上座部開書』と合綴り。旧伊丹家所蔵の書冊本。福岡市内の個人より奉納。伊丹家は黒田藩の重臣。「福岡分限帳(天保)」によれば、伊丹九郎左衛門は1380石殿。代々九郎左衛門を名乗ったらしく、元禄の彦山・宝満山の本来論争の時には、伊丹九郎左衛門と花房伝左衛門が寺社奉行として裁定を下している。史料には、寛延3年(1750)の奥書があるが、担当者の家に伝わる記録として、担当者しか知り得ない事情や、関係者の心情等まで綴られて興味深い。(森2008)別冊に解題と翻訳。

※葛城入峰絵巻・龍門山日記・宝満宮伝記・龍門神社詳細図は別項

②その他の有形民俗文化財

・大黒天立像 室町時代 樟材・一木造・彫眼 宝照院蔵

総高(米俵地着〜頭頂)73.1cm 像高73.1cm

頭巾を披り右手に打ち出の小槌を持ち、左肩から背中に袋(41.6×17.1×18.2cm)を背負い、俵の上に立つ。「大黒天東歴略記」(宝照院蔵)によると、大同2年(807)伝教大師一刀三礼の御作で、宝満山麓北谷に安置され、寺号を大黒寺奥ノ坊と称した。永禄元年(1558)25坊が山上に移転した時、大黒天も山上に遷し奥ノ坊境内に大黒天堂を建設して安置した。ある冬、山中雪に閉ざされ各坊とも食塩が払底し困窮していた時、坊舎内に食塩を発見、其の詮索をした所、雪の中に足跡があり、それを追うと大黒天堂の前に草履がぬいであった。それ以来、世に「宝満ノ塩穴大黒天」と云われるようになったという。この大黒天は明治の神仏分離(山伏が山を降りた際、奥ノ坊とともに志摩郡北崎村小田(現福岡市西区小田)、そして明治11年3月博多竹若町の妙覚堂に遷った。現在、12月2日、3日に開催。多くの人々が詣で、筒光繁盛、家内安全を祈願している。太宰府市北谷には大黒寺という小字がある。奥ノ坊はその最初から現在までの所在地をたどれる唯一の坊である。

・役行者倚像 年代不詳 木造 個人蔵

総高(台座・岩窟座)33.8cm 台座幅19.7cm 像高20.5cm 像幅12.0cm

高下駄を履き、右手に錫杖を持ち、岩窟型に座る。全体に黒色を呈するが、元々衣服は朱彩色であったのか一部に朱と金箔が残る。岩窟背面に板を貼った部分があり、内側に銘文がある可能性も考えられるが、片側は剥がせるものの片側が固定されているため未調査。旧吉祥坊(吉田家)に伝来したものと伝える。なお、本像は別製の厨子に五鈷棒、錫杖頭と共に納められている。

・大行事石塔

宝満山では、松尾大行事を末社十所守の第一とし神楽堂と東山麓大石に祀っていた。また神楽堂には白山大行事をも祀っていた。大行事は山王廿一社の中の七社のひとつと考えられ、天台宗と関わり深い山に祀られた。彦山では、大行事社は弘仁13年(822)法蓮の弟子羅蓮が彦山神領内に神領護持のため高皇産靈尊を祭る48ヶ所の大行事社を建てたと伝えられており『英彦山神社在昔神領内四十八箇

所大行事神社安置所在地由緒』、明治の神仏分離によって、「高木神社」となっている。宝満山では東側山麓に松尾大行事社、松尾寺があり、所在地の「野」は大行事原と呼ばれたが、野火による火災で焼失したため、麓の集落大石に遷し氏神にしたという。その島居の窟には今も「大行事」とあるが、明治以後はこも高木神社となっている。

江戸後期、大行事石塔建立が流行し、現在の太宰府市・筑紫野市・大野城市・福岡市博多区(旧唐田郡)・春日市・那珂川町・宇美町・志免町・筑前町・朝倉市・飯塚市・姪原市・小郡市、佐賀県基山町・島栖市に、約70基の石塔が現存している。その立地は多く、村境またはかつての入谷山、林場・採草地にあり、牛馬の神とも五穀豊穡の神ともいわれている。これらが、宝満修験の影響下に建立されたものかどうかは明らかではないが、その立地が宝満東麓の「野」、大行事原に通ずることや、建てられている区域が、牛馬安全の信仰をかかげる「愛護講」の結集地域、あるいは宝満神社の所在地とも微妙に重なることは、注目し得る。

宝満山麓には龍門神社参道のひあけ地蔵尊の横に花崗岩割石の高さ179cmの大型の石塔をはじめ、太宰府市北谷字ソイラ(1915年建立)、松川字冷林(1915年建立)、三条字谷(1837建立)、高雄(1815建立)、下高雄(1875建立)、筑紫野市袖須原(1797建立)、本道寺(1851建立)、大石(不詳)など、各集落に大行事石塔があり、年に一度祭事を行い、その際、大行事石塔の前で相撲を行ったという事例が多く報告されているが、現在では祭事を行う所もわずかで、お供えをして拝し、簡単な直会をする程度である。かつての株場の多くは宅地開発され、移動、役目を終えた大行事も多い。

第7項 祭事・年中行事

現在の龍門神社の祭事には、11月15日の例祭、11月23日の新穀感謝祭、6月・12月晦日の大祓、毎月1日・15日の月次祭、氏子集落の農耕儀礼に関わる祭事など、ごく一般的なのが明治以来の伝統として受け継がれ、祭礼や民俗芸能といった華やかなものは存在しない。

特殊神事としては元旦の作試しが少なくとも江戸期以来連続と続けられており、また近年、宝満山独自の祭事、十六詣りの伝説を踏まえた4月16日のえんむすび大祭、修験道の復活を図った5月第2日曜日の人峠、最終日曜日の探灯大護摩供などが盛大に行われている。8月7日に行われる七夕祭も、龍門神社古来のものではないが、境内に短冊を着けた笹飾りを立て、氏子たちが竹燈明を灯し、舞楽や音流の演奏などが奉納される。また2年一度11月に開催される神道夢想流杖道の入谷山の前日、境内末社「夢想権之助社」で、祭典と奉納演舞が行われる。夢想権之助は宝満山の普地窟で修行、宝満の神から杖道の極意を授かったという。なお神道夢想流杖道振興会では毎月一度境内で稽古会をしている。作試し・十六詣りについては第3章第6節、修験道行事については第3章第7節に述べるので、ここでは氏子域(内山・北谷・原)の村落行事について簡単に触れておく。

(1) おこもり(春籠り) 4月上旬〜中旬

内山では4月はじめの農作業にかかる前、村中総出で龍門神社に参拝し祝詞を上げてもらい、龍門山寺跡の塚の下で直会。北谷は4月15日、「五穀神の昼籠り」として龍門神社遙拝所(入谷宝満宮)の前にシナイ(糠)を立て、内山の龍門神社より神職を招き祝詞を上げた後、直会。以前はワリコ弁当にご馳走を添えて持ち寄ったが、現在はどちらも出しを止めている。

(2) オヨド 7月9日

田植えの結びまい後の祝いとして行われる。現在は7月中旬、龍門神社の夏祭りとして行われ、氏子が造った茅輪ぐりなどの行事が昼間神事として斎行され、夜、内山区の子供会育成会などが中心となつて、竹燈明を灯し花火やスイカ割りなどが行われる。昔は浪曲やニワカが行われたという。

北谷では氏神（遙拝所）で、竹の右にロウソクを灯す千燈明が行われる。かつてはオニギリ・ヒジキ・コンニャクなどの煮たものを氏神に持ち寄り、千燈明を灯すのは子どもの役割であった。

(3) 地蔵さまのオドド 7月23日

北谷地蔵堂の地蔵さまは平安時代の作で福岡県有形文化財に指定されている。かつて宝満山のいずれかの寺坊に安置されていたものと考えられるが、寺坊がなくなっても村人の手で守られ今日に伝えられた。「子どもの神様」として、北谷では7月23日夕刻から、地蔵尊にお供えし当番が地蔵堂の前にオ菓子などを用意し、参拝に来る子ども達に振る舞っている。

内山のひあけの地蔵は、大庭家・島岡家・藤木家の3軒で賽銭の管理・供花など日常の世話をしている。7月23日は3軒が施主となって供花・線香・灌酒・火花などをし、参詣の大人には酒の振る舞い、子どもには袋菓子振る舞う。子供会の行事として位置づけられている。

(4) 北谷の盆綱

盆の8月15日、かつては子ども組が各家をまわりワラを集め広場で綱をつくったが、現在は運動会の時使用するロープを使っている。夕暮れ時より青年と子ども組の綱引きが路上で行われる。子ども組が負けないように綱が手伝う。3番勝負の最後に、綱は真ん中で切断され、双方引き分けて終わる。

(5) 八朔祭

9月1日（現在は9月第1日曜日）、内山の人たちが龍門神社に御神酒等のお供えをしお百度詣りする。参加者が常緑樹の枝を持ち、石段の所から3人の総代が控える神前に進み、一枚を一つ三方に載せ、石段まで戻り、同じ事を数回繰り返す。総代はあげられた木の葉を順次俵に刺し、100枚位になったら三方に載せて神前に奉納。総代各人が一本ずつ作る。神職がお読みにして祈願をする。その後、境内にシートを敷き直会。その横で、子ども相撲が行われる。

(6) 宮座

・北谷区宮座

北谷の宮座は上組・谷組・下組の3組にわかれている。以前はこれに中組があったが、転出などで戸数が減少したため、中組の者は谷組・下組へ編入した（但し、オヒマチなどの行事によつては現在も4組で行っている）。元来、11月25日に行なわれていたが、現在は11月23日の祭日に行なっている。まづ村落全員、龍門神社遙拝所（北谷宝満宮）に集合し、大当番が新穀を炊いてお供えし、龍門神社より神職を招いて新穀感謝の祝詞をあげてもらう。祭典終了後、大当番が給仕して新穀の御供と御神酒を戴き、その後それぞれの組の座元の家に集まり直会をする。神職を招く組の頭元を「大当番」といい、大当番はこのほか正月元旦の朝、6時から8時まで遙拝所において参拝の部落人に御神酒をつく。これを「板敷くめ」と言っている。また、12月の初丑の日、山の神様の掃除を行ない、御神酒一升をあげてくる。これによって大当番の1年の役割を終わる。

宮座の構成員は、戦前、株（宮維持のための出費）を持っている者で構成し、現在もこの家の子孫がうけつぎ、他からの移住者はいない。席順も戦前は持ち株の多い者が上座であったが、現在は年功序列となっており、頭元は相役付として末席を占める。戦前は維持費として「宮田」があり、ここよりあがる米を「社倉米」といった。現在は各戸より切銭で金を徴集している。「頭元」は3人1組で勤める、頭元のうち一人が座元となり、これらは戸口回しにまわされている。戦前は紋付・袴で参会したが、現在は背広である。

直会を公民館などで開催し料理も仕出しという所が殆どとなった今日なお、下組では菅元の家で開催し、御馳走も、「吸物肴・酔味増（もたま）・さしみ（ぶり）・がめに・ぬたい・だが・あん餅・御飯・味噌の吸物・漬物」等、ほぼ宮座様の献立通りに、頭元の家族がこしらえる点など貴重である。ただし、

上組・谷組は仕出し料理をとっており、以前行われていた餅つきも、数年前から行われていない。直会ではまず冷感をまわし、次に会食にうつる。終わりに「頭わたし」を行なう。

頭わたしには、朱塗りに高砂の絵の盃で神酒をいただくが、盃は大・中・小の三ツ組盃で上組が大、谷組が中、下組が小を持っている。大盃は直径5寸。盃は上座からまわすが、戦前はお酌は頭元の家の娘が着着を着て行なった。その際、大根の中央部を輪切りにし、一切れずつに塩をつけておたす、その後、盃・控帳を箱におさめ、次の座元におたす。

夕食は、豆腐のみそ汁・つけ物・白御飯で簡単にいただく。

上記は昭和53年12月7日龍門神社氏子総代・斎藤久茂氏（61歳）に聞き取り調査したものに、現在の宮座の在り方を加筆したものである。

・原区宮座

原の世帯数は昭和53年には38戸であったが、現在は宅地開発により133戸に増えている。しかし、宮座に参加するのは古くからの住民で農業を営む者29戸である。以前は2名1組で「頭屋」をうけもっていたが、頭元はいわば宮座直会の当番のようなもので、実際の運営は農事実行組合長が宮座実行組合長となり運営を行なった。現在は、農事実行組合の正副組合長が3人で取り仕切っている。農事組合長は毎年交替する。経費は以前は宮田でまかなわれて、現在は、組合費に宮座費をくみ込んでおり、全員が参加する。宮座は元来12月10日であったが、現在は12月はじめの土曜か日曜日に行っている。原の宮座では、龍門神社へのお供えに特徴を遺している。

供物は、かぶ3・菜付（上段右）・オキョウ3（上段中右）・神酒（上段中左）・白菜3玉その上の人蔘5本1束にしたもの（上段左）・昆布すめ（下段左）・頭わたしみくじ箱（下段右・現在は使用しない）。オキョウは、新穀（餅米）を炊き、神社よりもらったかわらけに盛り、菘菔に包んだもの。一つのオキョウにつき米5合、三方に3つ立てて供え、一つは龍門神社へ、一つは頭わたしに使用、一つは中の米を切り分け皆で食べる。

龍門神社での祭典は新穀感謝の祝詞の後、玉串奉奠は原区総代、宮座実行組合長、神社総代の順に行なう。昭和53年の時点では、次年度の頭屋をきめるため、神職がくじをひき原区総代が発表した。くじには2名ずつ連記しており、当たった社は宮座台帳に貼り、残りの札のみ封筒に納める。拝読で以上のことが終了の後、参籠室に蔘、神酒・昆布・すめを簡単な直会をする。昭和50年までは、この時の肴として串に、大根・人蔘・さと芋・かまぼこ・こんにやく・ごぼう・蓮根のさしたものを（一本の串に七品）を持ってきた。

この後、部落へ帰り公民館で直会、昔は頭元の家に集まり、掃着一番に「つつかけごぜん」といって赤飯をいただいた。会食の途中で「頭わたし」をする。今年と来年の「頭元」が前に出て盆を交換し、手うち「おきょう。一本と「みくじ箱」を渡し、この後、全員に盃をまわし「おきょう。の御飯を切つて食べる。現在は頭屋がないため、頭わたしの儀式もない。昭和53年時点では、公民館で手作りの直会の食事であったが、現在は、鯉のあらい・鯉こけ以外には仕出し料理をとっている。

その他、村落内に山の神が三ヶ所あり、それぞれの組で頭元を決めて、12月初の丑の日の牛祭、餅つきのための「お日待ち」を行なう。戦前は青年団員による「神送り」「神遊文」も山の神を中心に行なわれた。（昭和53年12月10日原区宮座祭/平嶋正人氏〔66歳〕・森木清人氏〔66歳〕談に現在の变化を加筆した。）

・内山区宮座

龍門神社の注連縄は内山区があげる。現在、内山は戸数が増え、9組に分かれている。古くからの家は40戸、これが4組にわかれており、古い組と新しい組がなく2組ずつ当番となり「お注連ええ」

をする。以前は10月9日夜に、拝殿正面、末社等に至る分まで(10本)つくり、10日早朝にお注進あげをし、10日夜宮座を行なったが、現在は、10日に近い日曜日に1日かけて注連縄を払い、その日の夜に直会をし、10日早朝にあげる。特別な儀礼は伝えられていない。

平成元年2月の木村藤策(明治43年生まれ)への聞き取りによると、宮座は、以前は男子のみ羽織袴の正装で参加。当番の家に神職を招いて祝詞を上げてもらう。神事には他の組は参加しないが、直会には参加した。料理は当番の2軒の家で作った。という。

(森弘子)

【参考文献】

- 九州国立博物館『トピック展示 祈りの山宝満山』2009 九州国立博物館
太宰府市史編集委員会『太宰府市史 建築・美術工芸資料編』1998 太宰府市
竹林隆「山の秘密」『九州日報』1909(のち松岡実校「宝満山伏の峰入り」『まつり』9号)
中野輔能編『筑前国宝満山信仰史の研究』1980 太宰府天満宮文化研究所
福井敬彦「神道学者としての松下見林—その神社研究をめぐって—」『神道史研究』第35巻第3号
1987
森弘子『宝満山歴史散歩』1975 葦書房
森弘子『宝満山歴史散歩』2000 葦書房
森弘子『宝満山の環境歴史的研究』2008(財)太宰府顕彰会

第3章 考察編

第1節 遺跡と遺物から見た宝満山(遺跡分布と時代別の変遷)

遺跡の面的状況

宝満山の遺跡としての構成は、おおまかには垂直方向では山頂域、中腹域、山裾域に、平面的な展開としては太宰府市側の西側と筑紫野市側の東側とに分かれる。西側の山裾における主要な遺跡の分布は、龍門神社境内にある下宮地区、さらにその南西にある大門地区、中腹域にある本谷地区が挙げられる。下宮地区では宝満山遺跡第37次調査で、大門地区では第42次調査で、本谷地区では第34次調査でそれぞれ平安時代の礎石建物が確認されており、古代後半から中世にかけての山内の主要な堂舎があった箇所といえる。本谷地区より標高の高い中腹域には「西院谷」と呼ばれる近世の坊跡が広がっており、その中に中宮跡が含まれている。ここでは中世の遺物も採取されており、その起源は中世に遡るものと推定されている。龍門神社のある下宮地区から山頂に至る登拝道はこの西院谷を通過するルートである。山頂域には現在も龍門神社上宮があるが、花崗岩の巨岩で構成される山頂域では石の裂け目や東儀を中心とした場所で、多量の土器とともに奈良三彩や皇朝銭、経筒片、銅製の籠鏡、仏具などが出土し、山中祭祀の中心的な遺跡であったと理解されている。山の東側では山頂直下から中腹にかけて「東院谷」と呼ばれる近世の坊跡が展開している。崖主坊はここ東院谷に位置しており、近世に於いては山中の宗教施設としては中心的な位置を占めている。ここからは8世紀前半以降の古代の遺物、龍泉系青磁をはじめとする中世の輸入陶磁器などが採取されており、古代以来継続して使用されてきた遺跡と理解される。また、その南東斜面には花崗岩の巨岩で構成される「大南窟」など修験道で利用されてきた窟があり、山中での行場として重要な位置を占めている。窟周辺では奈良時代の須恵器や経筒片などが採取され、ここも古代以来の祭祀の場として利用されていたと理解される。この他、山頂から約1.2kmの南西側にある愛媛山頂(標高442m)には龍門神社が管理する愛媛神社がある。近世地誌には宝満山山頂の「大岳」に対しての「小岳」としており、宝満山山伏が奉仕していたことから本山と一体的な管理がなされていた地区である。

遺跡の時間的な推移

宝満山は旧石器、縄文時代を除けば、現状では遺物の存在から7世紀後半頃から継続的な利用が始まったとみられる。7世紀後半から8世紀前半の遺物が見られるのは山裾の内山の下宮地区、中腹にある幸野系祀遺跡、上宮直下の東院谷地区であり、山岳に分け入って祭祀をおこなった初期の段階で山中の祭祀場と山裾の拠点施設というような関係が成立していた可能性がある。下宮地区では8世紀中頃に以降には神籠師式軒瓦の存在から、規模は不明ながらも堂舎の建立がなされた可能性が指摘され、史料に見られる「龍門山寺」の成立を示唆するものである。この時期には2、6、30、34次調査地点や東側にある大南窟などの山裾から中腹にかけての小規模な独立峰の頂上や後に窟として利用される巨石周辺で須恵器の坏、蓋が発見されており、祭祀遺跡とされた地点以外でも、山中での小規模な祭祀がおこなわれていた可能性を示している。そのうち本谷地区にある34次調査地点では10世紀頃に三間四方の礎石建物が成立し、これが最澄登願の六所止塔に比定されている。この場所は西院谷にある中宮跡と山頂を仰ぎ、北側には遙か玄界灘が展望される位置にある。古代前半期には愛媛山頂周辺でも遺物が散見され、一体的な利用が始まっていたとみられる。また、現在の龍門神社から山頂に至る登拝道周辺で須恵器が散見されることから、山頂への登山ルートはこの段階で下地ができていたものと推察される。

をする。以前は10月9日夜に、拝殿正面、末社等に至る分まで(10本)つくり、10日早朝にお注連あげをし、10日夜宮座を行なったが、現在は、10日に近い日曜日(1日)かけて注連縄を掛い、その日の夜に直会をし、10日早朝にあげる。特別な儀礼は伝えられていない。

平成元年2月の木村藤策(明治43年生まれ)への聞き取りによると、宮座は、以前は男子のみ羽織袴の正装で参加。当番の家に神職を招いて祝詞を上げてもらう。神事には他の組は参加しないが、直会には参加した。料理は当番の2軒の家で作った。という。

(森弘子)

【参考文献】

- 九州国立博物館『トピック展示 祈りの山宝満山』2009 九州国立博物館
太宰府市史編集委員会『太宰府市史 建築・美術工芸資料編』1998 太宰府市
竹村憲『山の秘密』『九州日報』1909(のち松岡実校『宝満山伏の峰入り』『まつり』9号)
中野輔能編『筑前国宝満山信仰史の研究』1980 太宰府天満宮文化研究所
福井敦彦『神道学者としての松下見林-その神社研究をめぐって-』『神道史研究』第35巻第3号
1987
森弘子『宝満山歴史散歩』1975 葦書房
森弘子『宝満山歴史散歩』2000 葦書房
森弘子『宝満山の環境歴史学的研究』2008 (財)太宰府顕彰会

第3章 考察編

第1節 遺跡と遺物から見た宝満山(遺跡分布と時代別の変遷)

遺跡の面的状況

宝満山の遺跡としての構成は、おおまかに垂直方向では山頂域、中腹域、山裾域に、平面的な展開としては太宰府市側の西側と筑紫野市側の東側とに分かれる。西側の山裾における主要な遺跡の分布は、龍門神社境内にある下宮地区、さらにその南西にある大門地区、中腹域にある本谷地区が挙げられる。下宮地区では宝満山遺跡第37次調査で、大門地区では第42次調査で、本谷地区では第34次調査でそれぞれ平安時代の礎石建物が確認されており、古代後半から中世にかけての山内の主要な堂舎があった箇所といえる。本谷地区より標高の高い中腹域には「西院谷」と呼ばれる近世の坊跡が広がっており、その中に中宮跡が含まれている。ここでは中世の遺物も採取されており、その起源は中世に遡るものと推定されている。龍門神社のある下宮地区から山頂に至る登拝道はこの西院谷を通過するルートである。山頂域には現在も龍門神社上宮があるが、花崗岩の巨岩で構成される山頂域では石の裂け目や東崖を中心とした場所で、多量の土器とともに奈良三彩や皇朝鏡、経筒片、銅製の儀鏡、仏具などが出土し、山中祭祀の中心的な遺跡であったと理解されている。山の東側では山頂直下から中腹にかけて「東院谷」と呼ばれる近世の坊跡が展開している。座主坊はここ東院谷に位置しており、近世に於いては山中の宗教施設としては中心的な位置を占めている。ここからは8世紀前半以降の古代の遺物、龍泉系青磁をはじめとする中世の輸入陶磁器などが採取されており、古代以来継続して使用されてきた遺跡と理解される。また、その南東斜面には花崗岩の巨岩で構成される「大南窟」など修験道で利用されてきた窟があり、山中での行場として重要な位置を占めている。窟周辺では奈良時代の須恵器や経筒片などが採取され、ここも古代以来の祭祀の場として利用されていたと理解される。その他、山頂から約1.2kmの南西側にある愛嶽山頂(標高442m)には龍門神社が管理する愛嶽神社がある。近世地誌には宝満山山頂の「大岳」に対しての「小岳」としており、宝満山山伏が奉仕していたことから本山と一体的な管理がなされていた地区である。

遺跡の時間的な推移

宝満山は旧石器、縄文時代を除けば、現状では遺物の存在から7世紀後半頃から継続的な利用が始まったとみられる。7世紀後半頃から8世紀前半の遺物が見られるのは山裾の内山の下宮地区、中腹にある辛野祭祀遺跡、上宮直下の東院谷地区であり、山岳に分け入って祭祀をおこなった初期の段階で山中の祭祀場と山裾の拠点施設というような関係が成立していた可能性がある。下宮地区では8世紀中頃に降には湧鱈館式軒瓦の存在から、規模は不明ながらも堂舎の建立がなされた可能性が指摘され、史料に見られる「龍門山寺」の成立を示唆するものである。この時期には2、6、30、34次調査地点や東側にある大南窟などの山裾から中腹にかけての小規模な独立峰の頂上や崖に窟として利用される巨石周辺で須恵器の環、蓋が発見されており、祭祀遺跡とされた地点以外でも、山中での小規模な祭祀がおこなわれていた可能性を示している。そのうち本谷地区にある34次調査地点では10世紀頃に三間四方の礎石建物が成立し、これが最澄発願の六所空塔に比定されている。この場所は西院谷にある中宮跡と山頂を仰ぎ、北東には遙か玄界灘が展望される位置にある。古代前半期には愛嶽山頂周辺でも遺物が散見され、一体的な利用が始まっていたとみられる。また、現在の龍門神社から山頂に至る登拝道周辺で須恵器が散見されることから、山頂への登山ルートはこの段階で下地ができていたものと推察される。

古代末から中世前期に至ると、下宮地区、南谷地区、西院谷地区、山頂地区、東院谷地区と満遍なく遺跡が展開し、東の筑紫野市側でも山麓から中腹城にある本道寺地区においても石垣を伴う造成群が新たに形成されている。近世の坊跡である西院谷地区と東院谷地区においても当該時期の遺物が見られ、近世遺構の下に古い時期の坊に関わる遺構が存在する可能性が考えられる。西側の北谷地区、南谷地区、内山の下宮地区、大門地区などにおいては壇状の造成と尾根や谷の最高所に礎石建物が配置され、南谷地区においては「中堂」跡の推定地もあることから、各地区に「谷々の本堂」ともいうべき施設が存在した状況が見られ、遺跡としては地区ごとにある程度の独立性を保持していた可能性が指摘される。しかしながら内山の37次、42次調査で確認された礎石建物は、当該時期の九州を代表する寺院の中心的な堂舎と見なされ、寺務機能の中核は現在龍門神社のある下宮地区周辺にあったと考えるべきであろう。この下宮のある場所は北西に宝満A経塚、南西に宝満B経塚、北西に「キョウキヤマ」の地名が残されており、12世紀初頭前後の遺跡の急激な拡大期には経塚を取り巻くような状況があったようである。鎌倉時代になると壇状の造成の上に展開する無数の掘立柱建物群の中には、陶磁器の一括埋納遺構や鍛冶炉などを伴うなど、山内での活発な経済活動を示唆する様相を示し、山内に都市的な場をつくりだしていた。

中世も14世紀中頃を過ぎると、遺跡の展開は急激に退潮し、下宮地区から山頂に至る尾根筋の3次調査地点では、尾根を断ち切る堀切のような施設が構築され、山中が要害化していた様相が看取される。北谷地区の山側にある21次調査地点（内山辛野遺跡）では、建物が焼失した後に墓が形成された痕跡も見つかっており、坊舎が荒廃していた様子がうかがえる。

近世は西院谷地区、東院谷地区において良好に宝満二十五坊に関わる坊跡が残されている。中宮跡にも当該時期の石組みなどが残され、各地区において肥前系磁器や陶器類が多量に見つかっている。石段で整備された下宮から山の西斜面を上る登拝道のほか、各地区を連絡する通路も発達し、東院谷地区では里に当たる本道寺や大石に下る道として大谷尾根道などが利用されていたようで、山の東側への荷揚げは専らこのルートが利用されたようである。近世の遺跡は絵図などとの比較検討により、良好に残されていることが判る。

明治時代以降は山中での居住は基本的になくなり、宝満二十五坊が相伝してきた山の聖域は、龍門神社と国（現在は林野庁管轄）が引き継ぐこととなった。中宮は遺跡となり、下宮が龍門神社、山頂に上宮社殿が置かれる形で、愛嶽山には龍門神社が管理する愛嶽神社があり、宝満山頂の北東にある仏頂山頂には、山の開山伝承を持つ心連上人を祀る石祠があり、信仰の形が現在に引き継がれている。

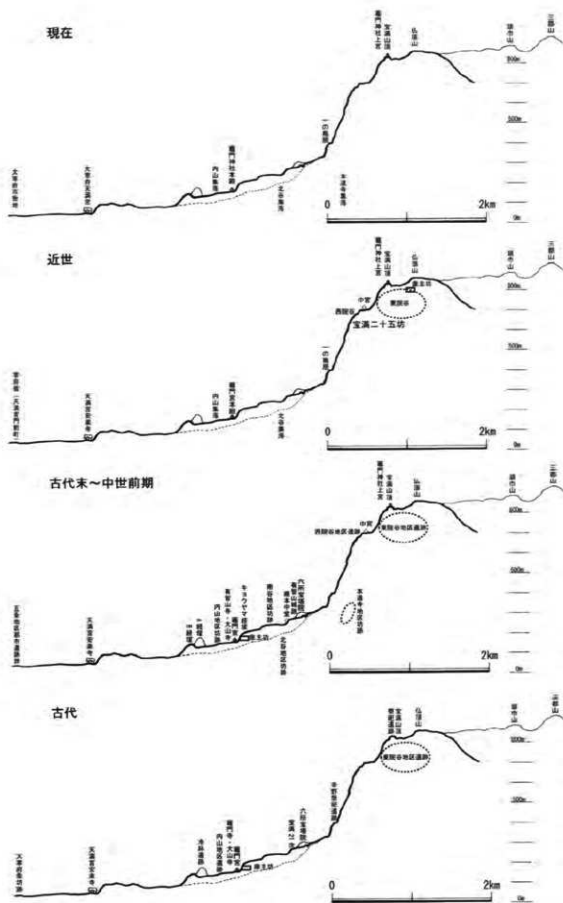


図4 遺跡としての宝満山の時間的変遷

第2節 自然環境と宝満山

1 御笠の自然・昔の姿

宝満山は、福岡都市圏に位置しながら、県内でも有数の自然植生に覆われた山である。四季折々に山中を歩くと、季節ごとに感動的な風景に触れることができる。このような自然景観が完成したのはどの時代からと考えられるか。昔の自然の記録は文字として残されたものは少なく、僅かに江戸後期の絵画が残されているのみであることから、推測の域は出ないが振り返ってみることにする。

宝満山（龍門山）が歴史に登場するのは8世紀頃からである。この頃の山頂付近の植生は原自然の状態に近かったと思われるが、山麓や山中の有用な樹木類は、この時代前後に盛んに建築が行われた大宰府政庁や寺院などの巨大な建築物にかなり利用されていたと考えられる。

大宰府政庁が設けられた時代、福岡平野南部はすでに里地・里山化されていた。西暦664年に水城堤が造られた頃、すでに付近の山はシイノキやアラカシなどの若木が繁る里山であった。水城堤の基礎部分には、これらの若木の葉の付いた枝が敷き詰められている。また、この時代は牛頭山の山麓から続く丘陵部は、西日本最大の須恵器の生産基地であった。現在までに約600ヶ所の窯跡が出土している。付近一帯は須恵器を焼くための燃料供給基地であり、アカマツを含む雑木林となっていた。福岡平野南部の景観は、平野部には水田が広がり、丘陵部～山麓部は畑や薪炭林用の雑木林が広がる。また、家の屋根材にするススキ草原が広がる、典型的な里地・里山景観がすでに成立していたと考えられる。このように想像すると、宝満山は建築用材や薪を供給するための山になっていたと考えても不思議ではない。

中世の龍門山は修験道の道場として栄え、山中には370の坊があったとされている。江戸期にはいると、坊は25坊と少くなるが、この時代は家族も同時に住んでおり、山中全体では少なくとも数百人の山伏や、それに関する人達が山麓から山中にかけて住んでいたことになる。これだけの人数が生活す

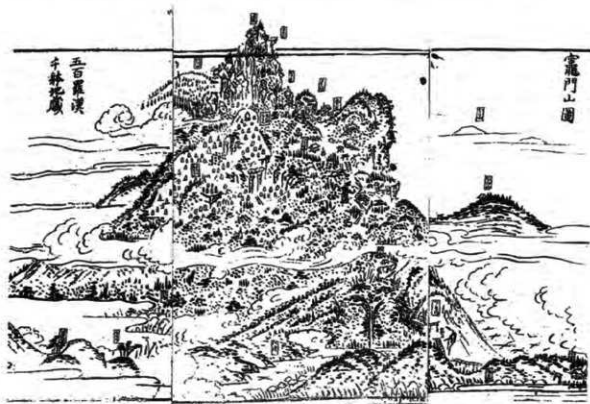


図1 『筑前名所図会』の龍門山園（福岡市博物館所蔵）

るためには、どの位の面積の里山・雑木林や茅場が必要と考えるか。19世紀初頭の1820年頃に著述された、奥村玉蘭著『筑前名所図会』中の龍門山園から推察すると、誇張はあるものの岩峰を中心に描かれており、全山がほぼ里山の景観であったことが判る。山中で生きる修験者の生活を維持するためには、里山の環境は必修であったと考えられる。ただし現在も山中に点在するスギやモミの巨木・巨木等は、神の住み処として神祭りの対象であったと考えられ、当時から保護されていたと思われる。

また、江戸時代中期に定められた『龍門山水帳』にある取り決めて、一定の樹木の保護・管理が行われてきたと思われる。特に寺社周辺は自然林的景観であったと思われる。特に、水廻りによれば6種の樹木、松・榎・杉・桜・椎・タブ（タブ）は厳しく保護されてきた。それぞれの樹木は次の通りと思われる。

松＝アカマツ。建築用材に利用。

榎＝トドマツ→亜高山帯の植物で北海道にしか自生しない。モミを指していると思われる。

杉＝スギ。建築用材に利用。

桜＝サクラ→ヤマザクラと思われる。建築用材に利用。

椎＝シイノキ。シイにはコジイとスダジイがあるが一定以上の標高ではコジイが中心である。

タブ＝タブノキ。照葉樹林帯の比較的上部まで生育する。葉は線香の原料とした。

参考資料として、『福岡県地理全誌』（明治15年（1882年）。以下『地理全誌』）の北谷村の項を見ると、戸数62戸、人口314人、牛63頭、田畑31町、山林272町（内訳：官林181町、草山77町、元預山14町）とある。明治初期に、宝満山麓の台地上での生活でこれだけの面積が必要であったことから考えると、中世から江戸期にかけて宝満山中で日常的に生活するためには、少なくともこの数倍の面積が必要ではなかったらうか。

『地理全誌』内山村の記載によると、龍門山は「瀟山尽く岩石にして、その形状良工の削成せるが如し」とある。また、山中にヤマザクラ、カエデが多く、霜のあとでは紅錦を張るようである。ツツジが数種類あり、カンアオイやヤマブキソウなども生えている。その他異木・異草が多く枚挙すべからず、と記されている。また、仏頂山の項には、この山には岩石や樹木はなく、茅茨（カヤとイバラ）のみが生えていると記載されている。但し、北谷村の項では「雑木草立なり」と記載されている。これらの記載から判ることは、仏頂山の山頂から斜面上部にかけての植生状況は、榛茅（1m前後の低木が生育し、薪炭利用をしていた植生）の状態であったと判断できる。また、『地理全誌』の記載に「龍門山は春は桜、秋は紅葉が綺麗な山である」とある。

このような植生状況は1950年代まで継続していた。この時代、秋から冬にかけて登山すると、仏頂山から三郎山～砥石山の尾根筋では、良く炭焼の人達に出会っていた。宇美町には炭焼という地名があるが、この集落の人や、筑紫野市柚須原の人達と尾根筋で出会っていた。また、尾根筋の植生は樹高2～3m程度の落葉樹が中心で、典型的な低木林であった。これらの樹木を切り出して、谷筋で炭焼が行われていた。三郎山の筑紫野市側斜面は、かつては樹高3～5m程度のアカガシやコナラ、リュウブなどの広大な雑木林であった。筑紫野市柚須原上部の、三郎山への登山道があるが、この谷筋には巨大な炭焼窯の跡が点在している。

2 宝満山麓及び周辺の山々の植生状況

筑紫野市大石上部の大行事原は、1970年代までは原野として残されていたが、その後クヌギ・コナラの植林が行われた。近年伐期が来たため伐採されたが、切り株からの萌芽が芽生え再び成長を始めている。新緑の頃は林床の至る所でシュンラが咲き、チョウが飛び交っており、秋には一斉に落葉して

幹や枝だけとなり明るい林となる。柚須原、九重ヶ原など、○○原という地名は各所に点在しており、かつて集落付近にあった草原などの原野を呼んでいたものである。明治時代の統計資料から、国土の12～13%は草原・原野であったことが判る。宝満山麓の集落に近い雑木林にはアカマツ林も多かった。アカマツ林は尾根筋の比較的貧栄養な土壌で生育し、低木層や草本層は貧弱で、燃料用として松葉掻きが行われていた。

宝満山の南にある太宰府市の高嶺山は典型的な里山の姿を呈している。かつては山全体が里山利用の対象であった。山頂付近はススキを中心とした草原・原野が広がり、茅場・牧草地として利用され、山麓から尾根筋にかけては薪林地で、薪炭用材の採取場として利用されていた。近年までアカマツ林が多かった。高木層はアカマツ、亜高木層以下にコナラ、リョウブ、ネジキ、ハゼノキ、カラズザンショウ、ヒサカキ、ネズミモチ、草本層はウラジロヤコソダに覆われていた。スギ・ヒノキの植林が始まったのは40～50年前からである。

3 大行事～大行司と草原

筑紫野市大石の高木神社の鳥居には大行事という額が掛かっているが、これは上部の原野の中に祭ってあった神を指すものと思われる。『地理全誌』大石村の項に大行事原の記載がある。「一の坂の下にある廣野なり。昔松尾大行事社ありて松尾寺という坊もありしが、野火にて焼けし故に、社は大石村に移し松尾寺の本尊及び仏体の焼け残りたるは皆埋めて、塚を築けり。この塚、今も大石村にありて、十三塚と言ふ。」と記載されている。高嶺山の山頂にはしめ縄が巻かれた大行事の石碑が建っている。「大行事」の石碑と地名は旧御笠郡を始め、近隣の各地に点在している。付近では龍門神社の境内、筑紫野市柚須原、本道寺の大山祇神社境内や参道、天山高木神社の鳥居や石灯籠、四王寺山麓の太宰府市民の森の山中に2ヶ所、大野城市乙金の宝満宮参道、同市平野山の浄水場付近、筑紫野市平等寺の大行事公園など、近隣で確認出来ているものだけでも15ヶ所に達する。いずれも近代まではススキを中心とした草原・原野であった場所で、日常的に茅場・秣場として利用されていた。茅葺きの屋根材、牛馬の飼料、堆肥作りなど毎日の生活に欠かせないものであった。

「大行事」は、寺院における法会の際に、準備、法式儀則など万般の指揮をとる僧のことを言う仏語で、大行事神も当初から仏教権導の善神という意味があったと思われるが、山王一実神道ではより具体的に、大行事権現を、猿田彦神あるいは皇尊産霊尊（たかみむすびのみこと）に習合させて、山王権現の惣役見と言ひ、山王権現勧請の場所には必ずこの神を奉斎すると説いている（厳神鈔）。県内では彦山がその神領内に48ヶ所の大行事社を置いたというのが顕著な事例であるが、太宰府市、筑紫野市などを始め、筑後～朝倉地区に大行事と刻まれた石塔が50数方に亘り散在しており、作神あるいは牛馬神、疫神などの信仰を維持している。いずれも天台系系社による山王信仰宣布の一翼を担っていたと思われる。

〔高川昌彦「宝満山周辺の植生史と里地・里山の利用の姿―高嶺山頂・大行事とー」2011年『紀要』筑紫女学院大学・筑紫女学院大学短期大学より抜粋〕

【参考文献】

- 貝原益軒『筑前国統風土記』（1703年）
- 奥村玉蘭『筑前名所図会』（1810年）
- 福岡縣『福岡縣地理全誌』（1882年）
- 西日本新聞社『福岡県百科事典』（1982年）
- 高川昌彦『宝満山の植生史』（2009年）日本生物教育学会九州支部研究発表資料

第3節 宝満山の空間構成

（地誌・絵画資料等から見た寺社境内、神社社地と参拝道）

1 歴史的空間構成

歴史的な信仰の山としての宝満山についてその空間構成を検証する文字、絵画資料には次のようなものが挙げられよう。

絵画資料

『宝満山絵図』（福岡県立美術館蔵。東西2葉あり。）元和6年（1620）から慶安3年（1650）頃成立
『龍門山図』奥村玉蘭 文政5年（1822）

文献資料

『龍門山旧記』乾坤 延宝8年（1680）
『筑前国統風土記』貝原益軒 宝永6年（1709）
『筑前国統風土記附録』加藤一純 元禄16年（1703）
『筑前国統風土記拾遺』青柳惟信 文政12年（1829）以降

(1) 山の領域観

宝満山と人との関わりは考古学的には7世紀後半頃からのものと考えられ、爾来1300年の間に山の空間構成は時代の趨勢とともに変化してきた。明治初期に神社神道による管理に帰する以前の宝満山の姿を文献から概観してみたい。まずは当地域における山の位置付けであるが、『筑前国統風土記』によれば「龍門山 此山は国の中央にありて、いと高く、造化神秀のあつまる所にして、神聖のとまります地なればにや、筑紫の国の惣鎮守と称す。凡国土には鎮守となれる山あり。」とされ、まさに当地域を代表する霊山として位置付けられている。

そして山の領域観であるが、『筑前国統風土記附録』によれば「龍門山 此山は御笠郡の北にありて内山、北谷、原、大石、本道寺、香園、柚須原へて七村に亘れり」とされ、明治初期に編纂された『福岡県地理全誌』によれば「内山村（中略）龍門山 村の東にあり。南は本道寺、大石、西は此村、及び北谷、四村に亘れり。」とされ、現在の太宰府市大字内山、北谷、筑紫野市大字原、大石、本道寺、柚須原、香園あたりがその範囲として認識されていた。

また『筑前国統風土記』によれば「小岳社 或愛敬の字を用ゆ。龍門山よりひくして小なれば、大岳に対して、小岳と云ふなるべし。大石村の上なる山也。（中略）宝満山の財行坊を以て社僧とす。故に宝満より是を預れり。今も此神をたふとひて、此山に参詣の人たへす。」「佛頂山 龍門山の次、北にある山也。龍門山より高し。かまとの奥の院と称す。開山心蓮上人が墓、山のいたたきにあり。」とされ、宝満山頂の南北にある愛嶺山、仏頂山の2峰まで宝満山の信仰に関連する領域であった。

その中でさらに信仰に深く係わる領域としては、江戸中期の『龍門山旧記』では「惣内山。北谷、南谷、中堂を山の頂まで龍門山と申也。中古山下の衆徒退転して、或は北谷、内山、原山三ヶ郷村と成。」と、中世以前の旧跡の情報は太宰府市側の山の西斜面に重きが置かれている。しかし、江戸後期の『筑前国統風土記拾遺』では「南谷、北谷に坊舎の跡あり。南谷は有智山村に属し、北谷は北谷村に属す。其中間の高き所に中堂原といふ。地形龍門山を負て西に向へり。根本中堂のありし址とて大きな礎石あり。草堂に薬師十二神像を安置す。」と記す一方で、「山徒漸く天台教を崇む。台徒年を逐て繁昌し有智山所に居あまりて四所の伽藍にも会集せり。四所の伽藍と云は、東伽藍は堤谷に跡あり。油原原本道寺村より登る道なり。西伽藍は休堂の下一町許内山村の方にあり。南伽藍は大石村大行寺原より登る

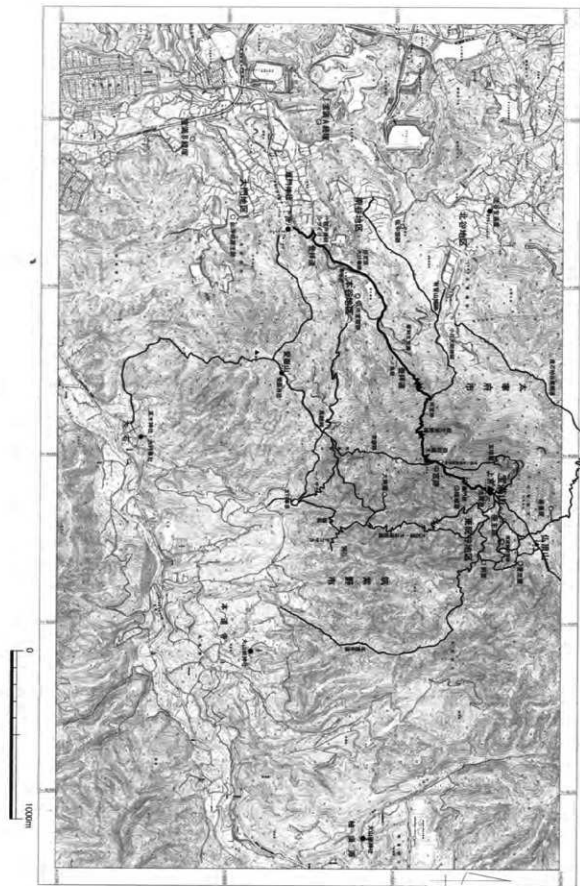


図1 宝満山の登拝ルートと旧跡

道なり。北伽藍は佛頂山の良化生童子という行場在。東の谷を超て穂波郡山口村の内形谷より登る道なり。」とし、山中の「四所の伽藍」が聖域の領域観を象徴するものとして描かれている。この領域に近い範囲は、宝満二十五坊中の井本坊が伝えている『龍門山水帳』（井本文書）に添付された図に具体的に見ることが出来る（後述）。

(2) 山中の近世二十五坊

「宝満山絵図」（福岡県立美術館所蔵）は元和6年（1620）から慶安3年（1650）頃に成立したと考えられる絵画資料で、描かれた山中の図としては最古のものであり、坊全体の名称を示す初期の情報として重要である。図は西の図と東の図2枚から成り、山林や岩、谷などが着色されている。注記された文字の内容は地名、堂舎、窟、井泉の名、祀られた神仏名、道、坂の名称、名所と坊名である。これによれば江戸前期の段階において西院谷には財徳坊、亀石坊、伊多坊、奥ノ坊、岩本坊、財藏坊、大谷坊、福藏坊、経藏坊の9坊が描かれ、東院谷には平石坊、南坊、福泉坊、東院坊、富倉坊、浄徳坊、浄善坊、道場坊、大正坊、中谷坊、修藏坊、鳥居坊、財行坊、尾崎坊、井本坊、松林坊、フクシヤウ坊の16坊が描かれている。この図には、坊をつなぐ小径が記されていることから、西院谷地区については平成20年度におこなった測量調査成果（第38次調査）との対照が可能となる。

各坊は調査によって抽出された石垣などで構築された平坦面と残された通路の関係性から、「宝満山絵図」と調査図を対比した場合、ほぼ相似した分布状況として理解される。遺跡は当然、残された最後の形状であり、「宝満山絵図」成立からの改変があるものと思われるが、絵図に示された相互の位置関係に近い場所に、今回抽出された各小群の中心的な広めの面が存在する形となっている。近年、山中の段造成と近世墓を悉皆調査した成果を『旧宝満坊中墓地名石碑根帳』などの台帳と比較してより精緻な坊位置の考察がなされている（岡寺2011年）。坊は時代の趨勢により幕末までには改廃、変遷があるものの、絵画資料からは江戸前期にはすでに宝満二十五坊と霊場たる各信仰対象の位置は確定的な状況で

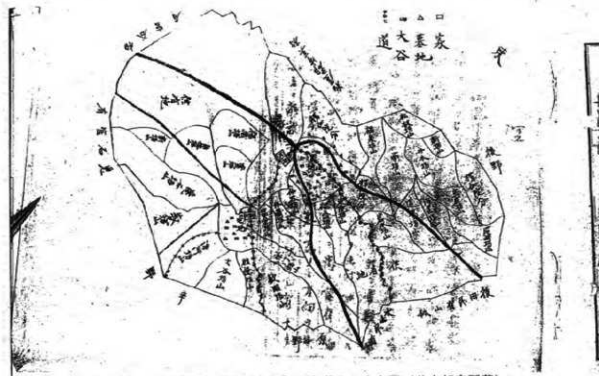


図2 井本文書『龍門山水帳』の宝満山の山内図（井本邦彦所蔵）

表 1-1 「龍門山水帳」における二十五坊の山内分有状況 (森 2008 より)

宝満宮各坊所有山林一覧

坊名	所有山名	山林の範囲	備考
楞伽院	楞伽院下寺内	東・良 往還切 南 有地限 巽 南坊堺道切 西 仏石道切 押出水切	平石坊楞伽院と成
	楞伽院寺内	東 獅子ノ宿道より上八大童子ノ尾切 南 福泉坊・浄行坊堺大巡道切(天明五年五月龍然院・放徳院・経蔵坊・福泉坊・立合にて堺改置也) 北・良 塔ノ尾結場道切 西 乾埵 寶石往還切	平石坊事
	楞伽院山	東 結場道切 南 大蘇尾切 北 釜蓋ノ尾より下丸山切 西 立岩通り	平石坊分
	楞伽院山	東 観音大尾鳥帽子岩之尾切 南 往還切 西 獅子ノ童子より伊屋ノ谷川切 北 八大童子より獅子童子迄道切	浄行坊分買取也
	楞伽院山	東 夫婦石之西之尾 南 大窟迄 北・西 往還迄	鳥之水窟
	楞伽院山	東 傍止道切 南 叶松 西 申子ノ木谷迄 北 鳥居坊堺廻場ノ谷 良井本坊堺道分	平石坊分
	楞伽院預山	東 釜蓋 南 丸山 西 大谷 北 傍止切	平石坊分也
修蔵坊	修蔵坊寺内	東 往還切 巽 同 南 往還虚空蔵道切 坤 冠石道切 西 後戸道切 北 南之坊堺破石富倉堺破石下小谷切 大岩岳切 良 富倉坊地岸切	
	修蔵坊預山	東 毘沙門ノ尾下小谷切大谷迄 西 ワクウ 石尾ノ下 南 大谷迄 北 往還切	
富倉坊	富倉坊寺内	東 往還切 巽 同 南 有地限 坤 修蔵坊堺大岩岳切 西 小谷切 乾 南ノ坊堺破石限 北 勸明坊墳所ノ下岸切 良 同	福寿坊地穴渡
	富倉坊山	東 行者堂之谷わくとう石之尾迄 南 窟迄 西 谷切 北 山道切	伊多坊預山、 新寺二付山中より 配当分也

表 1-2 「龍門山水帳」における二十五坊の山内分有状況

坊名	所有山名	山林の範囲	備考
勸明坊	勸明坊寺内	東・巽 往還 南 有地限 西 有地 坤乾 同 北 大石ノ上切南坊道切	墳地大聖坊事也
	勸明坊寺内	東 浄善坊堺尾崎通 良より坤向 南・坤 大溝切 西 東院坊堺ニツ石ノ間切 北 薬師堂土手切	大聖坊改名
	勸明坊山	東 修蔵坊堺二十番神道切 南 往還切 北 往還 西 中院ノ上谷切	大聖坊分
南之坊	南之坊寺内	東 勸明坊ノ堺大石ノ道切薬師堂岸往還切 南 岸ノ下有地限 坤 尾上ノ 北 破石九大寺ノ水流後戸道切 西 破石ノ小谷出水迄平石坊地岸切 東 道切 良 平石坊下敷道切	
	南之坊山	東 大尾切岩立附行坊堺 南 井之本坊堺出相之尾尻 西 遠見之尾切 北 炭床道切	
福泉坊	福泉坊寺内	東 経蔵坊堺 良 水流 巽 道切 南 谷切 西 薬師堂岸切 乾 往還切 北 大巡道切 経蔵坊堺小尾有	
	福泉坊山	東 松林坊山堺重石ノ大尾切 南 炭床道切 西 観音大尾切 北 塔ノ尾道切	
経蔵坊	経蔵坊寺内	東・良・巽 道切 南 往還切 西 福泉坊堺大巡道ノ小尾下水口屋敷之 立石屋敷下道切 北 大巡道切	浄行坊屋敷山共二 軒ニ成ル
東院坊	東院坊寺内	東 勸明坊堺 良 ニツ石ノ間切 南 土手切 巽金ノ手 西 乾坤道切 北 薬師堂土手切	
	東院坊山	東 往還道切 良・巽共に 南 岩蔵迄 西 首塚ノ大尾 北 首塚迄	
浄善坊	浄善坊寺内	東 往還切 良 谷切 巽 古道切 南 道場坊境岸中段迄(中段崩候ニ付以 後大口ヨリ西ノ方四辻ノ下迄) 西 勸明坊堺 坤 西堺(勸明坊・仲谷坊・道 場坊・浄善坊) 北 薬師堂土手坤ノ角ヨリ下	
	浄善坊山	東 遠見ノ尾より鳥居坊山ノ堺谷迄 西 観ノ窟東谷切 北 炭床道切 南 申子ノ木谷頭迄	

表 1-3 「龍門山水帳」における二十五坊の山内分有状況

坊名	所有山名	山林の範囲	備考
道場坊	道場坊寺内	東 往還切 南 往還切 坤 財行坊塙所ノ岸切 西 大溝切 乾 四塚切 北 浄善坊ノ塙中段ノ下岸切(中段殿候ニ付以後大口迄西ノ方四廿ノ下迄也)	
	道場坊山	東 龜ノ窟東谷切 南 尾尻切 西 往還より鳥居坊塙入角水流より谷二大石有り夫より坤新坊山塙川切下大瀧迄 北 往還切	
鳥居坊	鳥居坊寺内	東 谷切 南 道場坊山ノ塙入角水流ヨリ下大石切 西 財行坊塙谷切 南 岸切 西北 往還切	
	鳥居坊山	東 井本坊塙尾切 南 鞠ノ場ノ谷切 西 尻ナシ尾ノ畑切 北 遠見ノ尾迄	
新坊	新坊寺内	東 谷切 南 尾崎坊塙岩瀧切 西 岸切 北 往還切 有地限り	財行坊名改
	新坊寺内	東 飯光坊塙立石 南 道切 西 古道切 北 有地限り	財行坊地也
	新坊山	東 道場山塙川切 南 大立石切 西 尾崎坊山塙谷切 北 鳥居坊塙谷切	財行坊分也
	預山	東 谷切 南 出相ノ尾尻迄 西 尾崎坊塙谷切 北 道場坊山ノ尾下	由子ノ木原、 財行坊分也
	新坊山	東 今室瀧山道切 南 往還切 西 南ノ坊山塙立岩より出相ノ尾迄 北 炭床道切	財行坊分
尾崎坊	尾崎坊寺内	東 新坊山塙谷切 南 柱松一塚道切 西 谷切 北 有地限り	
	尾崎坊寺内	東 出水大岩瀧切 南 有地火立塙 西 大尾岩立切 北 大岩切	
	尾崎坊預山	東 新坊山塙谷切 南 出相ノ尾尻迄 西 欽明坊塙一塚ノ尾 北 一塚ノ山道切	伽藍北平

表 1-4 「龍門山水帳」における二十五坊の山内分有状況

坊名	所有山名	山林の範囲	備考
福寿坊	福寿坊寺内	東 浄行坊山塙谷切(東有地限り 南岸半切 西 道切 北峯之上尾切 右實地也) 南 松林坊塙岸半切 西 同破石切 北 浄行坊塙小谷切	買取井本坊寺内也
	福寿坊寺内	東 尾切 南 山道切 北 火立場下岸切 西 平石坊塙大岩切 下財行坊地之上岸切	大谷坊へ荒渡候故 大谷坊寺内ト成ル
福寿坊預山	東 首梁ノ大尾往松峠切 南 岩倉ノ西ノ尾切 北 立石切 西 谷切		
松林坊	松林坊寺内	東 伊屋ノ谷切 南 井本坊大石切 西 岸切 北 往還切	
	松林坊山	東 傍止切 南 炭床道切 西 福泉坊山ノ塙重石 北 塔ノ尾傍止切	
井之本坊	井之本坊寺内	東 大石 巽 往還切 南 往還切 西 往還切 北 有地限り	
	井本坊山	東 谷切 南 尾切 西 道切 北 遠見ノ尾峠切	
財徳坊	財徳坊山寺内	東 有地市坊塙窟切 南 伊多坊塙岸半石垣切 西 奥之坊大石ノ下通り城尾迄 北 出水ヨリ上道塙有地岸切	
	財徳坊山	東 往還切 南 水之手 西 谷切 北 山沖坊道切	
財徳坊山	東 城ノ尾より下出水杉谷ノ北ノ尾切 南 本谷 西 熊野ノ尾切 北 西院ノ道切	寺内下	
預山	東 熊野ノ尾尻ナシノ谷切 南 本谷切 北 西院道通 南 本谷迄		
市坊	市坊寺内	東・西 往還 北 財徳坊塙窟切	常道院分ニ成
伊多坊	伊多坊寺内	東・良 往還 南 龜石坊塙岸半 坤 奥坊道迄 西 奥之坊塙岩尾切 北 財徳坊塙岸半石垣切	梁門坊ト成

表 1-5 「龍門山水帳」における二十五坊の山内分有状況

坊名	所有山名	山林の範囲	備考
亀石坊	亀石坊寺内	東・南 往還 西 往還 北 柴門堺岸ノ半切 乾有地	
	亀石坊山	東 立石之尾末迄 西 牛ノ尾嶺根 南 中尾通 北 西ノ井道迄	
	亀石坊山	東・南・西 往還 北 財行坊山堺谷大石有	阿加之井ノ上
	預山	東 かひやこや床ノ尾より西ノ平 西 立石之尾尾尻迄	
岩本坊	岩本坊寺内	東 道切 南 有地下岸迄 西 大船道ヨリ上 北 有地限り	
	岩本坊山	頭巾石より西往還切 南 道切大曲り迄 東 頭巾石之東之大尾中尾尻迄 大曲りより 東尾切大谷迄	
	預山	南・西・北 往還切	
平石坊	平石坊寺内	東 福寿坊堺大岩切 南 金凝坊地上岸切 西 往還切 北 往還切	
金凝坊	金凝坊寺内	東 古道切 南 下岸半切 西 往還切 北 有地限り	上地ニ成り 後に座主坊ヨリ 亀石坊ニ壳渡ス
福蔵坊	福蔵坊寺内	東 往還切 南 山仲坊道切 西 大船道切 北 有地限り	平石坊地福蔵坊ニ 壳渡ス
	福蔵坊寺内	東 大谷坊堺有地 南・西 有地 北 往還切	
	福蔵坊山	東 立石之尾 北 床並往還切 西 大谷坊山堺谷切 南 龜石迄	
	預山	東 立岩之尾尻 西 木谷 北 龜石より下傍上切	山仲坊分
大谷坊	大谷坊寺内	東 福蔵坊堺谷切 南 尾尻切 西 浄行坊堺谷切 北 道切 良 福蔵坊下岸切	
	大谷坊預山	西 岩蔵之尾切床並迄 南 あいね岩 北 道切 東 道切	

表 1-6 「龍門山水帳」における二十五坊の山内分有状況

坊名	所有山名	山林の範囲	備考
浄行坊	浄行坊寺内	東 大谷坊堺谷切 南 大岩立切 西 往還切 北 阿	経蔵坊ト屋敷數ニ成ル
	浄行坊山	東 小悟道 西 立石尾切 北 道切 南 傍止迄	
寂光坊	寂光坊寺内	東 頭巾石切 南 床並道切 西 財行坊地堺立石切 北 山道切	東院坊地壳渡ス
	寂光坊寺内	東 谷切 南 財行坊堺普内坊地上岸切 西 谷切 北 山道切	山中坊寺内也
	寂光坊山	東 往還切 南 道切 西 谷切 北 山道切	山仲坊分
	寂光坊山	東 財徳坊地堺谷切 南 西ノ井ノ上道切 北 板橋横道 西 大尾切	山仲坊分
善内坊	善内坊寺内	東 板橋西ノ尾より離尾 西 谷切 南 大岩切 西 尾切 北 山中坊堺石垣有	福蔵坊下屋敷數にて 寂光坊ト成ル
	財行坊	東 道切 南 山仲坊堺山道切 西 牛ノ尾峠切 北 奥之坊堺石垣有	新坊ト成ル
奥之坊	財行坊墳処	東・北・西 往還切 南 龜石坊堺谷大石切	阿加之井ノ上
	奥之坊寺内	東・南 往還 西・北 有地限	新坊ト成ル
奥之坊	奥之坊寺内	東 大薄切 南 財行坊堺石垣有 西 大尾切 城ノ尾迄 北 財徳坊堺大石之下通切	
	奥之坊山	東 牛之尾 南 同尾屈限 西 杉谷之北尾 北 城之尾峠谷山迄	

高 600m あたりの太宰府市側の山林が第 1 種特別地域とされ、その他、愛嶽山や内山、大石、本道寺、柚須原の一部までが普通地域に包含されている。

内山辛野遺跡は平成 16 年 (2004) 1 月 30 日に太宰府市が指定した史跡で、太宰府市大字内山 5-4 の一部、大字北谷 905-235 の一部 3680 ㎡が対象地である。史跡は宝満山遺跡群の一角を占め、中世の庭園を含む遺跡であり、年代的、地理的環境から有智山城、有智山寺(内山寺)に関連するものと考えられ、地域の歴史を象徴的に示す内容を持つと言える。また、庭園遺構については鎌倉時代から室町時代初期に属し、国内においても同時期の発掘庭園遺構としては貴重である。



凡	
1	第 1 種特別地域
2	第 2 種特別地域
3	普通地域
4	景観形成地域
5	景観形成地域
6	景観形成地域
7	景観形成地域
8	景観形成地域
9	景観形成地域
10	景観形成地域
11	景観形成地域
12	景観形成地域
13	景観形成地域
14	景観形成地域
15	景観形成地域
16	景観形成地域
17	景観形成地域
18	景観形成地域
19	景観形成地域
20	景観形成地域
21	景観形成地域
22	景観形成地域
23	景観形成地域
24	景観形成地域
25	景観形成地域
26	景観形成地域
27	景観形成地域
28	景観形成地域
29	景観形成地域
30	景観形成地域
31	景観形成地域
32	景観形成地域
33	景観形成地域
34	景観形成地域
35	景観形成地域
36	景観形成地域
37	景観形成地域
38	景観形成地域
39	景観形成地域
40	景観形成地域
41	景観形成地域
42	景観形成地域
43	景観形成地域
44	景観形成地域
45	景観形成地域
46	景観形成地域
47	景観形成地域
48	景観形成地域
49	景観形成地域
50	景観形成地域
51	景観形成地域
52	景観形成地域
53	景観形成地域
54	景観形成地域
55	景観形成地域
56	景観形成地域
57	景観形成地域
58	景観形成地域
59	景観形成地域
60	景観形成地域
61	景観形成地域
62	景観形成地域
63	景観形成地域
64	景観形成地域
65	景観形成地域
66	景観形成地域
67	景観形成地域
68	景観形成地域
69	景観形成地域
70	景観形成地域
71	景観形成地域
72	景観形成地域
73	景観形成地域
74	景観形成地域
75	景観形成地域
76	景観形成地域
77	景観形成地域
78	景観形成地域
79	景観形成地域
80	景観形成地域
81	景観形成地域
82	景観形成地域
83	景観形成地域
84	景観形成地域
85	景観形成地域
86	景観形成地域
87	景観形成地域
88	景観形成地域
89	景観形成地域
90	景観形成地域
91	景観形成地域
92	景観形成地域
93	景観形成地域
94	景観形成地域
95	景観形成地域
96	景観形成地域
97	景観形成地域
98	景観形成地域
99	景観形成地域
100	景観形成地域

図 3 太宰府県立自然公園地図(福岡県作成。宝満山周辺箇所を抜粋)

第 4 節 古代信仰遺跡としての宝満山 —信仰の開始から展開へ—

1 古代九州の霊山

日本列島は四方海に囲まれ、その内側は多くの山岳とその裾部に広がる平野で構成されている。先史時代以来、列島に住みついた人々は、この自然環境から恵まれる資源に依存した生業形態を生み出してきた。これらの相関関係を整理してみると、つぎのような 3 類型に大別することができる。

- ① 山岳地域—山の民—狩猟・焼畑
- ② 平野地域—里の民—水稲農業
- ③ 海浜地域—海の民—漁業

これらの文化類型は、その不足部分を相互に補完する交流活動によって、全体的なバランスを維持してきた。このような観点は、いずれかが欠落する地域もあるものの、基本的に適用できる地域史の原点に据えることができよう。そしてそれぞれの生業が依拠する環境に根ざした自然崇拜が発生した。なかでも水稲農業が社会の主流となる弥生時代以降は農耕儀礼に淵源する祭祀が今日まで継承されている。農業作業に不可欠な水を与えてくれる湧水源として、山の信仰は水分神とも結びつく。また水神(＝龍神)としての神話に由来する豊玉姫を山中に祀る事例もみられる。さらに仏教や道教が伝来してくると、山は巫者や僧侶の修行の場ともなり、在来の山岳信仰に加えてこれらの教義が導入されて、のちの修験道の原則段階ともみられる新たな山岳信仰が形成されていった。

わが国における神道考古学を提唱された大場磐雄氏は、原始・古代の信仰の対象となった山岳(霊山)を、その山容から 2 大別されている(註 1)。

ひとつは里の集落に近い山で、大和の三輪山などに代表されるもので、古典に「神奈備山。(神が籠る山の意)とみえる霊山である。三輪山式の笠形の景観を呈し、これを背景として古社が鎮座する事例も少なくない。

もうひとつは高山大岳に属し、雲上高くにそびえるタイプである。これらのなかには当時噴火していた火山もあり、富士山(浅間山)・赤城山・鳥海山・阿蘇山などに代表される。山頂が円錐形・笠形を呈するコニーデ形火山に属するものが多い。大場氏は前者を「神奈備式霊山」、後者を「浅間式霊山」と称している。なかでも後者は洞窟などが生成されやすいところから、巫者や仏教徒が入山修行する事例が多かった。北部九州の著名な霊山は多くが後者に属する。(表 1)

古代の山岳崇拜は、特定の山だけが擧げられて信仰され、神社に発展し、さらには仏教と習合して宮寺(みやでら)に進化した事例もある。また国家的崇敬をうけて式内社『延喜式』神名帳記載官社に列せられた神社もある。

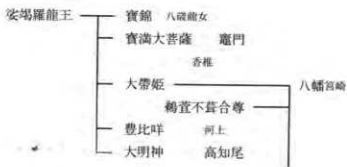
九州の霊山は『太宰管内志』に 110 余例が数えられ、山岳寺院の寺号や縁記にみえる開山者・中興者とその時期などについてまとめると別表のようである(表 1 参照)。しかし縁記の内容がすべて史実とはいえない。なかでも開山者とその時期についてみると、豊前・豊後では英彦山(古代は「彦山)・求善提山が継体天皇・飛來山が推古天皇・神角山が欽明天皇の時代など 6 世紀にさかのぼり、北魏や新羅・天竺などの外来僧を開山者とする。筑前・筑後では龍門山・高良山が 7 世紀、肥前では 8 世紀前半代で行基をあげる。肥後では 7～8 世紀で日羅があがり、この点では豊後の石仏なども共通する。日向・大隅・薩摩では 7 世紀とするが、霧島山では 6 世紀にさかのぼる。この 3 国では熊野系修験の山が多く、他宗教は入りにくい状況ではなかったかという指摘もある。

九州の霊山で最も有名な山は英彦山で、最盛時には「三千八百坊」あったといわれる。英彦山をはじめ北部九州の山々に考古学的調査が入るようになったのは 1960 年代以降のことで、以来今日では「山

とあって、いつのころからか三座神が祀られている。『龍門山旧記』にも、

「龍門之明神其由来ヲ奉尊ニ水海神ノ御女子玉依姫ト申。」

とある。また『八幡宇佐宮御託宣集』第2巻(註4)に掲載されている「或記云。安場羅龍王娘五人」の系図はつぎのようなものである。



また天平勝宝7年(755)の神託に、

「大帯姫者吾母。即安場羅龍王乃夫人也。龍門明神者吾妹。龍女被吾妹。是十一面觀音之變身也。」

と述べられている。この内容が神仏習合思想と校合されたものであることは容易に観察できるところである。中野幡能氏(註5)は龍門社と宇佐神宮の関係ができたのは高崎宮の遷座以降のことで、「宝満大菩薩」と称されるようになったのも平安時代末期からであろうと推測している。

一方、宝満山のような山容は、古くから仏教や修験道の徒が入山修行に適しているところから、はやくから神仏習合的傾向がみられる。豊前地域の彦山や求菩提山に關基伝承がのこされていることもその証となろう(註6)。宝満山でも天武天皇白鳳2年(674)に心蓮上人が入山修行した伝承が『龍門山旧記』に記されている。

「天武天皇ノ御宇心蓮上人常ニ總阿伽ノ水ヲ以テ山中ヲ修行ス。白鳳二年二月十日壬午辰ノ一ニ天山谷震動ノ異香穢紛トシテ懇然ト貴婦人現シ給ヒ貴婦人上人ニ告而曰、我ハ玉依姫ノ靈現レ玉守リ氏ヲ爲鎮護ニ此山中居ル事年久シ。(中略)惣チ雲霧四方ニ合シ貴婦人変シテ金剛神ト顯レ玉守リ、御手ニ錫杖ハ九頭ノ竜馬ニ翼シ十神其軀異形也。上人感歎シ其所ノ針ノ耳戸ト申。昔ノ石門也。竜馬ノ蹄一横ニ付処今尚其印有り。俗人ヲ馬蹄石ト呼テ上人感歎シテ時ノ官領ニ申此旨奏聞ス。天皇聞召貴實ノ思ヒヲナシ有司ニ宣テ御社ヲ神心慮を安んずセシム。今ノ上宮是也。宝満宮ト申ス事宝八珍財ノ至極ナルカ故ニ玉フト云字作ルト也。滿ハ壙ノ起リ來テ至極ナルヲ満ト可云。然ルニ依ト云字ヲ滿ノ字ニ書改宝満ノ二字ト玉依ノ二字ト一和通用スヘキカ、宮トハ勅定ヲ以立始メシカ故亦勅宮トモ申也。然ルニ此宮ヲ以テ鎮護國家の繁盛トす。心蓮上人ハ白鳳十二年六月十日ニ寂ス。北ニ當テ丸山有。其頂ニ奉葬リ仏頂山東尾寺ト号。」

このような伝承が成立した時期も不詳であり、また『龍門山旧記』編者の私考も加えられているやに思われる部分もあり、確たる依拠史料も示さない。文中玉依姫變じて金剛神に顕現する所伝などは、明らかに神仏習合思想と修験道における守護神思想に基づいて形成されている。また上宮が玉依姫を祀る勅宮に始まることや、「宝満宮」の字義についてふられているもの、儼すべき史料を知らない。ともあれ、宇佐宮や高良宮などの伝承もとり入れられて構成されたのであろうと思われる。以上の伝承から心蓮上人なる僧侶の存在が天武朝に付託され、その白鳳2年(674)2月以前から入山し、同12年(684)6月10日に入寂したこと。そしてその葬地は、上宮から根尾伝いに東北方10分ほど多い仏頂山頂(869m)の東尾寺跡と伝えられてきたことが知られる。同地には上人の墓と伝える近代の石祠が再興されている。

ついでに登場するのは役小角であるが、修験道の開祖とされるこの人物は、後世神格化されて全国各地の霊山に入山伝説が付会されており、宝満山もまた例外ではない。宝満山には文武朝に入山して「龍門山を金剛界トシ日子ヲ胎羅界トシ」という。山内に修行窟を設定し、各神仏の本地産窟関係を定め、彦山(現「英彦山」と)との関係を規定するなどを付託しているが、すべて後世に修験の山として整備されたことはいまうまでもない。

ところで確実な史料にあらわれる「龍門神」や「龍門大神」から、この山に鎮座する古来の神であることがうかがわれるが、その来歴については明確でない。大陸では古来阿や龍を神聖視して、家族の繁栄を祈る家神として信仰されている。中野幡能氏は、大宰府設置のときに「鬼門除」のために山頂に八百万神を祀ったという伝承に注目して、大宰府鎮護と繁栄を期して龍神が勧請されたであろうと推測している(註7)。このような大陸系の神が祀られた背景には、北部九州は古くから半島や大陸への門戸であったから、とくに半島との関係で韓系の神を祭る集団の渡来が目目されている。また6世紀代の近畿地方で古墳のなかに龍・釜・槌のミニチュアを一組として副葬した事例に注目した水野正好氏は、百濟・漢人系の外來氏族の居住地にみられ、故地における龍信仰の慣行を継承したことを指摘した(註8)。さらに平安時代にも平野神社の祭神のなかに久度・古間之二神として、現用の釜槌に遷り神格と使用ずみの釜槌に宿る神格が祀られていることをあげている。また岡山県大飛鳥祭祀遺跡では、8~9世紀の遺唐使往来にみかわる祭祀が行われたと推測されているが、ここでミニチュア龍が発見されている(註9)。律令時代にはミニチュア龍は神への祭料となり、国家的な龍神に定着していたのである。のちに最澄が渡唐にあたって龍門山に祈願した背景も察せられるであろう。

一方、現在の龍門神社祭神は玉依姫命・順願に応神天皇・神功皇后を祀る。『龍門山宝満宮縁起』(1747年成)には、

「或書に云、応神天皇柏屋郡宇美村にて誕生の時、此釜に釜を居へ、此清淨水を湯にわかし。産湯にさせ給うと有、何の道にても、清淨の水山にて撲ひ出し湯にわかし天子の産湯とし給ふ故に、龍門山と申と成り。」

とあって、さきの『龍門山旧記』同様上述の外來龍門神とは無関係な由緒を述べている。さらに鎌倉期成立とされる最古の縁起『龍門山宝満大菩薩記』には「八幡大菩薩伯母」とある。宝満大菩薩を玉依姫に擬することは近世初期には成立していたようであるが(註10)、森弘子氏も指摘されるごとく、神功天皇の生母玉依姫を八幡神(応神天皇)の伯母に擬すことは矛盾している(註10書142頁)。にもかかわらず、宝満大菩薩を玉依姫に擬し、今日主祭神に定着せしめた創始者として、石清水八幡宮別当頼清が永保年間(1081-83)大山寺別当に補された由緒に求めたのは森弘子氏である(註10)。すなわち頼清の経歴や活動に拠って、「以前より女神と認識されていた龍門神に『玉依姫』という名を奉り、応神天皇、神功皇后を併せて祀り、八幡の別宮と位置づけることができたのは、白河天皇・藤原師通という時の権力者の後援をもち、法華経にも八幡思想にも精通し、かつ熟年の長い期間大山寺別当を務めた頼清を描いて他にないと考えられる。」(註10書173頁)と述べている。

宝満山に水田稲作に不可欠な水源を求めた水分神信仰は、古墳時代にさかのぼって始まっていることが推測できるが、この説に従うならばそれに対して後に特定の神格名を与えたことになろう。しかし龍門山信仰をこれのみに限定してしまうのは如何であろうか。私はさきに、「原始的な山霊信仰の系譜をひき、玉依姫に神格化された系統のものはのちに修験信仰に継承されてゆき、また大陸系の龍信仰の系譜をひき、律令時代の国家神として龍門神に神格化された系統のものは大宰府鎮護のために勧請されたであろう(註11書8頁)」と述べた指摘はいまなお有効であろうと思う。また後者については中野幡能氏も「道教の一つの宗教現象である龍神信仰が都府様設置に付随して御笠山に導入された」(註7書

3 古代信仰遺跡の調査(1)と研究成果-祭祀遺跡・仏教建築遺跡-

宝満山の学術調査は、1960年代初頭に太宰府天満宮による宝満山文化総合調査会(代表・西高辻信貞貴司)が結成されて、関係諸学の学術面が編成されたことに始まる。遺跡・遺物関係は鏡山猛・小田らによる考古学的発掘調査が1960-61(昭和35・36)两年行われた。調査報告書(註11)は諸般の事情で大幅におくれ、20年後の1982(昭和57)年に太宰府天満宮文化研究所から発刊されて完結をみた。またこれと前後して小西信二氏による長年にわたる宝満山踏査の成果がまとめられて1984(昭和59)年に発刊された(註12)。これらのあいつく現地調査の成果によって、ようやく宝満山の内容の一端が明らかになり、多くの古代から近・現代におよぶ遺跡の存在が知られた。それとともに宝満山の全貌を知るには、かなりの年月をかけた組織的調査が必要であることを改めて認識させられることとなった。

その後しばらくは宝満山に関する特筆すべき情報にも接することなく過ぎたのであったが、やがて1980年代の後半期に送電鉄塔建設に伴う調査が始まり、1990年代に入ると山麓地区の住宅建設や民間開発が急増して、大宰府市教育委員会による緊急調査が毎年実施される状況となり、この傾向は2000年をこえてもなお継続する有様であった。さらに2003(平成15)年の集中豪雨や2005(平成17)年の福岡県西方沖地震などの、自然災害による山中遺構の荒廃も重なって詳細な現状調査記録を作成する必要に迫られてきた。太宰府市では2005~2009(平成17~21)年の5ヶ年間国庫補助事業として山中の遺構の測量調査を実施した。開発に伴う緊急調査ともあわせて2011(平成23)年までに43次が数えられ、調査遺構の時期も古代から近世に及んでいる。その内容も宗教関連遺跡(礎石建物ほか)、中世山城、生活関連遺構、鍛冶・製鉄遺構など多様である。それらのなかから古代の主要な遺構に係わる詳細な内容については既刊の報告書に譲り、成果の概要と若干の考察を述べておこう。

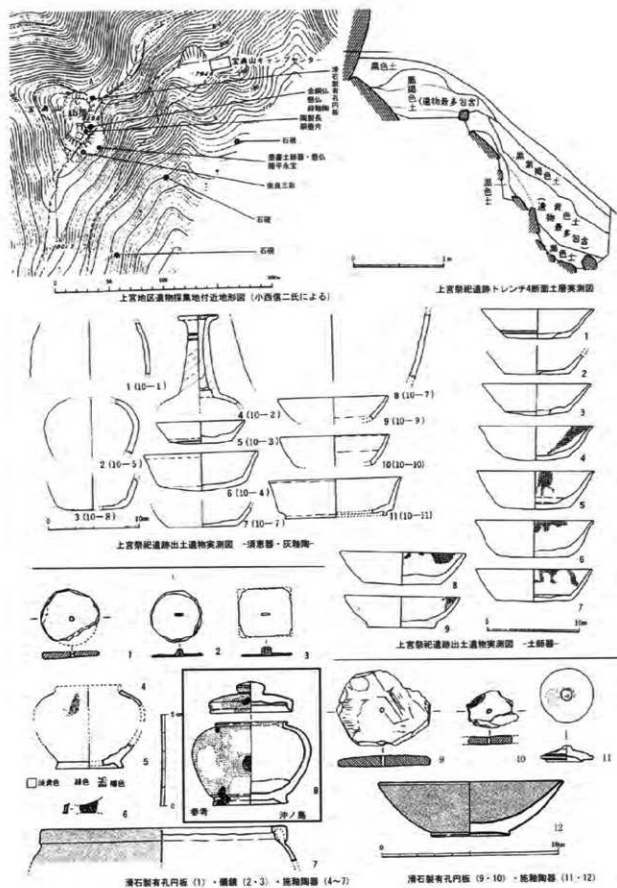
(1) 上宮祭祀遺跡(註11)(大字北谷字宝満1・筑紫野市大字大石字水上857)[第1図]

1960年10月の第2次調査対象地として予察的調査を行った。山頂に1957年度に再建された上宮社殿が在る。この背面は切り立った巨岩絶壁をなし、10m余下ったところに、西と南を巨岩で囲まれた岩棚状のテラスが在る。この絶壁は登山者達のロック・クライミングの練習場とされていたところから、銅鏡や土師器が採集されて情報がもたらされていたのである。このテラスの広さは東西3.5m、南北6mほどで、北側はさらに下方にむかって絶壁をなし、東側も急傾斜で下降してゆく。上宮背後のこのテラスに至るには、巨岩の割れ目をたいて、階段状の岩壁を下って到達する。樹木の繁る地表には土師器杯の破片が散布している。発掘調査はテラスの中央部に東西2.8m・幅50cmのトレンチを設定して掘り上げた。平板その他の測量杖材が持ちこめないで、簡単な平面略図や土層断面の詳細図を作成した。テラスのせまい状況から平面的に拡張することがむづかしく、トレンチ北面の土層図を作成して1日間の調査を終了した。

絶壁寄り西側平坦面では深さ60cmまで、また東側では約40度の急傾斜で深さ約1mで岩盤に達する間に、土師器杯類を主体とする土器類が土砂などを介させずに集積する状況がみられた。このような土器類の集積は、岩壁の上方、上宮社殿裏(東側)の岩場に腐植土が堆積して土師器片が散乱している状況をも参照して、この岩壁下テラスの土器群は、その上方岩場から投下された祭祀後の始末を示すものと推定される。

トレンチ調査で発見された遺物は、大量の土師器杯類と若干の須恵器などである。

土師器杯は口径12~13cm・高さ3~4cm・底径7~8cmの同形成品で、口縁部から内面にかけて



第1図 宝満山上宮地区遺跡と遺物(註11、12より)

煙の付着するものが多い。また底部を二次穿孔したものもあり、使用後に穿孔廃棄したのであろう。外面底部に墨書したものもある。このほか高台付桶・皿・蓋などがある。

須恵器は杯・碗・長頸瓶・壺などの器種がある。また灰陶碗は長胴形破片全面に緑色灰釉を被った瓶形かと思われる。

以上の土器・器種の特徴などから、上限は8世紀後半までたどられ、下限は9世紀後半にまで及んでいる。このうち須恵器には8世紀後半の特徴がみられるが、大量の土師器杯類は9世紀代の特徴を示しており、平安時代に降って神道祭祀が盛行する傾向にあったことが推察される。この時期には龍門神が紋位昇格をかさねていたことが参照されるのである。すなわち

- 承和7(840)・4-21 龍門神に従五位上を授けられる。
- 嘉祥3(850)・10-7 正五位上を授けられる。
- 貞観元(859)・1-27 従四位下を授けられる。
- 元慶3(879)・6-8 従四位上を授けられる。
- 寛平8(896)・9-4 正四位上を授けられる。

などの記録があげられる。この背景にはこれまでもいわれているように、新羅海賊の活動などの不穏な社会状況などが考えられよう。上宮遺跡の調査は、わずか1日間のトレンチ1ヶ所のみで予察段階にすぎないので、将来に本格的調査が期待されるが、あわせて遺跡の保存対策も要望したい。

(2) 下宮礎石群遺跡(註11・13)(大字内山字御供屋谷) [第2図]

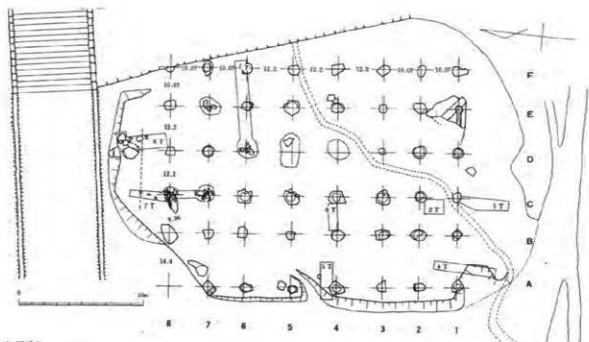
龍門神社の正面参道入り口横(南側)隣接地に広がる平地がある。ここに建物の礎石群が在る。神功皇后御座所跡の伝承が付会している。1960年10月の第2次調査時に礎石群の平面測量を実施し、さらに翌年4月の第3次調査で、山側(東側)に埋没した礎石列(南北方向)の存在が予想されたので探索して存在を確認した。かくして南北(桁行)8列・東西(梁行)6列の礎石列からなる大型建物となり、大講堂風な性格のものが予想された。また花崗岩を使用した礎石表面には、円形造出柱痕のあるものもないのが混在するところから、再建された場合を想定して礎石間や基礎想定箇所計8ヶ所のトレンチを設けて地下の探索を行った。その結果礎石の下層に及ぶ遺物包含層の存在(第2・3・5・8トレンチ)と遺物の時期から、現存礎石群の構成は11世紀後半以降と判断された。このたびの調査はわずか5日間の実測や発掘の予備調査段階であったから、本格調査は後日に托して終了した。

かて2008(平成20)年度に太宰府市による第37次調査で本礎石群(37SB010遺構)の確認調査が実施された(2009・1・14～3・26)。1961年の調査トレンチに続けて16トレンチまで設定して本遺構の究明がはかれた。礎石群から示される平面形はさきの調査と異なり、柱間法量などは正確な数値が示された。すなわち、

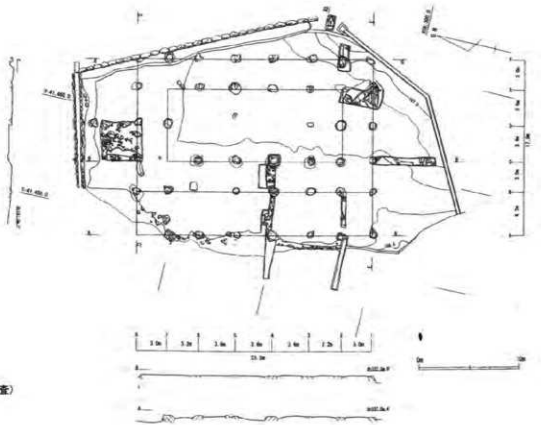
- 桁行 $3.0+3.2+3.6 \times 3+3.2+3.0 = 23.2\text{m}$
- 梁行 $4.3+3.0+3.6 \times 2+3.0 = 17.5\text{m}$ (西→東)

5×2間の身舎(内陣)に四面庇(外陣)がめぐる7間×4間の堂舎の正面(西側)に7間×1間の孫庇を付設した構成である。堂舎の下層トレンチからは古瓦・土器・輸入陶磁・国産滑・滑石製石鍋・金属製品(鉄釘・鉄滓)・砥石などが発見された。輸入陶磁(龍泉窯系・同安窯系)などから12世紀後半から13世紀初頭の建立と推定された。また礎石建物についても、7間×5間の堂舎とその前面孫庇付設の形式を富麻寺本堂の事例を引いて正堂と礼堂とする。なお出土遺物のなかには前回調査時に紹介した鴻臚館式軒先瓦一組のような8世紀代にまでさかのぼる資料があることも注意される(第4図1・2参照)。

[補記] 鴻臚館式軒先瓦はこのほか第36次調査(下宮南西側の谷地形部)で軒先瓦片が発見されている

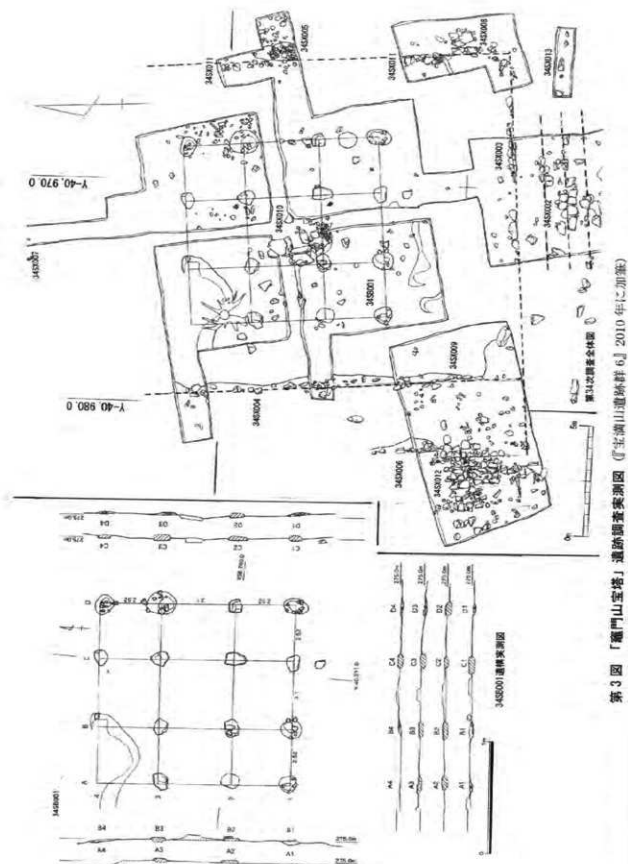


(1960年調査)



(2008年第34次調査)

第2図 龍門神社下宮礎石群調査実測図(註11、13より)



第4図 「龍門山宝塔」遺跡調査範囲（宝満山遺跡群6）2010年に追加

(365×0.24、註13書58図16)。この調査地は13世紀代に「龍門神社南側の奈良・平安期の遺物を包含する土を削平して、(中略)谷地形に流しこむことによって埋められた可能性がある」(註13書120頁)とされている。すなわちこの資料は本来下宮礎石群に所属するものであったことになる。

(3) 「龍門山宝塔」遺跡(大字内山字本谷780-1-16)〔第3図〕

小西信二氏の遺物採集によって御嶽・本谷地区B地点と仮称され、「妙見祠礎石群」として紹介された(註11)。やがて太宰府市の第34次調査(平成20年1~4月)で34SB001礎石建物として調査された(註13)。遺跡は宝満山西麓(標高276m)の独立峰上にある15m四方の平地中央に在る。復元すると一辺8.14mの総柱形式の建物となる(方位N-2°48'-W)。

建物の柱間は、

$$252+310+252\text{cm}(8.3+10.2+8.3\text{尺})=814\text{cm}(26.8\text{尺})$$

の3間四方規模となる。全16個の礎石のうち、7箇所の礎石が失われている。旧妙見祠やその周辺に移動された礎石は、60~80cm・厚さ20cmほどの扁平な花崗岩が使用されている。建物周辺には基壇を構成する石列が巡り、礎石列から南側まで5.5m(SX003)、西側まで2.5m(SX004)、東側まで3.5m(SX011)を測る。また南側石列のさらに南側中央に扁平石を使用した階段(SX002)が在り、南側を正面にする構成であったことが知られる。出土遺物には土師器・須恵器・瓦などがあり、9世紀後半から10世紀前半代のものが主体をなす。北斜面出土の軒丸瓦(九雁170A型)は9世紀後半以降に比定された。また観世音寺や安楽寺関係の文字瓦もみられる。特筆すべきはC4礎石の西南側表土下で発見された小金銅仏(高さ11.8cm)の発見である。表面の風化著しいが、施無畏・与願印をなす如来立像であり、木末は台座に挿入され、光背をともなっていた痕跡をとどめている。平安前期頃とされる。

〔補記〕創建時に使用された古瓦片と同一形式の軒丸瓦完形品が遺跡周辺から発見されている(註11書111~112頁)。参考までに掲げておく(第4図3)。

この遺跡を「龍門山宝塔」に比定する典拠はつぎの承平7年(937)大宰府牒(石清水八幡宮文書之二)にうかがうことができる。

府牒 百崎宮 延令造立神宮寺多宝塔一基事

緣 得千部寺僧兼祐中狀稱、讚業天台伝教大師去弘仁(817)八年遺記云、為六衆生直至弘造免難、於日本国書写六千部法華經、建立六層西宝塔、一一塔上層安置千部經王、下層令修法華三昧、其安置建之塔、龍山東西塔、上野下野國、筑前龍門山、豊前宇佐赤松寺者、而大師在世及滅後儀所成五塔塔也。就中龍門山分塔、妙善証聖信俗之日、以去承平(933)三年造立已成、上安千部經、下修三昧法、宛如大師本願、未成一地塔者、謂宇佐赤松寺未完千部、書写二百部之間、去寶平年中(889~897)悉地亡乎、爰末葉弟子兼祐、祈教大師遺書之未遂、心発念念、奔馳令分經火滅之誓、於宮崎神宮寺、新書寫千部、造一基宝座、於上層安置千部、下層令修三昧、以可果件願、然開始自承平5年(935)、且唱於知會令写經王、且運材木搜於彼宮巴辺、彼宮此寶觀其地異、早欲造作塔、私事之功地、凡為願国利民也者、府判依請、宮祭之状、早造立得令遂本願、故緣。

承平7年(937)四月日 大典推宗朝臣(花押) 参議師輔朝臣(2)願

すなわち伝教大師の弘仁8年(817)遺記に、日本国の六箇所に宝塔を建立して、各塔上層に法華經一千部を安置することを発願したことを承けて、唯一未建のままになっている「豊前宇佐赤松寺」分宝塔を宮崎宮神宮寺に造立することを伝えた文書である。九州ではさらに「筑前龍門山」分の一塔があり、「比叡山東西塔、上野下野國」の四塔とともに承平3年(933)までには造立されていたことが知られる。宇佐赤松寺では法華經二百部を書写した段階の寛平年中(889~897)に火災ですべて焼失したため、宮崎宮神宮寺に造塔することを求めたのであった。

以上、発掘調査によって内容の判明した古代遺跡を代表する3遺跡の概要を述べた。太宰府市による宝満山遺跡群の調査は現在43次にまで及んでいる。それらの成果によれば、もはや山中随所に須恵器・

宝満山における仏教信仰は、すでにⅠA期にさかのぼって開始していた。

『扶桑略記』延暦22年(803)閏10月23日条に、「**叡遣**和名大宰府龍門山寺。爲渡海四船平遣。敬造僧(倭)薬師佛四軀。高六尺袂餘。其名号无勝淨土善名僧吉祥王如来。已上。同條の記述は『金王』『取岳要記』にもみえる。遣唐使船は翌23年5月12日を難波を出発しているので、同船に乗って入唐するの最澄は、その前年から大宰府に至り、豊前の宇佐八幡神宮寺や賀(香)春神宮寺で講經祈願している(註15)。いずれも渡来しにかかわる神宮寺であり、ともに渡海の平穩を祈願したことがうかがわれる。

さらに『扶桑略記』から、「大宰府龍門山の神宮寺として存在したことが知られる最古の記録として重要であり、それが8世紀代にさかのぼる建立であったことも知られる。好都合なことに、下宮礎石群の下層からこのことを証する8世紀代の鴟尾飾式軒瓦1組が発見されている。しかし現存する礎石群は上述したように12世紀代に造立された大仏堂であるから、両者を直接結びつけることはできないが、この周辺を整理して建立する以前、すなわち8世紀代にさかのぼって堂舎が存在したであろうことが推察され、「龍門山寺」に比定する有力な文証となしうであろう。下宮礎石群の近くに位置する内山地区地蔵原遺跡でも大宰府市の宝満山遺跡群第27次調査で、鴟尾飾式軒瓦と考えられる瓦当片3点が出土している(註26)。下宮から西斜面谷部に下った標高140m付近の段々畑である。8~12世紀の罫目文や格子目叩きのある瓦片、8世紀代の須恵器群(8トレンチ)などが報告されている。報告者は下宮礎石ともかわる「瓦所要の建物が至近にあった」ことに言及されている(註26書16頁)。

延暦24年(805)に帰朝した最澄は、弘仁5年(814)春、神恩を謝して八幡神宮寺や賀春神宮寺で談経している(『叡山大師伝』)。

最澄の龍門神社参詣は、龍門山寺とともにその地位を高めることとなり、上述したように龍門社の位階昇格を重ねるとともに、大宰府の鎮護神として府の厚い保護を受けた。承和9年(842)に奉幣使を受けたことは国家的処遇を受けるに至っていた証であろう。

承和14年(847)に帰朝した**円仁**もまた龍門山寺で転経報謝している。すなわち、「十一月廿八日。於大山寺始入唐時所許金剛般若五仟卷。皆先馳使。奉送經部。同日。早朝一時發遣釋府使陀。使轉經。同日。爲龍門大神轉一千卷。」(『入唐求法巡禮行記』卷第四)このような談経報謝業は、最澄以来入唐僧のあいだに定着してゆき、このことが叡山系佛教との関係を一層深めてゆくこととなった。上述した承平3年(933)に最澄遺記による、六所宇塔造立分の1基「筑前龍門山」宇塔造立もその証であった。そしてその遺跡が近年内山地区本谷で調査された「龍門山宇塔」遺跡である。

このようにたどっていると、上宮祭祀の変遷(表4参照)におけるⅠA期後半(遺物分期の2期)最澄との交渉が始まっており、ⅠB期(遺物分期の3期)には宇塔が造立されるに至った。天台系仏教は龍門山中に徐々に浸透してゆき、やがてⅡ世紀後半以降、原始修験的な“山の宗教”の形態を示すまでに発展していった。初期の神宮寺「龍門山寺」から「大山寺」の寺号を称するまでに発展した。12世紀代には龍門山修験も系統化がすすんでいたように、後白河法皇の撰になる『崇寧秘抄』に、「龍門の本山彦の山」と詠まれているように、彦山(彦彦山)を本山とする本末関係が成立していたようである。

以上のような歴史的推移を勘考しながら、山中に見えられている古代遺物発見地にかかわる建造物遺構の調査が今後の課題である。祭祀遺構、僧の生活施設(山房)、修業施設(修業窟・山寺等)の構造究明などの作業も将来に托された問題である。現段階での過度な推定は今しばらく保留しておきたい。

また一方近年では「山寺」研究も活況を呈してきている。すでに太平洋戦争以前から「山岳寺院」の

名譽のもとに、山中寺院の伽藍配置などが提起されていた(註16)。最近では、奈良時代の史料にみえる「山林寺院」の用語が古代、「山の寺」が中世における適正な用語であろうという指摘もある(註17)。さらに一歩すすめて「山寺」を里山系寺院と重山系寺院に大別する分類案も提起されている(註18)。前者は「里山中腹や山麓、丘陵、あるいは谷や沢の奥などに立地した寺院の総称」であり、後者は「仏教伝来以前から信仰の対象とされてきた山岳の登山口や中腹に成立した規模の大きい寺院」であると定義している。そして「いずれも分類しにくい例や複合的な存在形態をとる例もないわけではない」という注釈つけられている。この大別案は現状観に基づく分類案のようであり、歴史的に古代や中世の段階における景観にさかのぼった場合には如何な状況であったのかという歴史学的視点からの検討も必要であろう。そのような視点に立つとき、宝満山遺跡の場合は、信仰の開始時期においては原始的な山岳信仰に始まり、やがて山内に修験者が入ってゆくというパターンを経過して、神仏習合思想から原始修験思想が形成されていった経緯が推察されてくる。すなわち古代末期においては、さききの二大別案は複合的な存在形態を呈する状況になっていて、これが中世に継承されて盛況を呈するに至っていたのが実情であろう。

4 古代信仰遺跡の調査(Ⅱ)一経塚

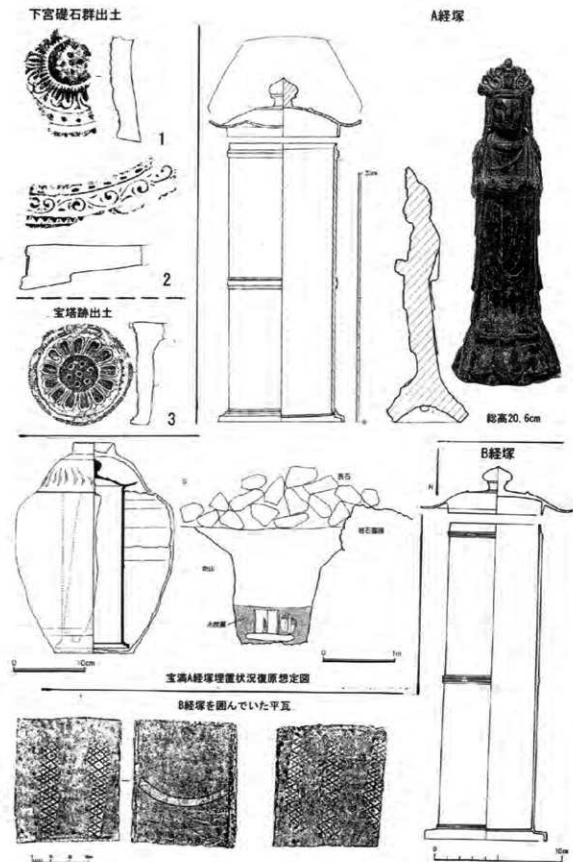
最澄に始まり、円仁ほかにも継承されてきた天台宗とのかわり、龍門山寺に始まり大山寺へと発展し、12世紀末には延暦寺の末寺となった。このような流れを背景に、宝満山にも経塚の營造がみられる。元来地蔵の風は法法思想の流行に起因することである。すなわち釈迦入滅後正法時・像法時の2千歳を過ぎて永承7年(1052)から仏法滅盡に近づく末法時に入るというものであり、この時期以降、仏教を後代に伝えるべく経塚する風習が全国的に廣がっていた。写経(法華經)を経簡に収めて中に埋納して小高塚を築いた。これを経塚と汎称したのであり、一般に山頂近くや、山中あるいは里近くの独立丘上などが選ばれた。宝満山周域でも現在までに2基の経塚が知られている。

(1)A 経塚(註14・19・20) (大字内山山字南谷95・大字内山山字冷林350) (第4図)

有節円筒式銅筒身と六角形銅筒蓋からなる経塚と、金銅菩薩形立像一軀がはやくから紹介されていたが(註19)、その出土経塚については大宰府市で2005(平成17)年に発掘調査された(宝満山遺跡第30次調査・30SX001)。遺跡は内山地区の北、南谷地区の西にあたり、南に張り出した標高189mの頂部に在る。「直径約1m、深さ約1mの掘り窪められた穴と、その周辺約6mの範囲に花崗岩が地表を覆うように集積された状況」(註20書4頁)の遺構が発見された。坑内から発見された肩より上に欠いた中国陶磁器を外容器とし、ヘラ描花弁文をめぐらす白磁筒をかぶせた中に経筒を納め、その傍らに平瓦3枚を組み合わせた囲いの中に金銅仏が納められていたという。これらの遺品は同一敷石上に置かれ、木炭層が充満していたという。この木炭層中には白磁の小壺・皿・銅鈴2個以上があり、銅網品でもあり、

(2)B 経塚(註21書574頁・註22) (筑紫野市大字原山崎) (第4図)

かつて亀井明徳氏によって原経塚(筑紫野市大字原)出土品として紹介された(註22)。経塚の所在地は「太宰府天満宮から龍門神社に通ずる道路の南側の山丘頂部に近いところ」である。古くに発見された一括遺物で、個人蔵品として九州歴史資料館への寄託品であり、遺跡の状況は不明である。『太宰府市史』(註21)では「宝満山地区」の経塚に加えられた。有節円筒式筒身と円形傘蓋で4ヶ所にガラス小玉を嵌下した瓔珞飾りがここのである。銅筒身は以下の14行にわたる刻銘がある。「僧觀等敬白/奉納如法經堂部^{半段}/右弟子是比州松浦郡/人也而佛法格行之間/不慮外氣前因往來/龍大南甞沙門堂/經數月間宿善此寺/推書法經先爲^カ現/在父母并藤原氏人良鎮/并妻子女世安福



第4図 宝満山経塚遺物と下宮・宝塔跡周辺出土軒瓦拓影(註11、19、20、22より)

後生/菩提乃至自身為始/九界衆生同利益敬白/天永元年度寅十二月八日/供養畢」
 経筒は同形同大の平瓦3枚で囲まれていたと思われる。その凸面には大形斜格子印文が全面にわたってみられる。

経筒の形式特徴は、さきのA経塚の経筒と共に12世紀前半に比定されるが、本経筒には天永元年(1110)の紀年銘が刻まれていて、年代推定を確実にした。「大南戦沙門堂」に籠って数ヶ月にわたって修業したことが知られる。宝満山南の急斜面中腹(標高515m)に所在する大南窟を指し、そこに「戦沙門堂」を名のる堂舎が在ったようである。

大南窟遺跡(筑紫野市大字大石宇水上)は宝満山南の急斜面中腹(標高515m)に露岡屹立する巨岩地点である。2つの巨岩の間が10㎡ほどの窟を形成している。窟の下方で8世紀後半から12世紀に及ぶ遺物が採集されているが、8世紀代が主流とされている。古代の遺物には土師器・須恵器・黒色釉・瓦器・製塩土器・皇朝銭(神功開宝)・滑石片などがある。筆者も平成23(2011)年春に登攀する機会があり、巨岩上から下界を望見すると、阿志岐から東行して米ノ山峠を経由する古代豊前路を眼下におさめうら好地にある。大宰府から豊前に至る交通上の境界祭祀などを考えさせられるような貴重な実体験ができた。

12世紀前半代の北部九州では、他の霊山でも経塚の营造は流行している。その発見数は宝満山の比ではない多くの事例が報告されている。その营造地点も山頂や山中に選定されている。それらについては筆者も総括的に述べたことがある(註23)。すなわちわが国の山岳信仰は原始時代にさかのぼって発生しており、古代には特に火山性の山岳に仏教徒や道教修業者が入山修業して、原始神道なども習合させた原始修験道ともいふべき独特の山岳宗教を形成した。神の天降る山頂は弥勒菩薩下生の場とされ、陰陽五行思想の導入ともあわせて東方再生や東南方位重視の思考方式も加わり、これらの習合思想が12世紀前半代までにはほぼ定着するに至った。宝満山にあっては9世紀初めの最澄参籠以来、六箇所宝塔造立の遺告のなかにも安西塔としての龍門山宝塔造立のことが指示されて、10世紀前半に実現して、天台宗系の山の大寺としての位置を確立していった。12世紀代以降中世に山寺として繁栄してゆく素地は、長い歴史的経過のなかで形成されていったのである。

宝満山経塚の遺地は上述した北部九州の霊山の場合に照してみると、やや異なるところがある。その位置するところは宝満山麓の独立山丘の頂上に在り、登山口や一般集落とのかわり方が考えられる。B経塚の経筒銘文に佛法修業としての写経業に加えて父母・妻子・自身の現世安穩・後生菩提を明記しているところにもそのヒントはありそうである。これまでの経筒銘文に「妻子」銘まで明記した事例は珍しい。

5 その他の遺跡—祭祀・生産関係—

『太宰府市史・考古資料編』(1992年)には宝満山の祭祀遺跡群の項目を設けて、小西信二氏が長年月をかけて踏査した分布調査の成果がまとめられている(520～550頁)。小西氏は「祭祀遺跡および祭祀遺跡の可能性がある地点」として「頂上近辺に五か所・山中に三か所・山麓に四か所の地点」の計12遺跡をあげている。

○太宰府市—筑紫野市

1. 上宮祭祀遺跡(大字北谷宇宝満、筑紫野市大字大石宇水上)
2. 龍門嶽祭祀遺跡(大字北谷宇宝満、筑紫野市大字大石宇水上)
- 太宰府市側(宝満山西斜面)
3. 辛野祭祀遺跡(大字内山宇辛野)

- 4. 妙見原遺跡(大字内山字本谷)
- 5. 一の島居東遺跡(大字内山字本谷)
- 6. 本谷1号遺跡(大字内山字本谷)

○筑紫野市(宝満山東斜面)

- 1・2. 愛嶽山南1号・2号遺跡(筑紫野市大字大石字水上)
- 3. 大南窟祭祀遺跡(筑紫野市大字大石字水上)
- 4. 水上大谷尾根遺跡(筑紫野市大字大石字水上)
- 5. 後田遺跡(筑紫野市大字本専寺字後田・国有地)
- 6. 佛頂山東遺跡(筑紫野市大字本専寺字後田・国有地・国有地)

さらにこれらの遺跡に共通の特殊遺物として製塩土器があげられている。これらのうちで**龍門嶽祭祀遺跡**〔2〕は山頂から南150mほどで、龍門岩と称されている2つの巨石を指し、8世紀後半までさかのぼる**土器資料**がある。上述した上宮祭祀遺跡のところでもふれたが、遺跡についての発掘調査などは行われていない。**辛野祭祀遺跡**〔3〕は南西斜面にわずかに発達した尾根部(標高約390m)の南。北面から皇朝枝(神功開宝・富寿神宝)・銅製金具・土師器・須臾器・灰輪陶・製塩土器・石製品などが発見されている。なかでも土器類は多く、土師器は甕・鉢・短頸壺・杯・桶・皿・高杯・托・甕など、須臾器は甕・鉢・瓶・短頸壺・鉄鉢形鉢・盤・杯・杯蓋など、灰輪陶(多嘴甕)片、墨書土器などが発見されている。上宮祭祀遺跡にちらべて器種も豊富であり、供膳形態のみならず、煮沸形態も含まれている。しかし金属器・滑石製品などはみられない。墨書土器は柄・杯・蓋・皿などに1字のもの(神・寺・論・奉・蕃・甲・大・豊など)と2字のもの(口識・知孝・相口など)、さらに習書(有)などもある。出土土器の主体は8世紀後半で9世紀に及び、7世紀後半にさかのぼる資料も若干ふくまれている。(須臾器・蓋・杯など)。祭祀の開始は8世紀前半にさかのぼり「尾根部先端は約三ノト×三ノトの自然石による方形組みが残っており壺座と考えられる」(註21書540頁)という。これが同時期のものであれば祭壇ともいうべき壺境を形成していた可能性もあり、上宮遺跡とともに古代前期の最も注目すべき祭祀遺跡となる。将来に本格的調査を期して万全な保存を望みたい。このほか上掲の遺跡では須臾器・土師器を主体としているが灰輪陶・古瓦・墨書土器を伴出した**愛嶽山南1号・2号遺跡**なども注意される。これらの遺跡がすべて祭祀遺跡であるか否かの判定はむずかしく、将来の課題である。これらの報告を通覧して、8世紀後半から9世紀代が宝満山祭祀の開始第1盛期であったことが確認できる。その場所は上宮周辺や山中であり、神佛習合的性格の祭祀であったことがうかがわれる。そして11世紀後半以降の第II盛期と対比してみると、神本佛徒の振相がうかがわれることもすでに指摘したところである。

いまひとつ注目しておくべきは、宝満山遺跡群中の各所で**製鉄関係**の遺構や遺品が発見されていることである。宝満山南西山麓の宝満山遺跡群第23次調査(大字内山)や浦/田遺跡(大字太宰府字浦/田)では1999～2000年度にかけての調査で古代の製鉄工房・中世の鍛造工房などが調査された(註24)。なかでも宝満山遺跡群第23次1区2号製鉄炉は、「7世紀後半に登場する鉄銜鋤型鋳方を伴う箱形製鉄炉」が8世紀代まで継承された事例として注目された(註25)。さらに太宰府市による宝満山遺跡群の調査においても金属製造物についての紹介がある(註26)。それらの報告を総括して山村信榮氏は出土傾向・金属加工過程での生成遺物・その背景などについて総括された(註20)。すなわち、鉄滓は「内山地区の10, 12, 13, 17次、柄型鍛冶滓が19, 24, 27, 28, 29次、銅滓ない銅塊は13, 24, 27, 29次、鉛が19, 25, 26次、ルツがないし取り瓶が24, 27次で出土している。遺構としては浦/田の炉跡が19, 24, 29次で発見されている」(31頁)。これらの状況から生活域の多くで金属加工関連遺物が出土している。なかでも29次では鐘の小札・鉄織・刀剣などの武器類や商品の可能性もある製品が出土し、

24次では継続的な工房が経営されていることなどをあげて「産業的生産の萌芽」にまで言及している。宝満山の第II盛期に相当するであろうが、一方では時枝務氏が掲げる研究課題(註17)のなかで、「山寺を社会の中に位置づけ、その歴史的意義を考察すること」をあげている点とも通ずるところがあり、今後の調査の進展が期待されるテーマである。

宝満山研究の切り口は信仰のみならず、多方面からの研究が可能な宝庫といっても過言ではない。本稿で述べてきたことも、主として信仰関係について考古学的調査の手法によってようやく研究の入口にたどりついたところである。あわせて将来に継承発展されんことを望む。

(小田富士雄)

註(参考文献)

- (1) 大場啓雄『祭祀遺蹟—神道考古学の基礎的研究—』1980年
- (2) 赤崎敏男『福岡県五穀神山出土の土製製造品』(『九州考古学』47号)1974年
- (3) 小田富士雄『筑前「龍門山日記」校本』(『神道史研究』第17巻第5・6号)1969年
- (4) 古代学協会編『史料拾遺』第1巻1966年
- (5) 中野輔能編著『筑前国宝満山信仰史の研究』1980年
- (6) 北九州市立歴史博物館『研究紀要1・特集豊前修験道』1979年
- (7) 中野輔能『太宰府天満宮と宝満山』(『菅原真直と太宰府天満宮』下巻)1975年
- (8) 水野正好『外来系氏族と龍の信仰』(『大阪府の歴史』第2号)1972年
- (9) 鎌木義昌・間野忠彦『大飛鳥遺跡—古代の祭祀—』1964年
- (10) 森弘子『宝満山の環境歴史学的研究』第II部第一章第二節2008年
- (11) 小田富士雄『宝満山の地宝—宝満山の遺跡と遺物—』1982年
- (12) 小西信二編『宝満山及び龍門神社周辺の遺跡分布調査報告書』1984年
- (13) 山村信榮編『宝満山遺跡群6』(太宰府市の文化財第111集)2010年
- (14) 小田富士雄・武末純一『太宰府・宝満山の初期祭祀—『宝満山の地宝』拾遺—』1983年
- (15) 鏡山猛『日唐交通と新羅神の信仰』(『九州考古学論叢』)1972年
- (16) 石田茂作『伽藍式より見たる天台宗と眞言宗』(『青藤先生古稀祝賀記念論文集』)1937年のち石田『佛教考古学論攷—寺院編』(1978年)収録
- (17) 時枝務『山寺研究の課題』(『季刊考古学』第121号)2012年
- (18) 牛山佳幸『山寺の概念』(『季刊考古学』第121号)2012年
- (19) 石田茂作『推古仏を納入せる経筒』(『MUSEUM』63号)1956年、のち石田『仏教考古学論攷—経筒編』(1977年)収録
- (20) 山村信榮編『宝満山遺跡群5』(太宰府市の文化財第84集)2006年
- (21) 太宰府市史編集委員会編『太宰府市史・考古資料編』1992年
- (22) 亀井明徳『経筒新資料について』(『九州歴史資料館研究論集8』)1982年
- (23) 小田富士雄『北部九州の霊山』(第20回国民文化祭・ふくい2005・シンポジウム『山と地域文化を考える・資料集』)2005年、のち小田『古代九州と東アジアII』(2013年)収録
- (24) 森井啓次ほか『宝満山遺跡群(第23次調査)・浦/田遺跡III』(福岡県文化財調査報告書第169集)2002年
- (25) 村上恭通『北部九州における古代の鉄器生産』(『日本考古学協会2012年度福岡大会発表資料集』第3分科会「白村江から土城へ」)2012年
- (26) 山村信榮編『宝満山遺跡群4』(太宰府市の文化財第79集)2005年

第5節 建築からみた宝満山

宝満山には近世以前の建物は殆ど残されておらず、宝満山の堂舎の具体的な形態や、寺院内外の景観について、その中世・近世の具体的な様相を窺い知ることは殆ど不可能である。ただ幸い、近年の発掘調査によって、顕著な三棟の遺構が検出された。これらから古代、中世の宝満山の様相の一端を推定することができる。

まず三棟の建築遺構の建築形態を復元的に推定し、それらの建築的特色を明らかにした上で、宝満山の寺院構造についての考察を述べたい。

1 発掘遺構の復元的考察

(1) 発掘遺構の位置

顕著な建築遺構は第34次・第37次・第42次で検出された。

第34次の遺構は、下宮から宝満山山頂へ至る登山道の途中にあり、宝満山から南西へ伸びる尾根先端の頂部にある。西には遙かに玄界灘を見ることのできる見晴らしの良い位置にある。昭和56年に発見され、平成20年に全面的に発掘調査がなされた。

第37次の遺構は、下宮の境内の最も低い位置にあり、すでに昭和36年に小田富士雄によって調査されていたものを、平成21年に再度調査した遺構である。

第42次は下宮からさらに100mほど南へ下った谷地形の最奥部にある。

それぞれ全く立地が異なっており、三棟が一体の寺院を構成したとは考えがたい。いずれも宝満山全体、もしくは宝満山を構成する一部分の僧団組織の堂宇と考える事ができる。

(2) 第34次の遺構（本谷礎石建物）

遺構 検出した遺構34SB001（註1）は、正面三間、側面三間で、内部に四柱柱がある。一边は8.1mの正方形である。中央間は3.1m、両脇間は2.5mで、後世に集められた石で妙見祠の土台が作られていたために、中央に心柱の礎石があったのか否かは明瞭ではないが、おそらくなかったと推定されている。

側柱の礎石から3～5m離れて小さな石列が並ぶので、低い基礎が設けられていたと考えられる。ただし、各辺で距離に差がある。さらにその外側のところどころに石列があって、石階と見られる（図1）。周辺から10世紀前半から中頃の瓦、9世紀後半から10世紀のものを中心に8世紀から11世紀の土器・輸入陶磁器、小金銅仏が出土していて、10世紀前半に建立されたと推定されている。

遺構の解釈 以上の遺構は、方三間の仏堂か塔と推定される。周囲の基礎状の石列が側柱から離れているので、五間規模の建物を想定する可能性もあるが、明確な礎石はなく、基礎規模も各辺で異なるので、方三間の建物と考へたい。同様の理由から縁東の存在も確定しがたい。この建物は縁を持たない方三間の建物と想定される。

遺構からは仏堂か塔か、塔だとした場合、何層の塔か、層塔か多宝塔かを決める手立てはない。

遺構の解釈 史料からみた場合、従来からこの遺構が最澄の計画した筑前宝塔院と推定されてきた。

弘仁九年（818）に最澄が計画した六処宝塔（註2）のうちの筑前宝塔院は、石清水文書の「承平七年大宰府縁」に記されるように、「筑前龍門山」にあり、「龍門山分塔」と呼ばれ、證覚の手で承平三年（933）以前に建立されていた（註3）。

筑前宝塔院が龍門山のどこかに建てられたことは確かであるが、34SB001がそれに該当するか否かは、遺構や遺物からだけでは確定することは困難である。

ただし、伴出遺物の年代が、筑前宝塔院の建立された承平三年以前と合致していること、34SB001の

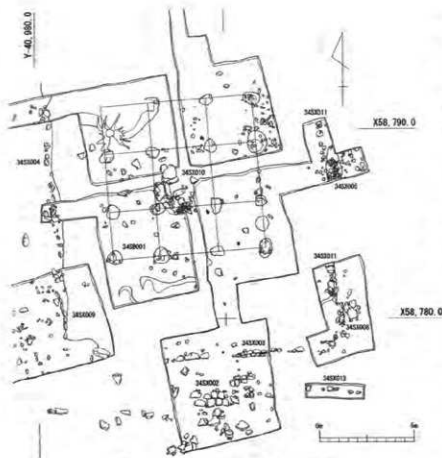


図1 第34次 34SB001遺構図（1/200）
（出典『宝満山遺跡群 6』太宰府市教育委員会 平成22年）

平面規模がきわめて大きい点は、留意しておく必要がある。

平面規模の点で、現存遺構と比較しておきたい。層塔及び多宝塔の現存遺構のうち、一边8mを超えるものは、表1に示すとおりで、五重塔では東寺五重塔・興福寺五重塔と、方五間の大塔形式の根来寺大塔、方五間の天台系多宝塔の切幡寺大塔だけである（註4）。一方、正方形平面の方三間堂は一边7m以上、8m未満の規模の現存遺構は少ないが、8mを超えるのは表2に掲げたものだけである。

すなわち34SB001が方三間堂とすれば、規模の大きい部類に属するとは言え、特異なものではない。一方、塔だとすれば、特異な規模を持つことになる。34SB001の造営年代と立地から見て、筑前宝塔院の遺構と考えることは可能であり、その規模の大きさは、六処宝塔の一つという、一般の塔とは異なった塔たる所以を示すと見なすことができよう。

建築形態の復原 このように筑前宝塔院の遺構だと考えた場合どのような建築形態が想定できるだろうか。

天台系の多宝塔については建築史学の分野では論争がある（註5）。下層・上層とも方形平面の二層の塔と考える考え方、下層が方形平面で上層が円形平面の多宝塔と考える考え方の二通りである。今両説の適否を判断する材料を持たない。

森弘子は「首崎八幡宮縁起」の社頭絵図に描かれた豊前宝塔院に該当する塔と、「岩船山寺藏菩薩縁起」に描かれた龍門山宝塔と

推定される塔を、34SB001の建築形態推定の手掛かりとして提示した（註6）。前者は上層・下層とも方三間の塔で、下層風根の上に亀腹がある。上層が円形平面の場合、亀腹があるのは自然であるが、上層が方形であるのに亀腹があるのは不

表1 大規模な塔

建物名	一边の規模	備考
東寺五重塔	9.48	
興福寺五重塔	8.85	
醍醐寺五重塔	6.63	
法隆寺五重塔	6.42	本体の規模
法興寺五重塔	6.32	
天石寺五重塔	6.39	
象頭寺三重塔	7.04	本体の規模
法起寺大塔	6.4	
根来寺大塔	14.92	
切幡寺大塔	9.98	
浄土寺多宝塔	6.61	
勝鬘院多宝塔	6.45	

表2 大規模な方三間堂

建物名	一边の規模
白水阿弥陀堂	9.39
高藏寺阿弥陀堂	9.3
浄土寺浄土堂	18.18
宝生寺弥勒堂	8.53
根来寺大佛堂	8.65
王蓮寺大日堂	8.52
法喜寺本堂	8.59
吉祥寺本堂	8.23
安国寺釈迦堂	8.51
長谷寺本堂	9.42
日轮寺本堂	10.32
西天寺寺元三大師堂	8.08

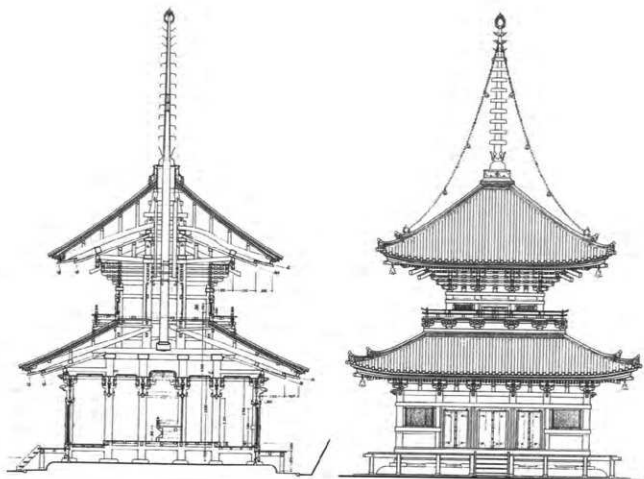


図2 切幡寺大塔立面図(右)及び断面図(1/200)
 (出典 『重要文化財切幡寺大塔保存修理工事報告書』切幡寺 平成13年)



図3 34SB001 復元推定図

自然である。後者は上下とも円形平面の塔のように見え、そのような形態の塔の実例を我々は知らない。ともに江戸時代の絵画史料であり、仮にこれが描かれた時点での事実だとしても、平安時代の形態との関連は定かではない。

従って、34SB001の建築形態を推定する手掛かりは殆どないと言ってよい。ここでは天台系の多宝塔として現存唯一の切幡寺大塔(明治維新まで住吉大社神宮寺の塔)を参照することにする。切幡寺大塔(図2)は下層が方五間、上層が方三間であるが、34SB001は現存礎石から下層が方三間であることが確実なので、切幡寺大塔の形式や比例関係を参照して復原図としたものが図3である。

(3) 第37次の遺構(下宮礎石建物)

遺構 検出された遺構37SB010(註7)は、五間四面の本体の正面(西側)に孫庇の付いた平面を持っている。従って、全体では桁行七間、梁間五間となる。柱間寸法は、身舎桁行の中央三間が3.6m、身舎両端間が3.2m、身舎梁間は3.6m、庇は四面とも3m、孫庇は4.3mである。礎石には柱座を削りだしたものかそうでないものが不規則に混在する。礎石の一部は岩盤を代用している。孫庇の礎石心から1.3メートル離れた西側に右列があり、これがこの建物の正面の基壇外装である。明瞭な雨落溝はない。背面(東側)に庇柱心から約3.4m離れて溝があり、背面山の手側からの湧水の排水路と報告されているが、これが雨落溝と兼用されていた可能性がある。周囲には縁束の痕跡はなく、身舎内部に一箇所小さい礎石があるのでそれを床束と考える事ができる(図4)。

建物周辺から土器・瓦などが出土している。整地土から検出される土器・陶磁器から、この建物は12世紀後半から13世紀初頭に造営された事が確認されている。孫庇の礎石は本体の礎石よりやや遅れて据えられるものの、工程差と考えられている。

遺構の解釈 この建物の性格を解明する上、周辺の施設の状況との相互関係が重要であるが、周辺の

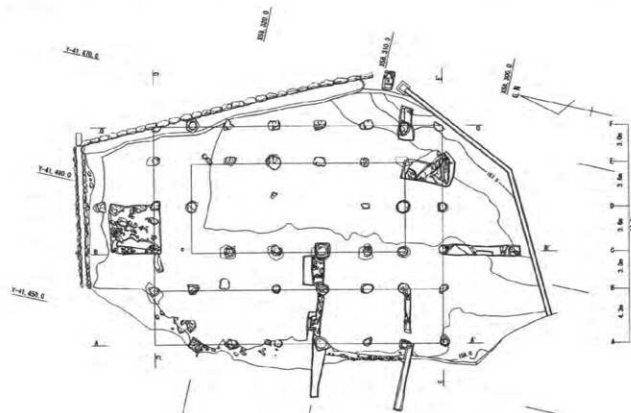


図4 37SB010 遺構図(1/300 出典は図1に同じ)

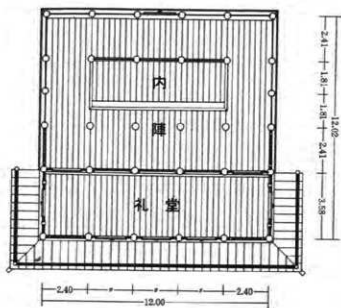


図5 室生寺金堂平面図 (1/200)
(出典『大和古寺大観』第六巻 岩波書店 昭和51年)

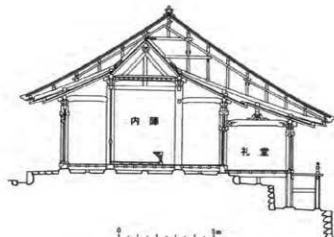


図6 室生寺金堂断面図 (1/200) (出典図5に同じ)

部分が床張りの礼堂、本体は土間床の内陣であったであろう。これら10世紀に造営されている(図9・10)。なお孫庇付の仏堂の類例は他にも、岩手県長者原廃寺(10世紀後半から11世紀)、福島県流廃寺10号平場のSB01(10世紀か)などで知られている(註11)。

広隆寺金堂は「仁和二平広隆寺交臂実録概」(平安遺文一七五号)によって、五間四面の正面に孫庇の付く建物と知られる。孫庇が礼堂、本体が内陣で、礼堂は床張り、内陣は土間床と考えられる。広隆寺では講堂も、寺内の般若院も、新堂院も類似した平面構成の仏堂であった(図11)(註12)。

以上のような類例から判断して、37SB010は礼堂付の仏堂と考えて大過ない。

四面庇のある建物に孫庇を付加するのは、建築の構造としては野小屋成立以前の簡素な技法であり、古代的な建築技法の残る建築と言うことができる。当麻寺曼荼羅堂は、前身曼荼羅堂が永暦二年(1161)に改築されて、孫庇を廃止し、野小屋を用いて礼堂と内陣を一体的な構造で作り上げている。同じ12世紀後半にあって、宝満山では野小屋を用いない古代的な技法の孫庇付仏堂が建てられていた。

発掘調査が行われていない現状では、それは不可能である。ただしこの建物の規模の大きな事、幅の広い孫庇を持つ平面形式から、中心的な仏堂であることは間違いない。

平安時代には孫庇付の仏堂のいくつかの実例が知られている。現存遺構では室生寺金堂、現存遺構の前身形態として確認されているものに当麻寺曼荼羅堂前身堂、発掘遺構として静岡県大知岬廃寺、文献史料から知られるものとして広隆寺講堂が挙げられる。

室生寺金堂は9世紀中期に建立され、三間四面の本体に孫庇が通破風で取り付け、本体が内陣、孫庇が礼堂となっている(図5・6)(註8)。礼堂・内陣ともに板張りの床であるが、内陣は地面に敷ばし根太を置いた低い床である。孫庇は江戸時代前期に改修されているが、おそらく当初からあったものであろう。

当麻寺曼荼羅堂前身堂は現在の本堂の前身建物として9世紀頃に建てられた。五間四面の本体の前面に孫庇が取り付けられているが、孫庇と本体の正面庇部分が礼堂となっていて、身舎と残りの三方の庇部分が内陣となっている。礼堂・内陣ともに板張りの床である(図7・8)(註9)。

大知岬廃寺(註10)では建物AとB1が孫庇の付いた仏堂である。孫庇部分のみ床東らしき礎石が存在するので、孫庇

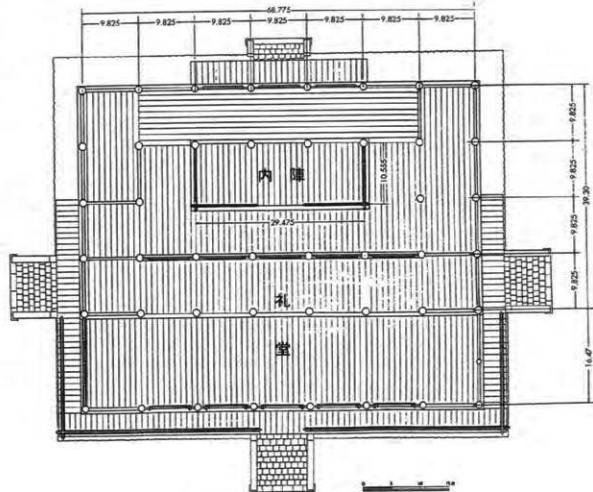


図7 当麻寺曼荼羅堂前身堂平面図 (1/200)
(出典 岡田美男『日本建築の構造と技法』思文閣出版 平成17年)

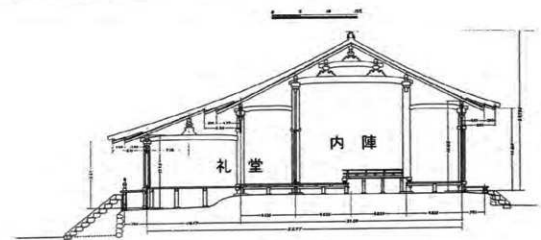
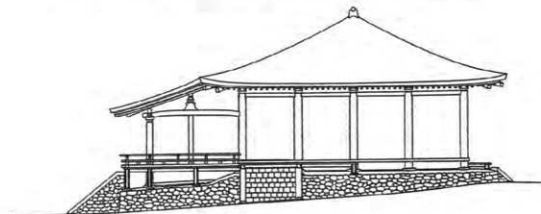


図8 当麻寺曼荼羅堂前身堂側立面図 (1/200) (上) 及び断面図 (下) (出典 図7に同じ)

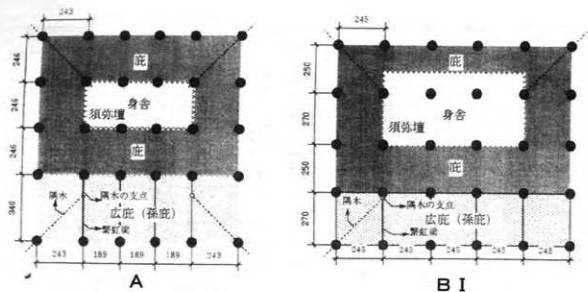


図9 大知波岬廃寺建物A(左)及び建物B I 平面図(1/200)
 出典『大知波岬廃寺確認調査報告』湖西市教育委員会 平成9年

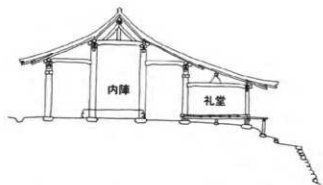


図10 大知波岬廃寺建物B I 推定復原断面図(1/200)(出典 図9に同じ)

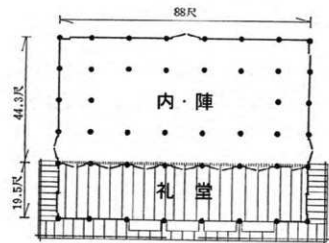


図11 広隆寺金堂推定平面図(1/400)

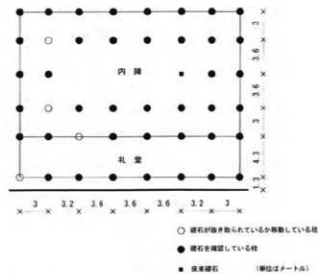


図12 第37次37SB001推定平面図(1/400)



図13 37SB001復原推定図

建築形態の復原 37SB010は身舎・庇からなる本体に、孫庇部分を竊風風で付加した構造と推定した。野小屋は用いていない。身舎内部の床東礎石の存在から、内陣が床張りと推定したので、礼堂も同様と考えられる。縁は建物の前半部のみであると想定した(註13)(図12・13)。

(4) 第42次の遺構

(大門礎石建物)

遺構 検出された遺構 42SB001は野面石積の基壇上に建てられている。基壇の規模は東西幅が24m、南北幅が22.5m以上ある。南には石段や参道と思われる石列が部分的に残り、また東側にも竊で覆った参道状の遺構がある。その基壇面上に礎石が6箇所、礎石抜取穴が13箇所残存していた(図14)。

周辺からは瓦や土器が出土し、整地層の遺物から11世紀後半に建てられたと考えられる。

遺構の解釈と復原 柱配置は、礎石・礎石抜取穴から推定して、図15に示すように桁行五間、梁間五間と推定した。特に南西部に残る石は、堀方が明瞭でなく、他の礎石と比べて低い位置にあって、礎石と認めることに疑問を呈する考え方もある。しかし広い基壇の南西部に柱が立たないのは極めて不自然であるので、疑問視されている石も含めて、平面復原の材料とした。

この復原案での柱間寸法は、桁行中央三間は4.2m、両端間は3m、梁間は前(南)から3、4.5、3、3、3.3mである。前方二間通りを礼堂、残る後方を内陣とする中世仏堂形式である。

このように復原した場合、基壇の向きと建物の向きがわずかにずれることになる。また側柱心から基壇東辺までの距離は2.7m、側柱心から基壇西辺までの距離は3.3m



図14 第42次 42SB001 発掘遺構図 (1/400)

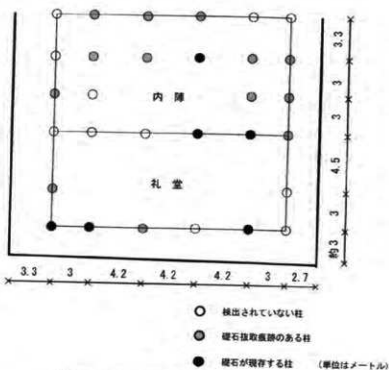


図15 第42次 42SB001 推定平面図 (1/300)

と彫削が生ずる。この原因は、柱配置の推定に問題があるか、あるいは現存する礎石と基壇に時期差があること等が想定される。これらの課題について、現状の発掘調査成果からはそれ以上追求する余地がないので、不整合を残しつつも、図15の復原案を現時点の成案と考えておきたい。

上述のように推定するならば、礼堂堂内に柱の痕跡がないこと、梁間が五間となることから、野小屋を用いた構造の建物と考えられる。屋根は入母屋造・寄棟造の二通りの想定が可能であるが、入母屋造として描いた。屋根葺材は檜皮を想定している(図16)。

野小屋は10世紀には使用されるようになるが(註14)、現存遺構で中世仏堂形式の建物に野小屋が用いられたのは、既述の当麻寺曼荼羅堂(永暦二年 1161)が最初である。従って42SB001は当麻寺曼荼羅堂より通る野小屋使用の事例という事になる。

2 発掘遺構の建築的特質

発掘調査で検出された遺構からその上部に立っていたであろう建物の形態を復原する作業について、厳密な学問的正確さを保つことは不可能である。想定できる複数の可能性の中から蓋然性の高いものを選択しつつ、恣意的な選択をせざるを得ないものである。

前節に示した復原はそのような留保条件を含んだ復原案の一例に過ぎない。その事を踏まえながら、復原作業を通して明らかになったこれら三棟の建物をめぐる問題について、若干の考察を行いたい。

(1) 34SB001

34SB001は筑前宝塔院と想定した。実際には筑前宝塔院は別の場所に立っていたかもしれない。しかし筑前宝塔院の遺構と仮定するならば、規模の大きさは相応の対応関係を持つことになる。天台系の多宝塔の形態についても二案があるが、通常の多宝塔(下層方三間、上層円形平面)ではこの規模のものは存在しない。

上層が円形平面であり、方形平面であれば、この規模は六処宝塔に期待された機能と彫削をきたすものではない。すなわち「叡山大師伝」(承平七年大宰府撰)に記される、塔の上層に千部の法華経を安置し、下層では法華三昧を修すべき場として、相応しい規模を備えていると言えよう。この意味において34SB001を筑前宝塔と推定して、規模の大きな多宝塔の建築形態を想定する蓋然性は高いと言える。

最澄が企画した六処宝塔院の内の近江宝塔院は、円仁の代になった貞観四年(862)に完成するが、それは方五間の多宝塔であった(註15)。宝満山麓に建てられた筑前宝塔院は方三間であるが、方五間の切幡寺大塔に匹敵する規模を持ち、日本全土を法華経の功徳で覆おうとした最澄の雄大な構想を現すに相応しい建物と見ることができる。

(2) 37SB010と42SB001

37SB010は五間四面孫庇付の仏堂、42SB001は桁行五間、梁間五間の仏堂である。前者は七間堂、後者は五間堂であるが、梁間の総柱間寸法はほぼ等しく、いずれも寺院の中心的な堂宇と見なすことができる。両者は比較的近接して立っているが、37SB010は西向き、42SB001は南向きであって、立地の仕方は大きく異なっている。

現在の龍門神社下宮が、中世初頭にどのような施設であったかは不明であるが、近世初頭の「龍門山旧記」には下宮には金堂・講堂があったと記されており、神社と寺院が近接して営まれ、その一つが37SB010であった可能性がある。

42SB001もその関連仏堂と考える事も可能であるし、それとは切り離された別の寺院の本堂であった可能性もある。もとよりその別の寺院も大きくは龍門山に包摂されたものであろう。

両者ともに礼堂を備えているので、平安時代中期頃から建設されるようになる中世仏堂形式の仏堂と



図16 第42次42SBO01復原推定図

いうことができる。ただし37SBO10は庇庇の孫庇を用い、42SBO01は孫庇を用いない。屋根構造との関係で言えば、37SBO10は野小屋を用いず、42SBO01は野小屋を用いていた。

37SBO10は12世紀後半の建設でありながら野小屋を用いず、それより一世紀遡る時期に建設された42SBO01は、先進的な野小屋の技術を用いていたのは、工匠の選択した技法の差なのか、それとも建物の性格を反映しているのだろうか。

37SBO10の礎石は柱礎の造り出しがあって、古代寺院の礎石の転用かとも推定されているので、そうであれば前身建物の形態や技法を継承して、孫庇を付ける古い技術が再度、採用されたことと見ることができよう。

いずれにせよ、二種の建築技術が平安時代後期・院政期の宝満山で併用されていたことは興味深い。畿内の建築技術が早くに地方に伝播したことは大知波陀寺でも知られたが(註16)、当然ながら九州でも同じ状況であった。しかし新技術が旧技術を直ちに一掃するのではなく、混在しつつ、徐々に転換していったのであろう。

3 宝満山の寺院構造への見直し

宝満山に所在した寺社は、史料上は龍門宮、大山寺、有智山寺、内山寺等と呼ばれてきた。これらの寺社が同一の組織か、別の寺社かは確証がない。大山寺・内山寺の寺名は「ダイセン」という音が共通すると考えられるし、「内」を訓で読めば「有智」の読みとも一致する。とすれば少なくとも寺院は一つしかなかったことになる。

しかし実態としてどうだったのだろうか。前述のように、37SBO10と42SBO01は多少の規模の差こそあれ一寺院の中心的な堂宇、すなわち本堂と呼ぶにふさわしい規模と形式を持つ建物である。内山地区に近接して二棟の中心的堂宇があることになる。

一方、南谷地区の北端には、中堂跡と推定される礎石のあったとされる場所があり、「中堂」という

小字名も残っている。近世の「宝満山絵図(西)(福岡県立美術館蔵)にも「コンホン中タウ」との記載が、その場所と思われる位置に記載されている(註17)。その規模は不明であるが、中堂(根本中堂)という呼称から推察して、しるべき規模を持った中心的堂であろうことは推察される。

つまり宝満山西麓には、二地区にあわせて三棟の本堂らしき建物を持っていたことになる。このことについて、中世の山林寺院についての既往研究を踏まえれば、以下の三つの可能性を想定できる。

第一：比叡山に典型的に見られるように、一つの寺院がいくつもの谷に分かれて下位の僧団組織を作り、その谷の僧団組織に固有の仏堂が設けられる場合

第二：全く別の寺院が複数併存している場合

第三：単一の寺院内に複数の中心的堂宇があって、それが地域的に散在している場合

ただしこの三種の区分、とりわけ第一と第二の区分は明確ではない。理念的には、谷ごとの意志決定と、すべての谷を包括した惣寺の意志決定が行われるのが第一の類型であり、それがないのが第二の類型と類別することができる。しかし史料が充分残存しなければこれらの区別はできない。

宝満山についてもそのことを確認する史料はないようなので、実証的な判断は容易でない。「龍門山宝満宮伝記」巻下(註18)の正慶二年(1333)の記事には「凡自上宮至下宮、有智山・北谷・原・南谷・中堂等地、皆龍門山也」と記す。これを字義通り受け取れば、列記された地区ないしは組織は、龍門山という一つの法人(すなわち寺院)に含まれることになる。この史料が正しく歴史を反映しているのであれば、第一の可能性が高く、三棟の本堂級の建物はそれぞれの谷の主要堂宇と見るか、あるいは第三の可能性と見ることになる。しかし「龍門山宝満宮伝記」の記事は編纂された江戸時代中期の認識が反映している可能性が高く、そのまま中世の状況に遡らせることはできない。実際、森氏は南谷の中堂跡を有智山寺、龍門山下宮付近を大山寺と推定され(註19)、別の寺院の存在を想定されているようである。

こうした霊峰を中心とした複数寺院のあり方の参照事例となるのは、国東の六郷山である。六郷山は、両子山を中心とした国東半島の山塊を信仰の中核として、多数の寺院が散在した。鎌倉時代中期以降、六郷山執行や六郷山所司が六郷山寺院群全体を代表し運営する機構が形成されるが(註20)、これは安貞二年(1228)に六郷山が関東御祈禱所としての地位を獲得し、六郷山の寺院群が比叡山の支配下に安ったことに起因する(註21)。それ以前は六郷山の諸寺院を包括する組織や機構は確立していなかったと見られる。

六郷山では、少なくとも現在の寺院の伽藍形態から見る限り、個々の寺院の独立性が窺えるので、現在の景観から窺い知ることのできる寺院の独立性と、それら寺院の連合組織の複合的な寺院運営には乖離があるかに見える。しかもその運営の組織のあり方は時代によって変化した。このような六郷山のあり方は、形式的に分類した上述の第一と第二の寺院の存在形態が複合したようなり方と見ることができ、宝満山も六郷山をモデルとして理解する事が可能ではなからうか。

このように考えた場合、中世後期の播磨地域の社会を描く「峯相記」が有効な情報を提供する(註22)。「峯相記」には、よく知られているように、播磨地域の公家・武家の御願所として円教寺・随願寺・一乗寺・八葉寺・神積寺・普光寺の六箇寺を挙げ、これらの六箇寺は酒見大明神や国衛での法会に際して、共同して出仕していた。しかし全体を統合する組織ができているわけではない。中央の大寺院は別として、住僧数が限られた地方にあっては、このような隣接地域の寺院の共同運営による法会遂行が、むしろ一般的であったのではなからうか。それは僧侶数が激減した現代においても見られる現象である。このような相互に独立した近隣寺院の緩やかな結合の模態を、先に復原案を示した三棟が機能していた中世前半の宝満山で想定することも可能であろう。龍門宮の祭祀を共同で遂行しつつ、緩やかなネットワークの中で独立した複数寺院の集合体と考える事が、本堂級の仏堂遺構の複数確認された宝満

山山麓の寺院構造の、蓋然性の高い理解ではなからうか。

もちろんこのような理解は、一つの仮説として提示したものであり、今後の発掘調査の増加と、関連史料の探検によっては正されるに違いない。そのためにも宝満山の遺跡の包括的保存と研究の継続が保証される必要がある。

註

(山岸常人)

- 註 1 34SB001の遺構と出土遺物については、下記の報告書に拠る。
『宝満山遺跡群6』(大宰府市教育委員会 平成22年3月)
- 註 2 『弘仁九年六所造宝塔願文』(『天台叢書』所収)
- 註 3 森弘子『九州における六所宝塔の建立をめぐって』(『太宰府学』第三号 大宰府市市史資料室 平成21年)
- 註 4 五重塔・三重塔・多宝塔のうち、表一に掲げた建物以外はすべて一辺6m以下である。
註 5 濱島正士『多宝塔の初期形態について』(『日本建築学会論文報告集』227号 昭和50年1月)
清水 擴『多宝塔についての史的考察』(『建築史学』第一号 昭和58年10月)
清水 擴『六処宝塔と「多宝塔」』(清水『延暦寺の建築史的考察』中央公論美術出版 平成21年7月)
- 註 6 前掲註3 森論文、宮崎宮宝塔と豊前宝塔院の関係も同論文に詳しい。
- 註 7 37SB010の遺構と出土遺物については、前掲註1報告書に依る。
- 註 8 毛利 久『生室寺の創建と金堂諸像』(『大和古寺大観』第六巻 生室寺 岩波書店 昭和51年)
- 註 9 岡田英男『日本建築の構造と技法』(思文閣出版 平成17年8月)
- 註 10 湖西市文化財調査報告第37集『大知波岐庵寺跡確認調査報告書』(湖西市教育委員会 平成9年)
- 註 11 『佛教藝術』265号 特集 山岳寺院の考古学的調査 西日本編(毎日新聞社 平成14年)
『佛教藝術』315号 特集 山岳寺院の考古学的調査 東日本編(毎日新聞社 平成23年)
- 註 12 山岸常人『中世寺院社会と仏堂』第一部第一章(瑞書房 平成2年)
- 註 13 東南隅から西へ二個目の礎石は、岩盤を削り出したもので、西へ向かって地覆を詰め込んだとも考えられる枘らしき彫り込みがある。このことから、内陣が土間であると考え事も可能である。あるいは、床張りだが彫り込みの下にも壁があって床下への出入りを防いでいたと見てもできる。復原図は岩盤の枘らしき彫り込みを考慮せず作図している。
- 註 14 山岸常人『大知波岐庵寺の礎石建物の構造と性格』(湖西市文化財調査報告第37集『大知波岐庵寺跡確認調査報告書』湖西市教育委員会 平成9年)
- 註 15 清水擴『惣持院と東塔』(前掲註5清水著書所収)
- 註 16 前掲註14
- 註 17 森弘子『宝満山の環境歴史学的研究』(岩田書院 平成二十一年) 第一部第四章・第二部第二章
- 註 18 前掲註17別冊『宝満山史料集』所収
- 註 19 前掲註17
- 註 20 網野善彦『豊後国六郷山に関する新史料』(『研究紀要』IV 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 平成元年) 所収史料
櫻井成昭『六郷山と田染荘遺跡』(同成社 平成十七年)
- 註 21 前掲註20櫻井著書
- 註 22 『兵庫県史』史料編 中世四(兵庫県 平成元年)

第6節 龜門神について 一 龜門神社史一

1 はじめに

現在の龜門神社の祭神は中央に玉依姫命、左の相殿に神功皇后、右の相殿に応神天皇を祀る。延喜式内社であり、旧官幣小社である。中世以来、二座の神を祀ることは史料にも明白であるが、『延喜式』では、筑前国御笠郡は二座並大社で「筑紫神社名神大 龜門神社名神大」とあり、龜門神社はこの時点では一座であったことが知られる。

龜門神社の史料上の初見は、承和7年(840)4月21日、龜門神に従五位上を授けた『続日本後紀』の記事であり、同書承和9年(842)7月3日条には崇寧により龜門神社等諸社に奉祭したことが見え、承和14年(847)には、天台僧円仁が唐から帰国後、龜門山大山寺において龜門神などのために報謝の転経を行ったことが、『入唐求法巡礼行記』に見えている。

龜門神への叙位はこの時期集中して行われ、嘉祥3年(850)10月7日従五位上(『文徳実録』)、貞観元年(859)1月27日従四位下(『三代実録』)、元慶3年(879)6月8日従四位上(『三代実録』)、寛平8年(896)9月4日正四位上(『日本統略』)が授けられている。その後しばらく叙位のことは史料に見えないが、龜門神社は大山寺の発展と相俟って発展、神仏習合が進み「龜門宮」と称するようになり、嘉承元年(1106)11月3日、龜門宮に正一位が授けられている(『中右記』『百練抄』)。

鎌倉期の縁起『龜門山宝満大菩薩記』には、表紙に「九国二嶋惣鎮守」と謳い、永永2年(1111)鳥羽院の宣旨に「八幡大菩薩伯母本朝鎮守大明神」、久安2年(1146)近衛院の宣旨に「九州權護之鎮守一府攝依之尊神」とある事などを記し、江戸期の縁起類には白河院の応徳2年(1085)5月9日、「龜門山大神社は九州惣鎮守」の官符を下し神領80庄を賜ったとある。他に徴する史料はないが、大宰府の亀門除けの為に神を祀ったのが神祀りの初めとする伝承や、未社の由来に80庄の存在を示唆するものが複数あること、石清水八幡宮との関係、考古学的知見等を併せて考えれば、史実としても差し支えないと考えられる。また応徳2年(1085)には龜門神社、天永3年(1112)には龜門上宮の遷宮日時を陰陽寮が勘申しており(『石清水文書』)、さらに『中右記』『台記』『百練抄』など貴族の日記に龜門宮焼亡の事や、長治年間、龜門宮をめぐって石清水八幡宮と比叡山が争った事件の記事が詳細に見られるなど、大宰府の龜門宮の存在は決して小さなものではなかったことが窺える。

本節では、以上の史料に表れた事項を踏まえて、縁起等を勘案しながら宝満山の祭神について考察し、かゝり々の信仰の有り様を述べる。

2 龜門神社の草創

『龜門山宝満宮伝記』(以下『伝記』)等、江戸期の縁起によると「天智天皇が都府樓(大宰府政庁)を建てた時、龜門に当たるこの山の頂上に、真神を刺し端出繩引籠めの祀りをしたのが祭祀の始まり」と言い、ついで天武天皇の白鳳2年2月10日、多年この山で修行する心遠上人(神僧とも法僧とも)の前に貴婦人が現し「我は玉依姫なり。国を守り民を安からしめんが為此の山に多年住んで居る」と告げたかと思うと、須臾の間に雲霧四方に合し貴婦人は金剛神に變じ、十神を従え、九頭の龍馬に駕つて飛行した。心遠は感嘆して奏聞し、天皇は有司に勅して社を立て「宝満宮」と号し、護國国家の御願所とした。と伝えられている。

龜門神社は、上宮・中宮・下宮の三殿からなる。開山伝説にある社は「上宮」であるとする縁起もあり、長治2年(1105)には龜門上宮神殿の存在が確認される(『中右記』)。巨岩に覆われた山頂は8世紀以来の祭祀の場であり、明治初期まで一貫して上宮が最も尊重された。下宮は、『龜門山田記』(以下

『旧記』に「南谷ノ衆徒上宮ヲ勧請シ神神ヲ祭ル、上宮ニシテ下宮ト号ス」とあり、「社記」にはその年を延喜3年(903)3月としている。江戸期は宝満25坊が山上に住んだため、下宮は円光院(寛政2年筑前寺院帳)。法忍坊(文久3年「筑前国龍門山并末山同派修験院名書上帳」)聖護院(文書)などという組下山伏が管轄していた。中宮は、蒙古襲来後、修験の中心道場として開発されたものと考えられる(森2008)。

『龍門山宝満大菩薩記』(以下『大菩薩記』)では、龍門宮上下宮と十所王は香椎と同じ聖武天皇の神元元(724)の草創であるとしている。十所王は玉依姫と共に示現した十神で、江戸期に至っても若干の神名の差異はあるものの、「十社皇子」として山中小社のうち、根本地主大田明神本地大日如来に次ぐ位置を占めている。地主神大田明神については、『伝記』に、「御笠山の地主神」とし、「当山を龍門大神に奉る時“あやしくもわれ濡衣を着つるかな御笠の山をひととられて”と詠い、濡衣宮に移った」と記している。

見貞軒は『筑前国統風土記』(以下『統風土記』)御笠郡上龍門山神社の項に「この山は峯高くそびえ、雲霧ふかおほひ、烟気つねに絶えず。故に龍門山と云。又御笠山とも云。太宰府は此の山下にある故、御笠の里と云。この山を成は宝満とも号す」と、3つの山名があることを述べている。山名の変遷は、『大菩薩記』に「神功皇后が応神天皇を産出した時、皇后の姉である姫野大瀧命は仏頭山とも御笠山とも号する高山龍宮家に登り、龍門を立てた。仏頭山を改め龍門山と号することはこの時より始まった」と記している。仏頭山は宝満山の隣峰で開山上人の墓のある仏頭山のことと考えられ、この山もまた信仰的には一括の山として重要視されていたことが窺われる。

御笠山から龍門山、宝満山への山名の変遷は、とりもおさずこの山の中心的な信仰の変化を物語っている。御笠山という山名は笠型の山容によると考えられる。宝満山は南の方角から望めば富士山を思わせる秀麗な姿をし、そこを水源として万葉集に「崖城川」と詠まれた宝満川が、現在の太宰府市高生、筑紫野市、小郡市など筑紫平野を潤し、やがて筑後川に合流する。流域には肥沃な土地が広がり、弥生時代以来の遺跡の宝庫である。また西側北谷を水源とする御笠川は福岡平野を潤し博多湾に入る。御笠山は農耕に必要な水を恵む「水分の神」であり、この山の地主神を「大田明神」というのも「田」を神格化した名であると考えられる。『伝記』の伝承はそうした自然神が性格の違う神へ変更したことを暗示するものとして興味深い。

龍門山の名の起りについて、『統風土記』には「この山は絶えず雲や霧が覆い、ちょうどカマドで炊きかしているように見えることから「龍門山」というのだとしているが、『大菩薩記』をはじめ縁起類では「龍門岩」に拠るとする。江戸期の縁起の冒頭はいずれも龍門岩と益影井にまつる応神天皇あるいは天神誕生の話で始めている。龍門岩は9合目「龍門嶽」にあり、高さ2メートルほどの3石が鼎立した岩をいい、益影井はその直下にある山中第一の秘水である。縁起冒頭に語られるのは、即ちこの山にとって特に重要な聖地だからであろう。

近年の説として、中野輔能は、この山の神祭の初めが天智天皇3年(664)大宰府の鬼門除けのために神を祀ったことによるという伝承と、奈良の三笠山の祭神との比較考証から、都城の守護神として道教で一家の守り神として信仰された龍神が、ひいては国家の安全と繁栄を守る神として祀られたのではないかし、その龍神を祀る故によって龍門山の祭がおこったと考証している(中野1980)。小田富士雄は考古学の立場から、遣唐使の往来に関わる祭祀が行われたと推測される関山果の大飛鳥などの例をあげ、律令時代彫形ミニチュアが神の祭料となっており、龍神が国家的な神として定着していたことを考察し、さらに大陸においてカマドを神聖視して家門の繁栄を祈る家神として信仰された龍神が、大宰府設置にあたって東北鬼門にあたることから、大宰府鎮護の神として位置づけられ国家的性格を有す

るに至ったということ推考している(小田1982)。富田弘子は龍門岩の石に「仙窟」と仙崖が彫ったこと、また仙崖の詩に「龍門丹穴道蒼蒼 玉女神遊天路通」とあることや、『延喜式』巻23民部下の交易雑物の大宰府項に「朱砂一千兩」とある事から宝満山で朱砂が採れたと推定し、高野山の開創伝説に関わる、高野明神・丹生都比売の祭祀に関わり、水銀の精錬に関与した龍門家、龍門神社との共通性に注目している(富田2010)。

延暦22年(803)、最澄は龍門山寺において遣唐4船の平安を祈り薬師八幡を彫り、法華経・涅槃経・華嚴経・金光明経等を講説した(『叡山大師伝』等)。龍門山寺の存在は、9世紀初頭には「龍門山」という山名が定着していたことの証左である。龍門神を祀る「龍門山」というのか、龍門山の神である故「龍門神」なのかは容易に決し難いが、山中諸処に祭祀が行われた痕跡がある事、遺物の内容が場所により異なる事などを勘案すれば、宝満山は大宰府あるいは筑前国、山鹿住民の祭祀の場であり、山中諸所で祭祀が行われていたが、次第に龍門岩あるいは頂上であつた龍門神社に集約され、8世紀後半から9世紀初頭に龍門神社が創建されたといえることができるのではなかろうか。大宰府の鬼門除けに祀った神が「八百万の神」という伝承や、平城京の東の春日山・三笠山(御笠山)で行われた遣唐使の航海安全が「天地地紙」に対しての祈願であり、春日大社に対してではなかった(『純日本紀』養老元年・宝龜8年)ことなども、考察の材料としたい。

しかしいずれにしても、御笠山から龍門山へ、大田明神から龍門大神への変化は、この山が自然崇拜に基づく信仰から、国家的、政治的な神への変遷を遂げたことを物語っており、それが大宰府の成立と密接な関係にあったことは論を俟たないであろう。

3 八幡神、比叡山との関係

龍門神は、この地方の豪族が古くから祀っていた神ではなく、律令体制下、新たにつくられた神であり、奉祭の当初から律令国家地方最大の官衙「大宰府」の祭祀と密接な関わりを持つ政治的な神であったと考えられる。神元元年(724)、2年に相次いで行われた、香椎麻宮の創建と宇佐宮の小倉山への遷座は、「律令政権の宗教政策の総仕上げ」とも評され(広渡1997)、対新羅、対人への守護神として神功皇后、八幡神が位置づけられた。

弘仁14年(823)、八幡大神と比売大神の二殿であった宇佐宮に、第三殿として「大帯姫」つまり神功皇后を祀る社殿が造られた(『八幡宇佐宮御託宣集』以下『託宣集』)。八幡神を応神天皇とする信仰の始まりについては諸説があるが、宇佐宮に大帯姫をまつる社殿がまつることとの整合性に注目する飯沼晋一の説に注目しておきたい(飯沼1993)。比売神は現在は宗像三女神とされるが、歴史上様々な説があり、玉依姫=龍門大神=宝満大菩薩を比売神とする説も有力であった。そして龍門大神八幡神の伯母、つまり神功皇后の姉と位置づけられたのである。

龍門大神が八幡のオバであるという託宣は、まず天平勝宝7年(755)の神託として「大帯姫者吾母。即妾嶋羅羅王乃夫人也。龍門明神波吾妹。龍女波吾妹。是十一面觀音之变身也」と『託宣集』に記され、また「或記云」として後嶋羅羅王の娘五人として、「一、八歳龍女 二、龍門(宝満) 三、香椎(聖母) 四、河上 五、高知尾」が羅羅王の子とされている。この系譜は、『大菩薩記』の冒頭にも載せられ、本縁起は全編、神功皇后と宝満大菩薩の密接な関係が綴られている。

奈良時代に上記のような内容の託宣があったとは、時代の思慮からも考えられないが、宝満山に寺院が建立されたなどの何かの年紀を示唆するものかも知れない。またここでは「伯母」ではなく「姨」と言われている。「姨」はオバであり母親の姉妹である。長治年間(1104~1106)、宝満山をめぐって比叡山と石清水八幡が争った事件の裁定をめぐる陣定で、中納言大江房が「昔延喜年中八幡託宣云、龍戸

宮者是我嫡母也」と奏聞している『中右記』。延喜年中の託宣とは、富崎宮創建のきっかけとなる延喜21年(921)の託宣をさしている『富崎宮縁起』。『縁起』の信憑性の検証は措くとしても、龍門宮は八幡のオバだと延喜年中の託宣にあった」という言説が平安末には存在し、それが一定の力を有していたことは間違いない事実といえよう。このような言説が何時構築されたかは不明であるが、宇佐八幡の龍門社への接近は可成り早い段階からあったと思われる。やがて八幡宮内における宇佐と石清水の勢力の逆転から、龍門宮も石清水の支配下に入ることとなる。

龍門宮と石清水八幡宮の関係を示す史料は、石清水八幡宮棟別当清が大山寺別当に補されたため、前別当院蔵が、永保3年(1083)、上洛の途中幽憤して亡くなったという「宮寺縁事抄所司僧綱進次第」(『神道大系』1988)の記事が初見である。院蔵自身も石清水八幡宮棟別当を努めた人物である。石清水八幡宮と大山寺の関係が院蔵以前に遡るかどうかは不明であるが、頼清の後には、その子光清が大山寺別当になっている(『卅五文集』『中右記』)。ここで注目すべきは石清水八幡宮の関係者が龍門宮の宮司ではなく大山寺別当に補任されていることである。

天元2年(979)宗像宮に大宮司を置くよう命じた「太政官符」に住吉・香椎・筑紫・龍門・富崎が大宮司をもって貢ましていることが『類聚符宣抄』。この頃までは山内に於いて寺院に対して神社が優位な位置を占めていたとみられる。しかし石清水八幡の別当が大山寺別当を兼ねた11世紀末から12世紀にかけては、龍門宮は存在するものの、宮司についての記述は見あたらない。『中右記』長治2年(1105)10月30日の項には、「龍戸宮者在大山之内」と見え、この頃には、大山寺が一山を統轄していた様子が窺える。また同項には龍門宮が「八幡の別宮」であるとも記している。

最澄が入唐求法の平安を祈って薬師仏を彫った寺は「龍門山寺」であったが、三代天台座主となる円仁が、承和14年(847)帰国後、報謝の転経をした寺は「大山寺」であった(『入唐求法巡礼行記』)。神々への報謝の転経は11月28日から12月3日の間、九州の僧侶を束ねる観音寺講師の助力を得て行われた。金剛般若経五千巻の転経を龍門大神・香春名神・八幡大菩薩のためにはそれぞれ1000巻ずつ、住吉大神・香椎名神等、対外関係などに関して公の祭祀が行われてきた神々、筑前名神・松浦少武(藤原広嗣)の霊に対しては500巻ずつの転経が行われている。1000巻転経を行った三神は、最澄も入唐に際し祈願に訪れた神である。円仁以後も、入唐僧等の龍門大神への祈願は続き、承平3年(933)には、六所宝塔のうちの龍門山分塔(安西筑前宝塔院)が沙弥遊覧によって建立された。こうした経緯を経て、龍門山大山寺は発展し、宝満山の神仏習合は一段と進んだ。

最澄以来、天台宗にとって大切な山であった龍門山に、石清水八幡宮の触手も伸びたわけであるが、龍門山内部の様相は複雑で、石清水の支配に一枚岩とはいかず、多くの神人・僧徒をかかえ一触即発の状況であった。そしてこの状況は、朝廷、大宰府をも巻き込んだ比叡山と石清水八幡の抗争と見做し長治元年(1104)に爆発した。この事件のなりゆきは『中右記』『卅五文集』『暇齋』などによって詳しくたどることができる。いわば当時の中央政権にとっても大事件だったのである。結局この事件は、比叡山側に有利な結果に終わり、大山寺は「天台末末寺」ということになり石清水八幡宮の勢力は龍門山から払拭された。この間、長治2年3月3日には龍門上宮の神輿が焼亡し、御正鉢まで焼けるという事件がおこり、軒輦御が行われている。

こうしたゴタゴタにも拘わらず、翌年嘉承元年(1106)11月には龍門宮は正一位に叙せられ、繁栄はなお続いたのである。この繁栄は対宋貿易によると非常な大きい。大山寺は交易に有利な地を荘園として持ち、荘園内には宋人も居住し、経済的にも文化的にも非常に充実していた。それを物語るものとして、天台真意宗総本山西教寺(大津市坂本)所蔵の『南條疏礼記』、要法寺所蔵の『観音玄義疏記』がある。原本は共に永久4年(1116)博多津唐房の大山船隻三郎船頭房有智山明光房の唐本を書写したもので

ある。博多津唐房は博多にあった中国人の居住地である。鎌倉時代の史料にも、「曾波留」という名の政所職(『海津文書』)や「張光安」という名の船頭(『仁和寺日記次記』等)など、外国人と思われる人物が大山寺寄人として見える。

4 宝満大菩薩の誕生

前項に述べた、龍門神が八幡神の伯母とされるなど、八幡教の中に於いて重要な位置を占めていたことを述べた。さらに『大菩薩記』の末尾には龍門三所を一脚脚 宝満大菩薩・二脚脚 聖母大菩薩・三脚脚 八幡大菩薩とし、首崎宮、宇佐宮も、主祭神の配置は異なるものの同じ三神を祀り合っていることを記している。

現在の山名である「宝満山」は、祭神の神仏習合的な称号である「宝満大菩薩」による。山の神が通常「権現」にという称号で呼ばれるのは異なり、菩薩号であることも八幡宮との深い関係を物語っている。「宝満大菩薩」の初見は、宇佐宮弥勒寺頭神軒が正応3年(1290)～正和2年(1313)に撰した『八幡宇佐宮御託宣書』、あるいは宝満山最古の縁起『龍門山宝満大菩薩記』に求められる。史料上の初見が鎌倉後期としても、龍門宮に宝満大菩薩・聖母大菩薩・八幡大菩薩をセットで祀ること、主祭神を宝満大菩薩とし、本地十一面観音という解釈を付することなどは、司祭者の関与が不可欠であり、石清水八幡宮の社僧が大山寺別当を兼帯していた平安後期に成り立ちと考えるを得ない。院蔵、頼清、光清と、3人の石清水関係の大山寺別当が史料に現れるが、その中でも白河天皇、藤原師通という時の権力者の後裔をもち、法華経にも八幡思想にも精通し、かつ熟年に20年という期間大山寺別当を務めた頼清が、この大事を成し遂げたと推考するのである(森2008)。

宝満大菩薩の称号は「仁王般若波羅密護国經受持品第七」の冒頭、釈迦牟尼仏が無量神力を現したとき、千華台上に見じた「宝満佛」によるのではないだろうか。仁王経は仏陀が16人の王に説法する形をとり、この経を崇敬し誦誦することによって王自身も王国も災いから護られると説かれている。つまり「宝満大菩薩」という称号は護国の神としての性格を表象するものといえよう。八幡宮でも仁王経は護国の経典として法華経と共に重視された。頼清は、寛治3年(1089)藤原師通が石清水八幡に参詣し、金泥般若心経一巻、法華経一部、仁王経一部を書写したとき講師を務めている(森2004)。

中世を通じて、龍門山の神は「宝満大菩薩」「宝満権現」「聖母宝満佛」などと言う名で資料に現れ、戦国期には、宝満宮の牛王宝印の料紙を使った起請文、「当国鎮守宝満大菩薩」「龍門山宝満大菩薩」などの神名がある起請文が交わされた(中野1980)。

5 玉依姫の御事

龍門神社の神が玉依姫だと明記した史料は、寛文7年(1667)の松下見林の後書がある度会延経の「神名帳考証」が古い例であり、貞享4年(1687)松下見林の校閲を受け編纂された『伝記』には冒頭に「龍門山大神は勳焉草草不合尊之妃玉依姫なり、鎮護國家のため大明神と現じ龍門山に降ります。故に龍門山という、大神また宝満大菩薩と号す(原文漢文)」と明記している。宝満山の神が「玉依姫」だと明記するのは管見の限りこれ以上遡らないが、おそらく宝満大菩薩が玉依姫であるということは、宝満大菩薩の誕生当初からであったと考えられる。

石清水八幡宮別当宗清が建保2年(1214)頃編纂した「宮寺縁事抄」「三所御本地阿弥陀三尊事」では、八幡三所を応神天皇・神功皇后・玉依姫とし、さらに玉依姫の説明として「玉依姫事 文殊入海済度衆生、其数無量、不可勝計、其中八歳龍女、南方唱覚、配法花之勝用、示成道道、今玉依姫彼龍女妹也、昔瀧海教化、仍文殊化身、神功皇后玉依姫同社相遊」と記している。玉依姫が八歳の龍女の妹であること、

法華経の功徳を標榜する神であること、文殊菩薩が仏道に導くこと、神功皇后との関係を強調する点など『大菩薩記』との共通点が多い。玉依姫は仏法、ことに法華経を興隆して衆生の苦を度脱する、きわめて神仏習合色の強い神として性格づけられている。龍女を長女とし宝満・聖母・河上・高知尾の四姉妹がいるとする『大菩薩記』『託宣集』等の説と勘案すれば、宝満大菩薩＝玉依姫という図式が成立するのではなからうか。〔森 2004〕

記紀神話の説に従えば玉依姫は人皇第一代神武天皇の母であり、八幡＝15代応神天皇のオバであるとする説とは矛盾する。柳田国男もその著『妹の力』『玉依姫考』において、八幡三所のうち第二殿の比売大神についての諸説を考察し「我々の極めて難物として居る龍門神社の玉依姫神」と述べている。中世には、宝満大菩薩が八幡のオバであるという説の外に、厳島大明神、白山妙理権現とも一体であるという説（『厳島大明神日記』『平家物語』長門本）や、元竺摩陀陀国から飛来したという説（『宝満山由来書』聖護院文書・高千穂文書）もあり、全国的な規模に於いて様々な解釈が加えられている。

南北朝期になると、宇佐八幡宮や石清水八幡宮に於いても八幡三所の一神、姫大神すなわち玉依姫が人皇第一神武天皇御母であるといわれるようになる（『神祕秘伝 八幡』）。建武中興で王政復古した時代、玉依姫の解釈にも記紀神話に則ったものに変化してきていることが知られる。

「玉依姫」がどういう神であるかについては、柳田国男にはじまり多くの学説があるが、龍門山の玉依姫については、八幡教との関係の中に生じた神であるとしてよいであろう。何故「玉依姫」が八幡教に採り入れられ、八幡神のオバとされたかであるが、それは記紀神話において玉依姫が王権を生み出した母神だからと考えられる。「玉依姫」といい「宝満大菩薩」といい、鎮護国家の意味合いを標榜する御名である。龍門山の神には、古代・中世を通じて「鎮護国家」「異国征伐」の神徳が求められた。承平3年（933）の六所宝塔の建立も最澄の発願から100年以上も経過し、新羅の脅威の高まる中に実現されており、これも鎮護国家・異国降伏のためであったと考えられる。

ともあれ、玉依姫を主祭神とし、神功皇后・応神天皇を奉祭する神社の在り方は、平安時代末より変わることなく今日に受け継がれ、ことに人皇第一代神武天皇の御母玉依姫に対する信仰は、「神武創業」に基づくことされた明治維新以来、大いに強調されるべきことであった。昭和15年の紀元2600年は、皇祖神武天皇の御母玉依姫命を祭神とする龍門神社にとって、神徳を称揚するこの上ない好機であった。その記念事業として発刊された『宝満山と龍門神社』（1940）は、小冊子ながら宝満山と龍門神社のこれらを考える様々な意見が述べられている。その『発刊の辞』では、神話の中の玉依姫命が遠い昔に実際に生きた婦人のように語られる。玉依姫は夫婦神睦まじく、建国の大業を援け、また大いなる母性愛で子进行を慈しまれた。旧來の「神武天皇を産んだ後この山に入った」という神話的、抽象的な説を超えて、現身在この地を訪れ、皇子神武天皇の東征の手助けをしたという話が具体的に主張され、そのことは日本民族の模範とするところであると、「神武天皇の御母」との論調が強調されるのである。また、宝満山が単に玉依姫の靈蹟であるに留まらず、神武天皇も「立ち寄られた山」、つまり神武天皇の聖蹟と位置づけられる論も打ち出されている。

玉依姫の神格は、時代の要請、信仰する者の要請によって、護国の神、異国征伐の神、水分の神、母性愛の神、縁結びの神等、様々な神威を発揮し、今日尚、宝満山の主祭神として信仰され続けているのである。

6 官幣小社龍門神社へ

江戸期の宝満山は、宝満二十五坊といわれる山伏の山であった。宝満修験については第7節で述べるが、明治維新を迎えて、神仏分離令、修験宗の廃止などの法令が出され、龍門神社は明治5年（1872）

村社に列せられた。そして吉祥坊吉田広輝一人を祠掌として残り、6年までには全員が下山した。その際、多くの信者も山伏とともに山を去った。当初龍門神社は、上宮が内山村の村社、麓の内山にある下宮は無格社、北谷の龍門神社が北谷村の村社、中宮の講堂は神祇殿とされ別社と扱われた。明治11年の大嵐で上宮・神祇殿が大破、上宮はその年の11月までに再建されたが、神祇殿再建計画はあったものの再建されないうま今日に至っている。

明治維新の際、宝満山伏が座主をはじめとする改革派（鹿伏派）9坊と守田派（奉仏派）16坊にわかれて争い、一致結束した新しい時代への対応がとれなかったことは龍門神社の没落を招いた大きな要因であった。盛時「九州の総鎮守」とまで称せられ、江戸期においても黒田藩の手厚い待遇を受けていたことを祠掌が神武天皇の御母玉依姫命である事などを考えれば、「村社」という社格はこの社にはふさわしいものではなかった。そのことを最初に指摘したのは、福岡裁判所の判事として赴任していた原田直教であった。原田の「此大神にして官幣に非ざるは明治昭代の大欠典なり」という語を承けた吉岡坪山が渡辺清果令に議し祠掌吉田広輝を説き、官幣昇格の願書を提出させた（本田1906）。

官幣社昇格願書は明治23年11月に着手され、その条件整備は明治24・25年に集中して行われた。明治24年（1891）4月、「福城窟は玉依姫の陵墓」という船曳鉄門の説（『龍門山陵考』）に基づいて福城窟（法城窟）の調査がなされ、同月「龍門神社神祇殿并ニ宝満下宮復旧願」が、翌25年6月28日には、北谷の氏子総代より「氏子復旧願」が福岡知事安場保和宛提出され、北谷の氏神龍門神社は龍門神社遷拝所とされた。同年9月には、龍門神社保存永遠資本金仕訳書がつくれ、社殿建築費等に充てる計画がなされた。永遠資本金の目標額は20,528円余、太宰府村大字内山・同北谷・同太宰府（三条・蓮歌屋・馬場・新町・梅大路町）、御笠村大字原・同吉木・同阿志岐・同牛島・同天山・同香園・同棟須原・同本導寺、二日市村大字二日市・同武蔵、大野村大字乙字、筑紫村大字下見に仕分られた。この時、それまで本社としていた上宮では、参拝に困難であるということで、民有地2480坪を購入し下宮の敷地を拡張、3080坪とし、社殿を建築して正殿と定め、奉幣使参向、一般人民の参拝にも便宜を与えるという計画がなされた。そして、明治25年9月、内山の大臣秩太郎を代表とする上記各村の信徒総代71人と龍門神社祠掌吉田広輝、御笠村助役八尋久兵衛、太宰府村長吉藤壽七が署名捺印し、「龍門神社昇格願書」を提出している。そして明治28年10月6日官幣小社に昇格した。（龍門神社近現代文書5-34）

しかし募金等が順調にいかなかったものとみえ、官幣小社に昇格したとはいへ「他の官国幣社に比して誠に御いたまじき御有様なる由はかねて聞き及び候処には有之候へども、かばかりとは存じよらざりし（中略）もはや杜衰の極点と奉存候」という有様（本田1906）であり、明治36年本田豊吉司着任と共に、附屬講社の結集に着手すると、37年10月には上宮が火災、再建したのは大正元年。下宮本殿の遷座祭は昭和2年になってからであった。土地にあっては官有山林の払い下げについては田中村が明治24年から熱心な運動を展開していたが、明治41年、63町8畝21歩が龍門神社境内に編入された。

7 農耕神として

「地主神大田明神はその名から「田」を神格化した神名であると考えられる。この山を龍門大神に譲って自身は鎌倉人に遷ったという。大田明神は修法の際の礼拝順も宝満大菩薩に次ぐものであった。その社は以前は上宮の石段を下りた所、鬼門除けに八百万神を鎮祭した辺りにあったというが、江戸期は一の鳥居の傍らにあり『筑前国続風土記附録』以下『附録』、寛政9年（1797）の『宝満官山中絵図』によると「龍」つまり焼き物の祠に祀られており、大きな扱いはなかったことが知られる。農耕神という地主神の神格も、玉依姫（宝満大菩薩）に包摂されてしまったものと考えられる。

江戸期、箱崎・太宰府・宝満・雷山・田嶋（宗像辺津宮）の五社、時としてこれに神ノ島・桜井神社を加えた七社が福岡藩の祈禱所となっている（『福岡藩社記』）。これら祈禱所には、天候・悪疫など様々な祈禱が仰せつけられた。特に雨乞祈禱は重要な祈禱で、それぞれに奥の手として雨乞いの儀があった。すなわち箱崎宮座主坊は「机島祈禱」、雷山仲之坊は「神面祈禱」、宰府葦台坊は「水鏡祈禱」、そして宝満御師は「水鏡祈禱」であった。社宝として伝わる「水鏡」と水鏡祈禱については第3節第6項に述べる。明治6年には、山伏の請うた宝満山で、太宰府神社の旧社家3人が水鏡祈禱を行っている（『明治6年太宰府神社日誌』）。

5月29日から7月14日の間、夜中、山中をめぐる大巡行は天台の修法ともいわれるが、この行を行う為の『勧化勘財帳』（井本坊文書、1867年）、この行の目的は専ら「蝗災」を退除し、五穀豊穡を祈願することにあるとしている。明治維新で庶民の願いに深く関っていた山伏が山を下り、彼らが行っていた行事には絶えたものもあるが、現在も龍門神社では五穀豊穡や蝗災退散の御札を發行しており、また一般庶民の行事として存続しているものもある。

作だめし 元旦に行われている「作だめし」は、大世間・日損・水損・風損・大妻・小妻・裸妻・夏島作方・早田・中田・干田・晩田・水田・秋大豆・小豆・粟・そば・養蚕について、籤で吉凶を占うもので、この結果は「宝満宮龍門神社作だめし」として印刷し、授けられる。山伏井本坊の子孫の家にはその版本が残っている。現行のものとは比べ、裸妻がなく、養蚕のかわりに「わた」となっている。山伏がどういう方法で占ったかは不明であるが、行事自体は山伏がいなくなっても神社の手で行われている。1月から5月にかけて、宝満宮を氏神とする地域から「作だめし」を受けに来る。これらの村では講をつくり、その代表者が龍門神社上官に参拝し、下宮にて「作だめし」と五穀豊穡の御札を受けて帰り、村では二輪走を作り代表者の帰着を待つ座がひらかれる。昭和初期には5万枚も印刷されていたが、今日では100枚程度と減少している。とはいえ、糸島市二丈松木・三井郡大刀洗町・古賀市青柳・福津市大石・同須多田・同生家・宗像市光岡・遠賀郡岡町藤塚などから地域の粗毎に代表が参拝し、各10数軒分の「作だめし」の結果や五穀成熟御札を承けて帰っている。宝満講の在り方を今日に引き継いでいるものであろう。また現在では個人で受けに来る人もあるという。

愛嶽詣り 愛嶽山は、宝満山の南に位置する標高432メートルの山である。古く祭神は伊豆奈（飯縄）権現であったが、明治維新以降、駒通十（御飯縄）神とされ、現在は木殿石祠の中に、愛宕御軍地蔵が祀られている。信仰的には宝満山と密接な関係にあり、宝満25坊の行財坊（のち新中坊）が祭祀を受け持っていた。『続風土記』では、「龍門山よりひききくして小なれば、大岳に対して小岳と云なるべし」としており、表題の小岳の下に「或いは愛嶽の字を用ゆ」とある。また「玉依姫が白蛇の姿になって、法城窟に姿を隠したとき、ジッポだけが見え、この山の方を目指してオダケと言う」とも伝え、元禄4年（1691）の道明寺天満宮（大飯藤井寺町）蔵『太宰府絵図』には右端最上は龍門山があり、その下の山に「御歳・大天狗」と記されている。本来「オダケ」と呼ばれていた山にいつの頃から飯縄信仰、愛宕信仰が入り、天狗の山と認識されるようになったのであろう。鳥居の扁額には「大権現」の字が見え、「大菩薩」とよばれた宝満山よりもいっそう修験色を強く感じさせる。

牛馬が、農業や交通の手段としてなくてはならなかった時代は、牛馬安全・五穀豊穡を祈る参詣者で賑わったという。ことに、1月24日、7月24日の祭礼日には、多くの人が牛馬をひいて参拝した。また牛馬が病気の時には土一駄を獻じて祈願すると病気が治るといわれた（『龍門神社 1940』）。明治36年、宝満講社の結果と共に、愛嶽講社の結果が図られ、それまでの参拝状況を調査し、1940の調査した村に牛馬安全御札と掛御守を配布している。明治36年の「愛嶽講社結取明細調査書」によると、筑紫郡・糟屋郡・夜須郡・嘉穂郡の大字単位に結果がかけられ、筑紫郡水城村では水城・因分・坂本・観世音寺・

大佐野、山口村立明寺・針摺、二日市村二日市・紫、御笠村原、太宰府町三条・通歌屋・馬場・大町・新町・五条・北谷・内山、山家村上西山・下西山、糟屋郡宇美村四王寺、夜須郡三根村三年田・櫛木・三箇山・桑曲、中津屋村吹田・赤坂などの村が結果に応じているが、大野村五田では「結取セントセシモ仏教信後多き為メ未だ出来ズ再募集ヲ必要トス」などの注記があり、「新たに募集すべき各町村」として、入講したのとはほぼ同数の大字に再募集をかけている（『龍門神社近現代文書』）。

かつて愛嶽山下宮があった所に遺された石灯籠の一基は、延宝7年（1679）御笠郡大石村の鬼木源助が寄進し、一基は糟屋郡忠勝村の原某が寛政元年（1789）に寄進し、その横の小さな石灯籠は本道寺村日田源作が寄進している。牛馬の祭は昭和30年代まで行われていたが、農村から牛馬が姿を消してしばらくは、愛嶽神社は荒れに荒れ、1月4日に、神官がひっそりと祭祀を行うだけとなっていた。最近では1月4日の祭典に多くの人が参拝し、直会も賑やかに行われる。またここを通過して、鳥越峠から行者道、かもしか新道への登山道をとる人も増えている。

8 講と末社

講 宝満山の「講」の存在を物語る物として、山中の龍門岩に登る手前の「杖捨て」という所に、本社三社の本地仏の種字を彫った岩があり、ここから上に登れない人のための遙拝所としていた。その梵字の下に、「大宰府馬場/宝満講衆等ノ十二/建武四年八月十日/勸進阿闍梨/願成」と彫られている。以前はこのから鉄素を使ってよじ登らなければならなかった。鉄素は元禄6年（1690）夜須郡五玉山村佐藤藤右衛門が寄進した銀で、元文2年（1737）三池の孫佐藤藤三郎と桑曲村佐藤佐兵衛が再興したものであり、その上には安永3年（1774）裏糟屋郡新宮浦の金内新左衛門徳貞が寄進した鉄素が掛けられていた。いずれも人跡道筋にあたる庄屋クラスの人であろうか。また土宮社殿の横から南東に下る下向路には、安永3年、博多土居町の治工岡田与三兵衛が寄進した鉄素があった。

この石碑は、南北朝期にすでに庶民の登拝や「講」の存在が認められることなど貴重な情報を提供しているが、御笠川の最下流「石堂川」の畔にある、金剛界大日如來の種子を彫った康永3年（1344）の銘のある板碑、所謂「濡れ衣塚」にも「接待講衆」として27人の名が刻されており、この時代の盛んな宗教活動を垣間見せている。

また龍門神社の宝物に「講碑」があった。それは「南谷行者樹也文廿三甲寅今月吉日」という銘がある方寸9分、深3寸1分の升であったという（『龍門神社近現代文書』『宝物古器古文書目録』）。深江宿（糸島市二丈深江）の中にある深江神社には宝満宮と天満宮を祀っているが、正面鳥居南には宿中東町の「宝満講連中」が安政3年（1856）9月に寄進した常夜燈（石灯籠）一対がある。台座には世帯人として、藤玄次郎・進藤久次郎等9人の名と石工棟梁淀川儀助、堀田藤吉の名が刻されている。また深江宿の曲がり角にある通称「火伏せ灯籠」と呼ばれる大きな石灯籠には、正面に「太宰府天満宮」、左側に「宿坊小鳥居」、右側に「月参講中」、背面に「寛政人歳（1796）丙辰九月進藤吉左衛門信房月参燈籠」、台座に「天保三年（1832）壬辰十一月吉日」の年号と同志18人の名が刻されている。この地方では、宝満宮と太宰府天満宮にセットで参詣することを「さいふ詣り」と言っている。

明治36年、本田豊吉司着任と同時に講の再結果が図られる。福岡県下全般の郡役所の所在地、最寄りの駅、担当の村、大字を調べ上げ、趣意書をつくり、龍門神社官司を講社長に10人程の結果員を任命して、担当地区を分担した。明治41年2月「官幣小社龍門神社附属宝満講社」が内務大臣より認可され、翌4年6月より結果に着手し、同年度末には、三地郡、旧豊前の一部を除く地域に40,400人の結果を見た。さらに佐賀県や長崎市、佐世保市、北海道にも講社員の獲得を見、大正5年には「宝満講社守札」の頒布は6万枚に達した。配布された守札は「家運永盛御札」「蝗災退散御札」「安産御守」であつ

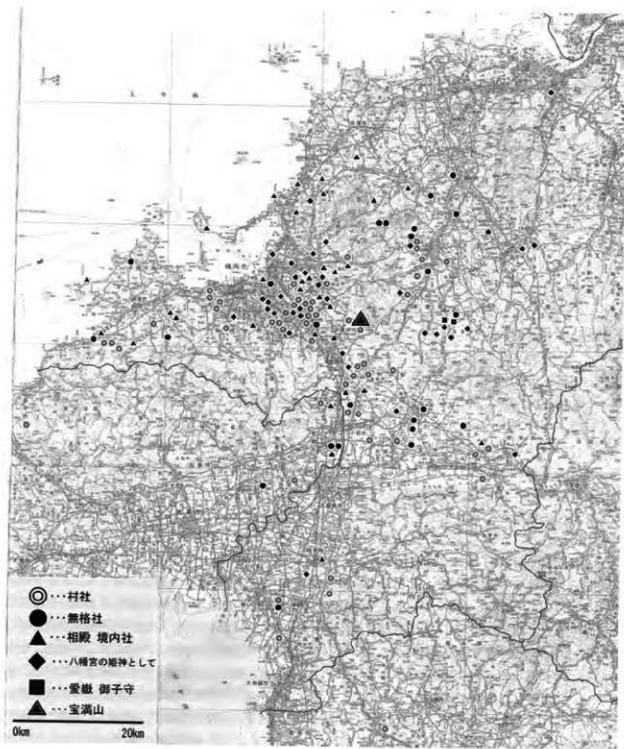


図1 福岡県、佐賀県、熊本県の宝満宮・鹿門神社の分布図

た。その他「登山案内図」なども配布された。大正年間には、概ね6万体制で推移したが、昭和に入り漸減し、戦争などの影響が、現在では「跡」の存在を知る人もほとんどない状態になっている。

また登山奨励を目的に大正12年「宝満会」が結成され、登山者に対して事前の申込みを呼びかけ、案内書、絵はがきが配布された。日誌によると、県下各地より多くの学校生徒、一般団体などが登山に訪れている。現在は、宝満会は存在しないが、九州一登山者の多い山といわれるほど、登山者が多い山となっており、殊にリピーターが多いことが特徴である。

末社 末社が勧請されるきっかけは、①荘園鎮守神として、②支配者層による勧請、③山伏による勧請、④一般人の信仰による勧請といったケースがある。

鹿門神社は鹿門宮、宝満宮などと時代時代に名称を変えているので、末社も鹿門神社という場合、宝満宮という場合、宝満神社という場合等がある。これらを一つのものとしてその分布をみてみると、筑前に最も多く、ついで筑後、肥前、なかでも太宰府に近い三養基郡・鳥栖市などの順で、安楽寺（太宰府天満宮）の荘園が多い地域と重なっている。なかには熊本県玉名郡菊水町鹿門の鹿門原神社のように、天満宮と鹿門神社が合祀されている神社もいくつかある。現在「全国神社名簿」に記載されている神社数をあたってみると、県別の末社の数は、福岡県52社、佐賀県7社、長崎県2社、宮崎県2社、熊本県1社、意外に多いのが鹿児島県の3社。平安末期より内山寺の末寺であった台明寺と関係があるのであろうか。また大分県には『豊後国風土記』に「赤湯泉」として記述される「血の池地獄」の泉の穴があるとされる鹿門山に鎮座する別府市の旧郡社八幡鹿門神社、大野郡に有智山神社があり、竹田市の吉田八幡宮には玉依姫命他十二柱の神を祀っており、玉依姫が主祭神ならば鹿門神社だった可能性もある。このほか、境内末社として祀られているもの、合祀されて他の神社名になったもの、八幡宮の一神として祀られたもの等がある。また「鹿門神社」という社名であっても一般に鹿門神とされる奥津彦・奥津姫を祭神としている社もある。しかし現存の鹿門神社・宝満神社の分布状況が、宝満信仰の流布範囲とその密度を示すとみて大過ないだろう。今のところ、九州以外では一社も確認されていない。やはり鹿門宮が「九州の惣鎮守」あるいは「大家府の鎮守」ということで、信仰圏も九州をこえるものでないことを物語っている。

図1は福岡県、佐賀県、熊本県にある宝満宮・鹿門神社の分布図である。福岡県については『福岡県神社誌』1944に拠った。神社名では分類せず、村社、無格社、相殿・境内社で記号を変えた。相殿でも八幡社の一神である場合は別に分類した。また村社で愛嶽神社が嘉麻市に2社、無格社で玉依姫を祭神とする御子守神社が糸島市に1社ある。『福岡県神社誌』では、村社42社、無格社18社、合祀神社で社名が天満宮のもの2社であったが、現在、神社数は漸減状態にある。

9 御子守の神として

十六詣り 宝満山の行事でもっともよく知られているのは「十六詣り」である。十六歳になった男女が4月16日（8日に行う村もある）に上宮に登拝するもので、男は一生金銭に困らないように、女は良縁を得ることを祈ったという。昭和6年の鹿門神社〔公文書綴〕によるとこの行事は1月16日と4月16日に「上宮十六祭」として行われており、宮司以下職員が前日より登山し、早朝、厄除祈願祭・家内安全祭を執行した後、登山者一人一人をお款した。また神社では金玉1個、銀玉2個を御蔵の中に入れ、これに当たれば幸運が得られたとして神符などを授けした。また本宮北の権尼落という懸崖の上に立ち、岩間の樹木に縁結びのコヨリを結ぶ良縁を得られるというので、未婚の女子が危うきを冒してこの行為をする者が多かった為、神社としては危険防止の為、上宮広場の樹木に結びつけるよう指導したという。

『太宰府市史』の民俗調査で典型的な事例を採取できた。

太宰府市桜町区では、旧暦4月8日、16歳の者が連れだつて宝満詣りをした。女は久留米紺の紅紐の短着に赤い腰巻きを新調して、黒の手甲・脚絆に紅白のアトガケのついた竹皮の草履をはき、新しい手ぬぐいを被ったおそろいの装束で登った。帰りに、シクナグの枝に糸のついた丸いコシを下げたものをいくつも持って帰り、宝満詣りの祝をくれた親戚に配った。この時着た着物は、そのまま洗濯せずにとっておいて、田植の時それを着て早乙女になった。男は8日・9日と二晩続く若者の春籠り（春

ヨコイ)に、酒一升・肴一鉢を持参、親が付き添って組み入りをし、女も招かれて加勢をしながら二日間を楽しむ。

4月8日は花祭り、寺院では釈迦の誕生日として灌仏会などが行われるが、民間では「卯月八日」の春山入りをし、山の神をツツジや石楠花、藤などの花木に宿らせ、里に帰って田の神とする行事が広く見られた。また「卯月八日の初山入り」といって、その年に成人した少年・少女を連れて山に入ることも広く行われた。桜町の事例は、成人儀礼であるとともに山の神を乙女の衣服やジャクナグの枝に依り憑かせて田に迎えるというもので、十六詣りの古い形と本義をよく遺したものであると考えられる。

十六詣りが何時始まったものかは明らかでないが、東院谷の薬師堂の近くに「愛敬岩」という高さ2メートルほどの岩があり、『附録』に「眼を閉て此岩に行当る時は、人の愛敬を得る故に此名あり」と記されている。この岩で恋古いすることがすでに江戸時代に行われていたことが知られ、そのようなことをするのは、十六詣りで上宮に縁結びを祈った少女たちの戯れであろうか。また「卯月八日の初山入り」は先達が先導して登山することが多く、民俗調査では「数人が連れだつて登拝した」ということしか聞けなかったが、古くは山伏の先達によって行われていたものと考えられる。稚児落としの断崖の岩間木にココロを結びつけるという行方も、大峰の西の覗きの断崖で新客に課せられる「覗き行」に通じるものがある。

十六詣りには、険しい山を登りきることが「成人の証」とされるという意味もあるが、いまひとつには祭神「玉依姫」が「御子守」の神であったため、成人したことへの感謝を捧げ、さらに将来の守護を祈るという意味が大きかったと考えられる。吉野水分神社は、中古以来「子守明神」「子守宮」として名高く、子授け、安産、子供の守護神として信仰された。「ミクマリ」が「ミコモリ」と説化したものともいわれるが、御子守の崇拜対象になったのは正殿右方の御殿に祭られた玉依姫命と袴幅千幡比売命であると吉野水分神社は説明している。龍門神社の宝物に「神功皇后の腹帯」と称するものがある。漆塗りの立派な箱の中に、第一封麻布、第二封赤地の綿、第三封紙、第四封腹帯麻布が収められており、紙に「玉依姫神功皇后応神天皇安胎平産 子孫繁栄息災延命之子安紙帯也」と書かれていて、安産祈願に用いられていたことが推測される。吉野の玉依姫と同様に、宝満山の玉依姫も、子を授け、その成長を守る神であった。

十六詣りは福岡県下内一円からの登拝があったが、戦後学制改革により廢れた。高校によっては、十六詣りの伝統をくんで学校行事として一年生が登山することもあったが、現在は行っていない。龍門神社では20数年前から「えんむすびの神」を前面に出し、下宮境内に「愛敬の岩」や「再会の木」、縁結びのココロを結ぶ木などを設え、4月16日には「えんむすび大祭」を舉行している。再会の木は崖主跡近くにあるサイカチの木で、神功皇后が三韓出征の折手植えし、凱旋の後に再会しようと呼びかけた木と伝えている。その木を下宮にも植え、横に絵馬掛けを設えている。

以上に述べたように、江戸期、山伏が行っていた行事、信仰が、明治初期、山伏の離山によってなくなったのではなく、戦後の学制の改革や、高度経済成長による産業の変化によって廢れたことが知られる。司祭者や神の名が変わっても、庶民が必要とする限り、行事・信仰は根強く遺るものである。最近、龍門神社は、縁結びのパワースポットとして人気を博し、インターネット等で情報を得た人たちが、若い女性を中心に全国から訪れている。一方、氏子たちが行ってきたオヨドや宮座など古くからある地域の行事、太宰府の人たちが、初老・還暦の厄除けを太宰府天満宮に折り梅の木を献木した翌年には、「紅葉あげ」といって龍門神社に紅葉もしくは桜を献木する行事も連続と続けられている。

(森 弘子)

【参考文献】

- 飯沼賢司「八幡宮における二つの『比売神』成立の意義」『大分縣地方史』148・149 合併号 1993
小田富士雄編『宝満山の地宝』1982 (財)太宰府顕彰会
官幣小社龍門神社『宝満山と龍門神社』1940 官幣小社龍門神社
『神道大系 神社編7 石清水』1988 神道大系編纂会
竹林庵「山の秘密」『九州日報』1909 (のち松岡実校『宝満山伏の峰入り』『まつり』9号)
富田弘子「空海と薬師一丹生の愛護と高野明神」『密教文化第225号』2010
中野幡能福『筑前国宝満山信仰史の研究』1980 名著出版・太宰府天満宮文化研究所
広瀬正利『香椎宮史』1997 文献出版
本田豊『龍門山記』1906 龍門神社
森弘子「宝満山玉依姫考」『日本宗教文化史研究』第8巻第1号 2004
森弘子「宝満山の環境歴史的な研究」2008 (財)太宰府顕彰会
森弘子「九州に於ける六所宝塔の建立をめぐって」『年報太宰府学』第3号 2009
由比草祐「怡土志摩地理全誌 怡土編」1989 糸島新聞社

第7節 宝満山と仏像の様相 —古代中世を中心として—

1 はじめに

古くは龍門山、また御登山などとも称された、宝満山は聖地である。そして参詣者が絶えない龍門神社の存在が示す通り、神祇信仰は山の開闢以来、一つの柱としてあり続けて今に至っている。しかし、かつて山を支えたもう一方の柱については、山内から面影を薄くしたことをもって、それはまるで、伝説の中での存在であるように感じられているかもしれない。もう一方の柱とは、仏教系の信仰のことである。明治初年の神仏分離令は、それまで千年にわたって続いてきた、神仏が共生する信仰空間を分解し、新しい世界を作り上げたが、この時に宝満山も、仏教色を薄めることになったのであった。

そのような中で近年、往事の宝満山を顕彰する動きが、広まり強まっているのは、いにしへの山の豊かさを感ぜさせる上で、大きな力となるものである(註1)。ただこれまでは、中世以前の仏教に関わる文物を主たる調査対象とし、仏の山としての宝満山の在り方を、具体的な遺品に基づいて考える試みは、考古学の分野以外では、多くはなされてこなかった(註2)。しかし、かつて山内の堂塔坊柱に祀られていた尊像が、実は山内に、または山外のゆかりの地にも、遺されていることが浮かび上がるに及び、それらを通して、古代中世の様相を窺うことが、可能となっているように感じている。

ここでは、それら尊像の近年の調査成果を受けながら、これまでと現在の考古学や文献史学等の成果を参照しつつ、とくに古代から中世にかけての宝満山の仏像と、宝満山の仏の山としての側面に、あらためて光を当ててみたい。

2 草創期の仏像の一面

宝満山における寺院の創まりが、いつのことであるのか、はっきりと押さえることはできない。しかし山内で、8世紀の第1四半期に造営されたと考えられている、いわゆる第II期大宰府政庁に使用された、鴻臚館式軒瓦が確認されていることから、創建が奈良時代に遡る可能性が指摘されていて、その頃には僧たちが山に入り、活動を開始していたらしいと考えられる(註3)。ではそこで、どのような信仰に基づく、どのような尊像が安置されていたのかについては、今は明瞭に語るための具体的な材料はない。ただ、何も語るべきでないわけではなくて、奈良時代と大宰府の地の様子に鑑みると、草創期の仏像の一面を推察することはできる。それは、造像技法に関することである。

奈良時代においては、銅造、乾漆造、塑造のような、像ないしはその原型を、やわらかい素材を盛り上げてつくる、捺塑の技法が主として駆使されながら、美しく洗練された多彩な仏像が造像された。しかしその多彩さは、実の所は都ないしはそれと直結する地に限られたものであって、一般的に、都を離れた地においては、堂内の主尊は塑像であり、加えて小金銅仏が見られる、というような状況だったと考えられる。そして所によっては木像、あるいは石像も見受けられたかもしれない。これは、宝満山に所在する寺院について考える上でも、意識すべきことであろう。

当該期の太宰府ということで見れば、観世音寺には、塑像を主としながら、金堂には、銅造の丈六阿彌陀如来坐像とその脇侍像が存在していたことなどを、『延喜五年観世音寺資財帳』のような史料から知ることができるのである(註4)。この寺の在り方は、当地では特別なものだと考えている。大宰府と共にあって府の大寺と称され、都の仏教界と強く結びついていたと見られる観世音寺の在り方を、太宰府とその周辺地域一般のもの、そのものだと考えるべきではないだろう。また、平地の大伽藍と山の寺という相違も、重要な要素として見ておく必要があると思う。

後世の在り方に鑑みると、宝満山に所在した寺院は、当初よりある程度の規模をもち、太宰府周辺



図1 宝満山A経塚出土 銅造菩薩形立像



図2 南谷出土 銅造菩薩形立像

地域にとって重要な存在だったかもしれないが、そもそも必ずしも、観世音寺程の、規模や多彩さを伴うものではなかったように思う。宝満山に創建された、そのような寺院の仏像については、やはり塑像を主としながら、小金銅仏も見られる、という状況だったので、はないかと考えている。この時、『順業三代格』所収の太政官符に見ることく、元龜5年(741)に大宰府政庁背後の四王寺山に創建された、四天王寺の仏像が、六尺の塑造四天王像であったことなどは、直接参照し得る事例と見ることができる(註5)。そしてあるいは加えて宝満山中においては、必ずしも専門の工人による洗練されたものではなくとも、木彫像も見受けられたかもしれないと、考えている所である。

ちなみに小金銅仏に関して言えば、地中より、飛鳥時代ないしは奈良時代に遡る作例が見出されている(註6)。文化庁の所蔵で、宝満山A経塚から経筒と共に出土したとされる、総高20.6cm像高17.6cmを測る金銅仏などは、飛鳥時代の形式と作風を見せる像で、沈んだ顔立ちや簡略化された表現や服制の不整合が、地方作ゆえか時代が下がるゆえかで議論があるものの、概ね説平安時代初期までには収めて考えている。当地を代表する金銅仏の古例である。また内山宇南谷から出土した、総高10.5cm像高8.9cmを測る小金銅仏は、簡要ながら童子のような清新さを見せていて、こちらは飛鳥時代後期から奈良時代ということでも異論はない。このような山内出土の小金銅仏は、後世の移入ばかりとは限らず、当初から山にあった可能性もある。であるならば、やや素朴、あるいは簡潔な感があるこれらの金銅仏は、仏の山としての宝満山の、草創期の在り方の一面を、映し出しているものなのかもしれない。

3 最澄造立の檀像薬師

宝満山に所在する寺院が、明瞭にその姿を見せるのは、平安時代に入ってからのことである。延暦22年(803)に、最澄が来山したことによって、今にこの史料上に、初めてその名を見せることになったのであった。このころ最澄は、遣唐使の一員として、北部九州にあって船出を待っていたが、延暦22年10月閏23日には宝満山にいた。『叡山大師伝』には、『延暦廿二年潤十月廿三日、於大宰府龍門山寺、為四船平逢、製造檀像薬師仏四軀、高六尺余、其名号无勝浄上善名称吉

祥王如来、又講説法華、涅槃、花嚴、金光明等大乗經、各々數遍、具如願文」とあって、この日この山の最澄は、4隻からなる遣唐使が無事に務めを果たすことができるように、龍門山寺において、安全祈願の法要を行っているのである。ここに、この頃の山の山守が、龍門山寺と称されていたこと、そしてこの度の法会に関しては、例えば観世音寺などではなくて、こここそが国家的な使節団にかかる法要が執り行われるにあふさわしい場だと認識されていたこと、また、寺が既に相当程度の施設と組織とを整えていたらしいことを窺うことができる。

そしてこの時最澄は、法要の主導として、新たに六尺の檀像薬師仏を4軀造像しているが、これがまた、今にこの史料上に初めて登場した、宝満山の仏像なのである。最澄が造像した薬師如来は、その尊名を詳しくは、善名修吉祥王如来と言った。この仏は、『薬師瑠璃光七仏本願功德経』、いわゆる『七仏薬師経』に登場する、七仏の第一に挙げられる仏で、経文中には、航海の安全につながる旨、説かれていたものである。この造像については、自ら五尺五寸の薬師如来像を刻んで比叡山寺の一乗正観院、のちの延暦寺の根本中堂に安置したという、延暦7年(788)の最澄自身の造像と通ずる要素を見せながら、同時に、この度のあらたな法会の目的に、よく合致するものであった。

比叡山寺と龍門山寺の事例については、山の寺における木造薬師如来像の造像という点で、通じてはいるけれども、前者の像が自刻だとされるのに対し、後者は自刻と史料に見えないのみならず、大きさと数と工法の公的な性格とに照らすに、これは専門の工人たちが造像したものだと見るべきであろう。この工人たちは、最澄が工人を帯同していた様子が窺えない以上、太宰府周辺に拠点を置く、そしておそらくは事の重要性に鑑みても、大宰府や観世音寺にゆかりをもった工房に属するものだっただろうと考えている。またこの時、薬師如来が檀像だったことは興味深い。この檀像は、六尺という大ききから考えて、材の大きさの制約により小像しか造り得ない白檀製ではなくて、『十一面観世音神呪経義疏』に説く所の、白檀の代用材である栢木、つまりは榿材を用いた仏像だったと考えられる。

ともあれこれは、日本における木彫像隆盛の、直接最大の源になったとされる檀像が、太宰府周辺で造像された、これもまた確認される最初の例である。最澄によるこの事績は、宝満山の仏教信仰と仏像との在り方を考える上で、まことに重大な意義をもつものだと言うことができる。古代、太宰府の地は九州における、新しい思想と造形の発信源であったが、その中心たる観世音寺と並んで、宝満山もまた、その一翼を担う場になっていたようである。そしてこの一件からは、都から来た知識人の指導によって、新しい思想と造形が太宰府に移入される様子や、ただちに新しい指導に応えることができるような、充実した工人集団が、奈良時代に引き続いて当地に存在していた様子が推察される。

なお、この時造像された4軀の檀像薬師は、現存してはいないものの、おそらくその姿は、平安時代初期の仏像らしく、幅も奥行きもある堂々たる体軀をもち、そして檀像らしく、目や口唇等以外には彫色を施さずに榿の木肌をみせ、さらには、鋭く強く、あるいは細やかな彫口を見せるものであっただろう。これは前代の、鮮やかに彩られた、端正で優雅な仏像とは全く異質な姿で、拝する者に、新しい時代の新しい精神世界の到来を、実感させたに違いない。

ちなみに最澄は、帰国後しばしば経った弘仁5年(814)にも九州を訪れて、宝満山やその周辺においてではないかと思われるのであるが、像高五尺の檀像千手菩薩を造像している。この像もまた現存してはいないものの、宝満山と同じく三郡山地の一面を占める若杉山には、その姿を彷彿とさせるような、榿材を用いた檀像の千手観音立像が存在している(註7)。この像は、頭部の幹部を、足下の台座連肉までを含めて一材から彫出して内側にも施さず、像像は基本的に素地仕上しているというものである。平安時代初期らしい、檀像らしい作例である。大きな頭部と短く厚重な体軀、顔を突き出し背をやや反らし、下半身は直立させるといふ剛直な体勢、首周りの鋭く立ち上がった衣の縁や、単純ながらも銘を



図3 若杉観音堂 千手観音立像

檀像薬師の面影を浮かび上げることができる可能性はある、と考えている(註8)。

4 北谷に伝わる古仏

龍門山寺は、龍門神社下宮の周辺、つまりは宝満山の南西側の、内山に所在していたと考えられている。そしてまた、龍門山寺が後にそう称されるようになったと一般に言われている、大山寺、内山寺、有智山寺の中心堂塔があったと考えられているのは、やはりこちらの方であって、山内における仏教信仰の中心であり続けたのは、内山であった。しかし、山の西側の北谷もまた、内山と共に、僧坊が主として展開する山内の要地であった。文献と遺構からは、おそらくこちらは平安の昔から、山の中心たる華やかなりし内山に比べると、性格を異にした静かな場であったように推察されるが、その北谷は、仏の山としての宝満山を具体的に考えるに際しては、きわめて重要な意義ももっている。山の中心であった内山の方には、最澄造立の檀像薬師にとまらず、いま仏像の姿はない。これは神仏分離の影響による所があって、江戸時代の地誌などを見ると、その存在が確認できるのは事実である。しかしそれとも、史料から窺える古中世中の繁栄を、そのままと継承するほどのものではない。神仏分離以前既に、山の中心から離れていたことが、かえって幸いしたものであろうか、ここには往時を偲ぶる古仏の一群が現存している。

まずとり上げるべきは、北谷地藏堂の地藏菩薩立像である(註9)。この像は、像高126.2cmを測る木像で、頭部を通して、幹部を針葉樹の一材から彫出して内側にも施さないという、平安時代前期の作例に通ずる、古式な構造もっている。そして事実この像は、造像が平安時代前期に遡ると考えることができる。ただそれは、一見しただけでは確信することが難しい。この像に、かなり後世の手が入って

つけて力強く刻まれる衣文などについても、同様に評することができる。また本像は、端正さの中に厳しく沈んだ表情を見せる面部や、上縁と下縁ともに抑揚をつける口唇の形状などに、奈良時代後期の作例に通ずる点も持っている。像高104cm、現状総高113.8cmと法量はいちいち異なるものの、最澄造立の檀像千手菩薩の面影を、最もよく伝えていると思われる像である。

このことが正しくそうであるならば、檀像薬師の面影も、当地の仏像の中に伝えられているのではないかと、考えることはできる。いま注目しているのは、糸島市二丈の浮城神社の如来形立像や、観世音寺の阿彌陀如来立像など、北部九州の一群の平安時代前期の作例の中で作例がずれていて、左袖外側にV字型の特徴的な衣文表現を見せる、独特の個性をもった如来形立像である。おそらくは大宰府ないしは観世音寺ゆかりの工房で造像されたものだと考えられるこれらを通して、

いるからである。正面観の、平板な肉づきや、硬く単調な彫口は、背面観の、力強い抑揚をもった肉づきや、鋭く厳しい衣文の彫口とは、全く異なっている。これは像の正面が、朽損のためか修理に際し、彫り直しがなされたためだと看取される。この像においては、服制を前面から見ると、下半身に裳をつけ、上半身には内衣を着けた上から、丸い頸のついた袈裟を掛けるというものとなっており、背面から見ると、下半身には裳をつけ、上半身には大衣を面頬にまとうというものとなっているのであるが、この前面と背面の服制の矛盾も、彫り直しに起因するものだと考えることができる。

そこで、当初の姿をよく遺している背面について見てみると、福岡平野周辺地域の平安時代前期の作例の中に、相通するものを見出すことができる。それは、先に檀像薬師との関連を想定した、浮嶽神社の如来形立像と、観世音寺の阿弥陀如来立像である(註10)。共に内割をもたない針葉樹材を用いた一本造の作例で、前者は造像が9世紀に遡り、像高は180.2cmを測るというもので、後者は10世紀に入ってからのもので、像高は166.2cmを測るというものである。これらを背面から見た時の、背面上部を盛り上げ、高い位置で腰を引き締め、臀部にゆるやかな盛り上がりを見せながら、下半身を長大につくる様子は、北谷地藏堂の地藏菩薩立像と軌を一にするものである。また、着衣形式が彼の2像は偏袒右肩ということで異なっているので、右半身こそ異なるとはいえず、左半身については、正中線近くは衣が張っていて衣文はないが、体側に近づくにつれて厳しく鋭くそれが刻まれているという様子や、左背面上部の衣端の処理の仕方とその結果としての、衣縁が「乃」の字型をなすような形態は、やはり三者で共通している。そして地藏菩薩立像は実は、左袖外側に、特徴的なV字形の衣文をもつことと、また彼の2像と共通している。これはただの地縁などではなく、三者に系譜的なつながりがあることを、推察させるものだと考える。地藏菩薩立像については、観世音寺の阿弥陀如来立像よりは衣文表現が穏やかなしは



図4 北谷地藏堂 地藏菩薩立像

単調で、より新しい要素を見せているものの、10世紀に造像が遡る作例だと見ることができる。そしてこの像からは、宝満山における主たる造像活動は、観世音寺周辺の造像活動に通ずるものがあつたらしいことを、窺うこともできると考えている。このような在り方は、この平安時代前期だけではなく、平安時代後期、あるいはさらに奈良時代と、古代を通して指摘できることなのではないかと思う。ここでも、具体的な現存作例に即して言うことを試みるならば、山頂付近から見出され、平安時代後期ないし鎌倉時代のものだと推定されている、美しい銅製仏手などは、小さなものではあるが、その証だとみなし得る存在だと言える。

しかしまた、宝満山における造像活動が、全く一つの方に収斂するものではなかったらしいことも、近年新たに北谷から見出された2軀の仏像からは窺うことができる。そもそも宝満山においては、かつては山の盛期たる平安時代に遡る古仏は、全く姿を消してしまつたように考えられていたものの、先の地藏菩薩立像が、まさしく10世紀から今に伝わる古像だと判明し、初めて往時の様相を具体的に考える起点を得たのであつたが、ここに、さらに作例を加えるに及び、今後考察を深化させるための重要な基盤が形づくられつつあるように感じている。見出された像は、朽損や破損が進んでいるものの、概要を窺うには充分であるし、さまざまな情報や視点を、今後これから引き出してゆくことができそうである。今回はまずは、像と見通しの概略を述べておくことにする。

2軀の仏像のうち的一方は、甲冑に身を因めた神将形の立像である。檢と見られる針葉樹材を用いた寄木造の像で、幹部は頭体を通して前後二材からなっていたうちの、背面を亡失し、また両肩先も亡失し、朽損によって足先を失っているというものである。像高は現状で65.5cmを測る。体部に比して小振りな頭部、下半身のみをゆつたりと動かす、細身に抑揚の少ない薄い体部、そして閉口しつつ忿怒の表情を浮かべながら、丸顔でどこか穏やかな趣を漂わせる面部などは、平安時代後期、12世紀前半頃の特徴を備えている。構造についても作風と整合するものであるが、ただここでこれは、同じく平安時代後期といつても、観世音寺に伝わる諸像のような作例に比べると、やや鄙びた感があるように見えることも指摘できる。



図5 浮嶽神社
如来形立像



図6 観世音寺
阿弥陀如来立像

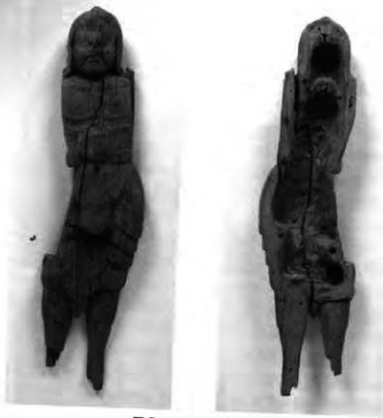


図7 北谷区 神特形立像



図8 北谷区 天部形立像

そして現状像高57.9cmを測るもう一方は、朽損がさらに進んでいて、甲冑を身につけているように見えるものの、高く髻を結い上げていたり、ちょっと尊名のみならず尊像の種類もはっきりしないので、天部形立像と称するにとどめておきたいのであるが、こちらは、針葉樹材を用いた一木造の像で、内割も施していないという作例である。このような構造は、平安時代前期の作例に通ずる古式なものである。しかしこの像の場合、やや肉厚で肉身の抑揚もしっかりしているとはいえ、やはり体の動勢は比較的静穏なもので、造像は平安時代後期だと考えられる。古式な点を見せながら、おそらくは11世紀頃に造像されたものであろう。

ここでこれら北谷から見出された作例からは、神特形立像はもちろん、おそらくは天部形立像も、群像中の1軀が残ったものであって、またそれら群像は法量に鑑みても、室内の主役そのものではなく、それないしはそれらに従うものかと看取されるところから、今はなきそのような存在までを含めて、やはり平安時代、かなりの数の仏像が造像され、それを安置する諸堂宇が存在していたことを、これらから確かを知ることができる。そしてこの時、洗練度の高い工房の作だけではなく、彫びたあるいは古式な表現や技法をもった、多彩な工房が山と関わり造像活動を行っていた様子が見えることも、興味深い。それはすなわち、この地の信仰や造像活動の規模や多彩さや階層性などを映し出している可能性がある。北谷に遺されている古像は、かならずしも完好な状態ではないが、これらの造形を読み取ることから広がる視界は、決して小さなものではない。そして宝満山においては、失われた中心を含めた往時の輪郭は、ここ北谷をはじめ、山の内外に面影と文物を遺す場と、加えて文献等資料、また、ゆかりある他の山を参照することで、ある程度は復元的に考えることができる可能性がある。

ここで、ゆかりある他の山ということで言えば、宝満山の場合まず参照すべきは、先にも登場した、同じく三郎山地の一面を占めている、若杉山の様相であろうと考える(註11)。正中2年(1325)の年



図9 石井坊 不動明王立像
(不動三尊像のうち)



図10 佐谷観音堂
十一面観音立像



図11 佐谷観音堂
十一面観音立像

紀をもった、佐谷の建正寺の梵字板碑に、「天宮別院有智山末寺於左谷山寶聖院」とある如く、若杉山は事実、中世には宝満山に従う山であり、これが遡っていつからと押さえることはできないにせよ、古代においても関係をもち、相通する様相を見せていたであろうことは、想定して大過ないものと思う(註12)。こちら若杉山は、周辺地域においては希にみる、平安時代後期に造像された古仏の宝庫である。山に伝わる、九州を代表する不動三尊像の一例である、石井坊の不動三尊像や、佐谷観音堂の十一面観音立像をはじめとする、都ぶりの仏たちの一群と、他地方の仏たちとはやや趣を異にする、佐谷観音堂のもう1軀の十一面観音立像のような、一木造で重厚な、地方色豊かな仏たちとの存在は、山内の信仰活動や造像活動が、洗練されたものから土着的なものまで多彩で、これが多様な階層や集団によって支えられていたことを推察させる。宝満山には、若杉山とは重ならない個性もあつたであろうが、輪郭なり大要なりには通ずる所があつたであろう。そして文献史料や発掘調査によって、さらに格式高く大きな存在であつたことが知られる宝満山の様相は、おそらくはこの若杉山の様相を、頂高く裾野広く、より豊かに増幅させたものに近かつたのではないかと考えている。

5 中世の仏像の諸相

中世の仏像についても、かつての山の中心から離れた場所から始めることになる。それは柚原須観音堂である。太宰府側から古来の要所である米の山峠へと登ってゆき、登りつめるそのまきに一歩手前の柚原須の集落に、大山祇神社と隣り合つて、観音堂は所在している。『筑前国統風土記附録』を初めとする地誌の類には、ここに「康永三年二月二十二日施主各信男信女為息災延命為五穀成就現当二世所願成親觀世音菩薩坐光華再興者也」となどという胎内銘をもつ観音像があると記載されているのであるが(註13)、調査によって、いま観音堂に祀られている観音像こそが、それであると押さえることができた。

観音像は像高51.3cmで、針葉樹材を用いた一木造の像である。像に対する信仰は今も健在で、比較的近年修理がなされており、また底板が張られていて、当初部の像底や像内を窺うこともできない。し



図12 柏須原観音堂 聖観音坐像



図13 同 (X線CT画像)

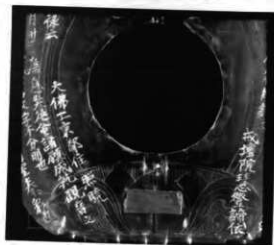


図14 同 (X線CT画像)

かし、下がくれてやや頬の長く感じられる顔立ちや、やや猫背の体勢などを見るにつけ、構造こそ古式ではあるものの、康永3年(1344)頃の造像だとすることに不自然な点はないと見えた。史料に見える銘文中の再興は、修理ではなく像自体を含めた再興造像と見るべきであろう。そして光背背面に元禄12年(1698)修理時の陰刻銘があった。これは、この頃の筑前地方で造像や修復に大きな役割を果たした、成壇院の運照や京仏師の照映が、この年に修理をしたことや(註14)、康永3年の銘文、慶長10年(1605)の修理に関することが、この時に一緒にまとめて記されているものだと看取されて、やはりまさしくこの像こそが、史料に見える像だと考えることができたわけであるが、こちらの陰刻銘は、修理の際の彩色で埋まって、現場では全文を判読することができなかった。そこで、像の像容と構造、この銘文を明らかにするべく、九州歴史資料館のX線CTスキャナでの調査を試みた(註15)。

その結果構造は、一本造で間違ひなく、頭部には内割を施さずに、体部には背面から内割を施し、背板を当てていること、内割は幅広く反りのある丸撃によってなされていること、像の底部はもともと底板状のこしていて、内割は像底までとは通じていないこと、などのことを確認することができた。まるで古代の仏像のような古式な構造である。また光背の銘文が全文明々白々に判読され、元禄12年には、里長谷谷氏を始めとする、「油須原村」村中によって「莊嚴坐光厨子」が再興され、関係者名の記録と心経一巻とを胎内に納入したこと、そしてこの時、諸史料に見えている、康永3年

の胎内銘や慶長10年の修理銘の概要が、ここに併せて刻み込まれたということも、確かに読み取ることができたのである。胎内を見ることができない今、この光背銘は、像の意義や歴史を考える上で不可欠なものだと言える。

ただ、像について考える上で何より有用だったのは、当初の彫刻面を映し出すことができたということである。そこで見えてきた姿は、面部はやはり確かに14世紀半ば頃の仏像らしいもので、右目には損傷があるものの思いの外に状態も良く、彫技もなかなかこなれたものであった。しかしその中で、上体には衣文表現はほとんどなく、膝前の衣文も最小限で、古式あるいは凝びた構造とも運動するものが、簡素な態ももっていることが看取された。そしてこの時一点、膝前に興味深い特徴を見出している。前面に半円形に見えている大衣下端の、形態や衣縁の様子や衣文構成は、慶派の流れをくみ西北九州で活躍し、いわゆる西国湛派(註16)の作だと推定されている(註17)、建武元年(1334)造像の直方市法華寺観音堂の十一面観音坐像のそれを、簡要にしたようなものを見せているのである。彼らにはその周辺にあった仏師の作である可能性がある。古式な構造や簡要な表現に鑑みて、後者をより強く意識すべきかかと思うが、ともあれ西国湛派の流れをくむ仏師が、宝満山と関わって造像活動を行っていた様子の一端を窺うことが出来る点興味深く、そしてそもその淵源としては奈良に縁をもちながら、当地に居を据えて活動していた西国湛派の仏師たちから、さらに当地でその流れをくむ仏師が派生してゆくようにも見える点など、貴重な視座を与えてくれる作例だと考えている。造像時期の判明する基準作としての重要性は言うまでもない。

ここ柏須原に関してはもう一点、中世の当地における仏師の動向にかかる史料がある。仏像自体は失われてしまっているが、『筑前国鏡風土記拾遺』で紹介される、薬師仏の台座の銘文である(註18)。それは「大永六年十月三日奉建立施主與三左衛門同子藤次郎依造立功德諸病悉除諸願満足奉祈者也」とあるもので、大永6年(1526)に造像されたと考えられる、薬師如来像にかかるこの銘文に見えている、與三左衛門、藤次郎の存在は看過できない。彼らは、15世紀に博多に居を構え、老岐まを含めて、主として西北九州に作例をのこす、博多仏師と称される当地の仏師たちなのである(註19)。そしてまたこれが、銘文に照らすと、どうやら彼ら自身の健康問題を一つの背景とする祈りに関わるもので、薬師如来という尊像も、その祈り故と見ることができるのは、当地の仏師の造像活動や、信仰者としての彼らの宝満山との関わり、そしてこの頃の人々が宝満山に寄せる信仰の一端を垣間見せているようである。いまは小堂であるとはいえ、さすがに要所東の山崎直近の聖地らしい、重要な意義をもった場であると思う。

なお、ここでは仏像ではないものの、かねてより知られている重要な木彫像についても述べておく。それは内山に伝来したもので、昭和54年(1979)に龍門神社下宮の床下から見出された、一對の獅子狛犬の像である(註20)。阿形の獅子像は像高87.5cmを測り、吽形の狛犬像(角は亡失)は現状像高87.9cmを測る。堂々たる大きさの作例である。大きく寸胴に延びた胴体に、やや扁平な頭部をいただき、胴体に比べると華奢な前足が踏ん張る様子は、例えば鎌倉時代や南北朝時代の獅子狛犬像のような、体勢や体つきともに、迫真性を感じさせるものとは様子が異なっているもの、大きさと相まって、おおらかな力強さを感じさせる、目を引く作例である。一見して、室町時代いづれかの時期の作であろう。



図15 法華寺観音堂 十一面観音坐像



図16 稲門神社 狛犬像（獅子狛犬の内）



図17 稲門神社 獅子像（獅子狛犬の内）



図18 稲門神社 獅子頭左眉（裏面）



図19 稲門神社 獅子頭右眉（裏面）

と思われる。そして材については樟を用いて、頭部を一本から彫り出しながら、軀を用いて左右に二分して、平整で像内の内割を行うという、奇木造でも別削造でもない見慣れない技法で、造像されていることが指摘されている。九州で特徴的に多用される樟を用いていることから、造像は当地においてであると判断され、その一風変わった技法に鑑みても、当地に根差した造像活動の中から生み出されたものか、と考えそうになるのであるが、胎内墨書によって、正しくはそうではないことが分かる。

狛犬像胎内には、胸部に「永禪作者」として造像した人物の名前が見えており、作者名を知ることができる作例なのであるが、これだけではそれにとどまる。しかし辛いなことに、ここにはこの人物が造像した別の彫刻、その一部がこされているのである。それは、『福岡県地理全誌』に「高横共二四尺」と見えているのは幸甚で、墨書銘をもつこの小部材によって、獅子頭自体は、この記載より後、明治時代以降に失われてしまったらしい、とはいえ眉のみでこされているのは幸甚で、墨書銘をもつこの小部材によって、獅子狛犬像の位置づけ、当時の宝満山の動向の一面までを窺うことができる。銘文は、右眉裏が「文明三年^嘉六月七日永禪作/歳五十二度」、左眉裏が「宝満下宮大宰少貳^殿□□/江州永禪」というもの。これにより、かつて存在した獅子頭が、文明3年（1471）に、稲門神社の下宮のために、少貳資の関わりのもと、近江からきた永禪によって造られたことが知られ、宝満山と少貳氏つまりは当地の有力者や、宝満山と近江とのつながりを示す点、山の信仰と歴史を考える上で重要な存在なのであるが、これはそのまま獅子狛犬像を考える上で重要な資料ともなる。件の獅子狛犬像も、同じ頃の造像であろうし、そして作者の永禪は近江から来た人物だったのである。これはやはり、天台宗の一大拠点であり、当地における一大山岳信仰拠点である宝満山、と言う観点から考えると、理解しやすい内容であろう。中世の宝満山においても、様々な人の関わりのもとに、多彩な造像活動が行われていたようである。



図20 大宰府市個人蔵 薩摩塔



図21 大宰府市個人蔵 薩摩塔（塔身の尊像）



図22 大宰府市個人蔵 薩摩塔（多聞天像）

6 海を渡ってきた尊像

宝満山においては、失われた中心を含めた往時の輪郭を考える際には、北谷や柚須原など、古の面影と文物をのこす場と、文献史料等の他に、先述の通り、やはり山の外にある文物や場も、十分に意識しておくおかねばならない。そこでまずはここに一点、山の外にある文化財について具体的に紹介し、考察を加えておくことにする。それは大宰府市幸府の個人宅に伝わったもので、神仏分離以前までは、宝満山中にあったのだとされる石塔である。地誌類から窺うに、神仏分離以前、すでに山内の様子は盛期に比べると衰退していたようであるが、神仏分離以後はさらに仏教的色彩が薄れてしまったと先に述べた。それは、必ずしも皆が破壊されて滅びたというのではなく、山を出た存在が、実は少なからずあるのである。山の周辺にとどまらず、福岡平野一帯には宝満山ゆかりの場が知られ、そこには少なからぬゆかりの文物が存在しているようである。今後はそのような存在について調査研究を深めることが必須であるが、ここで手始めに、宝満山の新たな一面を浮かび上がらせてくれる存在を、取り上げておこうとする次第である。とり上げるのは石塔で、『筑前国続風土記附録』に、龍門岩の側にあるとして「火焼皇子の祠、三重の石塔あり。塔の四面に仏像を彫刻せり。尊^尊と^尊として見えているのが、それかと推察されている（註

21）。この、全く変わった姿をしている石塔は、薩摩塔と称されているものの一例である。薩摩塔については、昭和33年（1958）に、薩摩で初めてその作例が認識されたことからその名があり、かつて平戸周辺や福岡平野周辺でも見出されるようになり、現在では作例数が40基に届こうとする所にまで来ている。ただし所在が九州内に限られていることは変わりなく、そしてその西側の特定地域に顕著に偏在していることが特徴である。その姿は、本道須弥壇を石にて模した下半に、壺形をした塔身を据え、宝満山伝来の件の塔は、例外的に板状の屋根をもっているけれども、一般にはその上に反りが強い屋根があるというもので、須弥壇には四天王が、塔身にはその正面龕中に、塔の主役である尊像が彫りあらわされている。日本にある石塔の中にあつて、強い異風を漂わせるこの薩摩塔は、近年飛躍的に深化した研究によって、中国製であることが押さえられ、総じてその制作時期は、12世紀から14世紀に絞り込むことができると推察されるに至っている。つまりは海を渡ってきた尊像だということになる。『筑前国続風土記附録』にいう「唐石といふ」というのは、よく見たものだと思う。顧みれば宝満山は、最澄造立の権像薬師が、遣唐使の渡海に関わったように、草創期から山の世界だけではなく海の世界ともゆかりがあった。この海との関係は、北部九州の霊山に往々にして見受けられるものではあるが、当地を代表する霊山の一つである宝満山も、その特色を濃厚に備えていたのだと言うことができる。



図23 首羅山遺跡 薩摩塔(西側)



図24 首羅山遺跡 薩摩塔(西側・多聞天像)

とすることができらう。そしてもう一つ、今回は古代から中世にかけての、仏像ないしは仏教系文物に焦点を絞って紹介し考察を加えてきたのであるが、この薩摩塔は、四天王が彫刻されていたり、下半が須弥壇だったりすることから、仏教系であることは間違いないにせよ、実はおそらく純然たる仏教を背景とするものではなく、道教ないしは神仙思想等のかかわりに関しても、加えて意識しておかねばならない存在だと考えている(註24)。このように、僧のような宗教者を頂点とする信仰体系価値体系には、素直に取まらない信仰と文物が、受け容れられ語り伝えられたことについて、少し意外な感もあるのであるが、そもそも山内は、仏教、神祇信仰、又これらと重なりながらも独自の世界も持った修験などが共生する、豊かで多彩な信仰空間であった。そしてそれは、僧などの宗教者たちが主として住まう日本の聖なる山に、一見馴染みにくいように思われる、商人や中国や海といったものまで受け入れる、懐の深いものであったことが感じられるのである。

そしてこの宝満山伝来の薩摩塔は、尊像表現が、宝満山ともつながりがあり、同じく三郡山地の一面を占める、首羅山遺跡に2基ある薩摩塔のうち、西側の塔のそれと近い。彼の塔は、薩摩塔研究史上初めて、塔制作の時間と空間が絞り込まれるにあたり鍵となった。学史上重要な作例なのであるが、その塔と宝満山の塔は、制作工房を同じくする等、親しい関係にある存在だと見ることができることから、それと同じく、13世紀半ば頃の中国、つまりは南宋にて制作されてもたらされたものだと考えることができる。要は鎌倉時代頃の宝満山が、大陸世界と結びついていたことを示しているのである(註22)。これは、平安時代後期から鎌倉時代にかけて、宝満山への宋商人たちの関与が確認できることも整合する在り方である。宋商人の関わりとしては、滋賀県大津市の西教寺に伝わる『阿巻疏知礼記』が、奥書から、宋商人が集住していた博多津唐房の、大船積三郎船頭が、有智山明光坊の唐本をもって永久4年

(1116)に書写したものが、原本となっていることと知られること、また建保6年(1218)に、宮崎宮留守行遍によって殺害された、宋商人の張光安が、神人、客人という形でこの山に帰属していたことが知られることなどを、具体的な例として挙げることができる。塔が大陸から山にもたらされる環境は、整っていたのである(註23)。

そしてこの時、この薩摩塔に関しては、かねてより、日本への移入と信仰の主体は、留学僧や渡来僧などではなく、海を渡る中国人商人たち自身であることを指摘してきたのであるが、これを承けるならば、この薩摩塔が存在していたことは、宝満山の山中に、新しい外来の海の民の信仰が、持ち込まれ受け入れられていたことを示していることになる。宝満山は、海にゆかりをもつと言うよりも、より直接的に海の世界と結びついた山であった、

7 結び

今まで知られていた作例に、今まで知られていなかった作例を加えながら、宝満山の仏像と、仏の山としての宝満山の側面について、しばしば考えてきた。調査が進んだ現在においても、変わらず決して作例は豊かに知られているわけではない。そのため、山内それぞれの場や、それぞれの時代について、具体的に詳細を明らかにする段階には未だ至っていない。しかし、かつて仏教信仰の一大型地であったのだ、とされながら、古代から中世にかけて繁栄を見た山内、主役たる仏たちやその在り方のことになると、茫漠として語りようがなかった以前に比べて、大きく前進して、輪郭なりと考えることができるようになってきた。宝満山は、都とつながる要素も大陸とつながる要素も在地の要素も備えた、九州にある霊山らしい、豊かで多彩な聖地だったことが看取される。

今回は、具体的に仏像を見ながら、この山がその申緒と格式にふさわしい仏像の陣容を、確かに備えていたらしいことを、窺うことはできたと思う。そして、文献史料や出土遺物とはまた少し異なる側面から、山の歴史を考えるための材料や視点を提供することも、できたのではないかと思う。まずはこれをもって、ここまでの調査研究の成果とさせていただきたいが、今後はさらに、とくに山の周辺部、博多部を始めとして存在が知られるゆかりの場に、調査の主たる舞台を移しながら、宝満山関係の仏像の調査を進め、今知られている諸像についても、さらに研究を深化させながら、宝満山と仏像の縁組を、具体的に肉付けし鮮明にしてゆくことに努めたいと考えている。この時、第一に掘るべきは、山内に伝わる、あるいはかつて伝わっていた仏像そのものである。しかしそれだけでは、十分な成果は出せないだろうから、山内に関わる文献史学や考古学の成果をこれまで以上に参照し、またやはり、若杉山や首羅山など、とくに同じく三郡山地にあって通ずる様相を見せる、ゆかりある山々の在り方も、さらに積極的に参照してゆかねばならないと考えている。

そのようにして宝満山の仏の世界を明らかにすること、それは聖地宝満山の往時の全姿を甦らせることであり、そしてそれは、北部九州の信仰と造形の世界を考えてゆく上で、きわめて重要な意義をもつことであろうと考えている。

(井形 進)

註

- (1) このような動向を代表する成果としては、森弘子『宝満山の環境歴史学的研究』(太宰府顕彰会・2008年3月)がある。本書では、修験の一大型地であった側面を中核としながら、山の歴史、民俗、環境にわたって、広く充実した紹介と考察がなされており、本稿もこれに多くを拠っている。
- (2) 小田富士雄編『宝満山の地宝—宝満山の遺跡と遺物—』(太宰府顕彰会・1982年9月)が、考古学を中心としながら、美術史学や文献史学も協力して一書をしたもので、文化財的な側面から本格的に山を取り上げた書物としては、最初のものであり、今も最も掘るべきものである。なお、今回の報告書中の仏教美術に関連する記述は、この書物中の八尋和泉氏による記述と、同氏による『太宰府市史 美術工芸資料編』(太宰府市・1998年5月)の記述に拠る所が大きい。
- (3) 註2書物中の、小田富士雄氏の見解に主として拠り、『太宰府市史 考古資料編』(太宰府市・1992年4月)を参照した。
- (4) 本稿中に登場する、太宰府周辺地域にかかる古代の史料に関しては、主として『太宰府市史 古代資料編』(太宰府市・2003年11月)に拠った。
- (5) 四王院、四王寺、大野山などとも呼ばれるこの寺に関する、歴史と文化財の概要を紹介したのとしては、『聖地四王寺山』(九州歴史資料館・2013年1月)がある。また、この寺の四天王像については、井形進『四王寺と四天王像を訪ねて』(『西日本文化』453・2011年10月)がある。

- (6) これらの小金銅仏に関しては、前述註2の2書中の、八尋和泉氏による記述に詳しい。
- (7) 本像については、井形進「資料紹介」福岡・若杉山の千手観音立像『佛教藝術』272号・2004年1月)、井形進「太宰府周辺における木彫像の黎明」『空海と九州のみほとけ』福岡市博物館・2006年9月)がある。
- (8) このことについては、井形進「太宰府周辺の仏像と造像」『太宰府—その栄華と軌跡—九州歴史資料館』2010年11月)、井形進「聖地太宰府の仏たち」『海路』第10号・2012年3月)に触れている。今後、具体的に考察を進めてゆきたい。
- (9) この像とその周辺について詳しくは、井形進「北谷地藏堂の地藏菩薩立像—平安時代の龍門山と北部九州造像界の一遺例—」『九州歴史資料館研究論集』35・2010年3月)を参照されたい。
- (10) 観世音寺の阿弥陀如来立像については、おそらくは平安時代前期から寺に安置されていたものではなく、後世いずれかの時期に、縁あって移座されてきたものだと考えられている。しかしそれは、太宰府周辺の観世音寺ゆかりの地からであろうことは、大方の想定する所である。
- (11) 若杉山と関連文化財に関しては、『九州の寺社シリーズ8』筑前糟屋 若杉山の仏教造跡(九州歴史資料館・1986年3月)が最も詳しい。
- (12) このような考えから、井形進「福岡平野周辺の山の仏像—首羅山の場合を中心に—」(『北部九州の山岳霊場造跡—近年の調査事例と研究視点—』九州山岳霊場造跡研究会・2011年8月)において、宝満山ともゆかりがある首羅山について、若杉山の様相も参照しつつ、山内の大要を復元する試みを行った。宝満山に関しては、より多くの関連資料が知られていることもあり、今後より具体的に、それを行ってゆくことができる可能性があると考えている。
- (13) 引用文は、『筑前国統風土記附録』で、1977年10月文献出版発行のものに拠った。
- (14) 運照と照曉の動向については、筑前地方で多く事績が確認できることから、『筑前 太宰府 戒壇院』(九州歴史資料館・1994年3月)をはじめとして、折にふれ八尋和泉氏が言及されてきたところであるが、最近のものとして、同氏の『筑前伯土興福寺十一面観音像について—西成壇運照と京大仏師照曉—』(『年報太宰府学』第4号・2010年3月)に、あらためて網羅的にまとめられている。
- (15) X線CTスキャナによる画像は、九州歴史資料館保存科学担当の加藤和哉氏の機器操作によって、作成したものである。
- (16) 西国湛派の呼称は、漢字のつく仏師たち、と呼んで彼らの作品研究を主導してきた八尋和泉氏が、『九州地方の仏像』(『仏像集成 8 日本の仏像(中国・四国・九州)』・学生社・1997年3月)の中で初めて使用されたもの。同氏による最近の業績としては、『対馬太平寺貞治六年銘木造地藏菩薩坐像—大権那少三頼尚・仏師湛勝—』(『年報太宰府学』第5号・2011年3月)があり、当該作例の造像の背景を詳細に明らかにするのみならず、西国湛派についての現状と課題とをまとめている。なお、竹下正博『肥前松浦海昌寺の如意輪観音像』(『MUSEUM』第614号・2008年6月)においては、西国湛派について、湛幸門流として紹介している。ちなみに同論文は、後述の博多仏師についてもその事績一覧を付している、有用である。
- (17) 2009年11月13日の、末吉武史氏の調査に同道した際の氏の見解と、その後氏が作成された調査による。
- (18) 引用文は、1993年4月文献出版発行のものに拠った。
- (19) 博多仏師については、八尋和泉「博多仏師と福岡仏師」(『宗教文化』13号・1975年6月)、同氏「中世博多仏師の存在とその作品」(『九州歴史資料館研究論集』2・1976年3月)で、初めて注目されるに至った仏師たちである。彼らについては上記2論文が今なお基本文献であるが、近年のものでは註16の竹

下氏論文に付された事績一覧が網羅的である。

- (20) 小西信二氏が見出したもの。小西信二「龍門神社の狛犬について」(『西日本文化』152・1979年6月)参照。その後、八尋和泉氏が彫刻史的な観点からあらためて検討を加えられ、その成果は、註2の2書中に見ることができる。本稿の記述も、これらに多くを依るものである。なおちなみに、見いだされた時にはバラバラであったものの、これは、廃仏毀釈によるものなどではない。大正期の写真には、社殿内に安置されている様子が写っている。
- (21) この記事の存在については、小西信二氏に御教示いただいた。引用文は1977年10月文献出版発行のものに拠った。
- (22) このことは、南宋時代の制作と見られる宋風獅子を伝える、若杉山の在り方と通ずるものである。そしてこれは宝満山と若杉山にとどまらず、福岡平野周縁の山々で共通して、多かれ少なかれ見受けられた特色であろうと考えている。
- (23) この塔について詳しくは、井形進「太宰府所在の薩摩塔」(『市史研究ふくおか』第4号・2009年2月)を参照されたい。
- (24) 薩摩塔研究の現時点での到達点に関しては、井形進「薩摩塔の時空と背景」(『デアアルテ』第28号・2012年3月)および、井形進「薩摩塔の時空 異形の石塔をさぐる」(『花乱社』2012年12月)を参照されたい。

第8節 宝満修験について

1 宝満修験の産地

前節で述べたように、宝満山は最澄の来山以来天台宗との関係を深め、長治の事件を経て、当時一山を統轄していた大山寺は「天台之末寺」と裁定されることとなった。それまでも、承和14年(847)には円仁が龍門山大山寺に於いて入唐求法の報謝の転経を行い(『入唐求法巡礼行記』、仁寿2年(852)には円珍が博多浜に於いて龍門社等のために7日間転経を行い入唐の安全を祈願し、『開城寺文書』、あるいは『往生要集』を著した源信も10世紀末、龍門山を訪れたと考えられる。その後、浄土教が龍門山でも盛行した様が、多くの高僧伝、往生伝等に散見される。

それと共に、長保5年(1003)入唐を志し西下したものの果たせず、脊振山について龍門山で修行した皇慶の存在は大きい。皇慶は書写上人性空の御で東塔の僧。静真を師とし早くから天台の学匠とうたわれた人であった。大山寺における東寺の景雲阿闍梨との出会いは26歳の頃であったが、皇慶が東密の灌頂をうけたことは、天台密教史上重要なでき事となった。大江匡房は『谷阿闍梨伝』に、「慈覺大師の灌頂で真言を志し密教を学ぶ者は、谷阿闍梨の門流でない者はいない」とその盛況ぶりを伝えている。

宝満山においても、台密が盛行したことは想像に難くない。江戸期にも行われた大巡行(夏行)は「天台3道法」ともいわれ、北畠山の回峰行と同様のものである。盛時、宝満山の坊は曹洞を専らにした衆徒方300坊と修行を専らにした行者方70坊があった(『筑前国続風土記』以下『続風土記』)と言われるが、台密の行者が宝満山伏の系譜につながっていったものと考えられる。大巡行は東院谷の薬師堂を中心に行われ、江戸初期の絵図にはその側に「伝教ヤシキ」の書き入れがある。また近くにある法城窟(福城窟)の窟奥の岩壁には十一観音と思われる線刻仏があり、龍窟修行の様子を彷彿とさせている。

宝満山の修験のはじまりについて『龍門山日記』(以下『旧日記』)には、役行者の来山を伝え、さらに「応和年中(961~3)浄蔵が登山して役行者の御影を開き、ここにこの山の流儀は役行者の伝法が繁盛するようになり、禁裏よりも下知があって、新しく私流の修行をすることは禁じられた。龍門山の衆徒は一家家を座主とし、山中の全てのごことは座主の命令によった。これが浄成座主のはじめである」と述べている。『鎮西龍門山入峯伝記』(以下『入峯伝記』)には、「幾城峯は、応和元年(961)、役者小角十一世の座主大僧都浄成和尚が仏燈華供大先達として行ったのが始まりである。浄成は村上天皇の玉体安全天長地久御願圓滿のため、三部習合の入峰をし、これによって別勅を賜り、鎮西本山座主僧正に転任した」と述べている。

他の山伏からは隔絶した権威を持っていたと語られる浄成座主であるが、宝満山以外の史料には見えず、文禄元年(1592)浄成坊42世隆全が滅却し断絶したため記録類も伝わらないと伝わる。太宰府市内山には「ジョウカイ島」という地名があり浄成座主の跡と伝え、室町後期のものと考えられる地蔵像を線刻した石板が発見されている。眼下に太宰府の町を見下ろし、西に脊振山を望む景勝の地である。

2 夏行一大巡行

大巡行が何時始められたかは明らかでなく、江戸期に行われた行法がそのまま台密の行者が行っていたものとも考えられないが、この行が修験道ではなく「天台の修法」とであるという山伏への取材(竹林庵1909)にしたがって便宜上本項で大巡行について述べておく。大巡行はまた「心運の道法」ともいわれ、開山心運上人の墓所に詣でることが行の大切な要素でもあった。行は、5月29日から7月14日まで45日間の修法を6年間修行するというもので、最初の3回は続けて毎年、あとの3回は一代のうちに修する事になっていた。一夏九回の夏安吾の半分の日数である。『南坊高橋賢俊一代記』(以下『一代記』(永

福院文書)によると、賢俊は18歳の安政4年(1857)より「如法經大巡夏行灌頂修行」を1ヶ年に45日、7ヶ年修行終わって慶応元年(1865)に「両部阿闍梨」の称号を開号したとある。

南坊永福院には、安政4年(1857)に改訂された(当山大巡二教之伝書并動行之定書)(以下『定書』)と天保8年(1837)6月の『大巡行法』、年号はなから天保8年のものとほぼ同じ内容の『大巡華供帳』があり、大巡りの行法を知ることができる。本稿では、古い形を伝えるものと考えられる天保8年の『大巡行法』を基本に見ていきたい。

『大巡行法』は仲谷坊55世阿闍梨豪珍(22歳)が写したもので、行中の花供の場所「道華上所」と、諸経「道経次第」について述べている。夜中に山内の壺所を巡り、昼間は如法經書写などの行をしていたと考えられる。表紙に「此書他有見聞聞敷事」と記されており、この行が伝承されるべきものであったことが知られる。この年の大巡同行は3人で越家・豪珍、金剛仏子・道場坊良延、初入・福藏坊彦珍であった。越家とある仲谷坊豪珍は、3年後の天保11年に初先達として秋峰修行を行っている(『鎮西龍門山入峯伝記』以下『入峯伝記』)。入峰の場合は入峰36度で「大越家」となる。大巡行の位階は峰入とは別で、大巡行を6回成就すれば「越家」と称したと考えられる。夜中の厳しい行であり若い内に、この行を終えたようである。

「道華上所」をたどれば大巡の道筋が判明する。大巡行は東院谷の薬師堂を起点に行われた。永禄元年(1558)25坊は山上に上がり、西院谷、東院谷に坊舎を縮んだと伝えられ、東院谷には16坊があったが、すでに7~8世紀の土器片が検出されており、古くから祈願や修行の際、東院谷が何らかの形で使用されていた可能性が考えられる。また江戸初期の絵図には薬師堂の側に「伝教ヤシキ」と書かれており、この辺りが天台の行の中心地だったことを示唆している。

夜の回峰行は、薬師堂を出、法城窟、福城窟、虚空蔵、影影水神、皮中尊天(青面金剛)、念仏石と、まず東院谷道(女道)から始め、青面金剛から東側山腹を斜めに下り冠石(神号武内宿禰・本地十一面観音)へい。冠石は心運の法統をつぐ行満が山中を経歴してこの岩下に誦経した時に、雨が傾りに降ったが法衣は濡れなかったので被石と名付けられたという大岩である。そこから高低差200mの急斜面を一気に下って中院の不動・毘沙門の堂に供花し、南に10余町降りて、大南宮の不動明王・毘沙門天王、ハクド石(蟪蝸石)に供花する。以下道順は、図1に示すとおりである。

その途中で、福城窟の次ぎと、五大尊の次ぎに「虫」とあり、その他にも「虫」の記述が散見する。ここでは虫陀羅尼が唱えられた。慶応3年(1867)11月7日の座主楞伽院等の「勅働勘財序」(井本文書)に、この行の目的は専ら「蝸災」を退除し、五穀豊饒を祈願することであると書かれている。庶民への寄附集めであるから、この季節に庶民が最も願いとすることが、願意として掲げられているのであろうが、現実上、道経の其他処で、虫封じのための「虫陀羅尼」が唱えられたのである。

大南宮からは急坂の中宮へ登り、大講堂・神楽殿に参り行者堂前の護摩壇・爰立岩、葛城七童子の花立に供花する。次ぎに男道から龍門岩に向かう。龍門岩のある龍門嶽の登り口には、根本皇子があり、ここからは鎖を頼りによじ登らなければならない。龍門岩は山名にもつながる重要な岩であるが、江戸初期に描かれた「絵図」にはこの部分に「マンヤン」とあり龍門岩の名はない。『大巡行法』には、「一宇美八幡・志賀大明神・文殊菩薩、一中津尾皇子 饒速日命(本地文殊菩薩)、一若八幡・大輪・宇佐八幡(三ツ口)、一火徳皇子・漢津姫命(是別三荒神也)、一高良大菩薩」とあり、宇美、宇佐などの八幡社に、中世八幡と関係の深かった志賀大明神、高良大菩薩、また『宝満大菩薩記』で、生まれたばかりの応神天皇に成道意を授けたという文殊菩薩が、この所に集中してある。

龍門岩を通り、袖すり岩では「四守道口」といって「カヒヤンセンサイ」と唱えながら通り抜ける。頂上ではまず御本社の内獅子・外獅子に花九つ供えるが、その方法は秘密で金剛佛子が動く。次



図1 宝満山大巡行順路図

ぎに一亀井(神童)・亀若(神童)・長生佛・今宮(神体彦五瀬命)、岩宮(神体稻飯命)、後初太子(神日本磐余彦命)・前室太子(三毛入野命)に供花する。頂上部分には、宝満宮獅子として神武天皇の兄弟が祀られている。また今宮と岩宮は「蓬菜山」に祀られているとあるが「蓬菜山」は、他の史料で「札押山」としている頂上中央の巨岩であろう。安政の『定書』では「上宮拝石札押」として真夜中に鵜杖院藤尼心経をあげると記されているが、天保本にはそのような記事は見当たらない。

社殿の左から東側に鎖を伝い下り、仁王石の上に祀ってある孔大童子(孔大寺権現)に供花。仏頂山に向かう。安政の『定書』では、東側山腹はほとんど省かれ、歩く距離が中宮神楽殿から仏頂山までとされているが、簡略化した中にも心連上人の墓に詣ることが、この行の大切な要素である伝統は遺している。

夜道を歩き通した一行は仏頂山で夜明けを迎える。日光札押し三礼をする。それぞれに口伝がある。日光札押は「東よりほのぼののり日の光り地水火ふう空とあひらうんけん」といながら東尾塔(心連上人墓)を巡る。三礼の口伝は「日輪正輪地水火風空」。日光札押が終わると、宇土の谷に下って藤(普地)岩屋に行き、西3町八重大童子で金剛界大日、胎藏界大日、護摩壇(大先達・初先達・度衆・新客)等に供花した。次に御岩屋、松石を巡り獅子宿の香椿童子と五大尊に供花し、西に行つて御石石、案内から雨宝童子に供花する。その途中の「水流」と「虫」にも供花する。最後に能樹菩薩に供花する。『旧記』の記述によれば雨宝童子の側に獅子童子と能樹菩薩が祀られ、その下に獅子窟があるという位置関係らしい。獅子窟で供華の水を汲むのに極秘の口伝があった。また多賀(担桶)を持時にも口伝があり、定足(履き物)を履く時、脱ぐ時にも口伝がある。獅子の窟での水汲みが終わると一日の行程を終え、栗師堂に帰る。また大巡行中に定められた場所、道經39巻、虫陀羅尼6巻をあげる。道經として何があげられたかは不明であるが、獅子の窟で行が終わって栗師堂まで帰る間に「普門品」一卷を誦している。

『定書』では、7月13日の夜を満行とし、大日堂より惣中松明をともし、獅子滝で消し、提灯に替え修法するとある。翌7月14日、満行の記念に長さ1丈2尺5寸、幅4寸5歩、厚さ2寸5歩の碑文を、本社三神の本地仏の梵字を彫った岩の前、龍門嶽への入り口付近に建てる。大巡行が終わると孟蘭盆会である。行者は山中二五坊を廻って施餓鬼供養を行ったという。

安政の『定書』にある「華供作法」は、道場である神楽堂に神仏を招いて、華皿・花供盆に花を盛って供えるもので、実際山中を巡回したようには見えない。しかし天保8年の『大巡行法』では、実際に山中の聖所に華を供えて巡った様子が見て取れる。大巡行で、巡る範囲は、宝満山内と開山心連上人の墓がある仏頂山に限られており、彦山大巡行の「小修尾」に相当するといえよう。そして、この大巡行で巡る道の内側が、おおまそ宝満山の「聖域」であったと考えられる。

3 宝満山修験の成立

宝満山は、九州における修験の山の代表格である彦山を胎藏界とする金剛界の山である。両山間の入峰を「大峯」といった。「大峰」は元々、紀伊半島南端の熊野を胎藏界とし吉野を金剛界とし両山間を抖擻する入峰行をいい、「大峰奥駈道」は世界遺産に登録されていることでも知られる。その行法が九州へも導入されたのである。養和元年(1181)、後白河法皇が聖護院の鎮守「新熊野社」に寄進した28ヶ所の荘園に「豊前彦山」があり、これにより彦山が中央の山居修験の系譜に早くから連なっていたことが知られる。その事によって彦山は、それまでの宇佐宮弘勲寺僧の山林修行の場、天台系寺院としての有り様から、修験の山への変貌が始まったものと考えられている。そしてそれは周辺山々にも影響を及ぼしてくる。

近世の史料ではあるが「彦山順峯四十八宿次第」に、伝に曰くとして「文永2年(1265)に彦山の軌則によって宝満山の行者9人に先達の職位を授けた」という記事があり、かなり信憑性のある事と考えられている。それを裏付ける一つの資料として、中野窟にある自然石に両界の大日如來の種子を彫った磨崖があげられる。その銘には文保二年(318)の年号と彫り手の「藤原廣口」そして「法眼奉崇十六度」と彫られている。16度は入峰の回数で、16度に特別の意味があったと考えられるが、このような巨岩の上部に、径80cmの日月輪に五輪具足の梵字を彫るというようなことは、単に個人の入峰成満の記念というだけでは成し得なかつたことで、幸栄が何かの使命を帯びて入峰修行を発願したものと考えるのである。

当時蒙古襲来から30数年、外敵の再来に備えてより強い戦力が求められていた時代である。それが「修験」であったのではなかろうか。何を以て「修験」とするかはなかなか難しいが、すでに当時宝満山にも山林修行を事とし、他山にも赴き入峰修行をする人たちが相当いたと考えられる。そんな中で彦山は最も近い所にある修験の一大霊山であり、しかも宝満山からは峰伝いに行くことができる山である。お互いの往来もすでに頻繁に行われていたのではなかろうか、そう考えるならば、文永2年(1265)に「彦山の軌則によって宝満山の行者9人に先達位を授けた」という記事も真実味を帯びてくるのである。わざわざこの年の先達位授与だけが特記され後世に書き残されたのは、文永2年にはじめてそういうことが行われたということを示唆しているのではないだろうか。しかも9人という複数の山伏に授与されたということは、それまで修験の行法が整っていなかった宝満山の行者が、公的に彦山修験の儀軌を学んだということだと考えられる。幸栄が入峰を重ねたのも、本格的な修験を宝満山に導入すべく為政者(鎮西奉行少武氏)、あるいは大きな宗教勢力の命を受けてのものではなかろうか。この場所は秋峰の際、碑伝を立てる場所であり、磨崖の裾にはかつて役行者堂があり、向かいの岩壁には、径72cmの日月輪中に、左に阿弥陀如来、右に釈迦如来を表す梵字があり、その下に文保2年の翌年の元応元年(1319)の年号がある。その右横の岩壁にも径72cmの日月輪が二つ残されている。梵字は完全に破壊されているが、日月輪の下に元亨三年(1323)の年号が見える。両岩にある年号は4年しか隔たっておらず日月輪の大きさが同一であるから、最初から一体のものとしてプランされたと考えられる。こうして一連のプランのもと本格的な修験の様式によって、かなり広い平坦部を持つ8合目付近に講堂、神樂堂、役行者堂、法華塔等を建立し、磨崖を彫り、さらに熊野権現を祀り、鎮護国家を祈念する当山の修験の中心道場が完成したと考えられる。

ちなみに玄界灘に面した糸島市の雷山では13世紀から14世紀にかけてさかんに伽藍の整備が行われた様を中世文書から窺うことができる。永仁6年(1298)の「雷山千如寺中宮曾祖岐社造宮用途文案」(「大徳王院文書」)によると、雷山中宮は総工費7500貫で、正殿・拝殿・樓門・回廊、若宮殿四つ・鐘樓・経藏・鳥居を備えた堂々たる境内として計画された。中宮の場所にこのような活発な造営計画を可能にした要因として、蒙古襲来に対する一連の祈禱との関連が考えられており、同じような状況が宝満山でもあったと考えられるのである。

また山麓には内山・南谷・北谷の院坊が展開し、山中には東院・中院・西院、あるいは四所の伽藍があったと伝えられる。このうち、東院・西院には、戦国期の永禄年間以降、山麓に住んでいた山伏が課役を逃れるため坊舎を移したと伝えられ(『龍門山日記』等)、その所在地の確定については、岡寺良の研究がある(岡寺2008・2011)。また山中には修法に使う五所秘水(五井)や修行の場である七窟が定められた。七窟には、役行者が49日の間鈴を振り明神の影向を祈りそれぞれの窟に神仏を祈り出した、また伝教大師が七仏薬師を安置した、淨戒が七観音を安置したなどの伝説がある(『龍門山七窟巡礼由来』)。

4 九州の大峯

北部九州の山岳宗教の世界が、胎藏界の彦山を中心として、方や福智山を、方や宝満山を金剛界として、密教の大曼荼羅の世界が現出したのは、こうした歴史の流れの中にあつたと考えられる。そして修験道のもっとも重要な修行である峰入りは、中央の大峯・葛城にまで整えられていた。(図2)

彦山・宝満山を往復する「大峯」は地図上の全長約130km、この間に四十八宿が置かれたが、この宿の中に中台の「深山(仙・衆)宿」をはじめ大峰百二十宿あるいは七十五座と同じ名の宿が散見する。また熊野・吉野の大峰修行は全長180kmのコースを75日の日程で修行したが(現在は6日)、彦山・宝満山の大峰修行も75日の日程であった。このうち往路75kmは峰から峰への険しい修行路で72日をかけ、帰路は里の道を3日で帰っている。このコースを彦山山伏は春峰・夏峰の修行をし、宝満山伏は秋峰修行をしている。

この入峰道を役行者が開いたという伝説は伝説として、当該峰入り道が体系化され教義づけられたのは、室町時代の永永年間(1521～28)の阿波房即伝によるとされる。即伝は下野日光山の出身で彦山に赴き南谷華蔵院の客僧となり、『修験修要秘訣集』『三峯相承法則密記』『修験頓覚証集』『住源秘底記』『彦山峰中灌頂密蔵』など、多くの教義書を著した。なかでも大永5年(1525)に著した『三峯相承法則密記』の「第一百二 三峯相配事」に、北方龍門山金剛界徒果向因、南方彦山胎藏界徒因因果、その中央に胎金合の神山つまり小石原深山宿が定められている。また永禄元年(1558)の彦山修験秘訣印信口決集の「第十二 三峯相配事」にも、龍門山を西方、彦山を東方とするなど若干内容が異なるが、同様のことを記している。

彦山側の資料には大峯の曼荼羅への充当は見られないが、宝満山の坊家の資料に、曼荼羅に充当して修行場所を示したものが認められる。それらによって(表1)と(図3・4)を作成した。

宝満山から三郎山、米ノ山、大根地山、夜須の五玉神社、古処山、両界嶽、馬見山、嘉藤峠、不動嶽の



図2 北部九州峰入りルート図

間には、いくつかの山をグループ化して金剛界九会曼荼羅の全体を一会から九会として充当し、さらに金剛界曼荼羅の根本をなす中央の閻摩会(成身会)の第一重院に描かれる37尊(表4欄)とその垂迹である童子(表3欄)を配し、さらに7欄に示す諸尊によって金剛界曼荼羅を山に描き尽くしている。兄弟嶽は胎藏界曼荼羅の最外

表1-1 大峯（秋峰）

大峯（秋峰）

<金剛界峰中三十七尊>

会	峰	番塗	仏・菩薩	持所	現在地	金剛界曼荼羅	三昧耶印大童子	八大童子本地
第一会	御笠嶽	①金剛童子	大日如来	中 御座	宝満山中	五仏の峯	虚空童子 彌勒童子 真弓童子 疑臥童子	虚空住仏 (宗生仏)
		②獅子童子	阿四仏	東 獅子	宝満山中			
		③床並童子	宝生仏	南 床並	宝満山中			
		④八葉童子	觀自在仏	西 八葉	仏頂山の先			
		⑤化生童子	不空成就仏	北 化生	頭巾山の先			
第二会	真弓嶽	⑥船石童子	金剛波羅密	船石	二鶴山	四波羅密		
		⑦釈迦童子	宝波羅密	釈帝	三鶴山			
		⑧文殊童子	法波羅密	文殊	三郎山			
		⑨岩尾童子	現波羅密	岩尾	米ノ山			
		⑩和羅童子	金剛薩埵菩薩	上宮	大塚地山上宮			
第三会	寝臥嶽	⑪土之童子	金剛王菩薩	五玉	五玉神社	東方四尊		
		⑫野山童子	金剛愛菩薩	野山				
		⑬持杖之童子	金剛喜菩薩	貴嶺				
		⑭冷水童子	金剛三菩薩	冷水	古処山の下の谷			
		⑮紹法童子	金剛光菩薩	白山紹法	古処山上宮			
第四会	白梨嶽	⑯弥勒童子	金剛轉菩薩	弥勒	古処山奥ノ院	南方四尊	棟増童子 白髮童子 両界童子 大徳童子	阿四仏
		⑰古洋童子	金剛映菩薩	古所東院	古処山奥ノ院			
		⑱阿彌童子	金剛法菩薩	阿彌	両界岳			
		⑲乳石童子	金剛利菩薩	乳石	両界岳			
		⑳大徳童子	金剛因菩薩	大徳	大徳岳			
第五会	両界嶽	㉑西後童子	金剛法菩薩	大徳相殿	大徳岳相殿	西方四尊		
		㉒馬見童子	金剛普菩薩	馬見	馬見山			
		㉓石童子	金剛護菩薩	馬石	馬見山			
		㉔象石童子	金剛牙菩薩	象石				
		㉕古杉童子	金剛準菩薩	古杉	葛摩峠の手前			
第七会	二腰嶽	㉖三腰童子	金剛準菩薩	三腰	二腰岳	内四供養		
		㉗不動童子	金剛不動菩薩	不動岩	不動岩			
		㉘高峯童子	金剛高菩薩	高峯	高峯峠			
		㉙平地童子	金剛平菩薩	平地	十三岳			
		㉚燒香童子	金剛香菩薩	燒香				
第八会	金剛嶽	㉛華鬘童子	金剛華菩薩	華鬘		外四供養	惡除童子 金剛童子 不動童子 兄弟童子	須弥相仏 (法波羅密)
		㉜明童子	金剛明菩薩	明明				
		㉝常童子	金剛常菩薩	常香				
		㉞不動童子	金剛不動菩薩	不動				
		㉟常童子	金剛常菩薩	常香				
第九会	不動嶽	㊱不動童子	金剛不動菩薩	不動		四拱臂菩薩		
		㊲常童子	金剛常菩薩	常香				
		㊳不動童子	金剛不動菩薩	不動				
		㊴常童子	金剛常菩薩	常香				
		㊵不動童子	金剛不動菩薩	不動				
外金剛	兄弟嶽	㊶兄弟童子	兄弟菩薩	兄弟		九曜星		
		㊷弟多童子	弟多菩薩	弟多				

史料『時中金剛界記』天保7年（永福院藏）

但し『金剛界曼荼羅』欄は『修実伝法集』（永福院藏）による

表1-2 大峯（秋峰）

<大峯中台理智冥合曼荼羅>

中台	現在地	福圓院朝倉部東峰村小石原	史料：『修実伝法集』
	知華峯	東葉阿因	<八大童子垂迹曼荼羅>
	識大本覺菩薩	上求菩薩	◎中台 香積童子 深山宿 竺之窟 愛法窟
	深山	愛法窟	※『金剛界記獅子流』寛政12年（永福院藏）には次のように記す
	定窟	下化衆生	◎聖華峯
	大本有理體	從因至果	◎識華童子 本覺菩薩尊
	理華峯		◎理華峯
			◎五大童子 本有理體尊

<胎藏界峰中八葉九尊曼荼羅>

第一	峰	番塗	八葉九尊	聖地観	八童子(本地)	現在地	備考
第一	野淵嶽	金剛油童子	東方字輪如来	具足地	愛光童子	釈迦窟	三山御堂八大童子垂迹では「慈悲童子」
第二	玉置嶽	須菩提童子	東南普賢菩薩	菩提地	(阿弥陀仏)	玉置岩窟	現
第三	大目嶽	◎中台童子	中台大日如来	四聖護地			
第四	屏風嶽	◎屏風童子	南方閻魔如来	利智地	慈悲童子	屏風岳	日本数箇ノ屏
第五	吹越嶽	◎吹越童子	西南文殊菩薩	八聖道地	(宗生在仏)	山内吹越宿	
第六	小幡嶽	◎小幡童子	西方阿弥陀如来	衆生界地	(獅子在仏)	英志山内小幡	楓嶽・鹿息嶽(オクノキダク)とある。
第七	弁財嶽	◎龍木童子	西北觀音菩薩	地蔵地		英志山内龍木	
第八	尊良嶽	◎大南童子	北方普智如来	六道地		英志山内大南神社	
第九	稻穂嶽	◎稻穂童子	東北弥勒菩薩	稻穂地		英志山内稻穂	
第十	一福之宿			彌摩地		英志山内行堂堂主	

史料『時中金剛界記』天保7年（永福院藏）

<胎藏界中外金剛部十二天之峰>

一	誓立	帝釈天	◎東方童子	田川郡添田町枝立峠
二	兵谷	火天山	◎東南童子	田川郡添田町〔英志山から4-6里の下の谷〕
三	勝所	瑞穂山	◎南方童子	阿弥陀 葛麻市八幡社
四	中岳	羅刹山	◎西南童子	葛麻市白井
五	白井	水天山	◎西方童子	葛麻市白井
六	十師	風天山	◎西北童子	観音 葛麻郡桂川町十師 老松神社
七	九郎丸	多聞山	◎北方童子	葛麻郡桂川町九郎丸
八	長尾	伊香那山	◎東北童子	観音 飯沼長尾 老松神社
九	山口	磐天山	◎北方童子	観音 飯沼山口 若宮八幡宮
十	橋須原	地天山	◎西方童子	観音・帝師 飯沼野市地蔵堂
十一	橋須原	日天山	◎西方童子	風雲野市地蔵堂
十二	本道寺	月天山	◎西方童子	観音 飯沼野市本道寺
				宝満山中

史料『龍門山峰中流記』文化9年（叶院藏）

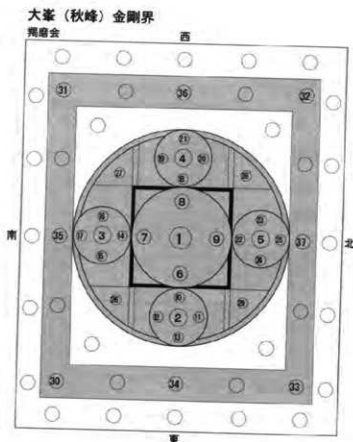


図3 大峯（秋峰）金剛界曼荼羅概念図

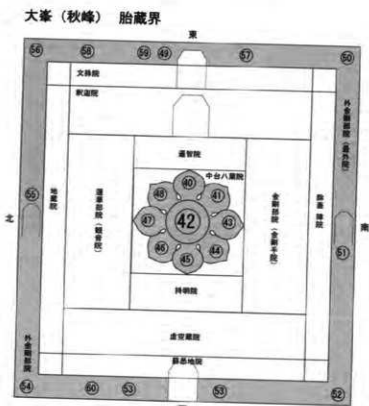


図4 大峯（秋峰）胎藏界曼荼羅概念図

園に位置する外金剛部にあて、ここに描かれている九曜星 28 宿をあてている。小石原は「大峰中台理管冥合曼荼羅」とし、行者堂を深仙（山・泉）宿とし、ここまでは「上求菩薩」、つまりひたすら修行を求めて修行する身であった者が、生まれ岩といわれる曼荼羅で出生灌頂をうけ、「下化衆生」つまり衆生を導く者となる大切な場なのである。仏の子として生まれ変わった山伏は、さらに釈迦尊、大日岳などを経て彦山俗林嶽に至るが、この間に胎藏界曼荼羅の中心八葉の蓮華に描かれる 9 尊とその曼荼羅である童子を配置している。また大峯は八大童子が守護する峰ということで、八大童子を配している。彦山からの峠路は嘉穂郡から筑紫野市の比較的平地を通るが、ここには胎藏界曼荼羅の最外周、外金剛部に描かれる 12 天を配している。なお第 3 欄（外金剛部は 4 欄）の垂迹（童子）の頭に付した番号と図の番号をあわせている。

入峰の歴史 宝満山の入峰修行についてその歴史を記した史料として『鎮西龍門山入峯伝記』（以下『入峯伝記』）がある。本伝記は、役小角に始まり、明治維新修験道廃止の後、明治 22 年に春峰・秋峰が再興されるまでの 237 回に及ぶ宝満派入峰について、編年を実施年と参加者が記され、特筆すべき事があった年次には、その内容を記している。大峯修行は秋峰として行われ、天曆 6 年（952）～永正 5 年（1508）の間は、子・辰・申の年ごとに、断続することなく行われたことが記されている。葛城峯については、応和元年（961）に始まったとされ、以後、座主の代替わり毎に一世に一度行われたとしている。

宝満山では弘治年間大友宗麟（または嫡子義統）が邪法におぼれ神社仏閣を没倒し、宝満山一帯で検地を行ったため、数百の門葉が断絶し、社家・神人は農民になり、神事祭礼は怠り、仏法修行の血脈も絶えたと伝えている（『旧記』）。そのような状況を反映してか、『入峯伝記』は 183 度目の弘治 2 年（1566）の秋峰修行の次の項に、「永祿・元龜・天正之間は、九州兵乱によって入峯灌頂が 38 年間中絶した。文祿 3 年（1594）、鳥居坊前住衆生院慶麟（75 歳）が大峯修尾を再興した」とあり、次の文祿 3 年の項には「秋峯 39 年目」とあり、この年からはじめて新客（20 人）と度衆（50 人）が参加したことが記されている。鳥居坊前住の慶麟は 75 歳、弘治 2 年の秋峰では授職大先達を勤めている。文祿 3 年の秋峰で授職大先達を勤めた山仲坊前住の快運はこの時 66 歳、弘治 2 年の秋峰には初先達で参加している。38 年の空白の期間を経て、すでに高齢の域に達した前回入峰の経験者が中心となって峰入りが復興されたことが窺える。

ところが次の 185 回目の慶長 6 年（1601）の秋峰は「是峯深仙迄、彦山に至らず」とあり、その状態が 188 回目の寛永元年（1624）の秋峰まで続き、寛永 9 年（1632）、二代藩主黒田忠之の祈禱のため行った秋峰より彦山駆けが再興している。この辺りの事情は『旧記』にも見える。すなわち「寛永 8 年（1631）黒田忠之が家督を相続し、翌年 7 月祈禱のため大峯執行の命令が出された。大峯執行は前回の定法があり、今頃云われてもどうしたものかと詮議したが、「君命には応じないわけにはいかない」ということで、1 月 10 日に当て加行したことにして入峯執行した。幸い何の障碍もなく、祈禱の巻数を奉ることのでき、布施も甚だ多かった。慶長 5 年（1600）以来、筑前藩主黒田氏と豊前藩主細川氏の不和により、豊筑両国の出入が僧俗男女農民工商一円に堅く禁止されたため、大峯修行は、龍門山よりは小石原深仙（筑前領）まで修行し彦山には至らず、彦山よりは深仙にも入る事叶わないという状況が続いていた。前年細川氏が肥後に移り、小笠原氏には何の意趣もないので、両界修行は豊州まで執行するべしと仰出され、絶えて久かった両界修行を悉く復興した。」と記されている。藩主の命令が出されたのが理だったため、前行等が行えないまま峰に入ることの不安、無事入峯行が終わった事への安堵が窺われている。仏法修行の本質より、世俗の権力の都合が優先される時代となった。

5 江戸期の復興—聖護院の末山へ

九州の首都ともいうべき「大宰府」の覇権をめぐるは幾多の争いが繰り広げられ、宝満山には鎌倉期から室町期にかけて少武氏の本城「有智山城」が、戦国期には大友氏の幕下高橋氏の「宝満城」が築かれ、戦乱によって宝満山は疲弊した。盛時370坊あったとされる僧坊も25坊に減少した。このすべては行者方、山伏の坊であった〔統風土記〕。

豊臣秀吉、小早川隆景の復興に続いて黒田藩による本格的な復興が図られるが、明暦4年(1658)3代藩主黒田光之が、先代藩主忠之に迫られた山伏明敏院秀榮の倅置りに150石の菜地を与え、御国中山伏の開墾(惣司)を仰せつけたことを端に、彦山との本末論争が勃発した。

明敏院の支配に反発した宝満山は、「元々彦山と宝満山は金胎両部の山として相並べ、外から、支配されるものではない。また彦山も此方より下知することはない、此方も彦山より下知されてこなかった。』(『宝満山寛文以来之記』)と訴えたが、御取り上げがないため、彦山の力を借りようとして、明暦2年(1656)庚戌の財行坊・山中坊を彦山に譲わたした。2人は、ともかく明敏院の下を離れることを専らに思い、彦山のいう通りに「末山に紛れなき」由の一筆に判形をした。それ以来彦山は「宝満山は彦山の末山である」と主張、宝満山は「古来、末山と申すことは聞いたことがない」と異を唱え、かえって両山は争うことになった。

その急先鋒が平石坊弘有であった。弘有は戦乱で荒れ果てた山の本格的復興に邁進し、宝満宮草創一千年祭の行方、山林の管理を定めた『龍門山水帳』の作成などを成し遂げた〔中興の祖〕とも言うべき座主であった。弘有はまた宝満山の歴史を明らかにし、彦山の末山ではない由緒と格式を持つ山であることを証明するため『縁起』の制作に当たった。縁起作成のため、弘有が足繁く京都に通う間に聖護院と宝満山の関係はより密接になっていったと考えられ、寛文5年(1665)、宝満山は聖護院の末寺になった(聖護院文書)。宝満山では弘有以前にすでに聖護院との接近が見られる。寛永8年(1631)熊野三山御代参を財行坊幸伝がつとめ、『旧記』、聖護院には寛永17年(1640)財行坊幸吟を代表とする宝満宮衆徒中より言上した宝満山の由來書と、同年付で聖御門主に「黒田藩の勅進停止」の解除のとりなしを頼み入れる書状の写しが残されている。

彦山の訴えに対して福岡藩は当初「聖門主は三山の檢校であり、天台山伏の惣司である。したがって彦山も宝満山もその命令に従うべきである」と立場をとり、明暦年中の財行坊・山中坊の「彦山の末山」との一筆は誤りであるとして、両坊を追放処分にした(高千穂(上)文書)。彦山は治まらず、平石坊弘有に対する讒議が数日に及んだ。その最中に平石坊が奉行に対して不届きなことがあったとして、元禄元年(1688)2月2日、禁纏を申しつけられた『貝原忠幹日記』。結論として宝満山と聖護院、彦山の本末関係について、福岡藩は「俗家として可申究無縁之候」と、結論を出さない立場を取った。にもかかわらず、彦山が福岡藩の裁定を了承したのは、この件の本人である弘有に下山・還宮が命じられたことによる。

平石坊弘有下山還宮の後、一山の支配は長床に仰せつけられたが、元禄2年9月、龍門山長床・一山中は寺社奉行に、「弘有を御赦免くださるか、新たな座主を任命くださるか」よう願ひ出た(石井坊文書166)。福岡藩では幼少より黒田光之の側近で当時隠居所付家老であった藤井甚太郎の弟で、奈良いた俊山(俊寛)を迎え傍御院兼雅と名乗らせ座主職につけた。元禄6年(1693)7月、聖護院に願ひ出て庵無畏寺傍御院の再興を認められ、兼雅は中本山の座主として任じられた。そして龍門山の座主のみ許された薄紫房の袈裟装を着直し、入峯の願に本末寺業として門主に乘る御四方衆の最長近く供奉した。聖護院の組織の中では龍門山宝神寺座主傍御院は、豊前国求菩提山護国寺座主教王院とともに、地方で強力な一山組織を形成する山として「御末寺」として一括包摂され、座主のみが諸先達別格の形で本山

表2 龍門山一山組織

宝満山伏一覽					龍門山伏一覽				
山名	院・坊名	所在地	寛政2年	文久3年	宗派	院・坊名	所在地	寛政2年	文久3年
天台宗傍御院	神池坊	龍門山座主	○	○	龍門山派天台宗傍御院	杖尾坊	御定部通谷賀村	×	○
天台宗傍御院	徳之坊	岡山坊中	○	○	龍門山派天台宗傍御院	若井坊	赤穂郡若杉村	○	○
天台宗傍御院	鎌倉坊	岡山坊中	○	○	龍門山派天台宗傍御院	通光院	福岡東郷町	○	○
天台宗傍御院	藤原坊	岡山坊中	○	○	龍門山派天台宗傍御院	宝賢院	福岡東郷町	○	○
天台宗傍御院	津本坊	岡山坊中	○	○	龍門山派天台宗傍御院	院	博多資賢町	×	○
天台宗傍御院	津本坊	岡山坊中	○	○	龍門山派天台宗傍御院	智度院	博多資賢町	○	○
天台宗傍御院	神谷坊	岡山坊中	○	○	龍門山派天台宗傍御院	法華院	福岡東郷町	×	○
天台宗傍御院	遠海坊	岡山坊中	○	○	龍門山派天台宗傍御院	永照院	福岡西町	○	○
天台宗傍御院	藤原(神)坊	岡山坊中	○	○	龍門山派天台宗傍御院	清徳院	福岡東郷町	○	○
天台宗傍御院	新 坊	岡山坊中	×	○	龍門山派天台宗傍御院	法心院	福岡東郷町	○	○
天台宗傍御院	徳崎坊	岡山坊中	○	○	龍門山派天台宗傍御院	教皇坊	福岡東郷町村山	○	○
天台宗傍御院	藤原坊	岡山坊中	○	○	龍門山派天台宗傍御院	正樂院	早良郡伊岐村	×	○
天台宗傍御院	大石坊	岡山坊中	○	○	龍門山派天台宗傍御院	利生坊	早良郡藤原村	×	○
天台宗傍御院	浄淨坊	岡山坊中	○	○	龍門山派天台宗傍御院	安祥坊	早良郡十六方村	○	○
天台宗傍御院	堀井坊	岡山坊中	○	○	龍門山派天台宗傍御院	花柳院	早良郡藤原南方町	○	○
天台宗傍御院	藤原坊	岡山坊中	○	○	龍門山派天台宗傍御院	法華院	志摩郡藤井村	○	○
天台宗傍御院	徳崎坊	岡山坊中	○	○	龍門山派天台宗傍御院	蓮生院	志摩郡藤井村	×	○
天台宗傍御院	徳崎坊	岡山坊中	○	○	龍門山派天台宗傍御院	安照院	志摩郡小畑村	○	○
天台宗傍御院	徳崎坊	岡山坊中	○	○	龍門山派天台宗傍御院	神之坊	早良郡藤原山	×	○
天台宗傍御院	徳崎坊	岡山坊中	○	○	龍門山派天台宗傍御院	門蔵坊	宗像郡藤原山	○	○
天台宗傍御院	徳崎坊	岡山坊中	○	○	龍門山派天台宗傍御院	眞王院	宗像郡三原丸村	×	○
天台宗傍御院	藤原坊	岡山坊中	○	○	龍門山派天台宗傍御院	香瓦坊	宗像郡三原丸村	×	○
天台宗傍御院	徳崎坊	岡山坊中	○	○	龍門山派天台宗傍御院	宗像郡藤原村	×	○	
天台宗傍御院	徳崎坊	岡山坊中	○	○	龍門山派天台宗傍御院	法華院	宗像郡藤原村	×	○
天台宗傍御院	徳崎坊	岡山坊中	×	○	龍門山派天台宗傍御院	法心坊	宗像郡藤原村	○	○
天台宗傍御院	浄行坊	岡山坊中	○	×	龍門山派天台宗傍御院	法心坊	法興郡藤原村	○	○
天台宗傍御院	浄行坊	岡山坊中	○	×	龍門山派天台宗傍御院	南門坊	法興郡藤原村	×	○

宗派	院・坊名	所在地	寛政2年	文久3年
龍門山派天台宗傍御院	瑞生坊	御定部永興村	×	○
龍門山派天台宗傍御院	善智院	御定部筑紫村	×	○
龍門山派天台宗傍御院	宗慶坊	上座部宝珠山	○	○
龍門山派天台宗傍御院	仲之坊	上座部藤原山	×	○
龍門山派天台宗傍御院	法心院	藤原郡藤原寺	○	○
龍門山派天台宗傍御院	徳崎坊	藤原郡藤原寺	○	○
龍門山派天台宗傍御院	徳崎坊	藤原郡藤原寺	×	○
龍門山派天台宗傍御院	徳崎坊	藤原郡藤原寺	○	○
龍門山派天台宗傍御院	徳崎坊	藤原郡藤原寺	×	○
龍門山派天台宗傍御院	法心坊	御定部山内村	×	○
龍門山派天台宗傍御院	大覚院	福岡郡大工町	○	○
龍門山派天台宗傍御院	本学院	博多多賀町	○	×
龍門山派天台宗傍御院	徳光坊	博多多賀町	○	×
龍門山派天台宗傍御院	本学院	博多郡十六方村	○	×
龍門山派天台宗傍御院	宗慶院	早良郡藤原村	○	×
龍門山派天台宗傍御院	宗慶院	早良郡藤原村	○	×
龍門山派天台宗傍御院	法華院	志摩郡藤原村	○	×
龍門山派天台宗傍御院	上智院	志摩郡藤原村	○	×
龍門山派天台宗傍御院	行光院	御定部山内	○	×
龍門山派天台宗傍御院	吉祥院	御定部吉本	○	×
龍門山派天台宗傍御院	藤原坊	御定部吉本	○	×
龍門山派天台宗傍御院	門蔵坊	藤原郡藤原	○	×
龍門山派天台宗傍御院	賢徳院	法興郡藤原	○	×

【史料】
寛政1(1780)：寛政二年御前寺帳
文久3(1863)：筑前龍門山并山内山内院諸院名書上帳(聖護院文書)

派に入る形式がとられた。しかし古くからの宝満 25 坊にとって、楞伽院がよそ者という感覚はぬぐい去ることが出来ず、このことが明治維新に当たって一山がまとまらず、座主を中心とする慶伝派（改革派）9 坊と亀石坊を中心とする恭弘派 16 坊に分かれて争う要因となった。

彦山派から分離独立した「宝満派獅子流修験道」の大成は、文化年間頃までに亀石坊を中心に行われたと考えられる。座主兼稚は奈良育ちで、西国の事情も修験の事も全く知らない者だった。また続いて入山した藩閥系の座主も同様で長床の助け無しには何ことも出来ない状況であった（『宝満山寛文以来の記』）。

ともあれ、彦山・宝満山の本山論争で、両山が亡くしてはならない「古法」と主張した金胎兩部の入峰行は、互いに「大峯修行」として連絡と続けられ、宝満山の大峯修行は争論中の元禄 4 年（1691）から幕末の慶応元年（1865）までの間に、33 回行われた。

表 2 は「寛政二年筑前寺院帳」（『福岡県史資料』）と文久 3 年（1863）に座主楞伽院から聖護院宮井役人に出された「筑前国龍門山井末山同派修験院名書上帳」（聖護院文書）をもとに作成した龍門山一山組織である。これによると所謂「宝満二十五坊」は寛政 2 年段階では、本山論争の際離山した財行坊の跡を継いだ新坊がまだ記載されておらず座主を含めて 25 坊、文久 3 年には新坊が入り座主を除いて 25 坊、浄行坊が吉祥坊と改名している。龍門山派天台宗修験の欄に記載されているのは「在宅山伏」「組下山伏」といわれる山伏で、若杉山、四王寺山などの古くからの山岳霊場が宝満修験によって復興され配下に入った者、宝珠山のように中世は彦山の組織にあった者が筑前領であるため宝満山の配下に入った者、筑前一円各村・浦・町で、民衆の近くにいて人々の様々な祈願に応じていた者など様々である。寛政 2 年には 31、文久 3 年には 38 の院坊が数えられる。两年共に存在した者もあるが、消長ははげしく、同じ村内にあっても坊名が異なるものもある。山内の宝満 25 坊とは隔絶した身分の差があり、入峰修行によって「小先」（準先達）までは昇進できたが、先達にはなれなかった。先達、大先達、座家へと昇進できるのは、あくまで宝満 25 坊に限られていた。

7 葛城峯の「再興」

宝満山の葛城峯は宗像孔大寺山を胎蔵界として春峰修行として行われた。『入峯伝記』には「大宝元年（701）役小角が、和州葛城の峯に準じて龍門山と孔大寺山との間に三部習合の霊場を布置し法華品の利益を表示して、二十八所の靈窟を開いた」。そして応和元年（961）にはじめて行われたとしている。この峰は「葛城結縁之峯」とも称し、座主の職位階級を授ける灌頂が行われる入峰である。そのためこの入峰の大先達は、秋峰（大峯）の「授職大先達」に対して「伝法大先達」「結縁大先達」と称され、座主は「伝燈大先達」とされた。しかし天文 23 年（1554）41 世座主隆成大和尚が入峰して以来、座主職が退転し、葛城峯も中絶した。そして元禄 12 年（1699）、座主楞伽院の成立と藩主黒田綱政の厄除け祈願を名目として、146 年ぶりに春峰が再興されたという。

元禄 12 年の入峰は、『黒田新統家譜』『博多要録』『筑前国統風土記』など多くの史料に見られ、記述にも矛盾がない。中世以前の春峰入峰については、他に傍証する資料がなく、あるいはこの 146 年ぶりの「再興」というのが、実は春峰葛城入峯の始まりではないかとも考えられる。孔大寺山との間には天台系山岳寺院の跡が点在しており、それらや有名社寺等を結び、博多・福岡市中に法華經二十八品の宿を設定したものである。彦山派を脱し、聖護院の葛城入峰に倣い、宝満派修験の独自性の確立をめざしたものと見えるのである。

葛城峯の構成 宝満山の葛城峯は、宝満山から若杉山へ出、現篠栗町の山伏谷で 7 日間修行し、首羅山から大嶋山、磨巖、戸田巖へと三郡山地の山々を経て孔大寺山へ至り、帰路は宗像・粕屋の古社をま

葛城峯（春峰）金剛界

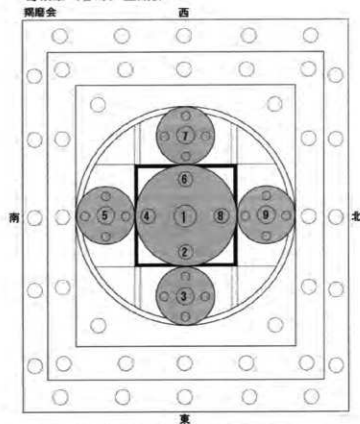


図 5 葛城峯（春峰）金剛界曼荼羅概念図

葛城峯（春峰）胎蔵界

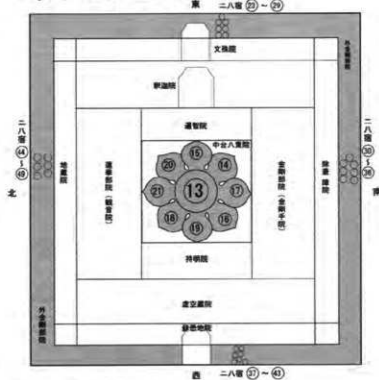


図 6 葛城峯（春峰）胎蔵界曼荼羅概念図

表3 葛城峯(春峰)

葛城峯(春峰)						
名	郡(札所)	祭神	本地	現在地	七大会子	七大会子奉違
金剛峯	二会 山内院	地蔵子	太山	宗蓮山中	福徳童子	真言在王仏
九条院	一会 山内院	石之童子	金剛地蔵	横道宇美野陸子		
二会	三味線	摩訶童子	阿彌仏	横道宇美野		
四会	山内院	山内院	横道宇美野	横道宇美野	福徳童子	獅子相仏
五会	山内院	山内院	横道宇美野	横道宇美野		
六会	山内院	山内院	横道宇美野	横道宇美野		
七会	山内院	山内院	横道宇美野	横道宇美野		
八会	山内院	山内院	横道宇美野	横道宇美野		
九会	山内院	山内院	横道宇美野	横道宇美野		

史料:『葛城峰中金剛峯記』文化9年(本願院蔵)
『金剛峯集供』文化9年(伊院蔵)

三原四重の大塚遺構

名	郡(札所)	祭神	本地	現在地	七大会子	七大会子奉違
三原四重の大塚遺構	三原	伊弉諾	伊弉諾	三原		

史料:『葛城家中給帳書記』文化9年(本願院蔵)
『華供時中給帳書記』文化9年(伊院蔵)

加藤野丸墓

名	郡(札所)	祭神	本地	現在地	七大会子	七大会子奉違
加藤野丸墓	第一 不動	清滝童子	六日如来	古賀市鶴野 清滝寺	三大会子	一切即興佛陀
	第二 清滝	那九童子	摩訶菩薩	宗徳市東丸清水寺		
	第三 大谷	大徳童子	宝輪如来	宗徳市・宗徳寺境		
	第四 伊弉	有木童子	文殊菩薩	宗徳市上有木	常行童子	常威仏
	第五 花風	大村童子	南無如来	宗徳市上有木		
	第六 伊弉	新久童子	観音菩薩	宗徳市上有木		
	第七 伊弉	新久童子	観音菩薩	宗徳市上有木		
	第八 伊弉	新久童子	観音菩薩	宗徳市上有木		
	第九 伊弉	新久童子	観音菩薩	宗徳市上有木		
	第十 伊弉	新久童子	観音菩薩	宗徳市上有木		

史料:『葛城家中給帳書記』文化9年(本願院蔵)
『華供時中給帳書記』文化9年(伊院蔵)

外金剛部

名	郡(札所)	祭神	本地	現在地	妙法蓮華經
第一 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第一 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第二 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第三 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第四 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第五 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第六 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第七 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第八 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第九 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第十 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第十一 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第十二 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第十三 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第十四 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第十五 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第十六 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第十七 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第十八 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第十九 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第二十 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第二十一 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第二十二 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第二十三 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第二十四 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第二十五 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第二十六 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第二十七 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第二十八 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第二十九 忍難	法華二十八品	二八八種切明			
第三十 忍難	法華二十八品	二八八種切明			

史料:『華供時中外金剛部記』文化9年(伊院蔵)

表4 葛城峯(春峰)入峰日訓道筋

葛城峯(春峰)日訓道筋

月日	明和4年(1767)	文化9年(1812)	安政7年(1860)
3・2・1	『明和4年及文政5年入峰事記』(大藏中蔵)	『葛城山中折道筋集』(北沢竹文蔵)	『葛城山中折道筋集』(伊院蔵)
3・2・2		宗徳童子窟出立・石之童子一佐倉観音一	三浦山一若杉山土宮
3・2・3		若杉山(地結木・清黒鬼・土宮)	徳業村/若杉山(伏谷(7日廻))
3・2・4		獅子窟出立・石之童子一佐倉観音(山上より)	熊ヶ尾一合野山伏谷(29日まで)
3・2・5		山伏谷(入)〔毎日主目〕	
3・2・8			伏ノ尾山神→久原村葛城谷→白山観音
3・2・9			大嶋山→獅子窟那九清水寺権堂一宿
3・3・0			伏ノ尾山神→久原村葛城谷→白山観音
4・1			伏ノ尾山神→久原村葛城谷→白山観音
4・2			伏ノ尾山神→久原村葛城谷→白山観音
4・3			伏ノ尾山神→久原村葛城谷→白山観音
4・4			伏ノ尾山神→久原村葛城谷→白山観音
4・5			伏ノ尾山神→久原村葛城谷→白山観音
4・6			伏ノ尾山神→久原村葛城谷→白山観音
4・7			伏ノ尾山神→久原村葛城谷→白山観音
4・8			伏ノ尾山神→久原村葛城谷→白山観音
4・9			伏ノ尾山神→久原村葛城谷→白山観音
4・10			伏ノ尾山神→久原村葛城谷→白山観音
4・11			伏ノ尾山神→久原村葛城谷→白山観音
4・12			伏ノ尾山神→久原村葛城谷→白山観音
4・13			伏ノ尾山神→久原村葛城谷→白山観音

※明和4年、文化9年、安政7年、(4)・(5)・(6)・(7)・(8)・(9)・(10)・(11)・(12)・(13)

わり、博多・福岡市中を通り、福岡城にて祈禱し、宝満山へ帰るといふもので、本山派と同じく、春、修行するものであった。葛城峯は、座主一世に一度のみ行われ、あわせて天下国家、天皇や藩主の安泰が祈願される入峰であるため、藩の記録、地方文書、町方文書、絵巻物など多くの史料が現されている。

曼荼羅を充当した教義書はすべて文化9年(1812)に授けられている。南坊子孫永福院には文化9年仲春に仲坊右前住知足院無染真海から道場坊良栄に授けられた『葛城峯中金剛界記』『葛城峯中胎藏界記』があり、叶院には伝法大越家法印前亀石坊寿量院有弁が華供大先達楞伽泰雅に授けられた『金剛界華供』『華供峰中胎藏界記』『華供峰中外金剛部記』がある。それらによって(表3)と(図5・6)を作成した。また実際の入峰日割道筋については、(表4)にまとめた。

宝満山の葛城峯は、大鳴山を中台(仏部・蓮華部、金剛部)とし、宝満山→楳屋部久山町の首羅山を金剛界、不動嶽→宗像市の孔大寺山を胎藏界とする。

宝満山から大鳴山に至る金剛界では、道筋の各峰を九会の曼荼羅の一会から九会にあて、諸尊は中心の羯磨部の第一重院にある五解脱輪に安置される諸尊のうち因に番号を附したのみのみ配当される。また①は本来無量寿如来であるべきであるが、ここでは観自在仏(観世音)が当てられている。帰路は胎藏界曼荼羅の外金剛部院にあて、二十八宿の星宿を東→南→西→北の順に配すると共に、和州葛城峯に準じて法華經二十八品を配している。この部分は許斐彦(271m)を除いては、岳越山・桜ヶ峯・峯の薬師などの小丘陵はあるがほとんど平地で市中を通るものである。和州葛城峯のような経塚との関連はこのあたりではあまり考えられないが、宝満山から孔大寺山の開山並みには、平安後期を中心に随所に経塚が営まれている。また葛城峯を守護する七大童子が三嶽に一童子ずつ配置されている。

入峰の実行に当たっては、宿の建設・確保、食糧の確保、道案内など地元の人々の協力は不可欠であり、実働それに当たった楳屋部尾仲村、宗像郡木村・池田村、遠賀郡鬼津、博多町方等にその記録が遺されている。また莫大な経費については、春峰の台落舎からの援助もあったが、坊単位に寄付を募っている。ことに新客は巨額の費用が必要であり、若杉山石井坊子息の初入峰には、表楳屋部の大庄屋が郡中の村々に寄附を呼びかけている(石井坊文書)。

8 明治維新以後の宝満修験

明治元年(1868)の神仏分離令、5年(1872)の修験場の廃止という危機にあっても、うまくそれを乗り越え、それらに耐え、今日に続いている神社も多い。しかし宝満山では一山が権主を中心の一つにまとめることが出来なかったことが、明治以後の疲弊を招いた。宝満山では明治2年最後の春峰を行った。この時の伝燈大先達は亀石坊有弁。すでに復讐した楞伽院とは別に、前年、旧藩主より「座主宝印寺」の称号と20石の寺領を賜り(『亀石坊歴世年忌早繰録誌』『入峯伝記』)この入峰に臨んだのである。

龍門神社は、明治5年村社に列せられた。神職に転じていた山伏も、大勢の神官は無用とする藩庁よりの下山の説諭に従い、吉祥坊古田広輝一人を仰蒙として残り、6年には全員宝満山を離れた。下山後は農務した者、教職に携わった者、神職になった者、信者の斡旋で無住の寺に入りその地域の下の信仰を受けた者など様々であった。楞伽院は藤井高門となり宝満宮社頭となったが、明治6年までに藤山、孫の厚丸が太宰府小学校の2代目校長(明治26～34年在任)となり(『藤井厚丸墓銘』)、亀石坊は福岡市西新町の黄葉宗千眼寺の住職をしていた次男を頼り同所に隠宅したという。

今日宝満修験の法燈を伝える寺は、筑紫野市山家の円通院(旧道場坊・天台寺門跡)、楳屋部新宮町の永福院(旧南坊・聖護院末)、福岡市博多区の宝照院(旧奥坊・聖護院末)、叶院(組下山伏叶院・聖護院末)である。宝照院は、宝満山から下山した大黒天と博多の北辰様として信仰の篤かった妙見像を

まつり、北辰堂を担当していた智楽院の名跡も継ぎ、叶院は博多普賢堂の普賢菩薩と宝満山組下の西の龍門であった蓮樂院の名跡を継いでいる。叶院には楞伽院・亀石坊旧蔵の儀軌類、亀石坊の年忌表なども伝えられており、亀石坊が宝満修験の法燈を叶院の当主に伝えようとした意図が感じられる。東の麓頭石井坊は若杉山に住み、邸内に護摩堂・地藏堂、平安仏などが現存するが先代より当主は俗家と成っている。

明治15年11月、大木山聖護院執事より、元龍門一山惣代中であて、「本山入徒弟之上八左之條款ヲ讀守ス可キ事」として八ヶ条に及び通達が出されている(井本文書)。明治19年(1886)9月、聖護院では、37年ぶりに深仙灌頂会が再興されて以来、明治後半以降には峰人も盛大に行なわれるようになった。宝満山でも、明治22年峰人が復興されたが、それに先立つ明治20年、天台寺門宗師になった元南之坊高橋武彦(賢使)の斡旋で、元奥之坊大黒重弁と二五坊内の6人、四王寺山元成泉坊井上快南ら組下山伏5名、計11名が天台寺門宗(聖護院)に帰入している(永福院文書)。『入峯伝記』には、明治維新から入峰再興までの経緯を次のように述べている。

明治廿二寅年春峰中興開峯二次日。

高祖廿六世宝印寺住職宗弁春峯終、而明治三年御一新被仰付候、神官并僧侶共一山悉廢シ、依之ニ取内郡村ト村ト差下山。而明治十五午年九月、南坊高橋賢使京都聖護院ニ登山願濟ノ上、授成得度式修行、当院殿支配下トナル。而後明治廿一月六月ヨリ本宗帰入寺門天台三井寺支配ト成ル。于年六月ヨリ再興入峯ヲ出願シテ漸明治廿一寅年十一月間許旨有リ。依之ニ明治廿二丑年一新ノ際ヨリ十二年日葛城・大峯ヲ再興ス。雖時再興大願主票下一派正管事ノ号ヲ蒙。南坊コト高橋賢使中興開リ

この入峰では、51歳の南之坊高橋賢使が伝法正大先達を務め、奥坊大黒重弁・富倉坊富永朝明等が、先達を務め、新客13名、総勢56名の修行であった。この年、富倉坊朝明を当峯大先達、南之坊賢使を伝法正大先達として秋峰も再興され、明治26年にも行われた。

明治22年の入峰に際して寄附が呼びかけられ、3冊の『地財録』が、旧井本坊に遺されている。1冊目は、太宰府神社の旧社家、太宰府の有力者に回されたもの。この人々は西高辻(宮司)の金三円を筆頭に金銭で寄附している。2冊目は、楳屋部・惣波部、3冊目は楳屋部・鞍手部にまわされており、金額が寄附する者もあるが多くは米を寄附しており、その数1005人にとらっている。殊に鞍手部から最も多数の647人が出財しており、春峰の入峰コースとの関連が考えられている。

この入峰を経て、昭和3年(1928)、昭天和皇の御大典を記念して福岡地方の山伏の結集がはかられ、天台寺門修験宗福岡神證会が結成され、聖護院より原大先達・宮城信雅を招き、女性行者を含む二百数十名の盛大な入峰が行われた。10月14日朝、叶院に隣接する扶桑最初禪窟「聖福寺」に集合して、福岡内、四王寺山、宝満山、若杉山を巡る一週間に亘る入峰で、宝満山頂では百数十名に山上授戒灌頂が授けられた。この入峰に参加した宮城信雅は、聖護院の雑誌『修験』に、この行が、地元の有力者・学者の強力な支援を受けたこと、多くの人々が修験を崇拜し、至る所で盛大な接待がなされたこと、護摩供の際には立錫の余地もないほど見物人が集まったことなど、京阪地方では見られぬ光景であったと述べている。

その後、7年・13年・14年に宝満山から彦山への入峰を行い、15年には皇紀二千六百年の祝賀入峰として行い、昭和18年には、「武運長久・敵國降伏祈願宝満龍山断食修行」を行い、岩田屋デパートと荒津山(西公園)で探灯護摩供を執行了。戦後は昭和47年に聖護院の因幡修行として、宝満山への入峰・護摩供が行われた。明治以後今日に至るまで、個人的にも断食行や籠窟行をおこなう者がいて、提督新道には「百日絶食記念碑」(昭和5年)が建っている。

本格的に入峰・探灯護摩供が復興したのは昭和57年。開山心蓮上人の1300年遠忌を記念して、旧坊

の子孫や現在もお宝満山を修行の場とする修験者が宗派を超えて結集し「宝満山修験会」が結成された。爾來毎年5月の第2日曜日に宝満山への入峰、同最終日曜日に龍門神社広前での探灯護摩供を修している。火生三昧では500名ほどの人々が火を渡るが、家族連れや若者の参加も多く、毎年参加する少年消防団もある。修験会の会長は龍門神社宮司、統管は、明治中期に三井寺が、離散した山伏を結集する目的で院号と50石の格式を与えた福岡市の天台寺門宗本行院がつとめている。本行院現住職藤野賢隆は昭和3年の入峰に参加した叶院江上了恵より宝満獅子流法螺の奥伝「三匝半」を授けられている。

平成19年の宝満山修験道復興25周年を記念して、宝満修験としての先達位が授与され、絵巻物などの資料を参考に江戸期の宝満派山伏の装束を復元した。また復興を記念して、俳人小原蒼々子作詞、筑前琵琶中村旭園作曲による琵琶歌「龍門山」がつけられ、探灯護摩供奉納奉告祭で演奏される。この歌は龍門山寺跡に建つ「宝満山修験道復興之碑」に刻されている。平成25年の龍門神社創建1350年大祭には、英彦山への入峰、英彦山での探灯護摩供を果たすべく、長野寛・森弘子の研究をもとに、入峰道の復元に取り組んでいる。

(森 弘子)

【参考文献】

- 岡寺良「宝満山近世僧坊跡の調査と検討」『九州歴史資料館研究論集 33』2008 九州歴史資料館
岡寺良「宝満山近世禁碑銘に見る墓地と坊跡の平面構造」『太宰府学 5』2011 太宰府市史資料室
竹林庵「山の秘密」『九州日報』1909（のち福岡実業「宝満山伏の峰入り」『まつり』9号）
森弘子『宝満山の環境歴史学的研究』2008（財）太宰府顕彰会

第9節 遺跡の現状と崩壊の進行

1 宝満山遺跡の現状

宝満山遺跡は、太宰府市域と筑紫野市域からなり、宝満山（標高約829m）の南西に位置する愛蔵山（標高約443m）と元宝満と呼ばれる仏頂山（標高約868m）に連なる稜線上を両市の境界としている。

近世宝満二十五坊と呼ばれた坊跡は、龍門神社中宮の南側に隣接する西院谷地区と宝満山々頂の龍門神社上宮から南側に延びる尾根に展開する東院谷地区からなり、西院谷の一部と東院谷地区全域が筑紫野市域に所在する。西院谷地区及び東院谷地区は、その大半が龍門神社社地内に所在し、一部が国有林地内に広がる。

西院谷・東院谷地区並びに登拝道は、元和4年頃に公設として普請されたといわれ、幕末まで多くの参拝者で賑わいを見せていたが、明治元年「神仏分離令」により坊中が離山したのち一旦政府の上地となったが、明治41年に龍門神社に編入され神社地として今日まで管理されてきた。（註1）

戦後の高度成長期を反映して、昭和40年代から全国的にハイキングや登山がブームとなり、宝満山も福岡都市圏近郊の日帰り登山ができる手頃な山として人気が高まり、また、三郡山縦走、岩壁登攀など様々な楽しみ方ができる山として登山者数が年々増加していき、折りの山から登山の山へとその比重が高まっていた。

このような中、西鉄山友会（註2）は昭和38年から宝満山の環境整備に取り組み、昭和40年には龍門神社上宮の降り場下に避難小屋を設置し、羅漢道をはじめとする登山道の整備を行っていった。

増え続ける登山者に対応するため、龍門神社と西鉄山友会は昭和43年3月、東院谷地区座主坊跡に建坪40坪で軽量鉄骨造プレハブ構造のキャンプセンターを建設（註3）、坊跡を野営場として整備し西鉄山友会がその管理・運営にあたった。

平成元年、初代キャンプセンターが老朽化したため、ブリカットログ材を使用した本格的な山小屋に建て替えられた。

建坪は24坪に縮小されたが、ベランダデッキを配し管理人室・発電機室・倉庫を併設している。また、西鉄山友会は平成4年にはこのログ材を使用してトイレを設置し、環境保全への取り組みを強化していった。

さらに平成20年には、西日本鉄道株式会社100周年記念事業としてトイレのバイオ化工事（註4）を行い、屎尿処理問題をさらに改善していった。

西鉄山友会は、キャンプセンターの維持・管理を行うとともに、登山道の整備・バイオトイレの設置・ゴミの清掃処理・登山者への啓発などに取り組み、宝満山の環境保全と荒廃から守る活動を続けている。



図1 座主跡キャンプセンター全景



図2 宝満山キャンプセンター

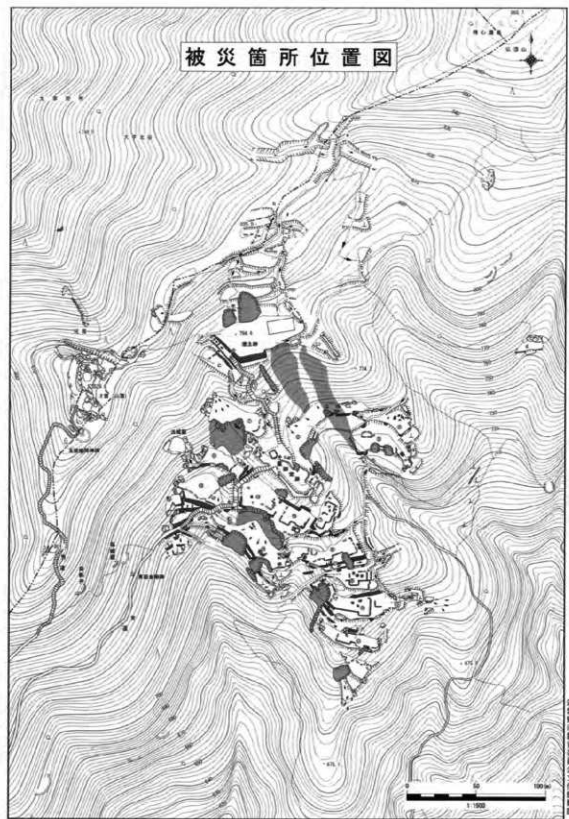


图8 東院谷被災箇所図

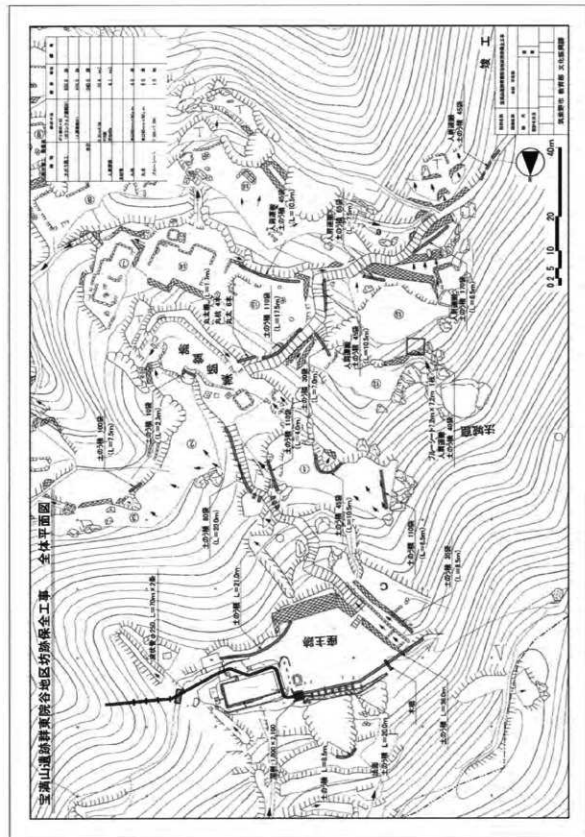


图9 東院谷工事全体圖

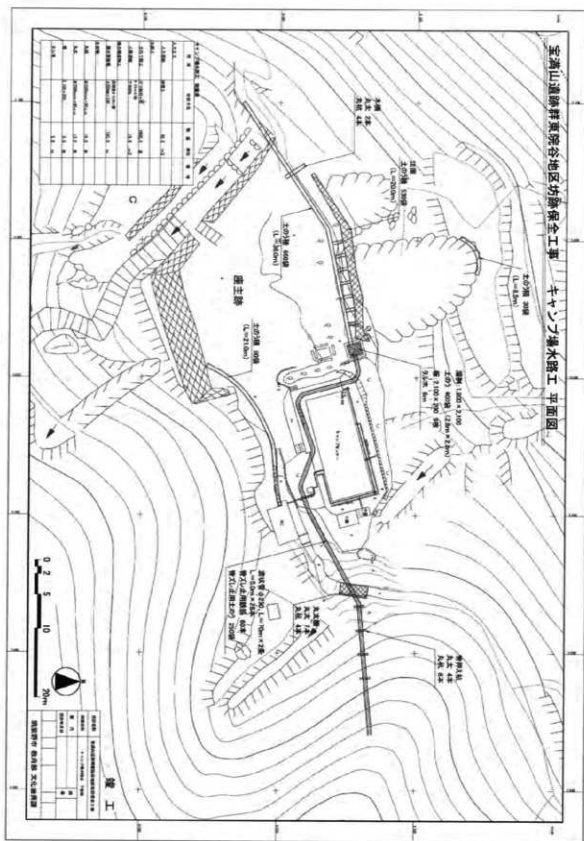


図10 東院谷産主坊跡工事全体図

竣工した。

◆事業費の内訳

総事業費 6,034,350円

◆宝満山遊歩道東院谷地区保全対策事業

設計施工管理費 208,950円

工事費 5,825,400円

設計・施工管理 スリーエヌ技術コンサルタント(株)

施工(有)天祥緑地

対策の概要

工事は、山頂稜線から流入する雨水を土糞(3段積み)で受け、キャンプセンター脇に設けた土糞積み(雨水升)に一旦ためてから、波状管(口径250mm×2本)をキャンプセンターベランダデッキの下を這わせて、遺構がない西側の谷部に導水し沢に放流口を設けた。

また、キャンプセンターの野営地の雨水が登拝道(女道)に流出しないよう石垣に沿って土糞積みを行った。

登拝道(女道)から坊跡にオーバーフローしていた箇所には、土糞積み(2段)を行い流出箇所を塞いだ。またさらに、崩落土によって雨水流路が坊内側になっていた箇所では、土砂の撤去を行い雨水が坊跡外に流出するように流路を変えた。

工事に使用した土糞はすべて遮光土糞を使用し、土砂はこれまでに崩落により発生した土砂を使用した。施工に際しては、遺構面を含め崩落土以外の掘削は行わなかった。

今回の工事は、年々激化する集中豪雨に対する応急の処置であり、東院谷地区全体の雨水対策を抜本的に改善し、崩壊箇所の修復を行っていかなければ遺跡全体の崩壊を食い止めることは困難であると予想される。

註

- 1 詳細な経緯は、本編第1章第3節参照。
- 2 西鉄山友会は、西鉄福岡山岳部が前身。昭和33年に社員30名で発足。昭和43年より宝満山キャンプセンターの管理・運営をしている。
- 3 キャンプセンター建設に先立ち、福岡県教育委員会による発掘調査が実施されているが、詳細は未報告のため不明。
- 4 排泄物の処理槽に微生物の棲む木片チップを入れ、排泄物の分解処理を促す。

【参考文献】

伊藤藤紀「宝満山の自然に包まれて」『祈りの山 宝満山』海鳥社 2011



図11 産主跡土糞機壁と土糞積み水路



図12 導水管設置状況



図13 登拝道脇土糞積み状況

第10節 山岳信仰遺跡としての宝満山（国内山岳信仰遺跡における位置付け）

1. 山の規模と信仰

宝満山の信仰が、宝満山において、自生したものが、どこかの山の信仰がこの地に伝わったという契機によって始まったのかを考えたい。宝満山の信仰は、日本の山信仰のなかで理解できるものであると考えたい。宝満山の歴史を明らかにするうえで、全国の山の信仰と宝満山とを比較するのが重要な視角であると考ええる。まず、山の高さ、けわしい点から比較したい。

宝満山は現在は、宝満神社の下宮が、山麓部に位置し、山頂に上宮が祀られている。その両宮の比高は、679mにも達している。下宮と上宮の平面距離を地図上で算出すると、約2kmである。比高差と、平面距離とを三角形の二辺とすると、傾斜角の距離は約2.1kmとなり、かつ傾斜角は、約19度弱となる。この傾斜角度は極めて小さく見えるが、19度は急傾斜の山である。

この数字を神の座す山として代表的な大和の三輪山（467m）と比較すると、三輪山の傾斜角は、約12.3度となり、斜面長さは1792mとなる。宝満山は、「けわしい」山であることが判る。独立峰で、同じように神の座す山と知られている近江の三上山（432m）と比較してみる。三上山麓の三上神社の地は、標高約105mであるので、比高は327mである。斜面の長さは1052m、傾斜は約18.6度。三上神社は、三上山を神山として祭祀しているが、現在は重要文化財の社殿に神が祀られている。ところが、この社殿が修理された時に、本殿の背面に開閉することが出来る扉の装置があったことが確認された。つまり、本殿を建設したのちも、背面の扉を開け放って神山を祀っていたことが判った。さきの三輪山を祀る大神神社は神山（禁足地）と、押殿（寛文4年、1664年）との間に三つ鳥居（現在の鳥居は1883年の造替・重文）を設置して、神山を拝している。宝満山は、傾斜や比高が示す数字が三上山と三上神社の関係にほぼ近い。

一般に登山では、比高150～200mの登山では一時間の歩行が必要とされている。この数字は、日本国内の高山でも、それ以下の山でもほぼ同じである。若干の例を示しておく（すべて、登頂方向）。

- ・上高地・明神（1545m）から槍ヶ岳山頂（3180m）のコースタイム（比高1635m）は、約8時間
- ・富士山の北口本宮富士浅間神社（850m）から、山頂（3535m）までのコースタイム（比高2685m）は約10時間（なお、神社から馬返近くまでは、傾斜の緩い道である）。
- ・伊吹山（比高1377m）は、4.5時間（ただし、山頂と、伊吹山寺との時間）。
- ・大峯山頂（1719m）と洞川の清浄大橋は（比高約800m）は2時間40分。

このように、山容の急峻さは無関係で、登山用の小径が明確である限り、その時の傾斜などは、さほど大きな差にはならず、すでに記したように比高200m約1時間強あるいは2時間弱である。（岩壁を登るなどの部分は、一般的でない）。

2. 山の信仰の始まり

人類が日本列島に定住を始めて以来、ヒトは自然のなかで生活していた。ヒトは他の動物と同じように木の芽や樹葉、草、草樹根を食していた。草食動物は、ヒトと同じように木の芽や樹葉、草樹根を食していた。ヒトは雑食動物であるので、他の肉食動物と同じように、草食動物、肉食動物、鳥類、は虫類や両生類を食していた。ヒトは雑食である。このため、他の草食や肉食動物に比して自然環境の劣化や悪化に耐えて、より強い適応性あるいは、順応性をもっていた。また、ヒト相互の意志伝達のための言語が発達したことによって、ヒト特有の「ココロ」が著しく発達し、過去の行動に対する反省、そ

こから予言思考ひいては予言能力が発達していったと、言語学や発達心理学では説いている。

山岳といひ、山という突出した地形に不思議な畏怖を感じたことによって、山への信仰が生じたと考えてよいと思う。山とヒトとの関係で見ると、つぎのように分類してみることにする。

- ① 生活空間に地理的に接した山。一般に黒山といわれることが多い。
- ② 生活空間とは、一定の距離が離れているが、その山体をよく望見することが出来る山。
- ③ 生活空間から望見することが出来ないが、位置的に山に接近することにより、あるいは高所（山や丘系）に登高することによって望見できる山。
- ④ ②または、③に接続して、大きな山脈あるいは山体となっている山の一部または全部。
- ⑤ さきわたる遠方に存在する山。
- ⑥ 伝承、伝聞によって知りうる山で、今日の科学的観点からは、存在しない山であるが、ヒトはその存在を強く信じている山。

などに分類することが出来る。

3. 飛鳥・奈良時代の首都周辺の山の信仰

7、8世紀、つまり飛鳥・奈良時代の首都の地である奈良盆地を中心として、祭祀あるいは信仰のあったの山を例示してみる。

① 生活空間に接した山

藤原宮を囲むように存在する大和三山（敏荷山、耳成山、天香具山）が、その代表である。平城宮からする春日山、御堂山もそうである。

② 藤原宮から都の西の二上山と、東の三輪山はその代表で、ともに7～10kmの距離にある。葛城山系も極めてよいかもしれない。

平城宮では、西の生駒山が代表である。はるか南東方向には、吉野大峯連峰が、冬季に望見できるの、含めてよい。

③ 藤原宮からは、葛城山系の南側（現在の山名では金剛山から泉葛城山）、信貴山、飛鳥盆地の東側の山（西樞宮の推定地）からは、二上山と信貴山の間を流れる大和川の地溝をはるかに越えて神戸市の北岸というべき六甲山系が、四季を通じてよく望見できる。平城宮では、宮の北の佐保丘陵に登ってみると、東北の比叡山、西北の愛宕山がよく望見することができ、笠置山系もよく望見することができる。

④ ②、③で記した生駒山から葛城山から葛城山系や吉野から熊野まで延々と続いている大峯山系などが、その例とすることが出来る。

⑤ 万葉集などにも詠われている富士山、筑波山などが代表である。筑紫の宝満山、越中の立山なども該当する。

⑥ 藤原宮・平城宮の僧侶、儒者、貴族ら知識階級に属していた者は、仏教における須弥山、儒における三山あるいは三仙といわれる海中にある蓬萊山、方丈山、瀛州山などは、よく知っていたであろう。後者は、『史記始皇帝紀』に記事があり、徐市をして、不老不死の薬を探させた故事があり、倭国との関係も彫刻に深い。神仙世界のことである。仏者の須弥山世界は、聖武天皇の発願による東大寺大仏の蓬奈に彫刻されていることによっても、天平時代においては知悉されていたことがわかる。須弥山は東大寺大仏造立以前から知られていた。法隆寺西百済観音の竹幹を模した光背支柱の基部には山岳文と言われる須弥山彫刻がある。また、玉虫厨子の背面台座の板絵も須弥山であるなど、飛鳥時代から知られていた。

古事記と日本書紀に記されている日本の建国神話（伝承）の高天原も、この範疇に含めてよいものと

思う。つまり、人間（古代以前はヒトと表現しているが、古代以後は人間と表記する）は、一般的な理解として、理想の世界、救世主の領域を山に求めていたことを示している（ヒンズーやキリストの思想においても山は重要な要素を占めていることは、よく知られている）。これが、今日の神道につながっているとも言われているが、本稿では、神祇、神祇思考と表記しておく。

4 山と人間のかかわり

このように山と人間の間関係を分類していくと、いくつかの小分類が出来る。それを記しておく。

分類	山と人間の位置関係	立ち入るか否か	山での滞在時間	独立峯か、連峯か
①	生活空間に即した山	A 立ち入り形 B 非立ち入り形	a 短時間 b 長時間	I 独立峯 II 連峯の突出峯
②	生活空間とは一定の距離	A 立ち入り形 B 非立ち入り形	a 短時間 b 長時間	I 独立峯 II 連峯 III 連峯の突出峯
③	生活空間から望見	A 立ち入り形 B 非立ち入り形	a 短時間 b 長時間	I 独立峯 II 連峯 III 連峯の突出峯
④	山脈など	A 立ち入り形 B 非立ち入り形	a 短時間 b 長時間	I 独立峯 II 連峯 III 連峯の突出峯
⑤	遠方の山	A 立ち入り形 B 非立ち入り形	a 短時間 b 長時間	I 独立峯 II 連峯 III 連峯の突出峯
⑥	伝承伝聞の形	A 立ち入り形 B 非立ち入り形	a 短時間 b 長時間	I 独立峯 II 連峯 III 連峯の突出峯

この表から、①B a と記した場合は、生活空間に近く、山には立ち入らない。また山の接触時間は短いことを示している。この例は、奈良県三輪山、同春日大社の神体山である御釜山などをあげることができる。日本の山の信仰で知られる著名な山を、これによって分類したのが、次の表である。

筑波山	②Aal	独立峯
富士山(現代)	③Aal	独立峯
富士山(古代)	③Bl	
大峯山	③AaIII	連峯の突出した部分
大峯山奥駈道	③AaII	連峯
三上山	③AbI	連峯の突出した部分
比叡山(最終開山)	①AbIII	
比叡山(以後)	②AbIII	連峯の突出した部分
宝満山(律令以前)	③Aまたは②Aal	
宝満山(律令以後)	③Aaまたは②Aal	連峯の突出した部分
玉満山(修験)	③Abまたは④AbI	

に滞在して行為（修業や修法と言われることが多い。日本の神道（神祇）での用語は明確でない）をなす場合がある。また、分け入る山が独立峯あるいは独立峯的な山容の場合と、山脈あるいは山地状をなしている場合がある。これらを表示すると次のようになる。

となる。山の信仰は、仏教導入以前と以後とは、大きく変わる。

人間が、山に立ち入らない山との関係と、人間が山そのものに分け入る関係とに小分類できる。分け入る場合は、さらなる分類ができる。山に分け入り、一定の行為をなした後、直ちに

下山する場合。山にかなり長期

5 山に位置する奥の院・奥宮

多くの山の遺跡（寺・神社）に、奥の院（奥社）が営まれることが多い。奥の院、奥社の場合も、その成立つまり起源について、2つの実例がある。

第一は、福岡県宗像大社の奥ツ宮（沖ノ島）、中津宮（大島）、辺津宮（九州本土の神湊）の場合である。（注1）考古学資料からのみ判断すると、沖ノ島が祭祀の始発地であり、のちに九州本土から、沖ノ島を遙拝することになったとせざるを得ない。いっぽう奈良県三輪山・大神神社の場合は、現在の社殿付近つまり山麓に初期的な祭祀遺跡があり、のちに山頂直下の遺跡の形成をされたとしてよい。

いっぽう、飛鳥から奈良時代の平地加藍の寺院においては、奥の院の形成はないのが一般的である。ところが、山の中に営まれた寺では、当初から奥の院的な場所から始まる場合がある。その代表は、奈良県室生寺である。室生寺は、国宝五重塔、同金堂と堂内の諸仏で知られている。室生寺の平安時代の姿を伝える史料として、正和三（1314）年に写された『一山図』（金沢文庫蔵）が残されている。これには別に高野山円通寺本、東寺観音院本などがある。平安時代の康平8（1065）年に誦雨法を修して験を得た東寺長者の成尊が作成したもので、室生川に沿った室生庵六と窟六神社を右端（南方）として、室生寺の山形を含む全城を描いたものである。（注2）山の寺の全城を描いた図面としては屈指のものである。その左端地区に、国宝五重塔が描かれていて「五重木塔此塔内四仏」と注されている。そこから現在の奥の院への通路にあたる地点に、三重石塔一基と、七重石塔一基が描かれている。前者には「此塔六角石塔也」と注記されている。七重塔には「白石七重。塔下穴。上蓋。高七八尺許也。七重石塔下此中〇〇。石疊深溝〇也。」と注記されている（〇印は梵字）。その下方には別の三重石塔を描き「如意峯此岩南草生タリ。三重石塔。同聖恵大師手跡如法經心経」と注記されている。このうち、国宝五重塔の左側山頂（岩峯）に立つ重要文化財層塔が、『一山図』の如意峯の三重石塔にあたる。

昭和21年に石塔の指定文化財調査に岸熊吉・末永雅雄両先生が行かれた時、石塔の前面の平板状の石を移動したところに、小形厨子に入った聖観音像が現れたので、本格調査を期して調査を中断され

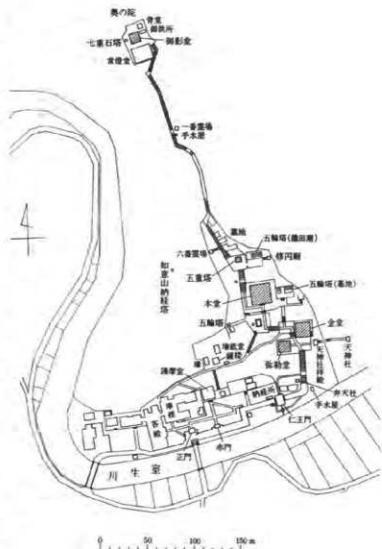


図1 現在の室生寺の情况

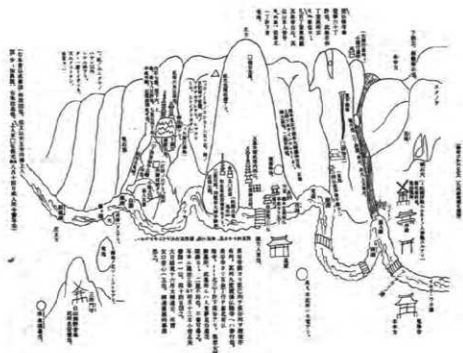


図2 一山山図

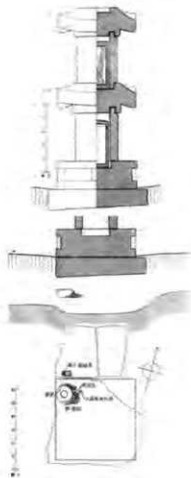


図3 如意塔の構造

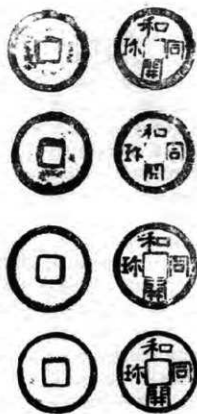


図4 如意塔下から出土した和同開珎
(上2枚は銀)

た。のち、大岡実氏が塔を解体し、擬灰岩製の塔身内を掘り抜いてうがった空洞の初層と二層からのおの一個の木製経筒を検出し、塔基の地下から蓋付銅塊、和同開珎、玉類などを発掘しているが、詳細な記録は残していない。出土品は、仏舎利様の珠1、瑠璃玉1、和同開珎(銅189枚、銀2枚)土器片少量である。ただ、報告図面第3図の注記によると、水晶製舍利容器、瑠璃玉なども出土していたようである。石塔の基石の底面から10 mのところに、銅塊があり、銅塊の右半分を囲むように銭貨などが置かれていた。和同開珎のうち拓本が残る2枚は、いわゆる古和同で、銀銭2枚も古い字体である。(注3)

和同銀は、銀2枚、銅189枚である。これらの出土品に混じって、塔基から塔前面の平石下でかどうかは判然としなが北宋銭もあり、幾度も追加奉納があったことが知られる。和同開珎は、和銅8年以降も、長く铸造された。このため、和同銀銭のみから埋納の時期を確実にしえないが、189枚の大量の一括出土は、和同開珎の早い時期を示しているとしてよい。銀銭との出土状況の関係は、記録されていないが、銀銭2枚の併出は、きわめて和銅元年(708)の初鋳年に近いころの一括セットであるとしてよい。さらに付言するならば、出土和同銀のうち、出土地が確認される和同銀銭は、きわめて少ないことを考察するし、和同銀銭の確実な最も新しい出土例である小治田安万侶墓(729年)、銀銭10枚の「出土を最下層として、如意峯に遺跡が形成された」としてよい。(注4)銅塊の形態は類型に乏しいが、図面を見る限りにおいて、遅くとも9世紀に下ることはない。総合的に見て、700年代の前半なかでも、その前半に、最初の埋納があり、平安時代に至って擬灰岩製三層塔(現在は二層)が、その地点に建立された。ただし、塔基壇の中心点に合わせて埋納物が安置されていないのは、石塔建立前には、永久的な構築物がなかったことを示している。塔の周辺出土の遺物は、当初からの和同銀13枚、その他後世のもの存在は、一回の埋納でなかったことを示している。

室生寺は、興福寺僧修圓、聖恵とつづく寺塔建造などの寺観整備の前段階として、8世紀初頭つまり藤原京時代最末期から奈良時代初期にかけて、初期の山の信仰があったことを示している。それが、室生寺の始まりで、それを具体的に示すものとして、高い崖の上の岩峯の先峯部であることは、山の信仰の一形態であったことを示している。これに少し遅れて仏教が加わったと見てよい。修圓らの求法持法は、山の信仰の地を利用したのである。

やや長く記したが、室生寺如意峯の信仰は、仏教以前の山の信仰としてとらえることができる。もちろん、式内室生竜穴神社との先後関係も検討すべきであるが、直接的に検討する史料がない。ともかくも、室生寺の奥の院、正しくは現在の奥の院の下方に位置する如意峯の信仰が、のちに室生寺の建立に結びついたとしておきたい。

神社の奥宮についても例を挙げておきたい。栃木県日光二荒神社の奥祠は男体山山頂(2484 m)に位置している。男体山は、大きな日光連峯の一部であるが、宇都宮盆地からコニーデ型火山の山容がよく望める。まさに神奈備状の山である。また、山麓の中禅寺湖にも、美しい逆さ男体山が映し出されている。同山の開山については、弘法大師空海が撰文した『沙門勝道歴山水筭玄珠碑並序』の碑文が『性靈集』に残されている。この碑文によると、勝道は奈良時代の767年(神護景雲元年)と781年(延暦元年)に登山を試みたが失敗し、782(延暦2)年に再び登山し、登頂を果たしたという。男体山山頂上には、二荒神社の奥宮があり、中禅寺湖畔に中宮祠がある。中宮祠から山頂までは比高約1190 m、登山の標準時間3.5時間である。八合目の滝尾神社付近からは、岩山となり、高木はなくなる。八合目近くからも縄文土器片、石鏡などが出土している。(注5)

頂上は、火口壁の上にある。再噴火時に吹き飛ばされなかった火口壁の一部である。二荒山神社奥宮が崖座しており、最高点は社殿から300 m程の位置にある。そこには大きい三角形の影向石がある。岩峯の突出部である。ここから神が影向するという。山頂の右側(北側)に小さい社殿があり、太郎山神

社である。社殿の東側に岩裂(割れ目)がある。割れ目は上で幅5m程で、その深さは計測されていない。昭和38年に学術発掘調査が実施され、岩裂から多くの出土品があり、重要文化財に指定されている。古墳時代後期から平安時代に至る土器類、鏡などともに、他の山の遺跡から出土していない奈良時代の銅印が多数出土している。また、これも他の山から出土していない時期確定が困難な鉄押が多く出土している。二光山頂遺跡の特色といつてよい。その他に経軸塚、銅鏡など、山の遺跡で多く出土する遺跡も多い。昭和38年の発掘調査の記録によると、岩裂を約1m掘り下げると、水が氷結している。お湯をかけたが、調査のさらなる進行は出来なかったと記されている。一種の永久凍土である。男体山の現在までに知られている出土品、伝世品を見ると、山頂の遺跡の形成が最も古く、山麓は、遅れたらしいという状況が知られる。山頂出土の遺物からは14世紀以降の山頂への参拝は急減している。このころ山麓の神社が整備され始める。

男体山の信仰を示す遺跡に宇都宮盆地の集落跡があると、栃木県埋蔵文化センターの橋本澄夫元センター長は、いくつかの遺跡をあげている。栃木県鹿沼市北赤塚町の青龍洞遺跡(注6)からは男体山の山容がきわめて美しく望見できる。鹿沼市上殿町の竜地遺跡(注7)と宇都宮市下荒針町の金沢遺跡(注8)は男体山への捷徑の道路上に位置し、かつ山容がよく望める遺跡である。今後、宇都宮盆地のこのような発掘調査が積み重ねられる課程で、勝道が男体山を望んで、登壇の宗教的意欲をかきたてられた遺跡が検出されるかもしれない(たとえば、当地に多く墨書土器などが出土すれば)。

たつた二例をあげては過ぎないが、山を対象とした遺跡が、山麓から山頂へと時間を追って遺跡形成されたのではないことを示した。山頂に遺跡形成されたのち、中腹あるいは山麓にも形成されるのである。この時は大規模化する。

6 修験道と山

全国各地に、霊山と言われる山は多い。ただし、その多くが出土品と伝承資料の分析からは、平安時代中期の未法思想の流行によるはるかなる世における弥勒による救済を求めている経塚経営以後にかかわる出土品と確実な史料が多い。平安時代初期までさかのぼる山は少ない。天台と真言両宗による弥勒信仰とは、異なる浄土教団による阿彌陀信仰は、釈迦入滅後、五十六億七千万年に出現し、衆生を導くという考えに比べて、よりきわめて近い将来に來迎される阿彌陀仏が人々に親しまれた。阿彌陀信仰を地上において現出させるために都塵を離れて、大都市近郊あるいは、近傍に阿彌陀寺等を造営することが流行した。岡山県東栗倉村の後山の修験は、寿辰では、14世紀に始まるという。日光の山麓の神社の盛行と同じ時期であることは注目されてよい。平安京における宇治、奥州平泉における毛越寺などが代表である。全国各地に例をあげることが出来る。



図5 南東から判官塚古墳・日光連山を望む

修験の本尊である不動明王信仰も深まった。藤原道長(966~1027)を例としてあげると、金峰山詣(寛弘4年・1017)を実行するとともに、比叡山にも3回にわたって徒歩で登山し、晩年の治安3(1023)年には高野山にも登山している。また平安京内にも法性寺などを経営し、宇治に淨妙寺を建立するなどもなしており、息男の藤原頼道の宇治平等院建立につながっていく。金峰山詣は頼道(長和3年(1014))、さらに師通(寛治2年・寛治4年)にも引きつがれていく。道長は、仏教のみならず神社にも詣でている(加茂、春日、岩清水など)。道長の仏寺と神社参詣をみると、その行動は、完全な宗教的規範性をもっていたとは考え難く、広く深く仏教と神、そして陰陽道に傾注していたのであった。具体的には宗教行事を行い、参詣している。倉本一宏氏によると『当時の貴族の中でも、やはり特筆すべきものであろう』としている。(注9)しかし、随行を命じられ、自願して扈從した者が極めて多数に上る寛弘4年5月17日に金峯山詣の長斉を始めた日に、精進所に赴いたのは、中納言源俊賢以下17~18名にも及んでいて、その被官を入れると莫大な人数となる。その影響を過少視することは困難であると言えよう。

古代未以降の修験道において礼拝の中心となる不動明王は、空海が請来した仁王経五菩薩尊因についで円仁請来、円珍請来像などを中心として流布している。なかでも円珍は25歳の延喜2年(902)に黄不動を感得して以来、その宗教のなかで大きい比重を占める。円珍は入唐から帰朝後に圓城寺(三井寺)を開基したことで知られている。不動明王は、まさに尊号のとおりに修験道にとっては、不動の信仰対象とされるに至った。

すでに、宮家準氏が『鎌倉時代によると、金峰山と熊野の間の大峯山系が修験の霊場として確立した』としている。(注10)この考えは、和歌森氏が、『修験道史研究』(注11)で考えていた摂関期よりは、およそ100年程は新しい年代を示している。和歌森氏は、『山伏(山原)』の用語の初出を重視していた。いっぽう、宮家氏は『修験』の初出を『日本三代実録』の貞観10年(868)7月7日条としているにもかかわらず、修験の成立を少し新しいと見ている。私には、宗教史からの宮家氏の考え方を論じることは出来ないが、遺跡と出土品などの分布状況と解離していないことから、その指摘が正しいと思える。

7 人間と神のかかわり 一祝詞から一

神との関係では、神話によまれている山の神(たとえば伊吹山の神は『日本書紀(景行紀)』では「近江五十葦山(伊吹山)有荒神」「主神化蛇之蹟、是大蛇必兼神之使也」と、山の神の存在を示している、山の神は大蛇に化身して出現するとしている。また使者として動物を使役している。また同じ景行紀などには「神山」とも表記されている。神話伝承ではなく、朝廷が山を祭祀した古い史料として『延喜式巻八』に集録されている祝詞がある。(注12)

祈年祭の祝詞に『山の口に座す皇神等の前に白く・飛鳥・石村・忍坂・長谷・畷火・耳無と御名は白して、遠山・近山に生い立っている大木・小木を本末うち切りて・・・(中略)・・・、水分に座す皇神等の前に白く、吉野・宇陀・都那・葛木と御名は白して・・・(下略)』(岩波古典文学大系による)。また、六月晦大蛇の祝詞には『国つ神は高山の末・短山の末に上りまして、高山のいえり、短山のいえりを抜き別けて聞しあさむ。(下略)』

祈年祭の祝詞に『山の口に座す皇神等』の所在地は、飛鳥山神社などとして式内社となる。「水分に座す皇神等」の所在地は、同じく吉野水分神社などとなって式内社として奉祭されていることは、よく知られている。祝詞からは、一般に山には、民衆の祖霊が山にいたとは、読めず、神話伝承以降のいわゆる人皇の霊もそこにいたとは読み取れない。神話伝承中の祖霊がいることになっている。この祈年祭と六月晦大蛇の祝詞は、現在においても踏襲されていて、律令時代にあつては、国衙・郡衙において

も唱えられていた可能性はきわめて高い。逆に言うならば、必ず唱えられていたとみてよい。

いま、奈良県の各山口神社と水分神社の発掘調査はまったくされていないので古学的に、おのこの山口神社と水分神社の創始の時期を確定することが出来ないのを遺憾とせざるをえない。旧宮幣社である丹生川上神社社は、社地の水没移転に際して、発掘調査を実施した。吉野川左岸の社地は、遅くとも8世紀末から9世紀初頭には社殿があり、20世紀末まで、その位置が踏襲されていたことが明らかになっている。

ところが、さきに紹介した室生寺奥の院近くの如意峯塔下の出土品のうち、8世紀初期のものは、祝詞には記されていないが、式内室生産穴神社と関係して見ることは許されるだろう。『一山園』に両者が描画されていて、同一の地点と認識されている。水分社と山口社の分布からみると、飛鳥・藤原の都宮に近い神社を指していて、平城京にかかわるものがないことは、その成立年代を決める手掛かりとなり、飛鳥(672～694)、藤原(694～710)とする武田祐吉氏らの考え方に従うべきであろう。律令の国衙・郡衙において、その土地の神あるいは地域に応じた祝詞があった可能性は強い(中臣の祝詞や出雲神賀詞の存在は、それを示唆している)。

8 律令祭祀と山を記ること

律令祭祀という用語が、前世紀の後末期から言われるようになった。もともとは岡山県倉敷市の大飛島の発掘調査において、奈良三彩小壺の出土などから、各地域において国家祭祀に共通する出土品として、奈良三彩小壺(もちろん大形でもよい)、和同開珎などの銭貨、小形の鏡(海獣葡萄鏡や素文鏡)、銅鈴(これは平安時代以降のようである)などの全部または一部である遺跡がみつぎと発見された。律令祭祀の用語は、国家の場合、各国の場合、各部の場合があり、他に有機質のものとしては、人形、木製品、絵馬などが構成要素とされている。土製品としては墨書人面土器などが含まれている(これは平地の遺跡でのみ出土する)。土馬も出土することがあるが、時代が下ると、三彩は灰陶質や輸入陶磁器にかかわることが多い。甲斐金峰山頂(2579m)においても土馬が出土している。(注13)

銭貨の出土は、山の遺跡から始まったのではなく、近江崇福寺塔跡出土の無文銀銭(注14)、川原寺塔跡出土の無文銀銭(注15)などの仏教の舍利奉安具に伴う荘厳具が始まりである。ついで、藤原宮の大極殿南門の西側から、須恵器平皿に入れられた和同開珎などの地鎮具に含まれていた。この例は、大宰府正庁南門での地鎮具など、各地の衙署(官衙)に及んでいる。仏教では、法隆寺西院伽藍南門外における和同開珎を含む地鎮具となる。

平安時代になると官衙における地鎮法や祭祀の儀礼は大きく変わる。延喜式に集録されている各祭祀で、銭貨はまったく使用されていない。延喜式以前の資料は少ないが、奈良時代後半の書写本が重要文化財となっている。『内宮儀式帳』にも銭貨の記述はない。神祇祭祀と銭貨は切り離されたとみてよい。

いっぽう仏教では、平安時代後半から鎌倉時代に至っても経路から北宋銭、南宋銭が出土し、大峯山頂に宇多上皇が親拝した時に築かれたと推定している護摩壇とその周辺からは、長年大宝・純益神宝・寛平大宝・延喜通宝、乾元大宝などが多数出土している。仏教では地鎮などに際して五宝・七宝などを重視して用いている。銭貨はその法軌には含まれていないが、出土例は多い。これが民間信仰となり、厭勝銭(時には絵銭とも言われている。中国唐朝では、開元通宝の金銭さえ厭勝銭として製作された。)さえ多用された。和同開珎は、日本最初の銅銭であったので、その後も長く製作されたようで、近世の銅銭においても縁銭として製作されたとも言われている。

9 山の信仰と入山の形式

山の信仰において入山の期間(時間)の長短を、すでに問題とした。これは、鎌倉期以降に大いに盛行する修験との関係において最も大切な検討を要する項目である。

修験の総本山と自他ともに認めていた熊野と吉野の大峯山系における修行は、行儀である。長期にわたって、大峯山中において修行するものである。

比叡山横川の首楞嚴院沙門鎮源が著した『大日本国法華華記』は長久之年(1040～44)季秋に撰されたと記されている。その第11話には、「沙門義春、巡行諸山、修行仏法。從熊野山入於大峯山金峰山…(中略)…視四方幽谷、十余日間」とあり、義春なる僧が、10余日の日程で、熊野から金峰山へと歩いたことが知られる。ともかくも長い日数をかけて山中をあぐるのである。

宮内庁本『諸山縁起集』の第9項には「大峯の宿名百廿所」とあり、熊野宿から玉宿(吉野川南岸)までに、120の宿があったとしている。この宿は、宿泊の場所ではなく、神が宿(やど)の場数を示していることは、私が早くに考証したところである。この宿は、近世には、大峯七十五所として再認識されるが、両者の多くは一致していない。(注16)

抖擻(登山用語では縦走)を中心とする修行は、歌人西行も12世紀の久安年間頃に行っている。日数もかかる。また大峯と並び、著名な葛城修験も地図上の最短距離で約90kmを縦走する。紀淡海峡の加太からさらには海上を友ヶ島に至って、そこを起点とし、河内と大和の国境屋根を北上して、二上山あるいは信貴山に至る縦走である。

大峯と熊野間の縦走一抖擻の始まりについては、具体的に確実な年代を示す資料は乏しい。ただし、8世紀の土器片が、吉野川岸から大峯山頂をへて近畿最高峰の弥山の池と谷までの区間において、わずかにあるが出土しているので、8世紀には人が歩いてきたことは確実である。弥山以南については知ることができない。

葛城については、われわれの研究は途中であり、明確にほしがたいが、金剛山(1125m)弥山中腹に7世紀の山の寺である高宮庵寺(海拔550m・史跡)があるなど、早くから仏教が、山の中に入った一例として知られている。礎石が整然として並んでいて、瓦葺の本格的な寺跡である。

大峯に戻ると、道長に始まる経路経営は、大峯山頂を目指したもので、抖擻ではない。中世末以降の大峯修験、なかでも江戸時代以降の大峯入峯の大部分は、山頂に登頂するものであって、抖擻を目的とはしていない。

大峯・葛城の名称は、全国に仮託地名として、「大峯うつし」「葛城うつし」の修業の場が全国に出現する。また、「胎内ぐり」「のぞき」「ありの戸わたし」などの名称も「大峯うつし」として全国各地の山に認められる。岡山県後山(1344.6m)の縁起では、大峯山の行場と「うり二つ」であることさえ強調している(『作陽誌』(注17))。

10 宝満山の出土遺物の検討

宝満山出土の遺物については多いように伝えられているが、小田富士雄氏が編集された『宝満山の地宝一宝満山の遺跡と遺物』に収録されたものが基準資料となる。その出版から30年を経過しており、その後も下宮周辺を中心とした太宰府市による発掘調査が継続して続けられていて、多くの新しい出土品があり、多くの新しい知見が得られている。太宰府市の発掘調査は、原地区から内山地区にかけてであり、山頂地区、東院谷地区、西院谷地区については『宝満山の地宝』に頼らざるを得ない。

宝満山の山頂、つまり麓門神社上宮周辺の発掘と詳細な分布調査は、①法城窟、②上宮社殿(1957

年再建)の背面にあたる東側の巨岩の岩棚状のテラスが調査された。上宮祭祀遺跡と命名されている。別に、かもしか新道にちかい大南窟からの採集遺物がある。大南窟は宝満七窟の一つで、自然の巨大な岩がズリ落ち、重ねあっている岩の下辺の一種の岩陰洞窟がある。その広さは10 m程度である(海拔約530 m)。

①の①法城窟には、現在は玉依姫像が安置されていて、水分神となっているという。土師器片(皿)多数と陶器片2個が出土している。

土師器は糸切り痕がある。たぶん、平安時代のものであろう。②の上宮祭祀遺跡は、山頂の絶壁を10 m余りも下った岩棚状のテラスにトレンチを入れて調査されている。このテラスでは、1961年の学術調査以前から、土器片が採集されていた。



図6

1961年の発掘調査では、このテラスに小規模な試掘溝を設けて、大量の土師器杯類、火、碗、皿、蓋などが若干出土し、須恵器の杯、碗、長頸壺、壺と、灰釉陶片が確認されていた。

土師器杯の口径部から内面に油煙の付着したものがかなりあると報告されている。さらに底部穿孔の杯もある。ともに祭祀による使用を報告書は想定している。

須恵器の出土量は、土師器に比較して少ない。明らかに8世紀中頃としてよい。杯(厚報告では碗)。長頸壺は、口径部から、壺肩部にかけての破片であるが、全高20cm程の大型品で、明らかに金属製水瓶を模したもので、8~9世紀のものと思われる。

灰釉陶は蓋の一部が出土しており、九州産でない可能性が、原報告で指摘されている。

以上の土器類は、原報告図版5~6によると、土砂をはさまない土器層として発掘調査されていて、使用済みの土器なかでも土師器杯がおびただしく、厚さ50m程の土器層を形成していた。これらの土器類は、山頂つまり現在の上宮社殿のあたりから投下されたものが、堆積層をなしたと考えられている。

発掘調査以外においても、上宮付近から大量の出土品があったことが、報告されている。山頂出土品には、滑石製有孔円板、三彩陶、皇朝十二銭、小形銅鏡、火打鎌、仏像片、懸仏片その他である。

滑石製有孔円板は、山頂部北側の崖下(種兎落と通称している)から採取されたもので、厚さ3m、直径約3cmの円板で、径2mmの孔が穿たれている。この一枚から年代を決めることは、困難であるが、全国的にみて、古墳時代に含まれる遺物である。目下のところ、宝満山における古い遺物であるとしてよい。

三輪陶としては、奈良三彩小壺の小斑片2点が、上宮社殿の南崖下約20mの地点の緩傾地に堆積している土師器、須恵器の上面から採集されている。復元口径約3.7cmと復元されている。奈良三彩は、一般に奈良三彩といっている。福岡市鴻巣館跡と、大宰府跡などでは、唐三彩も出土している。宝満山出土の三彩小壺と同じような三彩小壺は、北は千葉県、群馬県から、九州の宗像神社沖ノ島祭祀遺跡まで、約60個出土している。高さ3.5~6.3cm、胴径5.0~7.8cm、口径3.2~4.3cm、胴径5.0~7.8cm、口径3.2~4.3cmまでと、ややバラツキがあるが、およそ統一した法度で制作されている。宝満山出土のものは小片2個で、沖ノ島1号祭祀遺跡出土三彩小壺をモデルとして復元されていて、各地からの出土品と規を合せている。矛盾はない。畿内で焼成された三彩小壺である。

須恵器については、各地出土のものが一枚に図化されている(本誌第2章第3節第5項図2左上参照)。このうち、一番上に図化されているものは、杯蓋として図化されているが、わたしは破片の大きさを実見していないので、印象的観察であるが、上下を逆にして杯身とした方がよいのかもしれない。杯蓋としたらば、この破片の頂部にはツマミをつけるためのナデ痕跡が見られるはずであり、図面からは古墳時代後期の杯身片とみない滑石製有孔円板につづく時期のものである。

銅銭は和同開珎(銅銭)から乾元大宝までが出土している。1985年までに採集された銅銭を集計した表によれば、皇朝十二銭のうち長年大宝から寛平大宝までの4種をのぞいて、ほかの8種が出土している。なかでも、神功開宝(796初銭)と隆平永宝(818年初銭)の多さがきわだっている。これはほとんど種類の皇朝十二銭が出土した山の遺跡は、史跡大塚山寺の木堂地下発掘調査をいっていない。隆平永宝から富寿神宝につづく承和昌宝(835初銭)までの間は、宝満山の文献史料が空白にあたっている時期である。このことの解釈は、今後にゆだねざるをえない。

銅製儀鏡2面も、方鏡と円鏡があり、三重県の伊勢湾の孤島神島に鎮座する八代神社の伝世祭祀具(重文)とよく似ている。

以上、山頂(上宮)出土の考古遺物から考えられる宝満山信仰を簡潔書きにすると以下のようにまとめられる。

- 1) 山頂と山麓の現出土品を一覧すると、山頂がもっとも古い。その根拠は有孔円板であり、古墳時代中期から後期にかけての時期を示す。
- 2) 奈良時代中期から後期にかけては、三彩小壺、銅銭、土器片などがある。
- 3) 平安時代初期の大量の土師器杯の出土。堆積層をなしており、その全量はうかがうべきもない。そのような平安時代初期の大量の土師器杯の出土は、奈良県の史跡大塚山頂の黒色土器の出土情況とよく似ている。この大量の土師器杯の用途は、よく判明していないが、聖武天皇の天平16年12月に金鐘寺朱雀路での万灯会や、空海が天長10年に高野山で行いを始めて、現在に至っている万灯万華法要などとの関係も、検討する必要があるが、大規模な発掘調査をしなければ、確証を得ることは出来ない。
- 4) 山麓から山麓の遺跡に、1)~3)の情況に遅れており、天台宗と空海の九州での2年半にも及ぶ密行の時期以降のものですることが出来よう。
- 5) 修験化は、もっとも遅れて始まったと認めよう。

11 宝満山と、山の遺跡

かつて山を考古学資料から総体的に検討しようとする学問はなかったと言つてよい。大場磐雄先生の提唱された『神道考古学』の資料として、三輪山などからの出土品が、まったく考証することなく神道と関係する資料とされた。同じように仏教考古学では、おもに瓦葺の寺院建築のみを思い描いて、古瓦

出土地を寺跡としていた。近年の発掘調査で、そのいくつかは部衛であることが判明した。

信仰を集めた山には、各時代の遺跡・遺物が重層的に累積している。

宝満山は、古墳時代には御笠川畔から望見する神奈備形の山容に対して信仰が始まり、山頂の巨石に対して信仰が始まったものと思われる。後世に水神が祀られていることからの想像であるが、豊水を祈っていたのかもしれない。

大宰府都府楼を中心とする官衛が建設されてのち、ほぼ北東方向に見える宝満山のもとの信仰に重ねるように律令祭祀の対象となった。一般には官衛近くの川辺や道路側溝などで多く行われた三彩小壺と皇朝十二歳を用いた祭祀が山頂で行われていることは、それ以前からの山頂祭祀の伝統が強かったことを如実に示している。山頂における三彩の出土は大塚山頂、榑木県男体山頂と宝満山頂のみである。大塚山頂と宝満山頂のものは奈良時代の三彩で、男体山のものは平安時代初期の猿投窯系のものである。このため奈良時代の確実な祭祀を示す山は、二山にのみとなる。この点も、宝満山が内包する歴史の意義の大きさを示している。

つづいて、大量の土師甕を用いた祭祀である。『宝満山の地宝』によると、その多くに油の燃焼痕跡が付着していることが報告されている。神祕祭祀での火の使用は秘明などであり、油の燃焼を伴う燃灯仏教色の強いものと言わざるを得ない。法隆寺の修正会である「おこない」では、金堂内に120灯もの灯火がもやされている。東大寺の修二会であるお水取りでは、二月堂内陣内に数百もの灯火が燃やされている。もちろんこの二例がいつから現行のような法要形態となったかについては、確実なところは判らないが、聖武天皇の万灯会や空海の万灯万華法がある。中国時代の寺院で、歓迎が成道した日である12月8日を賑八会として万灯を燃やして供養していたことなどを合わせると、宝満山頂においての燃灯供養はひろく、太宰府地域の各地点からも遠望できたかもしれない。宗教的にきわめて大きな意義をもっていたといえる。

10世紀から11世紀は、真言・天台がきそって山中に堂舎を建築した。そこでは僧自体が修行するとともに、時には、僧が民衆に向かって説教していたかもしれない。『日本書紀』では、行基の説話として山房において説教する説話があり、燃灯用に献油をも用いていたことを暗示する説話がある。宝満山の多くの中・山腹部の多くの堂舎においては、同様のことがあったかもしれない。経塚以降については、他の章において論及されているので、本章においては、ここまでしておく。

宝満山の山頂を中心とする考古学資料が示す神祕祭祀と仏教法要についての祭祀と法要が残した豊富な遺物は、日本各地の山の信仰を残している山においても、特筆すべき豊富な内容を含んでいるとよい。

ごく小規模の発掘調査が実現された以外には、地上に偶然現れた出土品の採集からのみでも、これだけのことが説明することが出来るのであり、多くの文物は、岩棚と多く残されていることを考えると、山頂はじめとする宝満山に国家的水準での保存、保護がされることを希望したい。

注

1 宗像神社復興期成会編『沖ノ島』『純沖ノ島』『宗像沖ノ島』を参照

2 岩波書店刊『大和古寺大鑑』の室生寺に写真および描きおこし図がある

3 岸熊吉・末永雅雄「宇陀郡室生村室生寺如意筆出土遺物」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄

報 第五輯』昭和30年

4 奈良県教育委員会『奈良県総合文化財調査報告書—都介野地区—』昭和27年

5 角川書店刊『日光男体山—山頂遺跡発掘調査報告書—』昭和38年

6 榑木県埋蔵文化財調査報告書第317集 青龍洞遺跡・皇宮前塚—経営体育成基盤・整備事業北赤塚2地区に伴う埋蔵文化財発掘調査

7 榑木県埋蔵文化財調査報告書第246集 竜地遺跡跡跡警察学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

8 榑木県埋蔵文化財調査報告書第216集 山崎北・金沢・台耕上・関口遺跡東北縦貫自動車道弘前線(鹿沼—宇都宮間)改築に伴う埋蔵文化財発掘調査

9 倉本一宏『全現代語訳藤原道長御堂問白記』(全3冊)の「おわりに」頁441。講談社学術文庫2009

10 宮家準『修験道—その伝播と定義—』の第一章第3節、頁26～27 法藏館2012年

11 和歌森太郎『修験道研究』平凡社東洋文庫 昭和43年

12 祝詞の訳文は武田祐吉「祝詞」岩波古典文学大系『古事記 祝詞』による。

13 信藤祐仁「甲斐金峯山」季刊考古学第63号 1998年

藤原功一「甲斐金峯山と金楼神社」『山岳信仰と考古学II』同成社 2010年

14 奈良国立文化財研究所『川原寺発掘調査報告書』奈良学報第9 1960年

15 菅谷文則「大塚山の奈良時代開山」『山岳信仰と考古学』同成社 2003年

16 正木輝雄『新訂作陽記』第七巻 大正2年(昭和50年再刊)

挿出典

図1 『大和古寺大観』第六巻 室生寺 岩波書店1976年

図2 『大和古寺大観』第六巻 室生寺 岩波書店1976年

図3 『奈良県総合文化財調査報告書—都介野地区—』 奈良県教育委員会1952年

図4 『奈良県総合文化財調査報告書—都介野地区—』 奈良県教育委員会1952年

図5 『榑木県埋蔵文化財調査報告書第317集青龍洞遺跡・皇宮前塚—経営体育成基盤・整備事業北赤塚2地区に伴う埋蔵文化財調査』 榑木県教育委員会2009年

図6 『山の神と山の仏』奈良県立考古研究所附属博物館 2007年 ※菅谷撮影

図7 『山の神と山の仏』奈良県立考古研究所附属博物館 2007年

横谷山
文安貳年三月五日
水原庵

普門庵
妙珍（花押）

参
侍者御中

史料 4 4

○文明三年（四七二）六月

『龍門神社所藏獅子頭眉銘』

江州水原作

寶滿下宮大宰小貳殿御代

文明□年六月七日永禪

○五十二〇瘦

史料 4 5

○文明十七年（四八五）三月

『松平賴壽氏文書』

一所、六段半、日吉田外有智山滿願寺灯油

与蓮

史料 4 6

○永正十七年（五二〇）

『北肥戰誌』八、筑紫國門馬場嶺の處に對たる、事

然るに滿門、今年大水元年、筑紫國寶滿の上宮を建立す。去ぬる永正十五年に
炎上せしに依りてなり、抑て彼の寶滿岳と申すは、九州第二の高山、半腹よ
り頂上は岩石餘の如くにてすまじく、見上ぐるに、崖眼上に打覆り、數千丈の

解風に似たり、斯かる縁組を厭はず彼の大宮を再興しけり、

史料 4 7

○天文二十一年（五五二）正月

『歴代鎮西志』十一

天正廿一年壬子春正月、豐後者大友義鎮、實高橋參河守鑑種之數

篇之勤功、封筑前州三笠郡、以移大宰府、鑑種入寶滿城、亦城於

岩屋山、○下略

第4章 宝満山の歴史的価値を支える視点

前節まで考古学、自然史、宗教史、建築史、美術史、民俗学などの各方面から宝満山の歴史的価値について論証をおこなってきた。以下にその成果を概観し総括としたい。

宝満山は遺跡としては時間的な積層があり、信仰としては古代より現代に至るまで継続している。すでにそこに歴史的価値が見いだされるのであるが、その価値を支える次の5つの視点を挙げておきたい。1 古代国魂祭祀の山、2 六所宝塔建立の場、3 九州を代表する天台系山岳寺院、4 九州における修験道の根本道場、5 聖地としての継続性を持つ山。

宝満山の遺跡としての成立と展開は、7世紀後半から8世紀初頭にその嚆矢たる遺物が山中の複数箇所で見られ、特に山頂を主体とした場所において皇朝銭や奈良三彩などを用いた祭祀がおこなわれ、神ノ鳥祭祀遺物との共通性などから、遣唐使派遣など国家的事業に伴う祭祀が付託された可能性が指摘されている。これは大宰府政庁の成立と密接に関わるものであり、草創期の信仰の山としての性格付けに大きな意味を持っている。

平安時代前期に最澄が企画した六所宝塔の設置場所のうち、最西端に位置づけた安西塔が筑前龍門山（宝満山）に置かれたことは、遣唐使に随伴して最澄がこの山にあった龍門山寺立ち寄ったことに起因するものと思われるが、それもこの山が大宰府を背景とした国魂に置かれた祭祀の山としての性格があった故のことと考えられる。建立された宝塔は方三間であるが、方五間の大塔に匹敵する規模を持ち、日本全土を法華經の功德で覆おうとした最澄の雄大な構想を現すに相応しい建物と見ることができると評されている。

古代末から中世には、山中の広い範囲でひな壇状の開発がおこなわれ、谷の奥や尾根の高所に礎石建の空宇が、その前面には一部に石垣を用いた区画に掘立柱建物林立する遺跡群が展開している。長治元年（1104）にはこの山の嶺有を巡って朝廷、大宰府をも巻き込んだ比叡山と石清水八幡の抗争が起り、結果として比叡山側に有利な結果に終わり、大山寺は「天台之末寺」ということになった。『台明寺文書』の1162年の記事には「京都には本寺叡岳、鎮西には本山内山」とあり、鎌倉期の縁起『龍門山宝満大菩薩記』には、この山は「九国二嶋惣鎮守」とされ、そのような自負と社会環境の中で信仰の拠点としての性格を引き継いでいった。

山が修験の色彩を帯びるのは文保二年（1318）銘の五転長足金の胎内界の大日如来を表す梵字が中宮裏の巨石に刻まれた頃とも言われ、近世に至るまでに宝満山を金剛界、彦山（英彦山）を胎内界とする西国屈指の修験道の根本道場に成長する。

明治時代以降の修験道の離山により山の一部では寺坊が遺跡化するが、龍門宮は龍門神社として祭祀と山の聖域を伝承しつつ、平成25年には山の開闢1350年の大祭を企画し、宝満山の山状の末裔達は昭和57年に宝満山修験会を立ち上げ、平成25年に江戸時代以来約150年途絶えていた、宝満山から英彦山に至る峰入りを復興しようとしている。

本報告を編纂するにあわせて宝満山総合報告策定審議会を立ち上げ5回の審議をおこなった（第1回平成23年8月30日、第2回平成23年12月20日、第3回平成24年3月27日、第4回平成24年5月23日、第5回平成24年12月8日）。この審議の中で、史跡指定地の考察もおこなった。事務局は龍門神社社地および第3章第3節で紹介した「井本文書」が示す近世宝満二十五坊が保持した山林を中心とした範囲を提唱したが、審議では将来的には開発の可能性のある内山や北谷の集落も射程に入れるよう助言をいただいた。本報告で示された歴史的価値を有する範囲の確定と保全については、地元の理解を得ながら継続しておこなう必要がある。

藤原左衛門尉切落八王子駕輿丁男臨之間、令汚穢神輿、仍奉振弁跡山、是清水別當法印宗清執務西宮崎宮之間、天台末寺山寺神人船頭長光安、爲宮崎宮主相模寺主行遍、并子息左近將監光助等被殺害、仍兼徒峰起、勸奉狀申之間、行遍・光助雖被禁獄、沒收宮崎宮山門領、并可被配流宗清法印之由訴申之、所奉動神輿也。

史料 3 5

○貞元元年(一一三三)

『歷代鎮西要略』二 貞元元年壬辰
釋氏圓爾爲求法渡宋、先來而惠博多圓覺寺矣、茲西府有智山寺之僧義學言、以惡禪宗、擬加害、博多綱首謝太郎國明、請圓爾而衛備田之家。

史料 3 6

○貞元元年(一一三四)

『元亨釋書』七 淨律之二 望日御願
宰府有智山寺者、西州之大講肆也、嫉爾之禪化、欲毀承天新寺、執事者聞于朝、寬元年、勅賜承天・崇福二刹爲首寺、而息有智山之濫寇、爾乃高揚佛鑑所書勅賜太子、大協靈之遠識也。

史料 7

○文本十一年(一一七四)

『伏敵編』三
少貳景實、武藤氏、姓ハ藤原、小次郎資賴建久七年(一一二二)始テ大宰少貳二任シ、子孫世其職ヲ襲キ、筑前國御笠郡内山城二居リ、

肥前・筑前・夢岐・對馬ノ事ヲ管ス、

史料 3 8

○五和一年(一一三三)七月

『廣瀬文書』

依有智山與原山闘諍事、安樂寺宿直事、自來廿日迄同卅日、無代官之儀、自身相向、可被勤仕也、更ニ不可有緩怠之儀候、仍狀如件、

正安二

七月十六日

有範(一)(花押)

中村彌二面殿

史料 3 9

○延元元年・建武三年(一一三六)

『託摩文書』

託摩七郎之雜言上

欲草任軍忠之儀、預御證判手續事、

右、去年二月廿七日菊池武敏以下凶徒、寄來宰府之間、馳向中途筑後國大田早水、致散合戰、自身被耗ケリカキキリ重傷同廿九日於有智山城中致合戰、若黨中村丹三郎國家合討死訖、如此次第、武藤刑部爲惡房御見知之上、檢見勘文可爲分明歟、然早爲預御證判、相言如上件、

建武四年二月日

一(承了、少貳(花押)(稱號))

『太平記』十六 少貳菊池合戰御證判自書宗盛殿上事、

菊池ハ手合ノ合戰ニ討勝リ門出古ト悦テ、雖リ其勢ヲ衰シ、少貳入道妙勢ヲ攝

關ノ内山城ノ推吾ケル、少貳宗徒ノ兵ヲハ皆稱向ニ附テ、其勢過平水本ノ

渡ニ討レシ、城ニ殘リ勢僅二百人ニ至サレケレハ、菊池カ大勢ニ叶フヘキ

トモ覺ス、サレトモ城ノ要害難クカリケレハ、切腹ノ下ニ敵ヲ直下シテ防戰事

數日ニ及ヘリ、菊池新ヤ入替上替、夜軍十方リ攻ケテモ、城中ノ兵一人

モ討レズ、矢繼モイテ盡サリケレハ、如何ニ攻ルモ主落サルモノヲ思ケ

ル處ニ、少貳一旗等ノ少貳宗徒野見守ハ俄ニ心變シテ、語ノ城ニ引上リ、中

原ハ旗ヲ擧テ、我等御存候間、宮方ハ參候ナリ、御同心候ヘシヤト、妙勢カ

方ハ云道シレハ、一言ノ返答ニモ及ハス、苟モ存ヘテ義懸レシヨリハ、死シ

テ名ヲ殘サレシハ知シト云テ、持佛堂へ走入觀カキ切テ伏ニシテ、即等百餘人

モ、悲愴々々想天迄聞ヘヤスラント夥シ、少貳カ故末ノ子ニ、宗盛藏士ト云

僧、齋堂戸頭破テ斬トシ、父方死體ヲ葬シテ、萬里碧天、風高月明、爲問懸

公行御事、願朝日ヲ昇行、下火云、猛火重燒一段清ト、靜ニ下火ノ佛事ヲシテ、

其方ノ中ニ飛入テ、同ク死ニ赴ケル。

『梅松論』

妙勢一昨日二月廿八日九月廿二日、筑後國に力盡して戦しかども、筑後入道妙惠合戦に對して、宰府の敵を退ける所に、將軍の御爲又は年奉の人々の用意に任置たりし御馬物具、數を盡して成難となりしを見て、妙惠云けるは、兩將此境まで御下向は、高代の御事也、先達て關東より頼みおほしめすよし御自軍の御善を下されし間、微力をはげまむか爲に、頼置を御返し進せし候、合戦に對する候、面目を失ふ間、老後の存命無益なり、二方の御下向に命を奉る上り外、別に何の志もあらん、わか君の爲に忠節を盡さば、子孫永々心を存すへからすとして、宰府の近き所内山といふ山寺に歸籠て、最後の合戦を數刻致して、腹を切たりける。

史料 4 0

○正平十四年・延元四年(一一三五)

『太平記』三十三 菊池合戰事

少貳宗ハ叶ハシト思ヒケシ、大宰府へ引退テ、寶滿謙二引上ル。

史料 4 1

○正平六年・康安元年(一一三六)

『北肥戰誌』一〇三 新征西將軍宮大宰府御發向之事

斯ア宮ノ御發後ヲ打通り大宰府ヲ攻近ク、少貳是ヲ防シ、其身ハ宰府へ在テ、寶滿謙ヲ要害ニ構テ、天孫旗ニ出城ヲ誘ヘ、一關・岩門・飯盛・細峰、

要害五カ所ノ城二軍兵ヲ嚴置、大宰府ヲ據トシテ、宮ノ御勢ヲ待懸ル。

史料 4 2

○天授三年・永和三(一一三七)

『北肥戰誌』四 冬寶滿合戦見聞所ノ事

本和年丙辰、太宰府守相禮、有智山の城に籠籠る間、是を攻むべき爲め、

大内介藤弘、中國より渡海シ、大友式部大輔親世、豐後より來リ、大勢を以て

有智山の城を取圍フ、中にも麻生重前守、後左衛門尉、原田、秋月の一旗、

進んで有智山の大城戸を打破る、少貳の家人守防ぎ戦ふと雖も、大勢の著手に

叶はずして、七百餘人討死しけり、斯かりしは、頼置籠城なり難ク、密に城

中を落去りぬ、少時しばらく、肥前に隠れありと聞えし、

史料 4 3

○文安二年(一一四五)三月

『横岳古文書』〇 聖壽寺願

(題名)『横岳古文書』五

寶滿御馬場屋敷數三ヶ所下地職之事、有筋目數代と相拘候、然者當座江寄進申候地錢之事、有智山下宮江參百文社納候て、永代仁御拘肝要候、諸公役之事、御寺領同候候之上者、御免許之儀、不及申候、聯及於向後違亂之方、有間候候、仍寄進狀如件、

有恐，只可依勒定之由，定甲了。

件龜戶宮，彼合戰之後，自然有火，神殿燒亡，加之又一日之間，天暗霧濛，不見晴爽，又神座之石破壞，依之鎮西誠恐之由，已見所解，凡神聖有畏，不能左右欺。

今夕已帥御并光清・範政等，被勸罪名之條，已迷是非，就中檢非違使範政者，去六月祇園御覽會日，候前齋院御所三條北門邊之間，神人田樂與藏人町馬長童鬪爭之處，已及拔刀，仍範政郎等擄取之處，聞神人由則免了，神人還渡範政，之條損身命也，似無朝威，今被其罪，又帥御并光清守官旨，追捕惡僧，頗不可及過惡賊，就中諸社神人輒昇神輿不可出神境，若背件事旨之，僧俗解却職察，永不可被用之由，先年度被下宣旨了，近者帥御下向之日，鎮西諸社荷神輿致濫行，縱難不經奏聞，宰府任法可科決由，申請之處，依諸宣旨又被作命了，背度・制符，部部共荷神輿成惡，論之政途其理可然哉，彼龜戶宮爲八幡別宮者，此訴何不出八幡，從延曆寺言上哉，前後相違，首尾已亂，件訴有裁許者，八幡有恐，欲無裁許者，祇園・日吉并龜戶有畏，神聖難量，人力不及歟。

又聞，其後石清水神民等，爲山太衆依被損亡，荷神輿之，可向關云々，凡天下大亂，神民蓋，未有此例。

後日依八幡訴，山座主仁源可令進件下手人之由，被仰下云々，上帶左大臣。

十一月二日，○中略，左大臣・內大臣・民部卿召御前，八幡神人之事有定云々。

四日，○中略，後聞，昨日八幡別當光清依本宮神民訴申，被免之由

史料 2 8

○久壽二年（一一五五）四月
『台記』

○平治元年（一一五九）八月
『百練抄』七 後白河

○永曆元年（一一六〇）十月
『百練抄』七 一條天皇

○應保二年（一一六二）
『臺明寺文書』

大廣國臺明寺住僧等誠敬感惡語言，申請 大宰府殿事
○前略，京都仁成木寺敬岳，鎮西仁成木山內山，○中略
應保二年五月十五日

史料 3 2
○文治元年（一一八五）五月

被仰下了，去昔日保任之由，兩名之由候經下也。

史料 2 4
○嘉承元年（一一六二）十一月
『中右記』

嘉承元年十一月三日辛卯，○中略，結政請印，新宰相顯實勳之，此次龜門宮奉增正一位木位候。

史料 2 5
○天永元年（一一〇〇）四月
『觀世音寺文書』○東京大學所藏

○前略，又康和年中有大風之時，金堂、廻廊同以顛倒，寺家大敷在此一事，○中略，近則安樂寺，有智山既有此勳，

史料 2 6
○永久四年（一一六五）五月
『兩卷疏禮記』上 ○新教寺所藏

永久四年歲次丙五月十一日，筑前國薄多津唐房大山船襲三部船頭房，以有智山明光房唐木移畫畢，已上；

史料 2 7
○保延六年（一一四〇）六月
『百練抄』六 崇徳天皇

保延六年六月廿日，諸卿定大宰帥賴朝訴申去月五日九國所，大衆神人燒拂宰府已下屋舍數十家事，此中山。背條，鎮西爲爲事。

『古記』

元曆二年五月十日，陰晴不定，右衛門權佐棟範爲殿下（藤原基德）御使參上院，申云，宇佐宮黃金御正體并流記文書，爲武士被追捕取云々。

山嶽當澄雲參上，大山同被滅亡之由進解狀，皆是參河守（藤原範賴）所行也，天之誠我朝敵，可恐々々。

史料 3 3
○建久六年（一一九五）九月
『玉葉』

建久六年九月六日丁亥，○中略，座主被示天台末寺鎮西大山庄民等狼狽病滅之由，可書給御教書之由。

史料 3 4
○建保六年（一一二八）九月
『仁和寺日記』

建保六年九月廿一日庚寅，叡山悲振日吉神輿三基，王子宮，客人，十重障，祇園三基，辰刻參開院左衛門陣，奉安之，次北野神輿二基奉振石衛門陣，以官兵禦之之間，右兵衛尉藤光明射衆徒，大官者人多射而先死，爲醫檢校宗清印教書之由云々。

『吾妻鏡』

建保六年九月廿九日丁酉，陰，京都飛脚參者，申云，去廿一日山門衆徒頂戴日吉，祇園・北野等神輿入洛，奉振開院殿陳頭，仍遣北面來防禦之，又住京健士（軍使）光員，一應德，基清，天也，能直，廣綱等，依勒定馳參宮門，相支之處，加藤兵衛尉光賢員等，後等加

史料 14

○承曆四年 (二〇八) 六月

『水左記』

承曆四年六月七日戊戌、南中領許大山寺別當院經來、自鑲西上道也。

史料 15

○永保三年 (二〇八) 三月

『宮寺緣事抄』所司僧綱昇進次第

仍承保二年十二月七日春日社行幸、令彼法橋了。宣明山禪寺三藏院講

權之初云、但當寺別座、伴法橋又兼任大山寺別當、居住鑲西、而聞
權別當頼清申、公家、補彼大山寺別當了、仍院範依其思受重病、
永保三年三月、日自鑲西上洛之間入滅、

史料 16

○應德二年 (二〇八) 九月

『石清水文書』八幡宮舊日時摩支等

擇申可被行應門社、御遷宮日時

十一月十七日丑時寅戌

廿一日壬午時戌亥

應德二年九月五日 陰陽頭實茂朝臣道言

史料 17

○應德三年 (二〇八) 〇

『本朝高僧傳』七十 羅羅十二 兼用之上、筑前內山寺沙門安摩傳

釋安摩、住內山寺、學佛不覺、誦經不覺、給水不覺、晝博交遊哉、夜生禪經行、
外似無懈、內全大慈心、他人稱安摩如來、釋年謂衆曰、久積行業、
當山魔窟也、恐粉命終矣、俄移假居高城、至臨終時、沐浴淨衣、請衆念佛燒香、

唯辨院讀而致、翹足嘆嘆、應德末也、

史料 18

○承德二年 (二〇九) 〇

『聖光上人傳』〇沙門道光傳

壽水二年 〇中略、昔江師率飯岳師學東塔普見坊團聚、向大宰府、于時
有法相法師有普住、竭彼大意、山僧答云、彼無性有情義、

史料 19

○康和四年 (二一〇) 〇

『八幡宇佐宮御神限大鏡』

以康和四年之比、大山寺雖致非諍、於宰府對決、被進官府解之間、
依文書之理停止大山寺之妨業、委細之旨、官符宣等狀顯然也、

史料 20

○長治二年 (二〇五) 正月

『中右記』

長治二年十月卅日、〇中略、件事元者、慶朝法印爲天台座主之時、
依院宣、以八幡別當法橋光清補鑲西之大山別當了、大山寺是文台寺也、

然聞慶朝座主本山大衆違背、被拂山上之日、惡僧首法藥禪師執行
山上政之時、推而成彼大山別當、下道延曆寺下部并日吉古宮主法
師原於鑲西、撰以執行、爰件法藥禪師齎行齎長、被追捕之姪、又
法橋光清申下宣旨、相具檢非違使廳下部、令追捕法藥禪師之從類、

史料 21

○長治二年 (二〇五) 三月

『中右記』

長治二年十月卅日、〇中略、件事元者、〇中略、件事元者、彼合戰之後、
自然有火、神殿燒亡、加之又一日之間、天暗露滿、不見晴氣、又
神座之石被損、依之鑲西識成之由、已見府解、

『卜部兼文勅申伊勢大神宮神寶紛失事』 〇圖書所藏

長治二年三月三日、筑前國應門上宮神殿爲大火燒亡、御正林同燒失

史料 22

○長治二年 (二〇五) 六月

『百練抄』五 應門天皇

長治二年六月二日、諸卿定申大宰權帥李仲同意于八幡別當光清
射危應門社神輿、致苦日吉神事、并應門宮可爲八幡末社哉否事、

史料 23

○長治二年 (二〇五) 十月

『中右記』

長治二年十月廿九日、〇中略、有小所勞不出仕間、聞山之大衆晚頭
下京、或住祇園、或在祇多林寺、放聲叫喚、誠驚衆人、是猶帥卿
并八幡別當法橋光清并左衛門尉範政可被流罪之由申請者、事之赫
不論是非歟、

卅日、〇中略、今夕延曆寺大衆數千人先着祇園、荷輿群參陽門門下、
訴申之旨、大宰帥卿并石清水別當光清、檢非違使左衛門尉範政共
可被流罪之由、不論左右黃申之間、叫喚之聲已驚京都、僧綱等座
主以下、爲大衆參集承香殿、類以訴申、爰又八幡神民俗別當以下

群參待賢門、別當光清不可被行罪之由、訴申之間、彼神民三四人

爲山僧被切損也、件旨、俗別當等入自西陣方憂申、加之俗官等
臨暗夜之間、爲山大衆被凌辱了、凡亂治之甚、不可記盡、頭中將
顯實朝臣、藏人辨爲陰、互爲御使、頗往反、此間大衆可亂入由相令、

依宣旨不可入陽門內由、檢非違使等并武勇士相觸之間、夜漸漏亂、
已欲曉更、爰被下宣旨云、爲重我山佛法、大宰帥卿并範政、光清
等、任調度文書可勘罪名之由、被下法家了、但範政、光清先停任、

於帥卿者、日已稱停任、衆奉奉此仰旨、且以隨喜、曉更歸家本山上、

件事元者、慶朝法印爲天台座主之時、依院宣以八幡別當法橋光清
補鑲西之大山別當了、大山寺是天台之末寺也、然聞慶朝座主與本山大衆
違背、被拂山上之日、惡僧首法藥禪師執行山上政之時、推而成彼
大山別當、下道延曆寺下部并日吉古宮主法師原於鑲西、撰以執行
爰件法藥禪師齎行齎長、被追捕之姪、又法橋光清申下宣旨、相具
檢非違使廳下部、令捕法藥禪師之從類、帥卿隨宣旨、相具兵士、
欲擲惡僧等、互合戰之間、應門宮者在大山之內云、互亂發之間、

流矢自中彼神輿者、仍從大宰府訴申件旨、又從延曆寺訴申此事、

去四月比、令諸卿定申、被申之旨已不同、爰江中納言匡房卿
年在冢家聞云、昔延喜年中八幡託宣云、應門宮者是我姨母也、太略
見新國史云、以之思之、今年二月非常之敕詔文云、觸伊勢大神宮、

八幡訴者、非免限者、仍不可曾赦、諸件件事、不可曾赦由會議了、
仍被時沙汰者、府官并光清目代法師、於官司對問旨、被下宣旨了、

上雖左大臣、雖左中將時範等奉行、近曾府官并光清目代僧中等、於
官問法、但皆悉不參洛云、陳申之旨、不一決、就中八幡別當
光清其間在京都、不知子細者、一夜付問注記、雖有仗議、神慮爲

第5章

第1節 文獻史料

史料1

○延暦廿二年(八〇三) 閏十月

『扶桑略記』卷一 桓武天皇

延暦廿二年閏十月廿三日、坂澄和上於大宰府龍門山寺、爲渡海四船平達、敬造檀葉師佛四軀、六尺餘、其名号無勝淨土善名吉祥王如來、止。

史料2

○承和七年(八四〇) 四月

『續日本後紀』九 仁明天皇

承和七年四月丙寅、奉授肥後國從四位下勳五等健甞龍神從四位上、餘如故、筑前國從五位下龍門神、筑後國從五位下高良玉垂神並從五位上、

史料3

○承和十四年(八四七) 十月、十二月

『入唐求法巡禮行記』四

廿八日、於大山寺、始入唐時所祈金剛般若五什卷、皆先馳使、奉送蘇州、同日、早朝一時發遺蘇帛使訖使轉經、同日、爲龍門大神轉一千卷、廿九日、午前爲住吉大神轉五百卷、午後爲香椎名神轉五百卷、十二月一日、午前爲筑前名神轉五百卷、午後爲松浦少貳、重原重則、靈轉五百卷、二日、爲香春名神轉一千卷、三日、爲八幡菩薩轉一千卷、觀音寺講師每事相助、轉經僧布施白綿貳佰疋、

薩轉一千卷、觀音寺講師每事相助、轉經僧布施白綿貳佰疋、

史料4

○貞觀元年(八五九) 正月

『日本三代實錄』二 清和天皇

貞觀元年正月廿七日甲申、○中略 奉授筑前國正五位下龍門神・從五位下筑紫神並從四位下、

史料5

○元慶三年(八七九) 六月

『日本參代實錄』三十六 藤成天皇

授筑前國從四位下筑前神・龍門神從四位上、

史料6

○延喜廿一年(九二二) 六月

『舊唐宮錄』○石清水八幡宮延喜時所收

延喜廿一年六月廿一日、○中略 吾(筑前) 穗浪郡大分宮上移住後已有三殿、一者、龍門宮、我伯母上御坐、而年中節會仁府官以下國司雜任參來之間、愚暗之輩、或乘馬過、遙拜不下、或乍寄登渡彼御前、其御很表有恚、

史料7

○延長五年(九二七) 十二月

『延喜式』三 禮部三 臨時祭

名神祭二百八十五座 ○中略 龍門神社一座

延長五年十二月廿六日

史料8

○延長五年(九二七) 十二月

『延喜式』十 禮部十 神名下

筑紫神社名神

龍門神社名神

延長五年十二月廿六日

史料9

○承平四年(九三四)

『石清水文書』二 田中宗文書

府摩 高崎宮

應合造上神宮宇多寶塔寺基事

應合、得千部寺僧兼祐申狀稱、謹案、天台傳教大師去弘仁八年遺記云、爲六道衆生直至佛道發願、於日本國書寫六千部法花經、建立六箇基寶塔、一一塔上層安置千部經王、下壇令修法花三昧、其安置建立之處、叡山東西塔、上野・下野國、筑前龍門山、豐前宇佐宮彌勒寺者、而大師在世及滅後、僅所成五處塔也、就中龍門山分塔沙彌遺教在俗之由、以去承平三年造立已成、上安千部經、下修三昧法、宛如大師本願、○中略 承平七年十月四日

史料10
○正曆二年(九九一)

『重之集』上

春はもえ秋はこゝろ、かまど山霞も霧もけふりとやたつ

かまど山

史料11

○長保五年(一〇〇三)

『明匠略傳』日本下 延慶法攝

長保五年、寂照上人欲渡唐、同有渡海志、從聖人於海西、便傳秘教異義、官家有議、下牒拘留延慶、惜其偉器也、後昇大山寺、

史料12

○寛弘四年(一〇〇七)

『續本朝往生傳』

砂◎門高明者、本是播磨國書寫山性空上人之弟子也、後住大宰府大山寺、

史料13

○天喜二年(一〇五三)

『經衡集』

日のいたくりはへりしに、かまど龍門の明神に、むまかみなたたまつるとして、あめふれといのしるしのみえたらはみつかみとおもふべきかな

『新編古今和歌集』十六 詠部

筑前守にて嵐に侍けるに、日のいたくりければ、雨の祈りに、かまど明神に鏡を奉るとてそへたりける、

雨ふれと祈るしのみえたらば水かきみとも思ふべきかな 藤原経衡

第2節

1 年表

(伝説期)

- 664年 大宰府の鬼門除けのため龍門山頂に八百万神を祀る(龍門山宝満宮伝記ほか)
673年 心蓮上人が玉依姫の示現により社殿を造立する(龍門山宝満宮伝記ほか)
683年 心蓮上人寂し仏頂山に葬り東尾寺とする(龍門山宝満宮伝記ほか)
697年 役小角が宝満七窟に神明を祈り、宝満金剛界・彦山胎藏界とする(入峰伝記)
724年 龍門宮上宮、下宮、十所王寺社が成る(龍門山宝満大菩薩記)
(史実)
803年 最澄渡海祈願のため大宰府龍門山寺において薬師仏をつくる(扶桑略記、叡山大師伝)
840年 大宰府龍門神に従五位上を授く(続日本後記)
847年 円仁、大山寺において龍門大神のため経を転ず(入唐求法巡礼行記)
859年 大宰府龍門神に従四位下を授く(三代実録)
896年 大宰府龍門神に正四位上を授く(日本紀略)
979年 太政官符に龍門宮等が大官司を以て貫主とする記事有り(類聚符宣抄)
993年 沙弥澄覚が伝教大師の遺記により大宰府龍門山に宝塔を造立す(石清水文書之二)
1003年 大宰府大山寺で景雲阿闍梨が皇慶、延慶に両部大法を授く(明匠略伝)
1083年 これより先、石清水権別当頼清が大山寺別当となる(宮寺縁事抄)
1086年 内山寺僧安尊、首崎に移居して没す(後拾遺往生伝之二)
1086年 大山寺(筑前内山寺)僧安尊、居を首崎に移し死す(本朝高僧伝)
1102年 大山寺が府内左郭七条二坊の土地をめぐり八幡宇佐宮と相論となる(八幡宇佐宮神領大観平安遺文二六五七号)
1104年 叡山大衆の使と号す悪僧が大山寺荘園内で濫行に及ぶ(中右記)
1105年 大宰府龍門宮上宮が焼亡す(中右記)
1105年 延暦寺衆徒が紙園社神輿を奉じて陽明門に至り歌詠し石清水神人と闘乱す(中右記、石清水文書ほか)
1106年 大宰府龍門宮に正一位上を授く(中右記、百鍊抄)
1116年 博多津唐坊大山船籠三郎船頭房、有智山明光房本観音玄義疏記等を写す(観音玄義疏記)
1140年 大宰府大山、香椎、首崎の僧徒神人等、宰府巴下屋敷數十家を焼く(百鍊抄)
1146年 「九州擁護之鎮守 一府頼依之尊神」の近衛院の宣旨あり(龍門山宝満大菩薩記)
1155年 龍門宮焼亡(台記)
1159年 龍門宮焼亡(百鍊抄)
1162年 大隅国台明寺の訴状に「京都には本寺勧修、鎮西には本山内山」とあり(台明寺文書)
1179年 筑紫の靈驗所に大山、四王寺が挙げられる(梁塵秘抄二)
1218年 博多における大山寺寄人張光安暗殺事件(仁和寺日記ほか)
1243年 有智山寺の衆徒が博多承天寺と争論(元亨釈書)
1300年 有智山と原山の闘争により筑前御家人中村弥二郎が安楽寺に宿直を命じられる(広瀬文書)
1318年 法眼宗榮が中宮の大岩に両界の梵字を彫る(中宮梵字銘文)
1324年 東大寺衆徒が有智山と原山の僧徒に観世音寺の仏事の勤行を請う(東大寺文書)

- 1324年 若杉山左谷建正寺板神に「天台別院有智山末寺於左谷山賢聖院」とあり
1333年 肥後菊池左衛門三郎が権臣として有智山にある(博多日記)
1336年 菊池武敏が小式貞経(妙恵)が守る「内山の城」(有智山城)を攻め、山中の社殿坊舎が悉く消失する(太平記、梅松論は「内山と云山寺を要害に馳龍て」とする。)
1351年 有智山明意房を故殿のごとく扶持すべき令あり(厳原内山家文書)
1360年 龍造寺家経が有智山城に宿直警固す(龍造寺家文書)
1361年 懐良親王(征西府)大宰府に座し少式氏が宝満山に要害をかまえる(太平記)
1372年 九州探題今川貞世が有智山城を攻め落とす(入江文書他)
1376年 少式頼道が有智山城において大内義弘に攻め落とされる(北肥戦誌)
1441年 大内教弘が宝満城に少式教頼を討つ(歴代鎮西要略、北肥戦誌)
1471年 江州水滸が宝満下宮の獅子頭と狛犬を彫る(獅子頭銘文)
1496年 筑前守護大内義興が少式政資を追い有智山城に入る(宗俊軍記)
1518年 龍門宮上宮が焼亡す(北肥戦誌)
1521年 筑紫満門が龍門宮上宮を再建する(北肥戦誌)
1552年 大友宗麟(宗麟)が高橋鑑種を宝満城主とする(歴代鎮西要略)
1557年 大友宗麟が有智山、北谷、中堂、原にて檢地をおこなう(龍門山宝満宮伝記ほか)
1558年 二五坊が山上に移住する(龍門山宝満宮伝記ほか)
1567年 高橋鑑種が大友宗麟に背き宝満で合戦となる(滔文書ほか)
1569年 大友家家臣戸次鑑連、吉弘鑑理らが高橋鑑種の宝満城を攻め落とす(豊前覚書ほか)
1570年 吉弘鑑理の子鎮種が高橋家を推し宝満城主となる(大友家文書録ほか)
1576年 龍造寺隆信、秋月種実、筑紫広門らが宝満城を攻める(大友記)
1579年 秋月種実が宝満城を攻める(歴代鎮西志)
1580年 秋月種実、筑紫広門らが宝満城を攻める(立花実記)
1583年 毛利勢が宝満城を攻める(大友家文書録)
1585年 筑紫広門らが宝満城を攻め焼く(上井覚兼日記、歴代鎮西志ほか)
1586年 島津勢の岩屋、宝満城攻めで高橋紹運連れ、宝満宮の宝物と古文書などを焼く(豊前覚書)
1586年 秋月種実が山伏を東坂下新地に移し内山、北谷の社地坊舎を田圃とする(龍門山宝満宮伝記ほか)
1587年 豊臣秀吉が山内に二基の高樓を建て、米百俵を寄進する(龍門山宝満宮伝記ほか)
1592年 淨戒座主が廃絶する(龍門山旧記)
1593年 小早川隆景が米百俵を寄進し毎年の恒例とする(龍門山宝満宮伝記ほか)
1593年 平石坊重門が座主となる。(歴主次第)
1593年 社殿の造営はじまる(龍門山宝満宮伝記ほか)
1594年 大峰修行が再興される(鎮西龍門山入峯伝記)
1597年 社殿、末社などが完成する。座主は輪番制となる。(龍門山旧記ほか)
1618年 藩主黒田長政が二十五石を寄進(井本文書)
1625年 藩主黒田忠之が石島居を建立する(龍門山旧記)
1633年 本社、講堂等が焼失(黒田新統家譜)
1634年 宝満衆徒が聖護院に「由来書」を提出(聖護院文書)
1641年 社殿・講堂が焼失する(黒田忠之寄進銘籠、龍門山旧記)

- 1648年 藩主黒田忠之が社殿を造営する（龍門山旧記）
- 1652年 財行坊幸岩が公儀に内訴し叡山の門徒となり山上を境界とする（龍門山旧記）
- 1653年 坊舎破滅して山下に盤居する（龍門山旧記）
- 1657年 彦山の末寺となる（彦山神社文書）
- 1662年 太宰府より巻る道について大鳥居信兼と総論となる（龍門山旧記）
- 1665年 聖護院の末山となる（聖護院文書）
- 1667年 九輪塔を建立する（筑前国総風土記拾遺）
- 1671年 藩主黒田光之が宝満山の内山八十方坪を寄進（井本文書、筑前国総風土記拾遺）
- 1671年 「龍門山水帳」できる（井本文書）
- 1671年 平石坊弘有が座主となる（龍門山旧記）
- 1672年 四壁境界山林安堵の願いを言上する（黒田忠之寄進銘録、龍門山旧記）
- 1673年 宝満草創千百年祭がおこなわれる（龍門山旧記）
- 1673年 藩主黒田光之が登拝し平石坊にて「山中法令」を定める（龍門山旧記）
- 1678年～講堂、鐘樓などを修理する（龍門山旧記）
- 1679年 石の鳥居（通称一の鳥居）を再興する（鳥居銘文）
- 1686年 彦山との本末争論により山仲坊、財行坊が追放となる（寛文元祿書入書）
- 1687年 平石坊弘有が『龍門山宝満宮伝記』を著す（龍門山宝満宮伝記）
- 1688年 平石坊弘有が禁錮の後に離山し平石坊が断絶する（益軒日記）
- 1689年 藩主黒田綱政が田畑一町を寄進（筑前国総風土記）
- 1696年 彦山と宝満の和睦なる（福岡藩主記録）
- 1772年 宝満宮創設千百年祭（年譜）
- 1786年 登拝道の道標い（郡記録）
- 1797年 宝満山山中松園できる（宝満山山中松園図）
- 1798年 中宮に松尾芭蕉の句碑が建立（句碑銘）
- 1804年 五百羅漢の造立開眼（羅漢銘）
- 1814年 藩主黒田資清石灯笼を寄進し燈明代を年々の寄進とする（福岡藩寺社記）
- 1816年 龍門岩（仙巖岩）石の石を据え直し復興する（亀岩銘文）
- 1819年 仙厓が龍門山頭徳碑を建立する（捨小船）
- 1853年 上宮焼失（龍門神社所蔵年忌表）
- 1854年 藩主黒田長博が本社を再建（龍門神社社記）
- 1857年 大巡行の統一（当山大巡二教之伝書）
- 1859年 コレラの流行により宝満宮神輿が福岡城内と市中に下り祈禱する（見聞略記ほか）
- 1862年 修葺坊が富倉坊に山地を売却する（井本文書）
- 1869年 福岡藩より埴二十石を賜る（福永文書）
- 1870年 山伏に神職に転じるよう司祭局より命令あり（佐々木文書）
- 1870年 福岡藩庁より寄付米九十八石を受ける（井本文書）
- 1870年 宝満山中で殿仏毀釈がおこなわれる（神仏分離資料）
- 1871年 上知令により宝満山の土地は国有となる（井本文書）
- 1872年 龍門神社は村社に列せられ祠掌1名が置かれる（龍門神社社記）
- 1872年 上宮開殿千二百年祭（井本文書）
- 1873年 旧坊中下山（井本文書）
- 1878年 本社大破損につき氏子、信徒、公衆の募金によりこれを修繕（龍門神社社記）
- 1882年 元龍門一門の山伏は聖護院に入徒する（井本文書）
- 1885年 旧坊中19名が宝満山官林監護を願ひ出る（井本文書）
- 1887年 内務省より保存金百円下付（龍門神社社記）
- 1889年 春峰・秋峰の復興（永福院文書）
- 1891年 旧坊中が宝満山の官有林の払い下げを願ひ出るも翌年に却下される（井本文書）
- 1895年 龍門神社が官弊小社に昇格し、西高辻信蔵が龍門神社宮司を仰せつけられる（龍門神社社記）
- 1895年 山中に最後まで残った吉祥坊吉田家が離山する（佐々木文書）
- 1896年 龍門神社上地官林払い下げを願ひを提出する（龍門神社社記）
- 1900年 高原謙次郎が『龍門神社々記』を著す（高原文書）
- 1902年 旧坊中、龍門神社が再び宝満山の官有林の払い下げを願ひ出る（井本文書）
- 1903年 本田豊宮司能任と同時に宝満講社、愛慕講社の結集に着手（龍門神社文書）
- 1904年 上宮社殿が焼失する（龍門神社社記）
- 1903年 本田豊宮司『龍門山記』を著す
- 1908年 上地林のうち6町8畝21歩が境内地となる（龍門神社社記）
- 1912年 上宮が再興され遷宮祭をおこなう（龍門神社社記）
- 1921年 上宮社務所落成（龍門神社社記）
- 1923年 中宮跡に「龍門山碑」建立。碑文は大久保千壽宮司による（碑文）
- 1926年 西高辻信任が龍門神社宮司を仰せつけられる（龍門神社社記）
- 1927年 龍門神社下宮本殿遷座祭を執行（龍門神社社記）
- 1930年 祝詞書兼割殿、拝殿の改築、透壁、神輿所新築落成（龍門神社社記）
- 1931年 上宮神殿の修理を開始する（龍門神社社記）
- 1945年 上宮社殿が暴風により破損（龍門神社社記）
- 1945年 上宮社務所と下宮旧社務所が公衆入札される（龍門神社社記）
- 1952年 上宮が焼亡する（龍門神社社記）
- 1957年 上宮社殿をコンクリート造で復興（龍門神社社記）
- 1960年 西高辻信貞宮司が「宝満山文化総合調査会」を組織する
- 1961年 上宮、法城窟、下宮礎石において初の学術発掘調査が実施される
- 1980年 中野幡能編『筑前国宝満山信仰史の研究』が刊行
- 1982年 宝満山修験会結成
- 1982年 小田富士雄編『宝満山の地主』が刊行
- 1984年 太宰府顕彰会『宝満山及び龍門神社周辺の遺跡分布調査報告書』が刊行
- 1986年 太宰府市が開発に伴う宝満山道群野の発掘緊急調査を開始
- 1987年 内山妙香庵の伝教大師像が開眼
- 2005年 太宰府市教育委員会が5カ年の国庫補助事業で宝満山基礎調査を実施
- 2009年 九州国立博物館において『祈りの山宝満山』展が開催
- 2011年 太宰府市教育委員会が総合報告策定審議会を設置し国史跡指定に向けた準備を開始する
- 2012年 太宰府市教育委員会がシンポジウム『霊峰宝満山』を開催

【参考文献】

- 井形進「北谷地藏堂の地藏菩薩立像」『九州歴史資料館研究論集 35』2010年九州歴史資料館
- 岡寺良「宝満山近世僧坊跡の調査と検討」『九州歴史資料館研究論集 33』2008年九州歴史資料館
- 岡寺良「宝満山近世墓碑銘にみる墓地和坊跡の平面構造」『大宰府学 5』2011年大宰府市史編纂室
- 小田富士雄「古代における龍門山寺の活動」1975『九州文化史研究紀要 20』
- 小田富士雄編『宝満山の地宝』1982年大宰府顕彰会（宝満山総合文化調査のうち1次聞き取り、踏査、2次調査上宮祭祀トレンチ調査、法城窟レンヂ調査、下宮礎石群平板測量調査、3次下宮礎石群トレンチ調査）
- 小田富士雄・武木純一「大宰府・宝満山の初期祭祀」『宝満山の地宝拾遺』1983年大宰府顕彰会
- 亀井明徳「経筒新資料について」『九州歴史資料館研究論集 8』1982年九州歴史資料館（宝満 B 経塚）
- 九州国立博物館『トピック展示 折りの山宝満山』2009年
- 小田富士雄監修 小西信二編『宝満山及び龍門神社周辺の遺跡分布調査報告書』1983年大宰府顕彰会
- 下高太輔「大宰府市所在愛嶽神社周辺段造の歴史的位置付け」『大宰府学 2』2008年大宰府市史編纂室
- 大宰府市教育委員会『宝満山遺跡』1989年（市1～7次調査）
- 大宰府市教育委員会『宝満山遺跡 1』1997年（市14,16,18次調査）
- 大宰府市教育委員会『宝満山遺跡 111』2001年（市11,21次調査）
- 大宰府市教育委員会『宝満山遺跡 4』1997年（市8,9,10,12,13,15,17,19,20,22,24,25,26,27,28,29次調査）
- 大宰府市教育委員会『宝満山遺跡 5』2006年（市30次調査=宝満 A 経塚、遺跡総括）
- 大宰府市教育委員会『宝満山遺跡 6』2010年（市31,32,33,34,35,36,37,38,39,40次調査国補助による総合調査報告）
- 福岡県教育委員会『福岡県遺跡等分布地図筑紫野市・春日市・大野城市・筑紫郡編』1980年
- 大宰府市教育委員会『宝満山遺跡』1989年
- 大宰府天満宮『大宰府天満宮』1988年
- 大宰府市教育委員会『大町遺跡』1992年
- 大宰府市教育委員会『三条遺跡』2001年
- 大宰府市教育委員会『原遺跡 1』2001年
- 大宰府市教育委員会『奥国遺跡』2002年
- 大宰府市教育委員会『誰歌屋遺跡』2003年
- 大宰府市教育委員会『大宰府条坊跡 II』1983年（土師器分類）
- 大宰府市教育委員会『宮ノ本遺跡 11 窯跡編』1992年（須器分類）
- 大宰府市『大宰府市史考古資料編』1991年
- 大宰府市『大宰府市史通史編 II』2005年
- 中西義昌「戦国期筑前中南部における領土権力の動向」『福岡地方史研究』40号 2002年
- 中野福能編『筑前国宝満山信仰史の研究』1980年名著出版
- 治川昌彦「宝満山周辺の植生史と里地・里山の利用の変遷」2011年『紀要 6』筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学
- 広渡正利「彦山流記」『研究紀要 1』1979年北九州市立歴史博物館

- 福岡県『宝満・三部の自然 大宰府県立自然公園』1978年
- 福岡県教育委員会『原遺跡』1994年
- 福岡県教育委員会『浦ノ田 A・B 遺跡』1996年
- 福岡県教育委員会『浦ノ田遺跡 II』2000年
- 福岡県教育委員会『宝満山遺跡群・浦ノ田遺跡 III』2002年
- 福岡県教育委員会『浦ノ田遺跡 IV』2004年
- 山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』1995年中世土器研究会
- 森弘子『宝満山歴史散歩』1975年
- 森弘子『宝満山歴史散歩』2000年
- 森弘子『宝満山の環境歴史学的研究』2008年財団法人大宰府顕彰会

【画像一覧】

順	部	回	頁	名称	所蔵者・管理者
1	2	3	28	33 宝満山絵図（東図）	福岡県立美術館
2	2	3	29	33 宝満山絵図（西図）	福岡県立美術館
3	2	3	30	34 筑前国筑紫北守府録（龍門山神社図）	平岡忠幸
4	2	3	31	34 龍門山図（奥村主簿）	大宰府天満宮
5	2	3	32	35 相和司了寂藏宝満山入幕絵巻	大徳大願寺
6	2	3	33	35 宝満修験道島城入幕之図	龍門神社
7	3	1	60	50 龍門三神像	龍門神社
8	3	1	61	50 本道胎衣（阿形）	龍門神社
9	3	1	62	50 本道胎衣（阿形）	龍門神社
10	3	1	63	50 獅子頭型（右）	龍門神社
11	3	1	64	50 獅子頭型（左）	龍門神社
12	3	1	65	50 石造獅子	龍門神社
13	3	1	66	50 北谷地藏堂 地藏菩薩立像	大宰府市北谷区
14	3	1	67	50 北谷区 神待形立像	大宰府市北谷区
15	3	1	68	50 北谷区 天部形立像	大宰府市北谷区
16	3	1	69	50 陶製獅子（左）	大宰府市北谷区
17	3	1	70	50 陶製獅子（右）	大宰府市北谷区
18	3	1	71	50 柿原原観音堂 聖観音坐像	筑紫野市柿原原区
19	3	1	76	50 大宰府市個人蔵 薩摩塔	個人
20	3	2	1	72 筑前名所図会（龍門山図）	福岡市博物館
21	3	3	2	77 龍門山水帳	日本学術
22	3	7	3	125 修験観音堂 平手観音立像	佐賀区文化財保存会
23	3	7	4	126 定公修験堂 地藏菩薩立像	大宰府市北谷区
24	3	7	5	127 浮屠神社 如来形立像	浮屠神社
25	3	7	6	137 観世音寺 阿弥陀如来立像	観世音寺
26	3	7	7	138 北谷区 神待形立像	大宰府市北谷区
27	3	7	8	138 北谷区 天部形立像	大宰府市北谷区
28	3	7	9	139 石井坊 不動明王立像	隆栄町教育委員会
29	3	7	10	139 修験観音堂 十一面観音立像	佐賀区文化財保存会
30	3	7	11	139 修験観音堂 十一面観音立像	佐賀区文化財保存会
31	3	7	12	140 柿原原観音堂 聖観音坐像	筑紫野市柿原原区
32	3	7	13	140 柿原原観音堂 聖観音坐像	筑紫野市柿原原区
33	3	7	14	140 柿原原観音堂 聖観音坐像	筑紫野市柿原原区
34	3	7	15	141 法華寺観音堂 十一面観音坐像	長安寺
35	3	7	16	142 龍門神社 始大像	龍門神社
36	3	7	17	142 龍門神社 獅子頭	龍門神社
37	3	7	18	142 龍門神社 獅子頭左肩	龍門神社
38	3	7	19	142 龍門神社 獅子頭右肩	龍門神社
39	3	7	20	143 大宰府市個人蔵 薩摩塔	個人
40	3	7	21	144 大宰府市個人蔵 薩摩塔	個人
41	3	7	22	144 大宰府市個人蔵 薩摩塔	個人
42	3	7	23	144 吾孫山遺跡 薩摩塔	久山町教育委員会
43	3	7	24	144 吾孫山遺跡 薩摩塔	久山町教育委員会

※上記のうち3,4,5については九州国立博物館から、7～19,22～43は九州歴史資料館からの画像の提供を受けました。

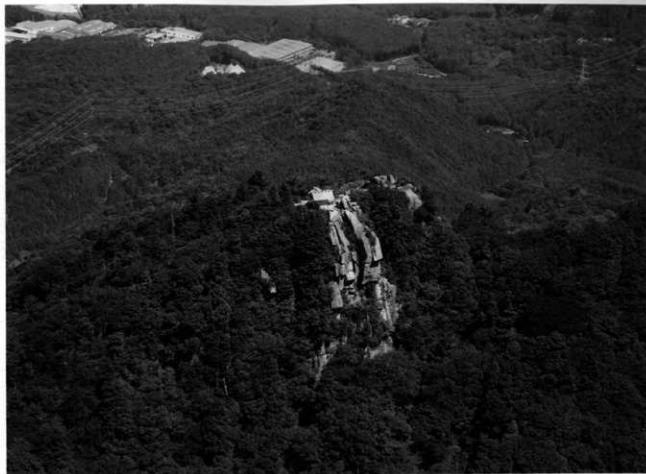
写真図版



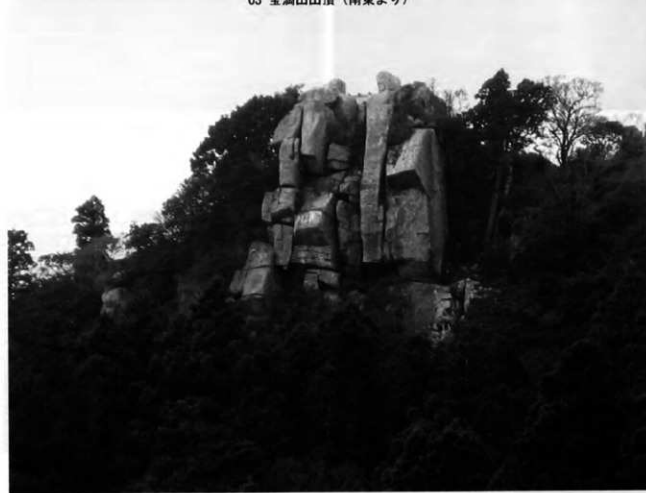
01 宝満山遠景（南西より）



02 宝満山南側遠景（筑紫野市阿志岐より）



03 宝満山山頂（南東より）



04 宝満山山頂（北東より）



05 宝満山西側（太宰府市側）



06 宝満山東側（筑紫野市側）



07 宝満山遠景（南西の大宰府政庁跡より）



08 宝満山頂（左）と仏頂山（右）（南から）



09 宝満山山頂より博多湾を望む



10 龍門神社上宮殿（太宰府市）



11 東院谷より上宮に至る登拝道（太宰府市）



12 山頂北東の鎖場（太宰府市）



13 東院谷全景（南西から 筑紫野市）



14 座主坊跡全景（南西から 筑紫野市）



15 座主坊跡（南から 筑紫野市）



16 座主跡の石垣と登拝路（東院谷 筑紫野市）



17 東院谷坊跡の石垣と登拝道 (筑紫野市)



18 登拝路 (上宮と東院谷への分岐 太宰府市・筑紫野市)



19 普池窟 (筑紫野市)



20 大南廬 (筑紫野市)



21 仏頂山 (峰入の様子 太宰府市)



22 中宮跡 (太宰府市)



23 西院谷の登拝路 (百段階木、太宰府市)



24 西院谷坊跡の石垣 (太宰府市)



25 伝有智山城跡 (太宰府市)



26 下宮礎石建物
(宝満山遺跡第37次調査 太宰府市)



27 本谷礎石建物
(宝満山遺跡第34次調査 太宰府市)



28 大門地区の礎石建物
(宝満山遺跡第42次調査 太宰府市)

報告書抄録

ふりがな	ほうまんざんそうごうほうこくしょ									
書名	宝満山総合報告書									
副書名	福岡県太宰府市・筑紫野市所在の宝満山に関する文化財の総合報告									
シリーズ名	太宰府市の文化財									
シリーズ番号	118集									
編者名	小田薫土雄、菅谷文則、南川昌彦、森弘子、山岸常人、井形豊、原場啓一、山村信泰									
編集機関	太宰府市教育委員会									
所在地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号									
発行年月日	2013(平成25)年3月31日									
ふりがな 所収遺跡名	条 坊 【鎮山指定案】	ふりがな 所在地	コード		座 標		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
ほうまんざんいせきてん 宝満山遺跡群	条坊外	太宰府市 大字内山ほか	402214	210187	58190.0	-41900.0				
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
宝満山遺跡群	社寺跡	古代～近現代	礎石礎物、祭祀跡 石垣、巻拝道ほか		須恵器、土師器、瓦ほか		1次から43次までの調査情報を網羅			

太宰府市の文化財 第118集
宝満山総合報告書

—福岡県太宰府市・筑紫野市所在の
宝満山に関する文化財の総合報告—
平成25(2013)年3月

編集 太宰府市教育委員会
発行 太宰府市観世音寺1-1-1
印刷 有限会社 システム・レコ
福岡市東区多の津一丁目14番1号
FRCビル



宝満山総合報告書

—福岡県大宰府市・筑紫野市等の宝満山に関する文化財の総合報告—

DISE

本県庁内の文化財 第110巻
大宰府市教育委員会
平成25年
(2013)

00B-C/1.142